近現代中国の「経世致用」思想と書法への展開
ー郭沫若を中心として

松宮貴之

博士（学術）

国際日本文化研究センター共同研究員
佛教大学非常勤講師

令和元年度
(2019)

目次

近現代中国の「経世致用」思想と書法への展開―郭沫若を中心として

松宮貴之

【目次】

序章〈pp1～3〉

A　二百年前から郭沫若に至るまでの中国学芸の演繹

一　前近代からの碑学派と帖学派の潮流及び実学思想と書法〈pp4～14〉

二　日本と影響関係にあった「経世致用」思想と書法への反映―亡命、留学中国人を中心としてⓐ 碑学派の変貌〈pp15～41〉

三　日本と影響関係にあった「経世致用」思想と書法への反映―亡命、留学中国人を中心としてⓑ帖学派と北洋政府〈pp42～66〉

四　日本と影響関係にあった「経世致用」思想と書法への反映―亡命、留学中国人を中心としてⓒ 中国共産党員と日本〈pp67～77〉

五　近代からの北碑南帖の学と共産党員の書からの郭沫若の位置付け〈pp78～83〉

B　在日時代から抗日戦までの郭沫若の学問と書法

六　在日時代の郭沫若と学問ー　五四運動期から反蒋運動に至るまでの郭沫若に於ける孔子観と儒教道徳の継承問題について〈pp84～101〉

七　郭沫若「《周易》時代的社会生活」に於ける階級史観の発見とその政治性についてー「《周易》時代的社会生活　上篇」の分析を中心として〈pp102～113〉

八　郭沫若の「辛」字論の是非と展開を巡って〈pp114～126〉

九　民国抗日戦争期に於ける郭沫若の「書」及び「文学」の論理―郭沫若に於ける「言語」「文学」「思想」の表出としての「書」様式の史的変遷について〈pp127～151〉

十　抗日戦に向けての政治活動と行書・贈《屈原》表演者二首を巡って〈pp152～156〉

C　解放後から大躍進政策までの書の在処

十一　抗日勝利から中華人民共和国建国期、百花斉放時に至る郭沫若の書様式の整理ー日中戦争終結から一九五〇年代後期の様式変遷と所謂「第二期郭体」の確立時期を巡って〈pp157～173〉

十二　郭沫若の大躍進政策期に於ける書法様式の類型とその背景についてー「漢詩」の分析を中心とした政治性及び建築と書法との照合〈pp174～180〉

十三　郭沫若に於ける百花斉放の文学と書ー百花斉放詩の書風を巡って　〈pp181～192〉

十四　一九五〇年代後期から六〇年代前期にかけての郭沫若の歴史学行政・視察旅行と詩、そして書ー一九五〇年代に誕生、一九六〇年代に確立する第三期郭体の生成過程と横幅作品の背景ついての分析的考察〈pp193～204〉

D　社会主義運動から文革、そして晩年に於ける書の変貌

十五　大躍進、調整時代、一九五八年から一九六二年までの郭沫若の文学と書ー視察時に於ける第三期郭体から第四期郭体までの過程とその詩、書の思想〈pp205～216〉

十六　一九六三年から文革に至るまでの郭沫若の漢詩の在処と書ー郭沫若「満江紅」詩の社会史的意義を中心にして〈pp217～227〉
十七　文化大革命期に於ける郭沫若の思想変転下の詩詞と書ー蘭亭論争の行方と毛沢東との関係に於ける書風の変貌を巡って〈pp228～243〉
十八　郭沫若の晩年の文学と書〈pp244～248〉
終章〈pp249～250〉

序章

本論は、中国の約二百年前から現代までの書法の変遷を中心に、学際的な観点で捉えんとした論考であり、主に中後半部から、その時代を生きた郭沫若の書を基軸とした社会史的視角から、分析を加えたものである。

俯瞰すれば、東アジアの文化史に於いて、日本、朝鮮半島、中国は、常に緊密な文化の交流が行われてきた。

遅くとも漢代には、日中の文化の行き来は確認でき、それは、儒教、仏教等の吸収過程からも大まかに推察できる。

日本に於いて中国からの文化の摂取は、個別事象を除いて主に時の為政者に拠るが、その時代の環境、時代情勢によって、それぞれの民族特有の形で、変化して受容された。

書に於いても、現代に行われる「臨書」と古代における「臨書」に対する思念の違いをはじめ、古代から近現代までの歴史上の人物の「書」に現れる「思想」を時代、地域、文化等のそれぞれの背景のもとに、王羲之、顔真卿、聖徳太子、副島種臣、毛沢東など、日中の能書家の「書」から解き明かすことも可能であろう。

基本的には、中国から日本へという流れが近世までの主な潮流であるが、近代からは、その潮流は底流として保守されながらも、西洋文化の受容と言う文脈で、日本から中国へと逆流を見せ、帝国日本は、中国革命の拠点的な地として、その文化的な葛藤の場として機能していたのである。

その実態は、明治からの北京、東京の帝都政権外交ルート、また江戸以来の所謂「近代東アジアのモダンロード」広州、上海、長崎、神戸、横浜ルートによって、中国の旧文化と共に、新文化も日本に経済的側面と共に流入していた。

取り分け、この二〇〇年は、中国清朝の旧文化が帝都政権ルートと広州ルートを通じても遣り取りされ、保守派、進歩派、超進歩派と鬩ぎ合いを見せながら相互に影響し、その拮抗の中で、淘汰されていく変貌の時代であったとも観念できる。

その中で、清朝からの北洋政府、中華民国、そして本稿で後の中華人民共和国で指導的立場に立った、郭沫若を基軸に論を構成する。

書法的に言えば、保守派の帖学派、進歩派の碑学派、それを超克する共産党の書として、内省の書、大衆の書から、実学の政治的プロパガンダの書として、この二〇〇年をかけて結実したのである。

書とは、そもそも歴史的に士大夫の芸であったが、現在は人民の芸術として、さまざまな民主的な芸術としての実験がなされ、さらにもう一方で民族文化遺産の継承、国学への郷愁としてその立場を形成しているが、為政者の書、政治、文学、学問、芸術をトータルな教養体系として有する文人の書としては、郭沫若が管見では象徴的な最後の文人であり、そしてその書であったと言えるだろう。

士大夫時代の清朝とその遺老、革命派、そして共産党、三本の矢が、交錯し、そのヘゲモニーを担う人民共和国の郭沫若によって収斂されていく姿を、近現代書法史の中核として跡付ける。

論を大きく四段に分けて構成したが、その概要を示すと以下の通りである。

A　二百年前から郭沫若に至るまでの中国学芸の演繹

中国、また東アジアが近代を迎える約二百年前から、急激な西洋化が始まった。

その影響は中国の政治思想をも変容させ、その経学が様変わりしていくが、それと共振するように書論も変貌を遂げる。

本稿では、その経世致用の政治思想が書論に現れるのを清の道光期広州の阮元の北碑南帖論と仮定し、その民本主義にスポットを当てることから稿を起こした。

そしてそれら民本化、大衆化の思想（西洋化の濫觴）の影響を受けた、康有為、孫文、楊守敬、王国維、羅振玉、蔣介石などが、中国から亡命、留学し、日本という場において、さらにその実学思想を促進させ、様々な書の華を開花させた。その潮流を、進歩派の碑学派、保守派の帖学派、超進歩派の共産党員の書として三つに類型化し、社会思想史的に観念化を図った。

その中からモデルとして、彼らよりひと世代後になるが、後の中華人民共和国の指導的な立場を取ることになる郭沫若を、中盤からの骨子として取り上げる。

B　在日時代から抗日戦までの郭沫若の学問と書法

先ず帝都日本と中国革命との関係を、留学生を中心に俯瞰し、その一人である郭沫若の留学、亡命時代において、日本に於いてどの様な影響を学芸共に受けたかを分析する。郭にとっての日本留学の意義を、同時代あるいは前後する時代の中国からの留学生のなかで位置付けた。

一度目の留学期の書の作品は管見では残されていないが、その当時、陽明学の影響を受けている。

後に、北伐に伴い中国に帰国するも、蔣介石との決別によって思想が決定的に変化し、再度日本に亡命。西洋思想のマルクス主義による歴史、甲骨金文研究に専心、また日本の左翼人士と交流し、日本の警視庁の監視下に置かれた。

当時の蔣介石思想批判、唯物歴史学、文字学についても少しく分析した。

特に周易の解釈、甲骨文「辛」字を中心に論究し、殷代の奴隷制社会についての歴史哲学を確認した。またその当時に残した書が、東京三鷹のアジアアフリカ図書館に所蔵されており、その書と書学についても論述する。

その後日中戦争の勃発に伴い再度帰国、抗日文化宣伝の責任者としてその書の持つ意味も、単なる趣味ではなく、経世致用の政治的役割を担い、所謂プロパガンダ化し、第一次郭体を形成する。その第一次郭体とは、旧文化（文語）への白話体の導入と位置付けられよう。つまり中華民族にとっての文化の生命線を、日本など周辺諸国の漢文とは一線を画し、郭沫若は白話に求めていたとも解せられる。

総じて本稿で言う「郭体」とは、抗日戦以後の、実学な政治性を帯びた書法様式から定義を始めたものである。なぜならそれは、郭沫若が立場的に、国民政府軍事委員会政治部第三庁に入り、「文化」を政治利用する経世致用を担う為政者側の任に本格的に就いたことを意味し、それ以前の書は、概ね例外はあるものの、所謂伝統中華的な「文人趣味」「国学」「国粋主義」による個人的「趣味」によって解消できるものであるからであり、この後者の文脈的な視角による分析は、別稿に譲りたい。

C　解放後から大躍進政策までの書の在処

その後日中戦争終結、国共内戦を経て中華人民共和国の要職に就き、文化行政のリーダとなって、文字言語政策を主導。当時の書はその模索ぶりを顕著に表す多様な実験作が多い。

そして一九五五年、その政策が一区切りつき、百花斉放時代に突入する。その当時の書は、学術の復興と芸術としての書を謳歌するが如く、抗日戦争以前の文語体の書風が盛り込まれ、裂帛の気迫と伸縮を伴う爆発的なエネルギーを放出する第二期郭体を形成している。抗日戦からの周恩来との影響関係についても言及する。

しかし、その後の反右闘争に伴い、エネルギーが衰え、その書風はややおとなしい白話体書風に少しく揺れ戻る第三期郭体へと変遷する。その頃、大躍進政策に伴う視察の中で、中国各地にその書を残すことになる。

D 社会主義運動から文革、そして晩年に於ける書の変貌

そして一九六三年の満江紅詞の発表以降、孤立する国際情勢の中で、ナショナリズム、また毛沢東の復権を後押しするような作品が多作され、詩より詞が増える道程の中で、再度エネルギーの溢れる第四期郭体へと姿を変えて、文革へと突入する。これは、文白の綱引きと言うより、旧文化の存亡をかけて、如何にその存在感を示すかと言う意義のある姿であり、書の本質の一面である「権力への奉仕」を見事に体現した、華やかで派手さを志向する様式とも言える。

また些か専門的で見解の分かれる点であるが、碑石学派の発展と、金石学の西洋考古学との接触にともなう変質の中で、郭沫若をいかに位置付けるか、また古典として賞玩されてきた王羲之『蘭亭序』などの諸写本の位置づけに関する論争に、郭がいかに関与し、そこにはいかなる政治的・時代的背景が潜在していたか等の論点からも考察を加えた。

その後、文革に至り郭沫若は詩の制作を辞め、毛沢東の得意とする詞の制作は続けるが、その書風も毛沢東風の狂草体、所謂文革前期書風(第五期郭体)へと移り、その書が残されるのは、文革初期のもののみで、文革中後期の書は、詞の存在と裏腹に姿を消す。そして文革終結後、また詩と共に姿を現わすが、それは、エネルギーの衰えた、文革後期書風(第六期郭体)と言えるだろう。

最晩年一九七〇年代の第七期の書風は、日中の和平の使者、外交官としての最後の書風(第七期郭体)だったと言えるのではなかろうか。そういう意味で、郭沫若の書は、抗日戦からその最期にいたるまで、「経世致用」の書であり、近代から継承された最後の文人の書と言えよう。

また建国以後は毛沢東の権力と比例して、賛歌、そして闘争として、その書が躍動する傾向にあったことも、否定できないだろう。

そして現代中国の書法は、経世致用から（復古的言語運動という文脈でもなく）人民の芸術として、すでに確たる地位に移行しつつある。

このように、近現代中国の「経世致用」思想と書法の展開を最も具に一覧でき、その時代時代の影響を強く受けた郭沫若の書法を中心に、日中文化交流史を踏まえた上で、東アジアの近現代の書の変貌として鳥瞰する。

A　二百年前から郭沫若に至るまでの中国学芸の演繹ー

第一章　前近代からの碑学派と帖学派の潮流及び実学思想と書法

一　貶南尚北の美学[1]

阮元書論の意義

書論史を通観したとき、これほどの衝撃を与えうる論文を著した人物は、他に類例を見ないのではなかろうか。阮元(一七六四ー一八四九)という本格派の経学者によってなされたその偉業は、後世の歴史に大きな影響を及ぼすことになる。阮元は清朝、乾隆五四年の進士で道光期には致仕して太傅を加えられた高級官僚であり、学問界にも大きな業績を残している。例えば『十三経注疏校勘記』『経籍籑詁』『皇清経解』『積古齋鐘鼎彝器款識』『両浙金石志』『揅経室集』や畢沅と共編した『山左金石志』などの著述は然る事ながら、『南北書派論』『北碑南帖論』という書論があり、その内容は阮元の学風の一端を示すものと言える。漢学を尊び宋学を排した学問的姿勢、また経史、金石に精通したその学殖を背景としてなされたところに、書に於ける新たな知見を齎しており、また従来の王朝単位でなされてきた書史の認識方法を打ち破り、地理文化史的な観点によって南北を二分した手法は、当時の書に携わる者にとって清新であったことは言うまでもなかろう。後世、その書論は実証主義的な論調から多くの批判、是正を余儀なくされることになるが、それよりも阮元という人物総体との関係論を明らかにすることや、当時何故にその説が提出されたかという真意を見抜くことが、最優先の課題であるように思う。

尚古思想と金石学的視座

上古の姿に思いを馳せ、その理想像を復元せんとことを期して、その礎となる事実を追い求め経学・史学の原典批判が行われるのは漢学(樸学)の常道である。そしてそれをより客観的、実証的に行うため、確実な資料となる金石文への研究が一世を風靡したのは、所謂清朝考証学と称される学風が席捲した只中にあることを意味しており、その学問の副産物として当書論は登場する。『南北書派論』の第一声、

元謂、書法遷變、流派混淆、非溯其源、曷返于古。

(大意)わたくし阮元のみるところ、書法の変遷、流派の混乱は、さかのぼってその源をたずねなければ、とうていいにしえに立ち返ることができない。

とあるのは、その復古主義を高らかに宣言したものである。また「中原の古法」として北派の書を高く評価する視座は、『積古齋鐘鼎彝器款識』『山左金石志』『両浙金石志』が示すように古代への遡及志向を背景としつつも、その系脈にある漢代の書法をよしとする美意識に連鎖し、それは同書で北朝の書について、

惟是遭時離亂、體格猥拙、然其筆法、勁正遒秀、往往畫右出鋒、猶如漢隷。其書碑誌、不署書者之名、即此一端、亦守漢法。

(大意)ただ動乱の時代に遭遇したために、書品は猥拙だけれども、しかし筆法は力強く遒秀であり、往々にして画の右に鋒を出し、漢代の隷書の趣がある。碑誌をかいても書者の名をしるさない、という一事からもうかがわれようが、やはり漢法を守っている。

と述べるように、漢代隷書の面影を残し、そこから派生したと観念される金石文字の美学に他ならない(図1)。

またその北碑を評した「方厳」「方正」など方筆（四角張った筆使い）を連想させる術語も『南北書派論』『北碑南帖論』が起草される直前に記された「摹刻天發神讖碑跋」（図2）の中で、

図 1

図 2

其字體乃合篆、隷而取方折之勢、疑即八分書也。八分書起于隷字之後、而其筆法篆多于隷。是中郎所造、以存古法。惜人不能學之也。北朝碑額往往有酷似此者。魏齊諸碑出于漢魏三国、隋唐以後、歐褚諸體實魏齊諸碑之苗裔。而神讖之體亦開其先、學者罕究其原流矣。

(大意)その字体は篆書と隷書を兼ね備え、方折の筆法を取っている。多分これが八分なのであろう。八分は隷書の後から起こり、その筆法は隷書より篆書の方が多い。蔡邕が造ったもので、古法を残している。残念なのは学ぶことができなかったことである。北朝の碑額はしばしばこれに酷似するものがある。魏斉の諸碑は漢、魏、三国から出て、隋、唐以後、欧陽詢、褚遂良の各字体は実は魏斉の諸碑の子孫である。この天發神讖碑の字体がその先陣を切ったものであり、学者もまれにその源流を理解している。

とあり、ここにある「方折」も隷書にゆかりのある書法であり、それが阮元の美意識の源泉になっていたことは論を俟たないだろう。

そしてその南北二派の分類は、

元、二十年來、留心南北碑石、證以正史。

(大意)わたくし阮元は二十年来、南北の碑石を研究し、正史による裏づけを試みている。

とあるように、正史との照合によって自説を裏付けたとする自負を込めたものである。以上のように阮元の書論は、その思想の中核に学問的精神を宿した書論であるという指摘ができるだろう。

北派優勢意識と唐宋分岐論

阮元によって為された南北二分の書派の流れを具体的に見てみる

と以下のようになる。魏晋以後、鐘繇・衛瓘を同源にして以後二派に分類されるとし、南派は東晋を起点に[3]、王羲之・王献之・僧虔等から智永・虞世南に至り、北派は索靖・崔悦・盧諶・高遵・沈馥・姚元標・趙文深・丁道護から欧陽詢・褚遂良へと系譜付けられている。そして、

南派不顯于隋、至貞觀始大顯。

(大意)南派は隋代には振るわず、唐の貞観年間になって大いに盛んになった。

とあるように、唐代になって初めての南派勢力の拡大を認めており、この分岐論が『南北書派論』を通じての一つの主題となっている。またその理由については、

至唐初、太宗獨善王羲之書、虞世南最爲親近、始令王氏一家、兼掩南北矣。

(大意)唐の初めになって、太宗がとりわけ王羲之を称賛し、虞世南を親任したため、はじめて王氏一族の書法が南北にゆきわたるようになった。

とし、唐太宗の王羲之称揚、またそれに伴う南派に該当する虞世南への親任によって、南北つまり中国全土がその色に染められたとし、その初例とする。しかしその前文で、

然歐褚諸賢、本出北派、洎唐永徽以後、直至開成、碑版石經、尚沿北派餘風焉。

(大意)しかしながら欧陽詢や褚遂良たちは、もともと北派の出身であり、唐の永徽以後開成年間に至るまで、碑版や石経には、北派の遺風が用いられた。

と述べられていたり、さらに下文では、

然此時、王派雖顯、縑楮無多、世間所習、猶爲北派。

(大意)しかしこのとき王派が顕彰されたが、書跡の数が多くなかったので、民間一般でならったのは、やはり北派であった。

と、太宗の趣向によってショックはあったとするものの、唐代を代表するそのキーパンサーとして欧陽詢(図3)・褚遂良を論い、その来源が北派であることを強調したり[4]、さらに「民間」で用いられたのは未だ北派であったとする唐代北派優勢説に終始していることは特筆に値する。また阮元にとっての一つ目の矛先が唐太宗に向けられていることや「民間」の書現象への配慮は、その政治思想を読み解く上でも重要な手がかりとなるだろう。

そして実際に南派が主流となるのは、

趙宋閣帖盛行、不重中原碑版。於是北派愈微矣。

(大意)宋代には『淳化閣帖』がもてはやされ、中原の碑版を重視しなかった。そのため北派はますます衰微した。

と述べるように、南派の美意識を内包した宋代の『淳化閣帖』(図4)の出現を北派衰微の強い要因と考えている。さらに下文で、

宋以後學者昧于書、有南北兩派之分、而以唐初書家、擧而盡屬羲獻。豈知歐褚齊隋、近接魏周、中原文物、具有淵源、不可合而一之也。

(大意)宋以後の学者は、書に南北両派の区別があるのに気付かず、唐初の書家を一人残らず全て王羲之・王献之の系統と考えた。どうして欧陽詢・褚遂良が、北斉・隋の世に生長し、北魏・北周に近接していたこと、中原の文物にはそれぞれ淵源があり、

まとめて一つにできないことなど、知っていようか。

とあり、当論が宋以後の学者、つまりそれに連なる阮元にとっての「現在」の学者たちの書法情勢に向けられた問題意識の発露であることも忘れてはならないだろう。

図 3

図 4

阮元の「南派」「南帖」批判

書論とは、文学である。よってその第一声に発せられる文言は、その論説全体にとって大きな意味を持つことは言うまでもなかろう。『北碑南帖論』に於いて、

古石刻紀帝王功德、或爲卿士銘德位、以佐史學。是以古人書法、未有不托金石以傳者。

(大意)古の石刻には、帝王の功德が書きつけられ、あるいは卿相のためにその德義や官位が書きしるされており、それが歴史の研究に役立っている。このように古人の書法は、すべて金石に刻まれることによって後世に伝わった。

とあるのは、阮元の書学の根幹をなすものであり、それが金石美学の開眼であったことは贅言を俟たないだろう。しかし当書論がその一点に止まることなく、「貶南尚北」の体裁を取っている事実は、その政治性を示すとともに、それがより根深い思想的背景を有していたことを暗示している。さらに具体的に言うならば、それは経学をはじめとする学術、文化の南北対峙に呼応するが如く、書法もその枠組みに収めることが所期の目的であったこと、そしてその構想を成し遂げるために北碑と対照にたる南派像を措定しなければならないという命題が課せられていたと言えるだろう。[50] では阮元によるその「南派」「南帖」、その批判の実態とは如何なるものであったのだろうか。それは同書で、

閣帖晉人尺牘、非釋文不識。苟非世族相習成風、當時啓事、彼此何以能識。

(大意)『淳化閣帖』に収められた晉人の書簡は、釈文がなければ読めるものではない。その書体を習い、使いなれた世族でなければ、当時のさまざまな啓事など、どうして互いに読むことができようか。

とあるようにその可読性に伴う特権化への異議、また『南北書派論』で、

宋帖展轉摩勒、不可究詰、漢帝秦臣之蹟、並由虚造。

(大意)宋帖はつぎつぎと翻刻され、原本の真相をつきとめることができない。漢の帝王や秦の名臣の筆跡など、どれも偽作である。

と述べるように、法帖氾濫による「美」の原形の喪失と偽物の混在を挙げている。

しかしその批判の根拠は、より根深いところに認めるべきであろう。それは終文で、

庶幾漢魏古法、不爲俗書所掩。不亦褘歟。

(大意)漢・魏の古法が俗書のために隠蔽されないようにと、願って止まない。北派が顕彰されることはなんとすばらしいことではないか。

と総括するように、その南派の書を「俗書」と卑下した実相は、韓愈の「石鼓歌」で、

羲之の俗書は、姿の媚(び)たるを趁(お)う。

とあるのを典故とした王羲之批判と見るべきであり、そこからも復古的経学者のアイデンティティのような感性が看取される。

経学的美意識の希求

阮元は確かに北派を顕彰し、南派の流れを貶めているが、一方で南朝の書を『南北書派論』の中で、

南派乃江左風流、疏放妍妙、長于啓牘、減筆至不可識。

(大意)南は江左の風流であり、奔放にして美しくたえなるありさまで、書簡に適しており、字画が省略されて識別できない。

とあり、可読性の批判へと集約されてしまう文脈ではあるが、その中でその書美を幾らかは認めている。では阮元の貶南尚北の観念を支える心底はどこにあったのであろうか。それは同書で、

北朝族望質朴、不尚風流、拘守舊法、罕肯通變。

(大意)北朝の名族は質朴で風流を尊ばず、かたくなに旧来の書法を守って、変化を求めようとしない。

とあり、さらに同書の終盤の局面に入り、

南北朝經學、本有質實輕浮之別、南北朝史家、亦每以夷虜互相詬詈。書派攸分、何獨不然。

(大意)南朝と北朝の経学には、もともと軽薄と質実といった学風の違いがあり、南朝と北朝の歴史家も常に夷狄よ虜囚よと互いに罵倒しあっている。南と北との分立、どうして書派だけがそうでないわけがあろうか。

とあり、その直後に、

宋元明書家、多爲閣帖所囿。且若禊序之外、更無書法。豈不陋哉。

(大意)宋・元・明の書家は多く『淳化閣帖』によって枠にはめられ、その上「蘭亭序」以外に書法がないかのように考えている。なんと視野の狭いことであろうか。

と述べられ、前章でみた王羲之書法の踏襲批判が行われている。

つまり阮元の北派への認識とは、「質朴」「質実」に象徴される人間性に根差した価値基準から発せられたものであり、それがゆえに王法が軽視され、よって冒頭で、

北派則是中原古法、拘謹拙陋、長于碑榜。

(大意)北派は中原に伝わった古法であり、ぎこちなく拙陋で、碑榜に適している。

と述べるように、技術を度外視した「拙」をも容認する美学を打ち立てたものと考えられる。また「拙」のみならず、その美意識が「勁正」「遒勁」「方厳」などの新たな評語概念の発明へと展開したことは、書美の領域を新たに拡充したことに他ならず、書論史に於いて大きな進展を見せた功績が指摘できるだろう[6]。

以上のように阮元の書論は、アルカイズムを基調としつつ経史の学問的方法を援用したダイナミズムを宿し、さらに南北の民族的性格を相対化した上でその北朝的人間性を顕彰せんとした強い政治性を有した書論であると言えるであろう。また「託古改制」を基調としつつ、その「質朴」を尊ぶ精神は、儒教的文人観のそれであり、その形骸化した貴族性に異を唱える反骨の美意識の源泉は、やはり彼の経学的人間性に求められるように思われる。

またそれとは別に、時代状況としての当書論登場の意味は、宋以降の法帖刊行に依存してきた美意識の偏向化、矮小化に伴う軽佻さに対して、新資料を以って書美の荘厳さを回復せんとした運動の始まりとも位置付けるべきかもしれない。

二　阮元の考拠学上の位置

濱口富士雄『清代考拠学上の思想史的研究』に拠れば[7]、阮元の経学は、「文字学は経学である」というテーゼを踏まえた上で、阮元には、「論語論仁論」「孟子論仁論」「性命古訓」「論語一貫説」「大学格物論」など、いわゆる理学にあって、かれらの存立にかかわる重大な概念である仁・性・命・一貫・格物など―儒学本来のかたちにおける聖賢の真意であると理学において認識されていたもの―これらの経書中における原初儒学における本義を実証的に解明した論文が『揅経室集』に見える。各語の、経書中における実際の用例を博引し、帰納法的処理によって究明した概念は、当然のことながら、理学において説かれているがごとき思弁的、観念論的な内実はまったく含まない平明な術語として提示され、その理学における概念の変質が強調された。これは現象的にみれば、紛れもなく理学にたいする厳しい客観的論拠を示した上での糾弾のように見受けられる。しかしながら本質的には、反理学の熱気に満ちた問題意識の逆りに突き動かされたものとはいえない。ただ考拠学における既成の路線上を形式的に進み、目前の課題解決のために分析を適用したにしかすぎないものだろう。すなわち反理学の要素がすべて欠落していたというわけではないが、いわば非理学として歩み、主観から離れて訓詁考証の方法論が存することを確信するに至った立場からの分析なのである。したがってその方法論の完璧さを期して実事求是を主張し、客観性を徹底化するために帰納法を活用したにしかすぎないものと判断される。

と述べ、戴震の反理学から非理学へと移行する旨を分析しているが、そもそも清の道光期に発せられた阮元の『北碑南帖論』、つまり「石碑」の文字が、「法帖」の文字より優れているという説は、「石碑」、つまり思想としての「漢学」が、「法帖」、換言すれば形骸化した「朱子学」「陽明学」などの「理学（天理と人性に照らして経書を解釈する学問）」を批判する「樸学(清朝に流行した考証を重んじる学問)」の思想を基底としていたことに大過なかろう。さらに阮元の思想に異を唱えた内藤湖南の、書道史を「作意派」と「率意派」の二大潮

流に分類する思想は、「作意」つまり朱子学、「率意」は陽明学に該当し、あくまでも帖学の範疇での見解に過ぎず、今となってみれば、作意派の代表を趙孟頫、率意派の代表を米芾とした董其昌の「朱子学対陽明学」の構造を有する思想の影響下にあったと言えるだろう。

つまり、近世の書論史に君臨する董其昌や阮元の思想は、朱子学、陽明学、樸学という学問界の相克の現れであったと考えられる。

三　阮元の反清思想と革命について

ここで昨今、松村茂樹氏によって提唱された説に触れておかねばならないだろう[8]。それは、阮元ら考証学の祖となる顧炎武からの経脈についての思惟である。碑学を興した阮元『南北書派論』は詰まる所、世に行われている王羲之の「俗書」（南派）を払いのけ、正統である「中原古法」（北派）に立ち返るよう訴えた論文で、南派は中国を支配している清朝の、北派は中原を発祥の地とする漢民族のメタファー（隠喩）であると考えた。それは、阮元が、反清思想を有していた顧炎武の流れを汲む古文学派経学者であることに因るとした。

つまり阮元は、その書論によって、清朝の支配以前の漢族の統治に復古するべきことを唱えたとするものである革命の思想を内包していたとする。それは高官の位にあった阮元にとっては、分かるものには分かり、分からないものには、分からないギリギリの提言であったと言えるだろう。

例えば、乾隆帝の業績として挙げられるのは、その間なされた文化面での学術奨励、博学鴻詞科を設けて人材を集め、古今の優れた書物を書き写し保存するという文化的大事業である『四庫全書』の編纂が有名であるが、その他にも、『大清通礼』『皇朝文献通考』『続文献通考』『三礼義疏』『大清一統志』『大清会典』『皇朝通典』『御批通鑑輯覧』『唐宋詩醇』などの編纂という事業への執着である。

これらの編纂事業は、反面で、反清思想を調査するという禁書、字句の点検という文字獄（もじごく）と表裏をなし、『四庫全書』『大清会典』などの存在は、その代表とされている。

つまり乾隆の禁書・文字の獄は、その罪を犯したものは重罪としたが、その裏面で行われた大規模な叢書の編纂は、国内の知識人を多数動員したことによって、反清思想の個所を削除し、知識人に活躍の場をあたえ、清朝の臣下として懐柔することで絶対の服従を目指したものとも言われている。

このような背景の中では、乾隆、嘉慶、道光の三期に仕えてきた阮元が、書論という従来最も政治性の少ない分野といえる領域から、晩年に漸く宣言した、反清思想の発露であり、漢族の国粋主義を意味する際どい選択であったとする考えには、妥当性はあると言えるだろう[9]。

最晩年の変節

さらに近年の詳細な研究業績によると、阮元の書論、その中でも東晋書法観の変遷について衆目を集めている。

菅野智明氏の研究に拠れば[10]、阮元の持説「南北書派論」は、経学をはじめとする学術・文化の南北対峙と書のそれとの符合を説く点に主眼があり、これに伴い起草時（嘉慶十六年）の「北碑南帖論」も、南派を概して王羲之等貴族書法で代表させようとする傾向にあったとし、さらに、

しかし一方で晋塼研究にも力を注ぐ彼は、東晋書法について、晋塼に見る隷意の支配的な民間書法と、そこから脱化した貴族書法との重層的な並存を想定するに至るが、この重層論への転換は、嘉慶十九～二十一年頃、つまり起草からさほど時期を隔てずして行われた可能性が極めて高い。その背景には、「南北書派説」との整合や、張燕昌の所説との密接な結び付きが示唆

された。こうした重層論を説く序跋は、道光三、四年頃までに多見する。そこでは、法帖における貴族書法の伝真性を疑いつつも、隷意から脱化した今楷性には貴族書法の原像を見、それを北碑書法と対置させていた。

とした上で、さらに、

ところが、道光六年前後から、阮氏は上記重層論とは全く矛盾する見解、すなわち晋塼書法で東晋期を一元的に捉え、伝存の法帖貴族書法を偽跡と見る説を示すようになる。塼文、碑刻を更に絶対視する彼は、かねてより鍾繇の法帖を偽跡としてきたように、法帖貴族書法の伝真性を徹して否定し、隷意からの脱化や今楷性も梁代前後からとした。この転換は、書の南北という地域性の枠組よりも、碑(塼)や帖という書写の場による資料性の枠組の偏重に由来するものであり、果たして南北書派説は、阮氏自身が大きく修正に向かう点を銘記しなければならない。

と述べられている。

つまり、当初の東晋書法の重層論から、後の隷意一元論は、後述する郭沫若の蘭亭論弁の基底を為すとする説を述べられている。

民本主義の思想

阮元の考証の特徴の一つに民間に残存する塼を、決定的な判断の根拠とする傾向がある。

例えば、澤田雅弘氏によれば[11]、

晋が南渡の際に携帯したのが帖であったことに加え、立碑が禁じられた南朝では、真・行・草書だけがおこなわれて、篆隷の遺法が失われた、と説いている。しかしその後文は、里堂道聴録所録本・墾経室集本ともに東晋墓甎を例にとりながら、その墓甎書法に対する両本の解釈は全く異なっている。すなわち、里堂道聴録本にいうところは、「太興三年甎」は蘭亭序よりも三三年早いが、その書は蘭亭序に近似する。蘭亭序にみる行書の風は、王羲之以前からすでに行われていた東晋書派の書風であって、王羲之はその大成者にすぎないというものである。起草時、この一段で阮元が力説したのは、蘭亭序に三三年早い東晋墓甎においても、すでに蘭亭序同然の行書であったという点である。つまり、東晋墓甎の書は、蘭亭序同様に、篆隷の遺法が失われた南朝の書の物証として掲げられている。

と述べ、さらに、

これに対し、墾経室集本にいうところは、東晋墓甎は民間の陶匠の手になるものながら、篆・隷に近似し、「古意[隷古の遺意]」を失った蘭亭序の書とまったく似ない。東晋の風流人の書も「古意[隷古の遺意]」を伝える民間の書を変えることができなかったというものである。つまり、阮元は嘉慶一六年に起草したのち、東晋では貴族間の書と篆隷に近い民間の書とが重層的におこなわれていたと考えるにいたって、東晋墓甎の書を蘭亭序とはまったく似ない篆隷に近い民間の書の物証としたのである。

とその論拠となる民間の塼について言及し、さらに、先ほどの菅野氏の論究でも[12]、

爾来の重層論を排し、確証ある民間書法での一元化に傾いたところへ「永和右軍」塼が示された。管見では、該塼の書影を供する図録は見ないが、ともあれ、或いは王羲之との直接的な関わりも臭わす該塼を、阮氏が貴族文化の枠内で制作された塼と見做したことは容易に想像される。勿論、貴族の墓塼であっても、阮氏の言うように、その書者は「城塼を造りし者」即ち民間の陶匠である。しかし、こうした貴族墓塼以上に、貴族書法を別格に位置付ける積極的な根拠があるのか、阮氏の疑念は大いに高まったに違いない。果たして「東晋世塼、字體大類如此」という、貴族・民間の別なく時代を一律に覆う隷意の存在が確信されるのである。

とあるように、つまりは、民間書法への強い拘りの背景となる思想の実態を解明する必要がある。

これは先ほどの『北碑南帖論』で、

古石刻紀帝王功德、或爲卿士銘德位、以佐史學。是以古人書法、未有不托金石以傳者。

とあり、さらに、

閣帖晉人尺牘、非釋文不識。苟非世族相習成風、當時啓事、彼此何以能識。

とあるように、その可読性に伴う特権化、貴族性への異議、つまりは民本主義、大衆化にあったのではなかろうか。次章では、その傍証となる起草された当時の阮元を取り巻く環境ついて見て行きたい。

阮元と西学の影響

そもそも当時阮元を取り巻く環境を考えてみると、阮元が建てた書院、「学海堂」は広州にある。

劉建輝氏の『日中二百年』に拠れば[13]、

一八一〇年代には、グローバルな自由貿易体制が既に中国南部、広州十三行に忍びをよせ、すこしずつ在来の帝国が独占する貿易体制(広東システム)を転覆し、そして最終的には武力によって中国ないし東アジア全体を「開放」させたこと、もう一つは、この自由貿易体制を代表する列強諸国、とりわけ英米の個人商人たちの合法、非合法に広州に潜入し、従来の外国人商館十三行を中心に、現地の人たちを抱き込んだ形で、まがりなりにも一つの近代的空間を形成し、その後の中国各地で成立する租界の祖形を作りだした。そしてこの人たちに交じって、プロテスタントの宣教師たち、中でもその先駆者であるロバート・モリソンがまさに一八〇七年に広州に上陸し、以降、彼を中心に中国、そして東アジア全体(ガンジス河以東)にキリスト教、また西洋文化を広め始めたことである。

とあり、当時の広州での西洋化の濫觴が確認できる。

そして阮元もその西学の影響を受け、『畴人伝』に代表される天算関係の著書を残し、西洋の社会政治制度、宗教、政治関係、科学技術にも関心を示している[14]。また同時に阮元は「西学中源」という発想を堅持し、その来源を中国の歴史に求めた。このような学問姿勢が「実事求是」の治学に関係しているとも解せられている[15]。

さらに先に見た阮元の民本主義的性格について、王宁宁氏は、「民本与家风—阮元的慈善思想及其实践」の中で[16]、西洋の慈善思想、キリスト教の訓戒を中国の儒家伝統の民本主義、その仁学に求めたとする画期的な説を提出されている[17]。

阮元の『揅経室集』所収の「孔子論仁論」「孟子論仁論」、取り分け王道の在り方を説き、その民本主義によって、王の不仁によって、革命をも容認する『孟子』の思想[18]を説いた「孟子論仁論」の中で、例えば[19]、

按、以上六章、皆言不仁之君重賦斂、好戦陣、糜爛其民、凶年不救民、不得民心、必致菑危憂辱、陷於死亡。六国、亡秦皆不逃乎此言。可見堯、舜、孔子三代之仁政、百世以俟聖人而不惑。

(大意)考えてみると、以上の六章は皆不仁で、税金を重くし、戦争を好み、民衆をただれくずし、凶年には救わず、民心を得ない。そうすると必ず災い、危険、憂い、辱めを受け、死に至る。亡秦もこの例を免れない。堯、舜、孔子の三代の仁政を見るべきで、百世、聖人をまって惑わない。

とある不仁に拠る王の滅亡論は、先に見た松村説の阮元革命論と符合するとも言える。

経世致用の書論と書

「実事求是」という語は、『漢書』巻五十三〈河間献王劉德伝〉に

「修学好古、実事求是。」にあり、その顔師古注に「務得事実、毎求真是也。」に拠っている。その思想は、顧炎武、戴震の継承であり、『揅経室三集』巻五〈惜陰日記序〉で、その理念が明言されている[20]。

そもそも「実学」という語を現代の言葉に置き換えれば、「実際に役に立つ学問」のことであり、それは直截に言えば、朱子学、陽明学の理学、その内聖のための窮理と雖も、その空理空論的な思弁性への批判である。

そして「経世致用」、つまり古代の経書、学問は世を治め，実益を増進するものでなければならないという観念は、阮元によっても推進され[21]、それが芸術、書の領域まで拡張された結果が「北碑南帖論」等の書論であり、それは、書の実学思想の源泉とも言えるだろう[22]。

つまり、当該期にあって、中国の学問、書は、従来の貴族専有の内聖の学、内聖の書法から、政治、実学、経世致用の学、そして石碑主義の大衆の為の書へと変貌を遂げ、大きく舵が切られたと言える。

そしてここで経世致用の学として創作された書論、「碑学」「帖学」という枠組みに拠って、その理念の基に学問も「碑学＝古文学、今文学」、「帖学＝理学」と、ともに変遷を遂げ、前者が、清代の革新派、後者が保守派によって堅持され、それぞれにその思惟が深められて中国全体の改革が進み、それが書の姿にも反映されたのである。

---

1 本章は、拙著『書論の文化史』（雄山閣　二〇一〇年九月）を基に加筆修正を加えた。

2 真田但馬「阮元の南北書派論について」『東洋研究』第八号　一九六四年九月　所収。

3 東晋観の変化については、澤田雅弘「焦循『里堂道聴』所録の南北書派論　北碑南帖論について」『書学書道史研究』第十三号　二〇〇三年九月　所収に於いて指摘され、その意識の変遷については、菅野智明「阮元における東晋書法観の変遷」『書学書道史研究』第十五号　二〇〇五年九月　所収に詳しい。

4 『北碑南帖論』では「欧、褚の若きは、則ち全く隷法従り来たり、磨崖の巨石、区夏に照耀す」とあり、欧陽詢、褚遂良の書法の淵源が隷書にあることが明言されている。

5 前掲真田、菅野論文参照。

6 阮元の北碑観、またそこに現れる評語の考察は、菅野智明「阮元の北碑観ー北派観との関わりから」『芸術研究』二十七号（二〇〇七年三月　所収）に詳しい。

7 濱口富士雄『清代考拠学の思想史的研究』（国書刊行会　一九九四年一〇月）第二編

8 松村茂樹『「書」を考える―書の本質とは』（二玄社　二〇一〇年九月）

9 注8参照。

10 菅野智明「阮元における東晋書法観の変遷」『書学書道史研究』第十五号　二〇〇五年九月　所収。

11 澤田雅弘「焦循『里堂道聴』所録の南北書派論　北碑南帖論について」『書学書道史研究』第十三号　二〇〇三年九月　所収。

12 注10参照。

13 劉建輝　東アジア叢書『日中二百年―支え合う近代』（武田ランダムハウス・ジャパン　二〇一二年一〇月）

14 彭林「从《畴人传》看中西文化冲突中的阮元」（『学术月刊』一九九八年五月）　顔广文「论阮元的西学思想」（『华南师范大学学报(社会科学版)』二〇〇三年四月）王瑜「阮元思想研究述评」（『广西社会科学』二〇〇六年六月）

15 钟玉发「论阮元　西学中源　说的考据特色」（『黄山学院学报』二〇〇八年二月）

16 王宁宁「民本与家风…阮元的慈善思想及其实践」（『扬州大学学报

（人文社会科学版』二〇一五年五月）

17 田汉云「论阮元对孔孟伦理观的阐发」（『孔子研究』二〇一七年三月）

18 金谷治『中国思想を考える―未来を開く伝統』（中公新書　一九九三年三月）

19 阮元『揅経室集』上（中国歴史文集叢刊　中華書局　一九九三年）

20 尹协理「略论阮元的『实事求是』之学」（『江淮论坛』一九八七年一〇月）　彭林「阮元实学思想丛论」（『清史研究』一九九九年八月）

21 钟玉发「论阮元经世致用思想的学术特色」（『肇庆学院学报』二〇〇七年五月）

22 郭伟其「在经史艺术之间―从阮何书学看中国艺术史的实学传统」（『艺术工作』二〇一六年八月）

第二章　日本と影響関係にあった「経世致用」思想と書法への反映
―亡命、留学中国人を中心として

ⓐ　碑学派の変貌

清代の考証学から展開した学問潮流について、濱口富士雄氏は、『清代考拠学の思想史的研究』の中で[1]、

以上のように、乾嘉の考拠学全盛期を承けてからさらに考拠学＝漢学派の重鎮として漢学の提唱を生涯にわたって事としたため、朱子学を奉ずる宋学派から激しい攻撃を受け、方東樹はその著『漢学商兌』の焦点を阮元に絞っていたほどである。しかしながら、阮元の積極的かつ効果的な考拠学にたいするテコ入れと主導にもかかわらず、思想史上の事実として、阮元以降の考拠学の趨勢は、その正統的な進展としてではなく、清代考拠学の中枢に根源的な理念として貫かれていた反理学の立場が徐々に修正され、理学＝宋学との折衷を旨とした漢宋兼采の学風が兆し、殊にその学長ともなった陳澧に代表されるかたちでこれが明確化したのである。また一方では、漢学の異端的な発展形態としての今文公羊学が、その優れた唱道者を得て大いに興隆してきたのであった。

と整理されたように、阮元以降の漢学は、漢宋兼采の学風と今文公羊学の流れで俯瞰すると、見事に了解される面がある。

以下、阮元の流れを汲む書人達を少しく見て行きたい。

一　包世臣　書論の交差点[2]

実学思想家と書論

包世臣（一七七五―一八五五）。字は愼伯。号は倦翁。涇県（安徽省）の人。一八〇八（嘉慶十三年）の挙人。仕官の機会に恵まれず、晩年にようやく江西の新喩知県に就いたが、一年で退いた。彼は、若き日から「経世済民」の実学に傾注し、しばしば時の高官の幕で政策提言した。

著述も、政治経済に関する現実的な問題を論じたものが多い。『安呉四種（安呉は涇県の古名）』は、その代表作で、その一種に有名な「論書（芸舟双楫）」が収録され、彼の書学をよく伝えている。

それも包世臣なりの書の制度化を期したものとも言えるだろう。本来的に思想、書法、制度[3]、政治、歴史とは、少なくとも士大夫たちが書の担い手であったころまでは、有機的な繋がりを見せていた。

包世臣と魏源・龔自珍等の変法思想の先駆者たちとの共通要素は、腐敗した官界の原因としての官僚の儒教的倫理観の頽廃であったが、後者二人は公羊学的なユートピア思想家であったのよりも、実学者、現実主義者であったと言えるだろう[4]。

帖学と碑学

包世臣の書法は、図1の作品が示すように、そもそも王羲之の臨書など帖学的なものが多く残存するが、一つ目の碑学改革の契機となったのは、鄧石如との邂逅である[5]。二十八歳時の十日と、二十九歳時の二日しか出会っていないにも関わらず、何の啓発があったのかが重要だが、弟子の礼を取ることになる。

しかしその書論『芸舟双楫』の中では、その伝授は空間論と執筆法の二か所しか記されていない。

さらに留意すべき点として、その鄧石如の才を見出した梁巘は、そもそも帖学派の泰斗である。そのことなどを勘案すれば、阮元以来の北碑南帖論、つまり帖学を否定し碑学を主張したのは、四五歳時、安徽省出身で揚州や南京に住むことの多かった包が、北京に行く際、山東省を通り、済南で北朝の碑文を多く入手したことに因ると考えられる。

その証左として、『芸舟双楫』の導入部「論書」は、四三歳のものであるが、その碑学思想の核心にある「歴下筆譚(歴下は済南の古名)」以下、大部分は四五歳以後の思惟に拠るものである。因みに嘉道年間での学風の変化にも留意したい[6]。

そして、この時期これらを総合的に踏まえ、包は鄧石如を北碑派の創始者に祭り上げようと企てたと考えられる。

そもそも包世臣がそこで手に入れたのは、山東省の鄭道昭の碑文、また、北朝の碑文では、「龍門二十品」に代表される洛陽郊外、龍門石窟の造像記である。

東京国立博物館所蔵の「嬌舞倚床図便面賦」の造像記風の書(図2)は、その影響を如実に物語る資料と言え、特に始平公造像記(図3)の面影が濃い作品であり、その結体が拡張されると図4のような行書となるのだろう。

『芸舟双楫』〈歴下筆譚〉に「…魏霊蔵、楊大眼、始平公各造像は、一種を為し、皆孔羨(碑)より出ず。龍威虎震の規を具う」とある「龍威虎震の規」とは、龍の威厳、トラの咆哮の震えのような力強さと、注釈すべきなのであろうが、その気が成す異形を開発せんと、包世臣はさらに研究を深めている。

ただし、荘厳に書くのが石刻美の美しさと理解しつつも、どんな言葉でもそのように書くべきという訳にはいかない。諸々の法帖研究を鑑みると、そういう書法様式的な拘束の限界に、包は気付いていたと言えるだろう。

図3

図 2

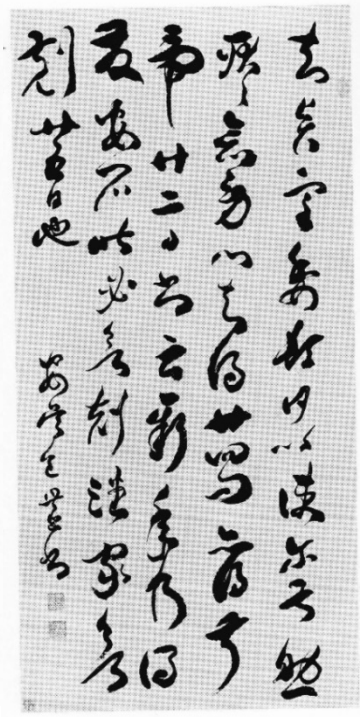


図 1

図４

気学と開発された用筆法と執筆法

書と所謂「気」との関係は、遅くとも孫過庭の書譜（図５）の時代に言及されている。更に南宋以後、書論の中に現われる「気」は、道学の理気二元論の着想の影響を少なからず受けている。

つまり包世臣の書論のキーワードとされる「気満」思想は、理学の延長、つまり理学と言う思想を背景とする帖学からの経脈の発想と言えるだろう。

そしてその気の抽出の拘りとして、この時代隆盛するのが、執筆論である。

包は双鈎懸腕、実指虚掌、逆入平出、によって「気満」に帰すと実践したが、その要諦とは、肉体内に於いて極限まで圧縮された指尖から発せられる気にあり、執筆法とはその「気放」の構えであり、その気の定着法としての用筆法が、中鋒論であると言えるだろう。

例えば、包の弟子であった何紹基は、廻腕法に拠る中鋒論によって書表現を実践し、呉熙載は、包世臣の細やかな執筆法を忠実に実践した人物とされている。

つまり、当時盛んであった執筆法、用筆法論争は、気功法の書への反映であり、包世臣は、帖学からの気学の命脈と、碑学との融合を期していたと言える。

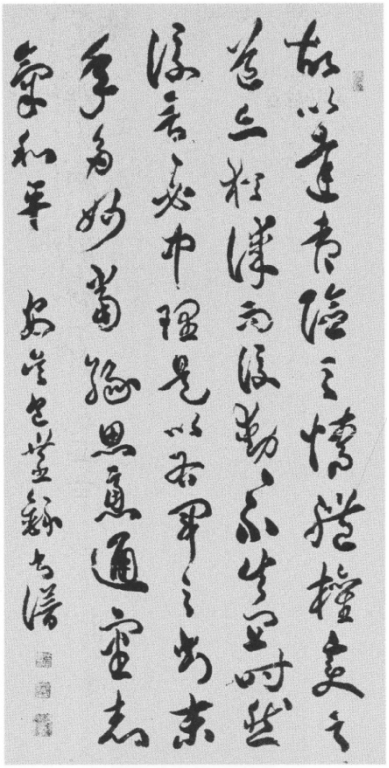


図５

時代は書に何を求めたのか

包の論としての碑学とは裏腹に、実作として残るのは、先に触れたように内聖、内面を詠う法帖系の草書の作品がほとんどである。

つまりその詩境の表出、本番のステージには、碑学を呑み込んだ帖学の姿が採択されたと見て大過なかろう。この碑学と帖学の矛盾と融合が、包世臣の特徴でもある[8]。

図６の草書作品のモチーフとなる詩は、宗廟の在り方を問う内容、つまり政治発言であるが、その気の注入への異常なまでの執着と、それに呼応する樸学と経世致用の学を呑み込んだ儒教宇宙の強固な大理によって国を治め、救わんとしたことは容易に推察できる[9]。

その貴族の在り方を問うた実学思想家の真実の姿、歴史上類例を見ない屈強の儒教魂こそが、包世臣の詩境であり、書境であったと言えるだろう。

これらの書論、書こそが、列強に対する救国のための抵抗運動の姿だったのかもしれない。

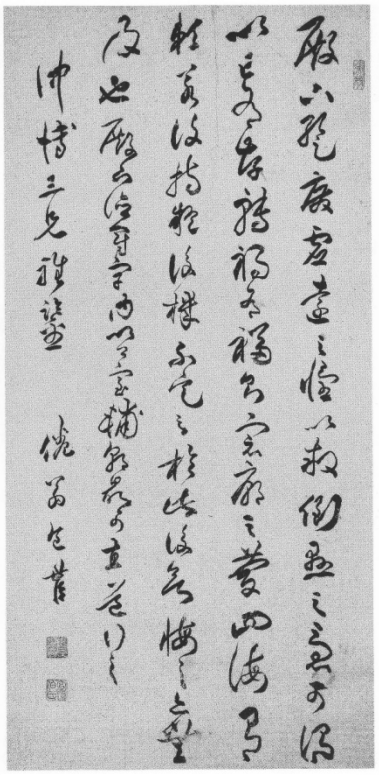


図6

包世臣の書論　Ⅰ

菅野智明氏によれば、包世臣論書の「奇」についての着眼が指摘できるが、その「奇」という美意識の源泉は、明の董其昌の書論『画禅室随筆』の中で、頻繁に使われる批評語に「奇に似(に)て、反(かえ)って正」という観念にある。これを翻訳すれば、「変わっているようで、逆に正しい」という意味であって、それが米芾や王羲之に見られ、趙孟頫には、理解できなかっただろうと述べられている。董其昌と趙孟頫の蘭亭序の臨書を比較すれば、その書論思想は、顕著に反映されていると言えるが、その「奇」と「正」で、物事を捉える着想は、陽明学左派の「狂者胸次(狂者の気概)」の議論の影響と言える。

このように当時の思想界では、「奇」「正」「真」が盛んに議論され、それが董其昌の書論(思想)や書の実作にも反映された。包世臣論書の碑学を呑み込み、より高度化された「奇」概念もその陽明学上の思想で捉えれば、その系脈については解消されるだろう。

そしてその高度化の内容について、菅野氏は[15]、

阮氏は更に、方筆の筆画を北碑の特徴とするが、包説における「中実」の筆法は、単に方筆の形状を意味するものではなく、「峻」「宕」「直」に類する評語と、「渋」「曲」に類する評語と対比されつつ、それらの属性が統一止揚される複雑な働きを見ようとしていた。このように複雑な統一止揚を見ようとする姿勢は、包説の特徴であり、それは結構や章法の面で確認される。阮氏は、北碑の結構に偏平を指摘する程度に止まるが、包氏の場合、「和」「渋」「曲」などの評語や、先学に着目されてきた「白を計りて以て黒を当つ」、「九宮法」「左右牝牡相得」など、主として結構・章法の調和や呼応の側面を重視する一方で、「変」も不可欠の要件とし、変化と調和・呼応、双方を満たすところに「奇」という境界を見るのであった。

と分析されている。つまり董其昌以来の帖学的な「奇」が、碑学的に開発されたものと考えられる。

包世臣の書論　Ⅱ

再び菅野智明氏の『近代碑学の書論史的研究』に[16]、

こうした包氏の北碑観は、実は彼の王羲之書法観と本質的に乖離せず、先学の指摘されるように、包説は南北差を重視しない。この点において、方筆の筆画のほか、隷意の諸技法の残存や扁平な外形に典型的な北碑像を見る阮説とは、鮮明な対立を成している。ただし包氏の描く王羲之は、北碑に見通した対峙的な鍾繇派と梁鵠派という二大書派のいずれも結び付けず、第三派たる一部の北碑とのつながりを重視した。そこには蔡邕や近代の鄧石如と並んで王羲之を中庸的な高みに置こうとする、包氏の志向が推測された。

という卓見を述べられている。

つまり包世臣は王羲之に象徴される宋学と、漢学に象徴され碑

学の用筆の止揚を試みていたと解せられる。

さらに換言すれば、阮元以降の考拠学の趨勢が、正統的な進展ではなく、清代考拠学の根源的な理念として貫かれていた反理学の立場が徐々に修正され、理学＝宋学との折衷を旨とした漢宋兼采の学風の表れが、包世臣の書論であり、その書であったと言えるだろう。

二　沈曾植　融合される東方思想の書相[12]

変貌する観念

沈曽植（一八五〇－一九二二）、は清末民初の官僚、歴史家。嘉興（浙江省）の人で、字は子培、号は巽斎または乙盦、晩年は寐叟と号した。一八八〇年、進士となり、刑部主事、員外郎、郎中を歴任した。一八九八年、母の死で離官。湖広総督張之洞の招きを受け、しばらくの間、張氏創建による武昌の両湖書院を主宰した。一九〇〇年、義和団の乱が発生すると両広総督李鴻章・両江総督劉坤一・湖広総督張之洞が東南互保を結ぶのに奔走し、その後、再び官途に復帰。江西省広信、次いで南昌の知府を経て、一九〇五年、安徽提学使に抜擢され、学生を視察すべく日本に派遣されている。翌年安徽布政使に累遷、賄賂が横行する腐敗した官界にあって、これを厳に慎み、その直行は江湖に喧伝された。一九一〇年に顕官との不和により引退。辛亥革命後は上海に隠棲、前清遺老の肩書きで売字を生業とし、邸宅を海日楼と称した。一九一七年、溥儀（宣統帝）を再度擁立しようとする張勲復辟に参加し、学部尚書に任命された。

博学で 多方面に造詣が深く、刑部在職中は刑法の研究に成果を上げるほか、西北辺境の歴史・地理や、音韻学などに精しかった。儒学・遼金元史・法律学・音韻学・地理学・仏教学に精通し、金石・日録学にも優れ、詩や書も能くした。

書学は、碑帖兼習の立場をとり、自身が蔵する碑帖も少なくなかった。それらへの題跋は『寐叟題跋』として影印刊行されている[13]。

その書は、こうした碑帖の 融合の産物と見做され、さらに包世臣や張裕釗の影響も指摘されている。また楊守敬、呉昌碩、羅振玉、王国維などの名士とも交遊があり、近代書壇の領袖と目されている。

帖学派の素顔から変法家の面目へ

沈曾植は、早年は理学に傾倒した。この現象は、多く清末の士大夫に共通する傾向でもある。例えば朱熹の「山林気」「道学気」という思想は、彼の書論にも散見し、陸九淵の影響も、その文献の中で確認できる[14]。図７の書は、そのような穏やかな理学者としての佇まいを示す帖学派の書、彼の素顔だと言えるだろう。ただし在官中、一時的に政治運動に頓挫していた康有為に金石学を勧め、それを受けて康有為が『広芸舟双楫』を執筆した話は有名であり、一八九五年、康有為や梁啓超とともに強学会を設立し、変法運動を推進している。そのような関係にあって、沈も同様に「北碑」にも傾倒したと言える[15]。そしてその両者の相異への言及もさることながら、その書流観、碑品観は、康有為と共有されるものであり、沈説は、これらの碑論の互証を拡大、充実させたと言えるだろう。沈も、その政治潮流の中で、当時の「大同」思想の現出である北碑に傾倒していったと言える[16]。図８に見られるような隷書の作品は、その時期の沈の思想変遷の足跡を示すものと考えられる。

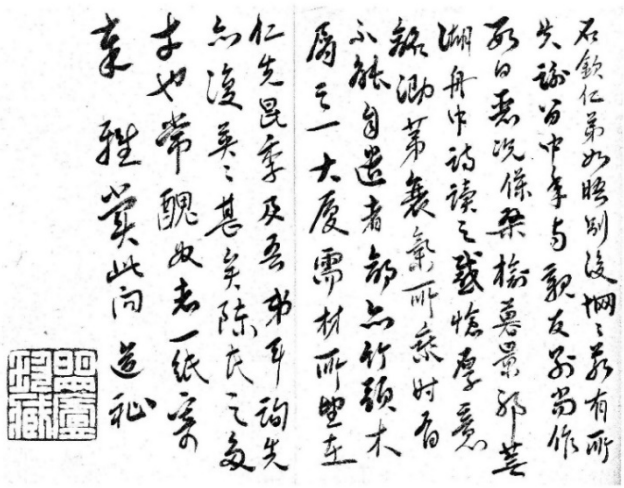


図７

図８

源泉としての包世臣

沈曾植が、特に理論面でも啓発を受けたのは包世臣の書論であり、またその筆法は晩年まで影を落とすことになる[17]。菅野智明氏の沈曾植の書論の総括に拠れば[18]、

沈氏は、包世臣の北碑論から影響を受けつつ、筆法の方・円による北魏期の対立的な二大書派を構想した。特に張猛龍碑・刁遵墓誌を各々の派の代表に据える点に、沈説の特徴が認められる。また、東魏期の敬史君碑も第三極に位置付け、この期の数碑を基準作とすることからも、包説に基づく展開が確認された。

とされている。

しかしそもそも包世臣の書論『芸舟双楫』は、碑学派の書論として世に喧伝されているが、その内実は碑学と帖学の兼采、融合にある。また沈は包世臣から実践面で多大な影響を受けたことはすでに指摘されており、図９の書にはそれが顕著に表れている。沈曾植の碑帖融合の思想、その漢宋兼采の学風の基の「融合」という思想は、その詩や学問にまで波及している。

菅野氏はさらに[19]、

従来沈説論書の特質とされてきた互証論では、先学に指摘されない異なる位相を見出せた。上記方円の様式対峙を、包説から示唆を得つつ六朝書論にみる二王の対比によって象徴的に擬える相。同じく二王の法帖を中心としながらも、前者の相とは別次元で鋭意比較の碑刻を拡充しつつ個別的・具体的な接点を探る相。更に阮元説への追従と反発の錯綜も互証論に多面性を齎す要因として見逃さない。

と述べられている。この「互証」という硬直化しない多面的なものの捉え方の先に「実事求是」、さらにそれら書境としての「融合」があったと考えられるだろう[20]。

その融合思想という着想の原点は、沈の詩に「百年、安吳老を起

こさんと欲し、八法歴下の談を重ねて添う」とあるのに象徴されるがごとく、包世臣の書論、及びその思想の漢宋兼采の学風の結果であると考えられる。

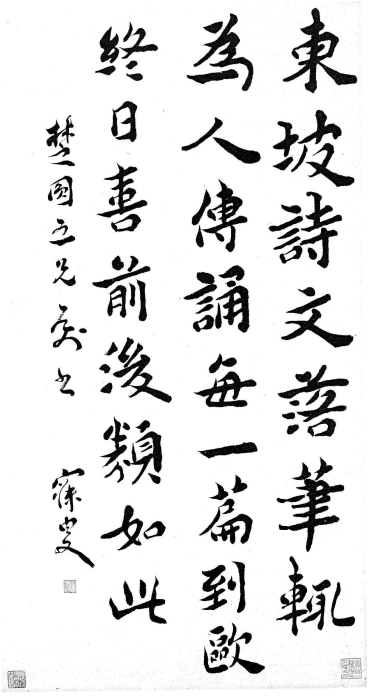


図 9

章草という新思想

沈は、晩年に章草をことさらに好み、包風のうねりのある草法に、直線的な章草の波法を交え、険絶且つ奇抜な図１０の如き書風を確立したとされる。しかしその章草書風への変貌の要因は、如何なるものだったのだろうか[21]。門弟の王国維は、「一切の諸学を治め、趣博くして旨約め、識高くして議平らかなり」と沈を評した[22]。その博学自由の才は、王国維によって提出された新しい研究『流沙墜簡』にまで及んだことは間違いなかろう[23]。その自由な木簡の姿態に魅せられ、中でもその章草に心奪われた。康有為同様に漢魏にその理想を見た経験のある沈曾植にとって、その章草が最も融合し易かったのかもしれない。またその章草の帖学(理学)的な要素が、大同の碑学の宇宙に上積みされた表現とも言えるだろう。

融合する詩書学の書相

図１１の北宋元祐期に寄した黄庭堅詩の釈文と大意を記すと

山行十日雨沾衣　幕阜峰前対落暉　野水自添田水満　晴鳩還鳴雨鳩帰　　霊源大士人天眼　双塔教師仙仏機　　白髪蒼顔重到此　問君還是昔人非

(大意)山の旅で十日雨に衣を濡らし、岡の先にある夕日に相対す。野水は自ずから田園を満たし、鳩は晴れにあらわれ雨に帰る。憔清禅師は世間の眼目となる方、祖心禅師は、諸仏のかなめになる方。白髪蒼顔になってたびたびここにくるが、戴君に機嫌を問うと、あなたは元気だが、昔の知り合いは亡くなっている

となる。

詩は、初め「三元」、盛唐開元、中唐元和、北宋元祐の詩人を規範とすることを説き、後に「三関」、つまり元祐、唐の元和、晋の元嘉の関を通過する「華厳詩境」を主張した[24]。そしてそれは思想的に言えば、経学、玄学、理学、仏学を超越し、解脱する境地を理想としたとも言える。

図１１のこの詩は、沈が拘りを見せた元祐期のものであり、書風的にもあらゆる要素が入り混じっている。まさに東方思想の融合、「渾沌」の書が、彼の行き着いた境涯だったと言えるだろう[25]。

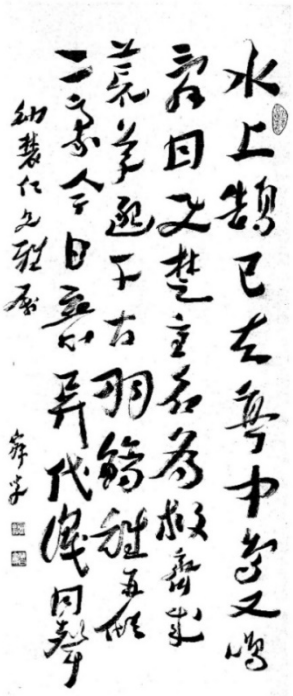


図 10

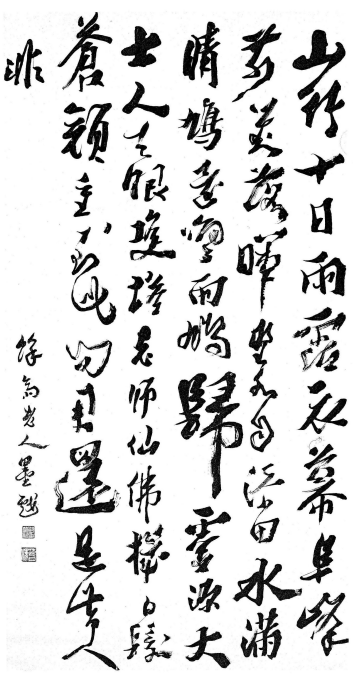


図 11

三　儒教魂の変革者　康有為[26]

大同の書と思想

康有為（一八五七―一九二七）清末の学者・政治家。広東省南海県の人。字は広夏。号は長素。また更生と号し、南海先生と呼ばれる。七歳でよく文を作り、十八歳のとき同郷の大儒、朱九江（程朱を主とし、経世致用を主とした）に経学を学び、また仏教、西洋の学にも通じた。のちに王闓運門下の廖平の影響で公羊学に入り、公羊学を大成した。一八八八（光緒十四年）、日本の明治維新にかんがみて、改革の必要を上書したが、いれられず郷里に帰り、万本草堂を開いて子弟の教育にあたった。弟子に梁啓超・陳千秋などがある。一八九一（光緒十七年）、『新学偽経考』を書いて、その説を発表したが、日清戦争後、一八九五年には変法自強をとなえ、また強学会を組織して政治運動をおこなった。一八九七年、『孔子改制考』を出して改革論の根拠を公羊学に求め、翌年二月には保国会を作り、光緒帝にも謁見し、ぬきんでて庶政改革の任に当たった。しかしあまり急激に過ぎ、反対派の反撃にあい、八月にはいわゆる戊戌政変を引きおこして、同志譚嗣同は刑死。みずからは梁啓超とともに日本に亡命した（百日改革といわれる）。その後は保皇会をおこして孫文の革命運動と対立。辛亥革命後は孔教会を設立して反動化し、清朝の再興をはかって失敗してのちは隠棲した。民国十六年二月没。著に、『孔子改制考』『新学偽経考』『大同書』のほか、『春秋公羊伝注』『礼運篇注』『孟子微』『論語新注』『広芸舟双楫』などがある。

その康有為を代表する大同思想が、図１２に書されている。

千界皆煩悩、吾来偶現身。　獄囚哀濁世、饑溺為斯人。　諸聖皆良薬、蒼天太不神。萬年無進化、大地合沈淪。人道只求楽、天心只有仁　先除諸苦法、復見太平春。一一生花界、人人現佛身。大同吾有道、吾欲度生民。廿年抱宏願、卅巻告成書。衆病如其己、吾言亦可除。　人天縁已矣、輪劫轉空虚。懸記千秋事。醫王亦有初。光緒甲申、法兵震粤、吾避兵還銀河鄉澹如樓、感兵事之惨、著《大同書》、以為待百年之後、不意今六十之年、親見大同、喜書舊書所題三詩。己未春正月。康有為

（大意）千界は、みな煩悩で、私はたまたま現在に身を宿した。囚われて濁世を哀しみ、苦しみてその人となる。聖人は良薬で、蒼天は神ではない。万年経つも進化なく、大地は落ちぶれる。人

の道はただ楽を求めるが、天の心にはただ仁がある。先ず苦法を除き、また太平の春を見る。ひとつひとつはなやかな世界を生じ、ひとびとは現実の仏身である。大同、わたしに道があり、民を生かそうと望む。二〇年その願いを抱え、三〇巻の書物を作る。もろもろの病は私の身のようで、わたしの言葉も除くべき。人と天の縁は已み、輪廻は空虚になる。予言は的中し、千年のこと。法の薬を施す佛菩薩界にもまた初めがある。一八八四年、フランス軍が粤を震わせ、私は銀河郷澹如樓に逃げた。兵事を哀しみ大同書を著し、百年後を待った。今思わず六〇歳、大同を見て喜んで、三詩を題す。一九一九年春。

図 12

この大同思想とは、儒教の経典『礼記』の一篇「礼運」に示された大同世界を、仏教世界や西欧の科学的知識で修飾し[27]、大同世界という一切の苦悩から解放された完全に自由平等の理想郷を書き上げたものである。

この著作期については、ここに記された一八八四年説は、既に批判されているが[28]、その当時の事態が執筆の契機になった可能性は否定できないだろう。

またこの作品が書された一九一九年は、ちょうど五四運動の時期に当たる。

一般に封建道徳、儒教文化の否定運動と言われるその運動について、康有為は、ここで肯定しているが、それは彼の思想、政治活動と一見矛盾しているかのように見受けられる。

竹内弘行氏は、この問題について[29]、

康有為が名を民国と称しながら今に至るまでの八年間、未だ一度も真の民意、真の民権を見なかったけれども、「これあり、学生の此の挙より始まるのみ」と評価し、いわば毛沢東の新民主主義革命論からする時代区分と共通する部分をもつことができたのは、あるいは両者ともに、母体としての伝統社会や文化を根底にもっており、五四運動も中国革命も実は、魯迅のいう「中国式の乱」であったかもしれない。ともあれ、魯迅を五四文化運動の代表者とすれば、五四運動評価の一点において、五四文化運動の攻守が一時入れ替わったこと、その鍵が、康有為の虚君共和制や孔教論を支えた伝統の母体をめぐる評価の相異にあった…

と述べられている。つまりこの書の文言にあるように、康有為にとって五四運動は、大同世界を拓く佛菩薩界の始まりと認識していたと言えるだろう。

三世説と書論

実学とは、実際の現実世界に役立つ学問のことであり、それが歴史学に投影され、理想的な未来のロマンスが語られるようになるのが、この当時の公羊学の特徴である。換言すると、西洋の未来に理念的世界を希求する様式を、「託古改制」という東洋独特の様式にすり替えて、実現せんとした挑戦でもあった。

そして康有為の大同思想に於ける三世論とは、「礼運」の大同・小康説を、公羊三世説と結び付け、拠乱世←升平世(小康)←太平世(大同)という順序で社会は発展するものと考えた。しかし中国の現状は無数の苦悩に満ちた拠乱世であり、それは孔子の時代から継続している。欧米社会については、男女平等の問題や、人民が平等で君主を立てず、大統領がおさめていることなどから、升平世と見るのが基本姿勢であったと言える。

そして孔子を素王として、その時代を拠乱世としてそこから升平世、太平世へと発展していくという考えは、漢代公羊家の考えであり、一八八九年頃に著された書道論『広芸舟双楫』にもその影響が垣間見られる。つまり康有為にとってのこの書論は、当初の動機はともあれ、三大著書といわれる政治思想書『新學偽經考』『孔子改制考』『大同書』の前座的な位置付けに見るべきものであり、それら思想書の論拠となる古文偽作説を証明するための準備作業としての文字研究的側面をもっている。そのような政治性を孕んだ当書論は、自らが信ずるユートピア文字を確立する布石ともなったと考えられるが、その太平世の文字として六朝文字が採択された。つまり「神品」「妙品」「高品」「精品」「逸品」「能品」という康有為のランク付けにおいて、その「神品」に爨龍顔碑(図13)、靈廟碑陰、石門銘を置いているが、近年の研究では、三世説に於いて最高位の太平世、それは後の『大同書』に結実する大同的理想郷に通底するとし、そうした境地に置かれるべき碑刻は、隷意の筆意、「渾」的筆画、変化ある結構という三特性を兼備しているという指摘が、既に提出されている[30]。

また殷周代の籀書は彫刻刀を使ったのでとがった筆画が多く、その後、漆によって書かれたので、丸味を帯び、漢代以後は墨を使うようになったことにより四角張ったようになったと説くように、その書風の変遷を用材から見たうえで、康有為自身、常に漆ばりの濃墨で丸味を帯びた蔵鋒用筆で通したアイデンティティは、あくまで素王孔子、隷書のＤＮＡ、つまり孔子教の継承者としての立ち位置を保守しながら、「渾」等の形而上学的な美学を構築した太平世としての六朝の表出である。

つまりその書論を基盤に書に於いても、大同に結実するロマンスの世界を描いたと言えるだろう。

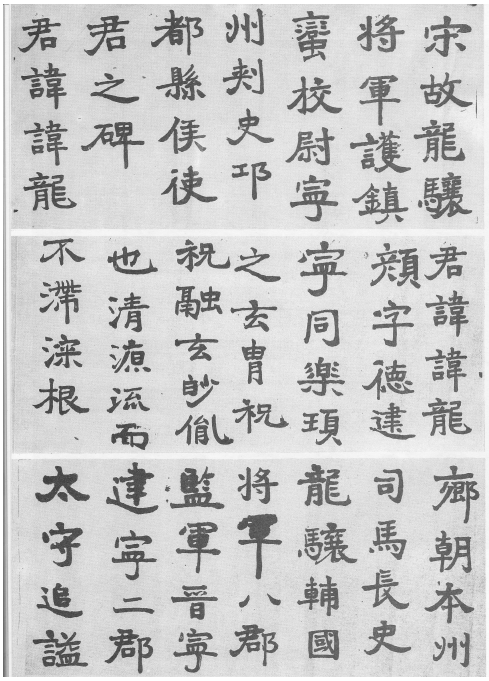


図 13

北碑南帖論の批判的継承と「渾」と「峻」

菅野智明氏の分析に拠れば、『広芸舟双楫』に於ける「書派」の語、及び　関連語彙を列挙した上で[31]、

これらを通覧してみると、その殆どが南北書派、及び漢魏の鍾繇・衛氏派（もしくは包氏のいう梁鵠派）への言及で占められていることに気づく。南北書派説が阮元の提唱以来、碑学の基本的論点に据えられてきたことは、ここで改めて説くまでもないが、康氏の場合、かかる南北説は上記のように「書は派を分かつべきも、南北は分かつ能わず」（宝南第九）として明確に否定する。だがこの否定は、一方において、包氏が提起する鍾繇・梁鵠派という二派の対峙説を批判する中で、微妙に揺らぐことになる。康氏は、史伝をもとに梁鵠の書法が鍾繇のそれに拮抗するほどの書流を形成しなかったとし、むしろ衛覬から衛瓘・衛恒へ累代継承される衛氏の書法を重視した。

とし、康有為においては、漢魏南北朝の二大潮流として衛氏ー崔氏と鍾繇ー盧氏を二大書派と提示したとした上で、さらに書の評語に於いて更に微細に、「渾」系と「峻」系で分類したと整理された。そして概ね渾系は鍾派、峻系を衛派に属すると観念されている。

そしてその「渾」と「峻」の内実について、

この書派群では、評語「峻」が付す一群と、「渾」の付すそれとが、大きなまとまりを形成しつつ対峙している。各々は、筆画の方／円の別でほぼ重なるが、「渾」の書派の実際を見るならば、ある種の円筆はその範疇に入れず、逆に一定の方筆性が認められるものを取り込むなど、独自の概念が窺われた。これには、康氏における「渾」の評語が与っている。

とした上で、さらに、

康氏の六朝評価は、かかる書派を単位に窺うことによって、その傾向が明らかになった。即ち「碑品十七」の所掲碑刻に鑑みるなら、今般の十四派は、「高品」以上と、「精品」以下に、ほぼ明瞭に区別されている。この内、高品以上の高位の書派は、上記の「渾」を冠する一派の他、隷書の筆意を留める古碑の一派、変化に富んだ姿態の摩崖で構成されることが確認された。そこで「神品」に冠される爨龍顔碑、靈廟碑陰は、こうした隷意、「渾」的筆画、変化ある結構とういう三特性を兼備した、康氏碑品の典型的存在であると推測できる。

と述べられている。

つまりこれらの書論は、後の梁啓超の新史学に連なる科学性と、康有為の漢代にルーツを求める恣意性、つまり思想性の産物だと考えられる。

宋学的思惟、人欲と天理の行方

「人欲を去り、天理を存す」

このストイックなテーゼは、宋学からの理学の伝統である。

青年期に朱子学者である朱次琦に教えを受けた康有為にとって、その思想を如何に継承し、また発展させ、新たに時代に合うものを創出するか、大きな課題であったことは言うまでもない。

結論から言えば、その「天理人欲」の説に対して康有為は「天欲人理」の説を提出することになる。早く二九歳の著『康子内外篇』一四、理気篇の中で、

故理者、人理也。若耳目百体、血気心知、天所先与。嬰児無知己有欲焉、無与人事也。故欲者、天也。程子謂天理是体認出、此不知道之言也、蓋天欲而人理也。

（大意）よって理とは、人の理である。耳目身体、血気知覚は天より先ず与えられたものである。嬰児は知識はないが、欲がある。人事に関係ない。よってやはり欲は、天である。程子は天理を

体認してるというが、これは分かっていないから。たぶん天欲人理が正しい。

とあり、従来の理学を批判し、欲望の合理性を認めている。また後年の『大同書』に於いても、

大同之世、交合之事、人人縱其欲、而給其求、(中略)無界無限。

(大意)大同の世界は、性愛は人々の自由であり、その求めに与え、(中略)無限である。

と述べ、男女の性欲を認め、一定の条件を付して肯定する徹底的な欲望肯定論を主張している。

つまりは、欲望が膨張し、人と自然、社会を破壊する緊張を、「仁」の徳で解決し、調和させるという近代的思想性を具えていたと言えるだろう[32]。

ならば、次の書(図14)の

澹泊足以明志、寧静足以致遠。慆慢不足以研精、険躁(不足)以理性。

(大意)淡泊が志を明らかにさせ、冷静さが遠くをおもんばからせる。あなどりは研鑽を妨げ、険しく騒がし状態は理性を妨げる。

とある「理性」の文字は、近代的な理性の姿態である。

その激しいエロチズムを内包した書は近世からの変転、その思想の反映という他はないだろう。総じて言えば、康有為の隷楷書は、公的な性格の場で、行草書は、内面を詠う語や詩など私的な場で多用されている。

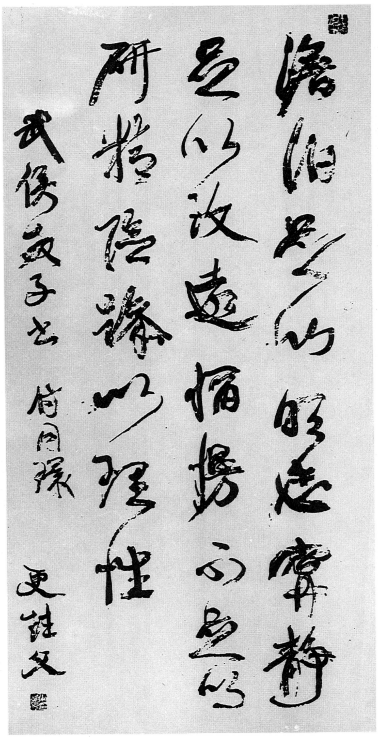


図 14

四　梁啓超　進歩派の啓蒙思想と書の在処[33]

進歩派と伝統

梁啓超(一八七三―一九二九)。清末民国初の学者、政治家。新会県(広東省)の人。字は卓如。号は任公。幼時から秀慧で、阮元の学海堂に学んで、訓詁の学を修めたが、十六歳の時、康有為の広東長興の万木草堂に学び、その変法維新・大同の説に共鳴して、その鼓吹につとめた。一八九六(光緒二十二年)に、中国最初の雑誌である『時務報』を上海で創刊し、自らも『変法通義』を著した。

一八九八(光緒二十四年)、康有為が光緒帝に召されて戊戌の新政を行うに及んでは、その参謀格として活躍し、その失敗後(これを戊戌政変という。光緒二十四年八月のこと)は日本に亡命し、『清議報』を発刊した。次いで一九〇二(光緒二十八年)、『新民叢報』を出し、新民運動を展開した。民国になってからは、一九一五(民国四年)袁世凱の帝政に反対し、民国六年張勲の復辟に反対し、民国七

年にはパリの平和会議に 中国全権顧問として渡欧した。晩年は時代の動きにとりのこされて専ら学術研究に従事した。民国十八年没、年五七。著に『清代学術概論』『中国近三百年学術史』『中国歴史研究法』『先秦政治思想史』『中国文化史綱』『墨経校釈』『飲泳室文集』『大乗起信論考証』『梁任公近著第一輯』『梁任公学術講演集』などがあり、著書論文を集めたものに『飲泳室合集』がある。その『飲泳室文集』には、古碑帖を扱った題跋類が多く収められ、執筆時期は民国六年から七年、十三年から十四年に集中している。

その進歩的な思想は「四蔽」「二病」として、以下のように伝統文化を批判する。

1 旧史は朝廷の君主と臣下のために書かれたもので、国家に対する観念がなく、国民のために書いたものではない。
2 個人の存在に重きを置きすぎて、社会そのものへの視点がない。
3 過去の事実の記載はあるが、現在の記載がない。
4 事実の記載に重きを置いて、その事実が起こった因果関係について考えていないため、将来を見据える観点がない。
5 事実の記述はあるものの、それは役に立たない事実で、その内容に取捨選択を加えていない。
6 「述べて作らず」という考え方に固執して体裁を踏襲するだけで、そこにほとんど創造がない。

つまり旧来の史学には、君臣関係という意識だけで、国家、国民という意識、社会そのものへの視点、現在の記述の欠如、歴史の因果関係、内容の選択、新たな創造という要素が欠落していると指摘する[34]。

さらに、「私は孔子を愛する。しかし真理をもっと愛する。私は先輩・国家・故人を愛する。しかし自由をもっと愛する。それに私は孔子が真理を愛することを知っている。」と述べるところが梁啓超の伝統文化への基本姿勢だったと言えるだろう[35]。

詩界革命の形

梁啓超の詩を分析するのであれば、『飲冰室詩話』を紐解かねばならないだろう。その中で、明確な定義をせずに「詩界革命」の言葉を使うが、新意境、新語句、旧風格を同時に充たす詩を作ることが、梁啓超の詩界革命の定義だとされている。そして、その中で「近世詩人で新理想を鎔かして旧風格に入れ込むことができるのは、黄遵憲公度を推奨すべきであると」と述べ、黄遵憲を詩話全体に渡り高く評価する。

また梁啓超の詩界革命の特徴は、杜甫を特に評価することだと言えるだろう。その「情聖杜甫」の中で、

真実の描写が詳しければ詳しいほど真情はいよいよはっきりと表れる。我々がそれらの詩を熟読すれば『真即美』の道理を理解することができる。

と述べ、その詩風を「簡単な語句の中に無限の情緒を包括」していると、何よりも情感を重んじる。

そして次の書(図15)は、一九一七(民国六年)に梁啓超が王羲之風の様式で杜甫の暮帰詩を書したものである。

霜黄碧梧白鶴棲　城上擊拆復鳥啼　客子入門月皎皎　誰家搗練風淒淒　南渡桂水闕舟楫　似歸秦川多鼓鼙　年過半百不稱意明日看雲還杖藜

(大意)黄色の霜、青い梧に白鶴はすみ、城の上では、拍子木を打って夜回りし、鳥がまた鳴いている。客人は門に入り月は光り、だれの家でねり絹を打ち、風がひややかであろうか。南は桂水を渡る。舟の楫が少なく、秦川に帰るようで、軍事用の太鼓がおおい。年は五〇年がすぎ、意はかなわず。明日は雲を見て、杖をもって帰ろう。

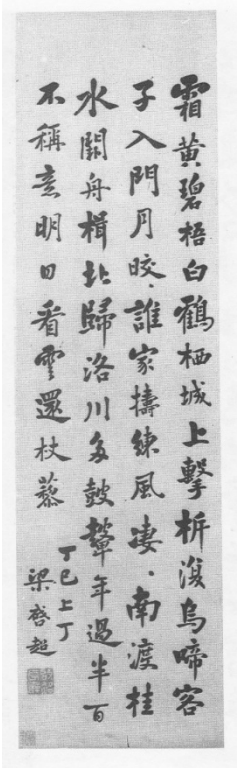

霜黄碧梧白鶴栖城上擊柝復烏啼客子入門月皎誰家擣練風凄南渡桂水開舟楫北歸洛川多鼓鼙年過半百不稱玄明日看雲還杖藜
丁巳上丁
梁啓超

図１５

とあり、前半は暮帰のさむざむとした景色を詩人の悲哀に託し、後半句はその生活の寂しさ、孤独さを描写している。

当年の七月、張勲の復辟に反対するために、段祺瑞内閣の財務総長となり、八月にはドイツに宣戦布告、十一月には、財政総長を辞任しており、この詩は、上丁つまり二月か八月の上旬の丁の日に書かれている。前年の護国運動成功後、政治から離れ社会教育事業に従事するが、また「憲法」「内閣」「復辟」問題によって、政治の渦中に巻き込まれる。

この詩はその政治に対する失望と社会の度重なる変乱への嫌悪感をあらわしているのだろう。

新民と新史学と書

康有為の弟子であり、その三世説を継承した梁啓超が、来日後、愛国心発揚のために独自の社会進化論を踏まえた新民論、新史学を発表する。これが後に継承される「実事求是」の精神である。

一九〇二年に発表された『新民論叢』に発表した『新史学』には、今日西洋で通行している諸学問の中で、中国に固有のものは、史学だけである。史学とは学問の中で最も広く、きわめて大切なものである。国民の明鏡であり、愛国心の源泉である。今日のヨーロッパの民族主義が発達し、列国が日々文明を発達させたのには、史学の功績がその半ばにある。

と述べ、史学の意義を説き、『新民論叢』の第一号に掲載された『新民説』では、

新民というのは、我が民がことごとく古いものを捨て、他のものに従うのではない。新の意味に二つある。一つは「もともと持っていたものを鍛え磨いて新しくする」ことである。もう一つは「もともと無かったものを他から取ってきて新しくする」ということである。

と、その新民の姿を述べている。

そのような新民論、と新史学との有機的な関係の中で、かれの書があったと言っても過言ではない。梁啓超の書について、宣統三年、つまり一九一一年時の書について星翁氏は、

梁任公の書法は、鄭文公の魏碑にその用筆法を得ている。しかし、晋唐の王羲之、褚遂良の筆法で険しさを納めて出入し、粗の中に細を帯び、幾つかの意を平らげ濃厚な古体字について見ると、龍が飛び鳳が舞うようである。

と評せられたように、当初は図１６のごとく帖学の影響が強いものだったと考えられる。

また梁啓超の書についての言説は、「飲冰室碑帖跋」と清華大学教職員書法研究会での講演録にある「書法指導」（民国一六・一九二七年）五五才時の諸説に基づくべきであるが、先ず金石学者としての梁啓超のスタンスは、

１　金石書を他見し、かつ引用する。
２　文字考証に主眼をおく。
３　史書による歴史的考証を旨とする。
４　北碑の啓蒙を説く。

とされている[36]。また師である康有為の書論『広芸舟双楫』の影響が強く反映されていることも既に指摘されている[37]。

そして、前者の題跋時期が乙丑の歳、つまり一九二五年に集中しているが、彼が前年に病床に臥し、天津で療養生活を送り、年明け

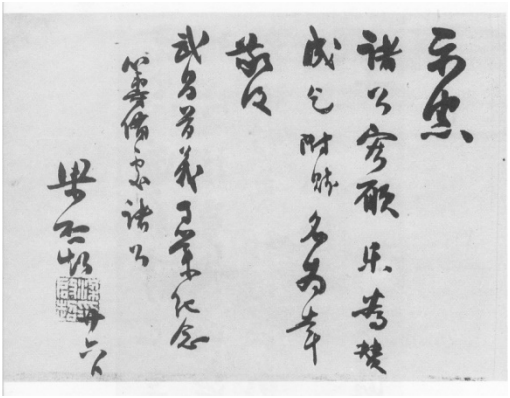


図１６

て回復したものの公務に復帰せず、天津で静養していた時期であり、また現存する書作品もそれ以降のものがほとんどであるのは、当時に梁啓超は書に携わる時間が多かったことを物語っている。

当時、書の跋文を書くことは、余暇の楽しみであるとともに、彼の新史学の一環だったのであろう[88]。そしてその書風も図１７・図１８に見るように漢碑の様式、北碑の書が多見され、この時期から本格的に梁啓超の書家として生活が始まったと言えるだろう。

図１７

図１８

図１８は、北碑の臨書であるが、図１７には、

宿雪不除　愛厥虛白
新月来覿　麗以流黄

（大意）積もった雪を除かず、その虛白を愛す。新月がやってきて、麗しく黄色に流れる。

図１９

と当時二月の情景を詠っている。

また図１９に見えるような、北碑を基盤とした行書様式は、当時に編み出されたものであったと推測できるが、その文言は、

石梁茆屋有彎碕　流水濺濺度両隄　晴日煖風生麥気　緑陰幽草勝花時

（大意）石のはり、かやの屋に湾曲した岸があり、流れる水がさらさらとつつみをわたる。春の日のあたたかい風が麦の気を生じ、緑の影の奥深い草が花よりも優れている。

初夏に書かれたこの詩は、当時の梁啓超の静養中の自身の状態を暗示していたのであろう。

北碑の書論と「蛻嬗」

菅野智明氏に拠れば[39]、梁啓超の書論、その題跋の分析から、まず注目すべきは北碑、さらにそれを中心とする魏晋南北朝碑への跋が挙げられる。康有為の『広芸舟双楫』に啓発された梁啓超は、無論その影響下にあり、その傾向は自然であると言えるが、そこでその特色を言えば、既に劉濤氏の指摘にあるように、梁説が諸跋を貫いて常に視座に据えているのは、書体や様式の「蛻変」「嬗変」乃ち変遷であり、北魏碑について、「元景墓誌跋」「鄭道忠墓誌跋」「恵猛墓誌跋」などから太和期、そして神亀・正光期に画期をみようとする点を、梁氏一流の「史家的眼光和立場」の反映とされている。さらに梁氏が「方厳峻抜」なる書風を「盛魏正宗」とする傍ら、「石門銘」や「龍門造像」などを「別調」とする「主流」と「支流」の対比的鑑賞法も梁氏碑学の特質と見ているとされた。

また太和期様式の特質として、「蛻して未だ化せず」という隷法の残存や、重厚にして刀意の横溢する筆画の迫力を見出し、神亀・正光期では張猛龍を基準作として、精緻な刻法によって、方厳と豪放を兼備する結構を重視し、それに代表される様式を書品の絶頂と捉え、その後の東・西魏、北斉・北周期では、作為的な隷法に書品の凋落を見られた。

さらに、神亀・正光期の一類を正統とし、その傍系について多様性を説き、「風華」「妍妙」を付すも、南派書法の影響を認めず、あくまで北碑の自律的進展を見、遷洛以後の北魏期の絶対視によって、南化の時期を遅らせたと観念されている。

以上のような、史学によって、梁啓超の書学の骨格は形成されていると考えられる。

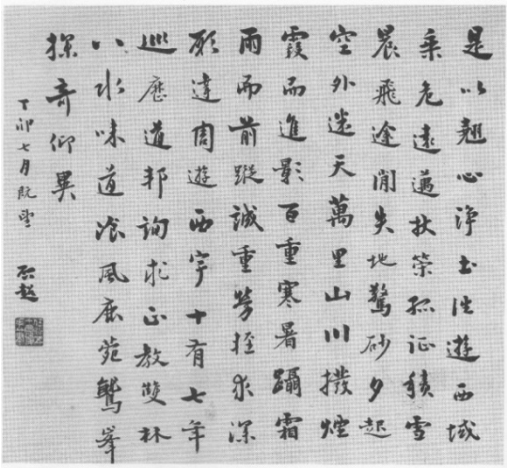


図２０

娯楽という在処

一九二七（民国一六年）、逝去の約前年に発表された「書法指導」は、梁啓超の晩年の書道思想の結晶である。因みにこの年に師康有為は亡くなっている。その概略は、

1　字を学ぶのは、造像記の『魏霊蔵』『始平公』『楊大眼』から入手するのがいい。

2　唐碑と六朝碑を比べると、前者は規矩整斉としており、後者は一定の法則がない。筆力遒勁なものにしたければ、六朝碑がいい。

3　乾隆以前は帖学が盛行したが、中葉以降は代わって碑学が興り、現在に至る。コロタイプ版が発明されて、帖学にも回復の希望が出てきた。

4　入門が難しいため学ぶには慎みが必要であり、道を誤ってはいけない。模倣すべきでないものに四派ある。①趙子昂・董其昌の一派②蘇東坡③柳公権④李北海がそれに当たる。

となるが、基本的に康有為の説を踏襲するものの、帖学のコロタイプ版を認めるなど、より柔軟性のある思想と言える。

さらにその中の前段の前置きで「書法はもっとも優美で便利な娯楽の具である」と述べている。

これは、書が元来詩の表現であり、その詩とは毛伝以来「詩は志

の之くところなり」とする伝統を放棄していると言える。

少なくとも政治家時代の詩には、政治的な寓意が認められ、この思想は、隠棲以後の書の在処を具体的に述べたものと考えられる。

図２０の「節臨聖教序」は、「書法指導」発表と同年の作であるが、一九二〇年代に於いて、仏教の「中国化」の意義を高く評価し、さらに仏教の「中国化」のプロセスを、将来の中西融合による「新文明」建設のモデルとしていることと、この「妙」を尽くしたとする[45]、仏教碑文への執着とは関係があると言えるだろう[46]。

五　羅振玉　科学とルーツの書法[42]

羅振玉（一八六六―一九四〇）。清末民国初年の考証学者・金石学者。浙江省上虞の人。字は叔蘊、また叔言。号は抱残老人・守残老人・雪堂。少年のころから考古学に没頭し、成人して張之洞の知遇をうけ、清の宣統元年（一九〇九）、京師大学堂農科監督になった。その間、清室内閣大庫所蔵の古文書や敦燈文書の保存に努力した。

民国革命で日本に亡命し、京都で甲骨文字の研究に専念し、帰国後、天津に居住し、溥儀の家庭教師を務める。満洲事変後、その監察院院長となり、後に日満文化協会会長も務めている。金石考証の学に精通し、王国維の師であるとともに義父である。書室を禁雨楼・面城精舎という。民国二九年没、年七五。著に、『殷虚書契考釈』『殷虚書契前後篇』『石鼓文考釈』『敦煌石室書目』『敦煌石室遺書十二種』『敦煌零拾七種』『史料叢刊初編』『皇清奏議』などがある。

跋文と日常様式

中国清王朝の崩壊にともない、多数の中国書画の逸品が日本に流入しその受け皿になったのが、今の関西にある博物館の前身であり、またその収集に当たったのは、政治家、財界人、学者であって、その作品群は彼らの功績の結晶である。その中国側のパイプ役となった清朝遺民の代表的な人物として、ここでは、羅振玉を挙げる。辛亥革命の難を逃れ、王国維とともに京都に居住し、京都学派をはじめ、その周辺の財界人、政治家と交流した。そしてその生活の為に、所有していた書画文物を売却。また、書品の流伝についてなどが書された跋文の内容は、その書美とともに近代日中文化交流史に於ける貴重な歴史資料とも言える。図２１の宋拓集王聖教序（上野本）跋を見ると、

集右軍書聖教序宋拓本、平日所見不下十餘本。然多南渡後拓本。此本曩得之西呉周氏、精采殊勝、初亦不敢遽信為未渡南時物、比来京師、見楊大瓢跋関中南氏所蔵宋末周艸窓本。艸窓言得之京口一士人家、忭京未失時所拓者。並几与此細校、一一朐合、始知此本確為北宋氈墨。歳庚戌、吾友内藤博士来京師、出以相示、一見驚歎。視予之篋蔵十餘歳、必竣校以周艸窓本而始確信為北宋拓。其鑒賞之敏鈍、相去殆不可道里計矣。博士叚之帰国、付良工精印、並介予此本於其友上野君、其愛之篤、与博士同、因以帰之、爰識語于冊尾、以存鴻爪、辛亥七月下澣、上虞羅振玉。

（大意）集右軍書聖教序の宋拓本は、この半生で十数本を見てきた。しかし南渡後の拓本が多い。この拓本は、以前西呉の周氏から得て、その精彩は殊に勝れ、初めはすぐには南渡以前のものとは思わなかったが、最近北京で楊大瓢が跋した関中南氏所蔵の宋末周艸窓本を見た。艸窓は、これは京口の一士人家よりえて、北宋の都、忭京の時代に拓したものであると言っている。机に並べてこれと細かに比べると、すべて符合し、はじめてこの本が確かに北宋の拓本であることを知った。歳、庚戌（一九一〇年）、吾が友内藤博士が北京にきたので、出してみせたが、一見して

驚歎した。自分の篋蔵のものを十数年見てきたが、必ず比較をおえるのは周艸窓本を使い、始めて確信して北宋拓と見做した。其の鑑賞の敏鈍は、わたしと比べてそのみちのりは計ることが

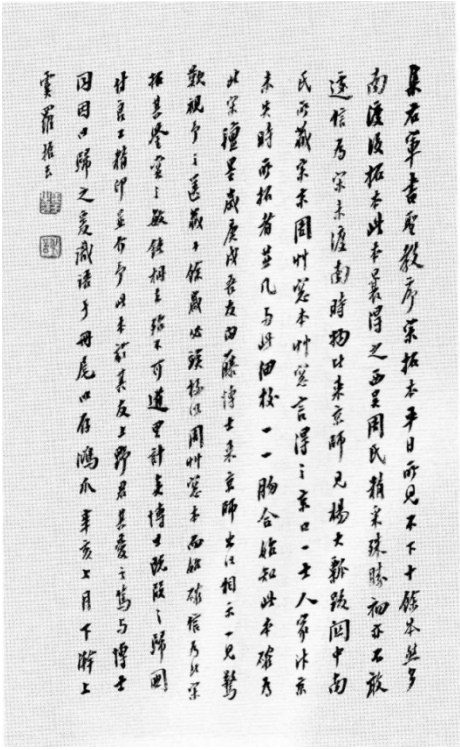


図２１

できない。博士はこれを借りて帰国し、良工に精印させ、あわせてこの拓本をその友人、上野君に紹介すると、これを愛することが篤く、博士と同様であった。であったのでこれをかれにあげることにした。ここに冊尾に識語して鴻爪を残す。辛亥(一九一一年)七月下旬、上虞羅振玉。

このような細字が、羅振玉の科挙日常文字であると言えるだろう。また内藤は、羅振玉と旧知の仲であったことが分かる。

そしてこのような時勢背景に於ける跋文は、当時大量に書かれ、原田博文堂から、コロタイプ印刷として出版された。羅にとっては生活のためでもあったが、清朝の文物に纏わる、日本と清との交流を示す、貴重な資料でもある[43]。また従来皇帝の為になされたこの跋文を付すという作業が、大衆の為となったのが羅振玉の跋文の特性であり、碑帖の思想に捉われない新たな唯物的な実学の書論の形であったとも言える。

甲骨金文の学問研究文字

羅振玉は、金石に造詣が深かったが、その史学、学術研究上に残した貢献の一つが、甲骨文の伝播である。それは、『殷墟書契前編』などに纏められている。甲骨、金文の臨書作品が多数残されたが、杉村邦彦氏が述べるように、その書は「臨」というよりも、「写定」すなわち「定本として書きとめる」の語を用いている。つまり彼のそれは、学問の延長であり、むしろ学問そのものであった、という説が提出されている[44]。

確かに、多数の「金文」の臨書は、そのような傾向にあったと言えるだろうが、甲骨文の場合そうとは限らない。図２２の書には、甲骨文を用いて、

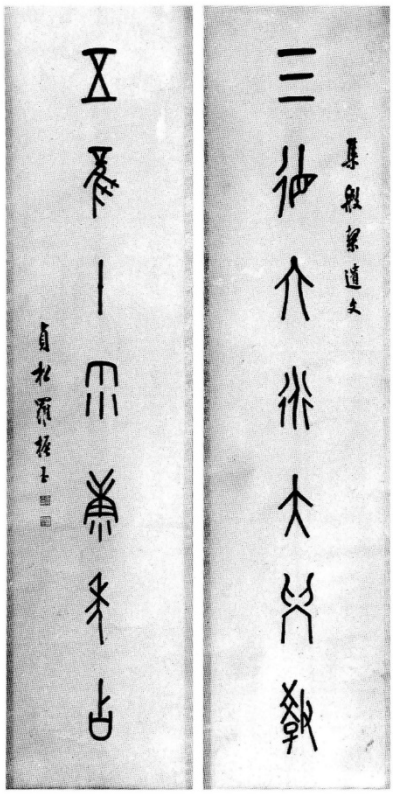


図２２

三徳六行大学教　五風十雨豊年占　集殷契遺文　貞松羅振玉

（大意）三徳（智仁勇）、六行（孝、友、睦、婣、任、恤）は大学の教え、五日ごとに風が吹き、十日ごとに雨が降る意から、世の中が平穏無事であるたとえ。気候が穏やかで順調なことで、豊作の兆しとされる。

羅振玉は、その生涯に於いて、教育行政への関心が強かった。当時の多くの論者たちが、「西学」を提唱しながら西洋の学問の倫理的、精神的価値を認めず、中国と外国を切り離したのに対して、羅振玉は先ず革新の諸原理を異文化としてとらえないのみならず、西洋の「倫理思想」にも「多く隠かに我が先哲之遺訓と合す」として、西洋と中国の内的生活に於ける相関関係を見出していた。それによって儒家思想の価値観を中国個別なものとしてではなく、東西の価値を踏まえた普遍的なものとして足らしめようとした。つまり西洋の近代的なものと中国の伝統的なものを、「新」と「旧」として捉えず、中国の主体性と国際化の実現を両立させようとしたのである[45]。

そのような文脈から言えば、中国の文字のルーツの研究、その甲骨文字を使って軸足を中国に保ちながら、古代の神秘的な雰囲気の中で、儒教道徳や固有の文化を高らかに宣言した羅振玉独自の境涯を記したものと言える。その羅振玉の甲骨作品も、今も色あせることのない持続力な生命感を有していると言えるだろう。

内面、境涯の表出としての書

一九三三年、羅振玉六八歳の六月、二年前の満州事変、前年の満州国建立を受け、監察院院長に就任、十月には満日文化協会の常務理事の任に就く。その臘、つまり年の暮、陰暦の十二月に、羅自身、作詩は得意ではないと自任し、古典の引用が多かったにも関わらず、次のような詩を残している（図２３）。

馬足車塵又二年　頽矜仍荷主恩偏　多冠耀首態無補　虎口餘生未忍捐　畢竟人心思漢臘　果然天命集團宣　囊中尚有枯毫在　好賦車攻六月篇　癸酉臘八日即事　口占一律　貞松老人書付縄祖次孫

（大意）戦時から二年が経ち、くずれかけたプライドが君主の恩にかかっている。神獣の冠が頭を輝かし、態様に補うところはない。危険な余生は棄てるにはまだ忍びない。つまり、人心は、漢の祭りを思い、はてに天命は、団体宣言を集めるものだ。袋の中にちびけた筆があり、詩経の車攻や六月で王を言祝いで賦す。

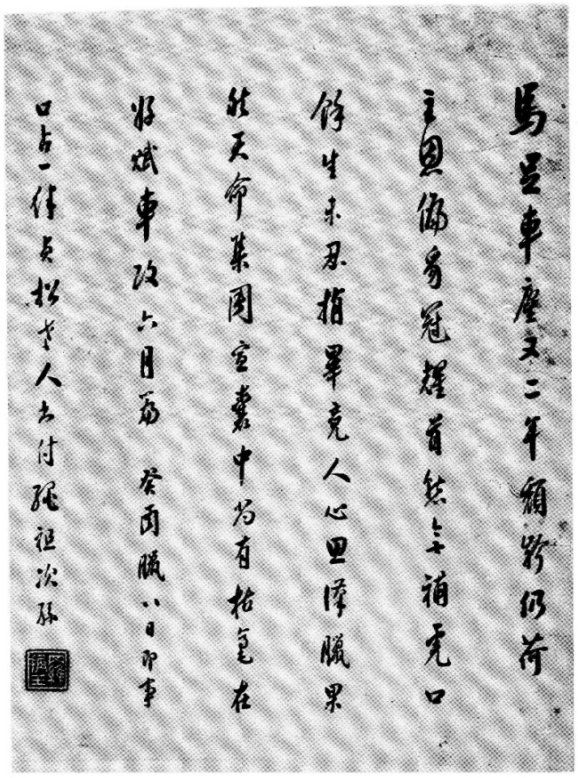


図２３

とある。その少しく屈折した心理の中で、王政への忠誠は、変わらない。

羅振玉は、しばしば顔真卿の書を学んだとされているが、この書

には、日常時の文字に比べ、膨らんだ用筆が見て取れ、その影響が看取される。

つまり顔真卿を好んだと言うことが[48]、終生変わることのない王(清)への忠義の表れであったことは、容易に推察されよう。つまり内面の表出、道徳には伝統に沿って帖学的な行草を用い、研究という史学、実学には、科学的で忠実な「写定」というスタンスで向き合ったと言えるだろう。

六　王国維　その哲学と文学、そして書[47]

その学問と政治

王国維(一八七七ー一九二七)。清末民国初年の人、海寧(浙江省)の人。字は、静庵・伯隅。号は、観堂・静菴。諡は忠愨。一八八三年から私塾で学び、一八九二年に秀才となる。一八九九年、上海の『時務報』に勤務し、羅振玉の東文学社で外国語と化学・物理学を学び、西洋の学問に触れるようになった。また、藤田豊八博士について、欧文及び西洋の哲学・文学・美術を修めた。清の一九〇一(光緒二七・明治三四年)、日本に留学し、東京物理学校に入学したが、翌年帰国して江蘇省の南通師範学校教習・蘇州師範学校教習となり、哲学を講じた。一九〇七年ごろ西洋哲学の研究から、文学の、詞、戯曲の研究へと嗜好を変える。さらに辛亥革命後、一時、羅振玉と京都に亡命し、羅振玉に従って、考証学・金石学などの古学を研究した。また当時、改めて内藤湖南、狩野直喜、富岡謙蔵などの清朝保守派を支持する京都学派と交流した[49]。

帰国後、一九二三(民国十二年)に愛新覚羅溥儀に招かれ「南書房行走」に就任、一九二五年には清華学校研究院教授となり、また北京大学国学研究所で指導した。民国十六年六月、国民革命軍が北京にせまるに及び、清朝の末路を悲しんで北京頤和園の昆明湖に身を投じた。年五一。カント・ショーペンハウアー・ニーチェなどを愛読して、その影響を受け、一九〇四(光緒三十年)『紅楼夢評論』の著がある。第一次帰国期の『人間詞話』『宋元戯曲史』など新分野を開拓して注目されるが、日本での甲骨文研究の先駆者としての功績も大きい。著は上記のほか、『静菴文集』『曲録』『考原』『頤和園詩』『流沙墜簡』『観堂集林』などがあり、それらを集めたものに『王忠愨公遺書』がある。

西洋学の影響

王国維が西洋文化に始めて接したのは、新学を通じてであるが、科学技術・政治・経済・社会などの学問には向かわず、西洋哲学を専攻した。その西洋哲学を知ったのは東文学社時代であるが、田岡佐代治の文集を読み、はじめてカント・ショーペンハウアーを知ったという。さらに趣向はニーチェへと向かい、後の文学思想や史学研究の科学性にその影響を及ぼしている。そのような王国維の西洋学への心酔を示す内容が、図２４には記されている[50]。

旧徳酔心如美酒　新篇清目勝真茶

(大意)ふるい徳目は心を酔わすこと美酒のごときで、新しい学問は、眼を清め真茶に勝る。

その書風は、唐の欧陽詢を基礎にした力強い楷書で書されている。王国維の書の傾向は、唐時代を下地にした謹直なものが多く、それは宋様式に分類できると言えるだろう。

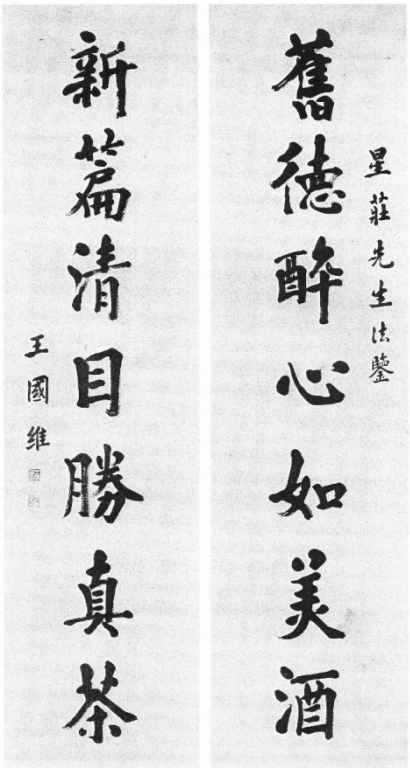


図２４

人間詞話の思想

王国維が、文学、また広く学問全般の根本的使命とみなしたのは、絶対的真理の追求であり、その真理は学説なり作品なりのまとまった形としてそれぞれの時代に於いて完結しているが、それは絶えず後世に向かって開かれ、その完成を期し、その持続力が、学説、作品の持つ生命力と考えた[50]。

王国維は詞を作る前に、詩を作っており、文学への関心はかなり早くから始まっている。

その理論書、『人間詩話』の中で、五代、北宋の詞を独絶と評しているが、その根拠に持ち出されたのが、「境界」の概念である。

境界の創造に、先ずは造境と写境があり、造境は理想であり、写境は写実であり、大詩人はそれが自然に合する。また有我の境と無我の境があり、有我の境は、我を以て物を観て、それゆえに色彩を表し、それは動より静にゆくときに得て、故人の詞に多く表れる。

無我の境は、物を以て物を観ることで、何者が我で何者が物か分からず、豪傑の詞に多いとされている。そしてまたその境と言うのは、景物をいうだけでなく、喜怒哀楽も人心中の一境界であり、よって真景物、真感情を写すものを境界があるという。

このような境界説の背景には西洋のカントの流れを汲むシラーに基づくと言われ、その国(Staat)という語が「境界」概念を生み出したと言われている。シラーは権利の力の国では、人と人とは力で相遇しその活動も制限を受け、倫理の国では、人と人は法律の威厳で相対しその意志は束縛を受けるが、文化教養の世界、審美の国では、人は形象を別人に表し、ただ自由遊戯の対象として人と相対し、自由を通り、自由を給予する、これが基本法律であり、この審美のStaatが「境界」の源泉と考えた。無論、その考え方は、中国伝統の思想にも垣間見え、その伝統的な美学思想、その民族本位の思想を具有し、また中西融合、渾然一体となったものと分析されている[51]。

また真摯な感情によって、天下万世の真理を探究する王国維の基本的態度は、「真」「不真」が基準となり、それは「不隔ー隔」という区別に換言でき、人間詞話四十則では、蘇軾は不隔で黄山谷は、やや隔と評されている[52]。

黄山谷の位置付けと書

図２５は王国維の表面的には黄山谷《松風閣詩帖》の臨書であるが、その意図は、形態よりもその文学にあると言えるだろう。

依山築閣見平川　夜闌箕斗插屋椽　我來名之意適然　老松魁梧
數百年　斧斤所赦令參天　風鳴媧皇五十弦　洗耳不須菩薩　泉
嘉二三（以上二字倒置）子甚好賢　力貧買酒醉此筵　夜雨鳴廊
到曉懸　相看不歸臥僧氈　泉枯石燥復潺湲　山川光暉為我妍
野僧早（此字點去）旱饑不能饘　曉見寒溪有炊煙　東坡道人已
沈泉　張侯何時到眼前　釣臺驚濤可晝眠　怡亭看篆蛟龍纏　安
得此身脫拘攣　舟載諸友長周旋

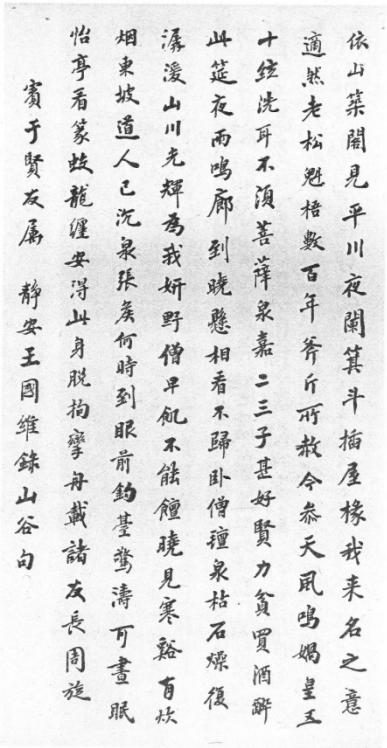

依山築閣見平川夜闌箕斗插屋椽我来名之意
適然老松慰梧數百年斧斤所赦今恭天風鳴媧皇玉
十絃洗耳不須菩薩泉嘉二三子甚好賢力貧買酒醉
此筵夜雨鳴廊到曉憑相看不歸卧僧壇泉枯石爍復
潺湲山川光輝為我妍野僧早飢不能饘曉見寒谿有炊
烟東坡道人已沉泉張侯何時到眼前釣臺鶯濤可畫眠
怡亭看篆蛟龍纏安得此身脱拘攣舟載諸友長周旋
賓于賢友屬　靜安王國維録山谷句

図２５

（大意）山によりそって築かれた楼閣、そこから広い長江が見わたせる。夜が更けると、箕・斗の星座が、軒端のたるきにかかっている。私はここへ来て松風閣と名づけたが、心によくかなっている。老松は高く厳（いか）つく数百年を経て、斧や斤を免れて今は天にとどくほどだ。松風は女媧氏の五十弦の意が鳴るようで、その音に清められて菩薩泉で耳を洗う必要もない。君たちがすぐれた人物を心からしたう気持ちを愛で、貧しい懐を無理して酒を買い、この宴席で酔おう。夜の雨が回廊に鳴り、朝方までつづき、顔を見合わせて帰るのをやめ、寺僧の毛布で眠った。枯れた泉、乾いた石に、また水がさらさら流れはじめ、山川は光り輝いて、私のために美しくよそおっているようだ。田舎の僧はひでりで飢え、かゆもすすれない。暁に寒渓のあたりにかまどの煙が立つのを望見するばかり。東坡道人（蘇拭）はもはや黄泉路（よみじ）に没した。張侯（張耒）はいつ眼前に姿をあらわすことか。釣台では騒ぐ浪音にも昼寝ができ、怡亭で李陽冰（りようひよう）の蛟（みずち）のからみついた篆書を見ることもできよう。どうしたらこの身は憂き世のしがらみからのがれ、友人たちと舟に乗り、いつまでも遊ぶことができようか。

そして『人間詞話』補遺の中で、黄山谷に触れ、

山谷云『天下清景、不擇賢愚而與之、然吾特疑端為我輩設』誠哉是言。抑獨清景而已、一切境界、無不為詩人設。世無詩人、即無此種境界。夫境界之呈於吾心而見於外物者、皆須臾之物。惟詩人能以此須臾之物、鐫諸不朽之文字、使読者自得之。遂覚詩人之言、字字為我心中 所欲言、而又非我之所自言、此大詩人之秘妙也。

（大意）黄山谷が言うには「天下の風景は賢愚を選ばず与えてくれるので、私は疑心を持ちながら自分のしつらえをつくる」と。これは名言だ。そもそもただ風景があるだけで、すべてが境界であり、詩人が作るのである。世の中に詩人がいなければ、この種の境界などない。そもそも境界は自分のこころを外者に託し、みな寸刻のものである。ただ詩人のみが寸刻に不朽の文字をきざみつけ、読者に自然と得さしめる。遂には詩人の言葉を覚え、その文字が私の望むところとなり、また私が自分の言えないところとなる。これが詩人の秘訣である。

と述べている。

この我々に身近に感覚できる中西融合の境界論は、先ほど見た思想に他ならず、黄山谷の詞にそれを見たのであろう。その書も黄山谷の書をいささか小振りに意匠を変じたものであるが、宋様式に他ならない。

王国維の書もまた、その独自の様式として持続的な生命力を保有していたと言えるだろう。

七　胡適　プラグマティズムと口語詩の書[53]

胡適の生涯

胡適（一八九一―一九六二）。民国の人。安徽省績溪県の人。最初の名は胡洪騂。のち「物競ひ天択び、適者生存す」の適の字をとって、適之と改め、胡適をペンネームとしたが、一九一〇年アメリカ留学の官費生となってから、それを正式の名とした。若いころの清末の維新時代に生長して、梁啓超の影響をうけ、とりわけ厳復訳の『天演論』の影響を受けた。十四歳のとき上海の梅溪学堂に入り、のち、澄衷学堂・中国公学・震旦学堂に学び、清末、一九一〇（宣統二年）二〇歳のとき、義和団事件の賠償金による官費生としてアメリカに渡った。

はじめカンタール大学で農学を勉強したが、のちコーネル大学で文学を学び、コロンビア大学で哲学を学び、哲学博士の称号を得た。「先秦名学史」はその学位論文である。最もハクスレーとデューイの影響を受け、みずからも「この二人は科学的方法の性質と功用とをはっきり私に教えてくれた」と言っている。アメリカ主義者として、デモクラシーとサイエンスを中国にもちこんだ最初の人として注目された。

留学中、一九一七（民国六年）一月、雑誌『新青年』二巻五期に発表した「文学改良芻議」は、文学革命（白話文学の提唱）の第一声として大きな反響を呼び、その後発表した、「歴史的文学観念論」「建設的文学革命論」「論短篇小説」「文学進化観念与戯劇改良」「談新詩」などはいずれも画期的な新文学論として新文学運動を前進させた。その論は、文言の文学を死んだ文学と認めて、これを排撃する破壊的方面と、白話の文学を活きた文学、正宗の文学と認めて国語の文学をうちたてようとする建設的方面とに分かれるが、白話文学の価値を認めるところからは白話文学史を書き、白話文学の手本を過去の小説に認めるところからは、『紅楼夢』『水滸伝』『儒林外史』などの文学作品の整理考証を試み、また新詩を提唱するところからは、みずから創作して『嘗試集』（民国九）を出した。

一方、思想方面にも大きな業績をのこし、特に『中国哲学史大綱』はその方法態度において画期的なもので、民国六年帰国後は陳独秀に迎えられて北京大学教授となり、『新青年』の編集にも関係して文学界思想界に活躍し、民国十一年陳独秀のあとをついで北京大学文科科長となった。翌十二年病気のため大学を去ったが、翌年また復帰し、民国十五年渡米して、翌年帰国した。その後、光華大学教授・呉淞中国公学校長兼文理学院長になったが、孫文の三民主義を批判して国民党の忌避にふれ、圧迫せられて公職を辞し、商務印書館に入った。民国十九年また北京に帰り、翌年北京大学教授となって、同大学の諸種の政治問題・文化運動を指導した。

抗日戦中は国民政府の命を受けて渡米し、各地で講演し、民国二十七年、駐米大使となった。戦後は三十七年北京大学校長となり、一九四八（民国三十七年）十二月、中国共産党の北京解放とともに北京を脱出して台湾に移った。その後アメリカに渡り、一九五三年には日本にもたち寄ったことがある。一九六二年二月二十四日没、台北市南港に墓があり、中央研究院構内に胡適記念館が建てられて遺品が陳列せられている。なお解放後、一九五〇年ごろから徹底的な胡適批判が行われた。

白話運動の書

伝統的な思想的制約から解放へと向かう時代に、胡適らの五四運動の旗手は立ち上がった。取り分け、アメリカ帰りの胡適は伝統的な思想制約に真正面から組み合ったと言える。そのアメリカで習得したプラグマティズムによって、伝統的な古代からの中国思想を整理し[54]、文語と言う旧弊を打破、一部貴族の言葉ではなく、大衆の

言葉を尊重し、その白話運動に取り組んだ。

胡適と言う人物について、竹内好の言葉を借りると、思想的な深みはない。幅広いが奥行は浅いと評されるが、そういう意味で、一世代前の梁啓超と類似するところがある[55]。

文界革命に着手したこの二人は、科挙の廃止、清朝の崩壊、中華民国の成立などに政治制度が激変する中で、新しい文学を模索した人たちであると言えるだろう。

その胡適の次の書(図２６)、一九二四年の作、曹誠英に対する恋愛詩「煩悶」には、

放也放不下、忘也忘不了。剛忘了昨兒的夢、又分明 看見夢里的一笑。

(大意)放っても放てない、忘れても忘れられない。忘れたばかりの昨日の夢、また明らかに夢の中の微笑みを見た。

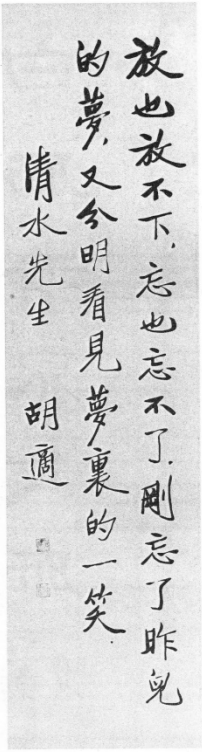


図 26

と書かれ、その書様式は、洒脱な清涼感を湛えるとともに、伝統的な格式よりも当時の今に比重を置く感性が顕著である。やはり、当時の民本主義的な進歩派、大衆化の流れを汲む碑学派の影響が顕著であり、そういう意味で、胡適の文字は、活字に近い可読性に富んでいるとも分析でき、敢えて言えばやはり石碑の趣を有している。

白話運動の旗手としての文学革命を担った胡適が、その発露を楷書に求めたのは、後に見る郭沫若がそれを簡体字に連なる主流としての白話様式(音譜的草書様式)に求めたのと、見事に対照をなしている。

二人の詩観と書法観の違いを反映していると言えるだろう。

小結

本章では、阮元の流れを汲む碑学系の書人について、概観した。

総じていえば、阮元の民本史観による漢学を背景とする北碑南帖論から実学的に演繹され、漢宋兼采であるが、先ずは包世臣に影響を与え、そこから沈曽植へと展開する。そして康有為はその碑学、「実事求是」的な科学性と、三世論という「史観」を背景とする書論を登場せしめ、その弟子の梁啓超においては、更に科学的な史学として再構成され、羅振玉、王国維に於いては、さらにその西洋史学的実証性、学術性が実学的にも高められた。また胡適に至っては、その内面を詠う白話文学にも石碑の書風が侵入したのをみた。

つまり、碑学者も一般的には、公的、実学的な性格のものは、碑学系の書で、私的な文学などは行草書で書かれたように、その用途、環境、対象によって、書き分けられてきたのが、現実の碑学派の実態でもある。

つまりその実学思想によって、碑学にスポットが当てられても、一方で漢宋兼采の状況が、なお一般的であったと言える。

さらに「史観」の問題。それは、実証主義的な書論へと変貌していく近代書論の趨勢の中でも、なおその根源的な思想として存し、「託古改制」に拠るユートピア世界を幻視する康有為に於いて最も顕著であったと言えるだろう。

無論、その関係者にもその影響が見られるが、外面的、実学的、社会的、さらに史学・学術的な文脈で使われた碑学派の書風が、後には内面を詠う私的な文学(旧詩)にも侵入し、多様な書美が花開いたと言える。

ましてや新文化運動の旗手でもあった、胡適の白話詩までにも石碑の書風が浸潤したのは、その実学的性格の故であったとも了解されよう。

これら、実学的な碑学派の書、書論によって、当時期に飛躍的に書の美質の発見に拍車がかかり、その多様振りは、近代の東アジアの民主化、西洋化の趨勢と軌を一にしていることも偶然ではないと考えられる。

これら近代碑学の美質の問題についての研究は、菅野智明氏によって厳密に研究されており、本章でも多くその説に拠ったことも明記しておかなくてはならない。その学恩に謝意を示したい。

---

1 濱口富士雄『清代考拠学の思想史的研究』（国書刊行会　一九九四年一〇月）第二編

2 拙著『書と思想』（東方書店　二〇一九年五月）の「包世臣」の章に加筆修正を加えた。

3 江口久雄「包世臣の鈔法論に關する一考察」（『東方學』第五五輯　一九七八年一月　東方學會）

4 大谷敏夫「包世臣の實學思想について」（『東洋史研究』第二八巻　第二・三号　一九六九年十二月　東洋史研究会）大谷敏夫「清末江南基層社会と包世臣の農政観」（『研究論集』第一〇集　二〇一二年一二月　河合文化教育研究所）

5 高畑常信「鄧石如　包世臣をめぐる諸問題」（『東京学芸大学紀要』第二部門　人文科学　第四一集　一九九〇年二月　東京学芸大学）遠藤昌弘「新資料　包世臣に宛てた鄧石如尺牘について」（『大東書道研究』第一七号　二〇一〇年三月　大東文化大学書道研究所）

6 包世臣著　高畑常信訳『芸舟双楫』（一九八二年七月　木耳社）郑大华「包世臣与嘉道年间的学风转变」（『安徽史学』二〇〇六年七月）徐立望「时移势变:论包世臣与常州士人的交往及经世思想的嬗变」（『安徽史学』二〇〇五年一〇月）

7 西林昭一「包世臣の書學ー氣満について」（『東洋研究』第八号　一九六四年八月　大東文化大学東洋研究所）

8 杨林顺「从平城时期与洛阳时期书风比较看包世臣碑学观中的矛盾性」（『中国书法』二〇一七年一〇月）

9 熊帝兵「试析包世臣的『厚生』思想及实践」（『淮北师范大学学报(哲学社会科学版)』二〇一一年一〇月）

10 菅野智明『近代碑学の書論史的研究』（二〇一一年二月　研文出版）

11 同注10

12 拙著『書と思想』（東方書店　二〇一九年五月）の「沈曾植」の章に加筆修正を加えた。

13 菅野智明「『寐叟題跋』の書法」（『福島大学　教育学部論集　人文科学部門』第六一号　一九九六年一二月福島大学教育学部）

14 成联方「沈曾植研究摘编」（『中国書法』总二八一期　二〇一六年五月）

15 菅野智明「沈曾植の北碑論」（『中国文化』第五七号　一九九九年六月中国文化学会）・同注10

16 同注10

17 金丹「包世臣书学思想对晚近书坛影响不同论」（『南京艺术学院学报(美术与设计版)』二〇〇八年五月）

18 同注10

19 同注10

20 狄德全「论沈曾植的书学思想」（『安康学院学报』二〇一〇年八月）成联方「碑帖融合　继往开来ー沈曾植的书法风格及演变」（『中国书法』二〇一五年七月）

21 贾明哲「沈曾植的章草探索及意义」（『大众文艺』二〇一一年一二月）

22 彭玉平「论王国维与沈曾植之学缘」（『中山大学学报(社会科学版)』二〇一〇年三月）

23 唐全明「论《流沙坠简》与《爨宝子碑》对沈曾植书法的影响」（『美与时代(下)』二〇一五年六月）

24 李瑞明「三元与三关—陈衍与沈曾植的诗学离合」(『文艺理论研究』二〇〇五年九月)
25 李瑞明「沈曾植诗学与书学的意向同构」(『嘉兴学院学报』)二〇〇五年三月)
26 拙箸『中国の政治家と書』(雄山閣 二〇一七年九月)「康有為の章に加筆、修正を加えた。
27 孙浩然「论佛教的大同理想」(『广播电视大学学报 哲学社会科学版』二〇一二年第四期 总第一六三期)
28 竹内弘行『康有為と近代大同思想の研究』(汲古書院 二〇〇八年一月)
29 同注28
30 菅野智明「『広芸舟双楫』における六朝碑書派の構成と評価」(『筑波大学芸術研究報告 第四三輯 芸術研究報二四 二〇〇三』筑波大学芸術学系研究報告委員会 二〇〇四年二月) 王崗「康有為的碑学改良与古典書法美学的終結」(『書法研究』八一・八二 書法研究組 一九九八年)
31 同注10
32 李强华「"理欲之辯"的近代价值嬗变— 以康有为"理欲观"为中心的考察」(『江汉大学学报 人文科学版』第三〇巻第二期 二〇一一年四月)
33 拙箸『中国の政治家と書』(雄山閣 二〇一七年九月)「梁啓超の章に加筆、修正を加えた。
34 馬場将三「梁啓超の『新史学』について—その「新」の考察を通して」(『東洋文化』九一号 二〇〇三年九月 無窮會)
35 梁啓超「保教非所以尊孔論」(一九〇二年 文集之九)
36 高澤浩一「梁啓超碑帖跋—中国国家図書館蔵本を中心として」(『書学書道史研究』十二号 二〇〇二年)
37 平野和彦「飲冰室論書考」(『群馬女子短期大学紀要』二一号 一九九四年)
38 菅野智明「梁啓超の北碑論」(『書学書道史研究』十四号 二〇〇四年九月)
39 同注10
40 梁啓超「跋集王聖教序」(一九二三年一〇月)
41 高柳信夫「「中国学術思想史」における仏教の位置—梁啓超の場合」(『言語 文化 社会』五号 二〇〇七年)
42 拙箸『中国の政治家と書』(雄山閣 二〇一七年九月)「羅振玉の章に加筆、修正を加えた。
43 拙稿「羅振玉跋文注釈考」(『京都語文』十九 二〇一二年十一月 佛教大学国語国文学会)
44 杉村邦彦「羅振玉における"文字之福"と"文字之厄"—京都客寓時代の学問、生活、交友、書法を中心として」(『書論』第三二号 二〇〇一年三月 書論編集室)
45 錢鷗「羅振玉の教育論—斑—国民教育の普及をめぐって」(『書論』第三二号 二〇〇一年三月 書論編集室)
46 同注44
47 拙箸『中国の政治家と書』(雄山閣 二〇一七年九月)「王国維の章に加筆、修正を加えた。
48 修斌、陳琳琳「王国維と狩野直喜、内藤湖南」(『東アジア—歴史と文化』第十九号 二〇一〇年三月 新潟大学東アジア学会) この中で狩野とは戯曲研究で、内藤とは古代史研究に於いて交流したとある。
49 佐藤武敏『王國維の生涯と学問』(二〇〇三年十一月 風間書房)
50 井波陵一「躍動する精神—王國維の文學理論について」(『中國文學報』四十二冊 一九九〇年十月)
51 同注49
52 同注50
53 拙箸『中国の政治家と書』(雄山閣 二〇一七年九月)「胡適の章に加筆、修正を加えた。
54 船引一乗「胡適の提唱した「整理國故」運動の二つの側面」(『中国言語

文化研究』第四号　二〇〇四年　佛教大学　中国言語文化研究）

55 大原信一「胡適と白話文　国語運動（『同志社外国文学研究』六四号　一九九二年　同志社大学外国文学会）

第三章　日本と影響関係にあった「経世致用」思想と書法への反映
―亡命、留学中国人を中心として

⑥　帖学派と北洋政府

清中末期から改革の思想、経世致用の思想は、樸学、碑学に象徴されがちではあるが、実際に政権の中枢を担っていたのは、理学者であり、書で言えば帖学派に象徴されるということが見過ごされている感がある。つまり経世致用、実学の精神は、宋明理学にも変容を与え、その内聖思想に少なからず影響を与えた。そしてその保守派たちは、内聖の思想を思惟し続けながらも、時の情勢に致用せんとしたと言えるだろう。

具体的にその系譜は、清朝の保守派、実権派から北洋政府、更に北洋軍閥へと受け継がれ、満洲国に於いて消散される宿命にあった。

その理学者達の書法は、無論帖学派のそれが基幹とされているが、さらに書道の用筆論的に言えば、王羲之を代表とする帖学、筆を傾け側筆を使う偏鋒と、石碑などの筆を垂直に立てる用筆、正鋒を、清代の書人達は融合したものが多いと言えよう。

そして、そこに書そのものが、内聖の具としてよりも、実際の政治に如何に裨益するかという実学の思想が反映され、顕著に表れるのが、一八〇〇年頃からの、東アジアの西洋化の潮流と合致する。

そして松村茂樹氏の論に拠れば[7]、清朝の書法界は、

革命が成功し、帖学派は打倒され、碑学派は中国書法界を席巻したのみならず、日本にも及び、いわゆる六朝書道としてもてはやされた。ただ、これにより、書の世界は大きな宝を損なうことになる。帖学派が根底とし、その命脈を保ってきた王義之書法である。そもそも、阮元が打倒の対象としたのが王義之書法であった。ただ、阮元は、王義之書法打倒を呼びかけながら、自身は王義之書法で書き続けていた。阮元の目的は政治的革命であり、王義之書法はそのメタファーに過ぎなかったが、阮元はメタファーによる論理を徹底させたため、結果的に思ってもいない王義之書法根底否定になったのである。

と述べた上で、

だが、純然たる王義之書法で書いたのは、王義之一人だけであった。王義之書法は、偏鋒という正統でない書法を用いているため、正統を尊重する人々は、そのままを学ぶわけには行かなかったのである。かくして、人々は、王義之の字形を正鋒で書くようにした。初唐の三大家（虞世南、欧陽詢、褚遂良）などはその典型で、王義之書法を推進した唐の太宗に仕え、王義之書法の名手とされながら、基本的には正鋒で書いている。ただ、当時は紙を机上に広げて書くのが普通になっていたので、もはや筆を九十度に当てる純然たる正鋒は不可能である。だからどうしても角度がつくし、スナップや抑揚も少しは利かせたくなる。そういう風潮に待ったをかけたのが唐の顔真卿である。政治的にも学問的にも超がつく保守派であった顔真卿は、王義之の字形を正鋒で書くことを徹底させ、顔法という保守的筆法を確立させた。顔真卿を革新的書家とする考え方があるが、これは当たらないと筆者は思う。かくして、顔真卿以降、中国の書の世界には、

①正鋒で書くことを徹底しようとした人。

②正鋒で書くことを精神としながら変化を許容した人。

の二種が存在するようになった。そして概ね②の立場の人々が清代の帖学派を形成するのである。

とした上で、その清朝帖学派について具体的に、

つまり、中国における正統尊重が純然たる王義之書法を存在せしめなかった中、清代の帖学派は、建前上は正鋒を尊重しつつ、

かろうじて王羲之書法の命脈を保っていたのである。そのような帖学派の書論を見ておこう。まず、晴代初期の帖学派を代表する笪重光（一六二三-一六九二）は、『書筏』の中で、

腕を寝かせて筆管を傾けると、中鋒の妨げになり、思考が滞って機知が止むと、多く算盤のように揃っているだけの字になる。生き生きとして留まらなければ意趣が開通し、流れ動いて滞らなければ作用が円滑になり、作用と意趣が相い生ずれば、変化が出る。

と述べ、中鋒つまり正鋒を大前提としながら、変化を出すことを目的にしている。

とし、更に清朝帖学派の泰斗たる梁同書（一七二三-一八一五）『頻羅庵論書』の言説を踏まえた上で、

ただ、こういったいわば正鋒の軛があったからこそ、帖学派の書は軟弱に流れなくて済んだのである。そう考えると、帖学派の書とは、王羲之書法の行き過ぎを正鋒で制御することによって成り立っていたとも言えよう。

と述べられている。

このような、書法論の流れを、政治史、思想史、文学史を踏まえ、少しく垣間見て行きたい。

一　林則徐　アヘン戦争と東洋道徳の書境

アヘン戦争と書

林則徐（一七八五-一八五〇）。清代の官僚政治家。福建省生れ。字は元撫（げんぶ）・少穆（しょうぼく）、号は竢村老人（しそんろうじん）。嘉慶の進士。アヘン禁煙論を唱え、鉄差大臣としてイギリスとの貿易問題解決に奔走し、アヘン戦争の際に、陸軍海軍最高責任者となる。敗戦あとの和議成立後、イリ辺彊に左遷されたが、また開墾事業に功績をあげ、雲貴総督に昇任し、洪秀全の乱の際には、討伐軍司令官に任ぜられ、進軍中に病歿した。

林則徐と言えば、やはり東アジア近代史を告げるアヘン戦争での戦歴と、その愛国主義的な性格で著名であるだろう。

アヘン戦争とは、イギリスが清を開国させた戦争であるが、その発端は、産業革命を遂げたイギリスが十九世紀初めに行った、インドに綿花を、インドから中国にアヘンを輸出し、中国の茶を輸入する三角貿易による民衆のアヘン吸飲の弊害に心を痛めていた林則徐が、厳禁派の代表として、一八三九（道光十九年）、広州でアヘン貿易を取り締まったのを機に、翌年イギリス艦隊が広州を封鎖したことによる。四二年に清は敗北し、イギリスと南京条約を結び、香港を割譲、広州、厦門、福州、寧波、上海を開港した。この事件の情報は、オランダから日本へと伝わり、幕府は攘夷の法令を撤回し、外国との衝突を極力避けることに腐心したのである。

その林則徐の心の葛藤を示す内容が、図1の書に顕著に表れている。

清貴容仁貴断　莫苟刻以傷厚　莫磽确以沽名　勿借公道遂私情　勿市小恵傷大体　憑怒徒能損己　文過豈足欺人　遇急愈要従容　得意倍当謙謹

（大意）清貴は仁を容れ、断つことをたっとぶ。厳しさに、傷深きなきように。やせ地で名を求めることなきように。公道を借りて私情を遂げないように。小さな恵みで本体を傷つけないように。怒りに憑りつかれると無駄に自分を損なう。饒舌で人を騙すことができようか。急にあえば、ますますゆったりと振る舞い、意を得ればますます謙虚たれ。

この「清貴は仁を容れ、断を貴ぶ」で始まるこの書幅は、「断」、つまり「勿れ」の訓戒が、いくつか書されている。その中に「小恵

を市い、大体を傷ずつくること勿れ」とは、まさにアヘンのやり取りをする当局者たちへの呼びかけであったに相違なかろう。

図 1

林則徐の書風と書論

一般的に林則徐の書は、その楷書は欧陽詢、行書は帖学風の秀麗な書と評され、郭尚先、梁章鉅とともに「閩(福建省)人の三君」と並称されている。しかしさらに言うならば、図2らの多くの臨書作品が示すように宋の米芾の影響が顕著であると言える。またその米芾観は、図3に、

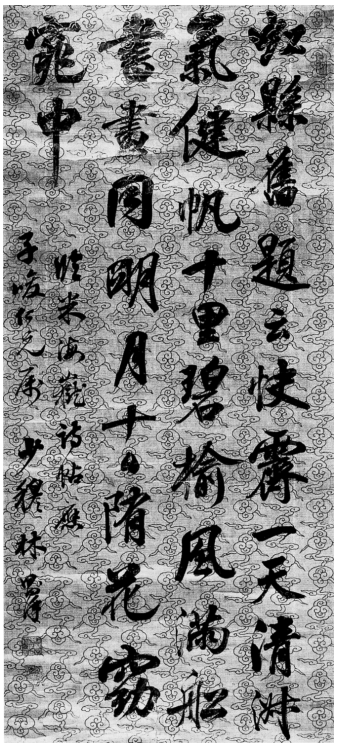


図 2

東坡云詩求工、字不奇。天真爛漫是吾師。此語直是無等等呪。

其作書毎於巻後留数尺曰以待五百年後人題跋。

(大意)蘇軾がいうには、詩は、うまさを求めず、字は奇を衒わない。天真爛漫が、わが師であると。この語は、まさに真言の呪文に相当する。書をかくごとに巻後に数尺を留めている。五百年後の題跋を待っていると。

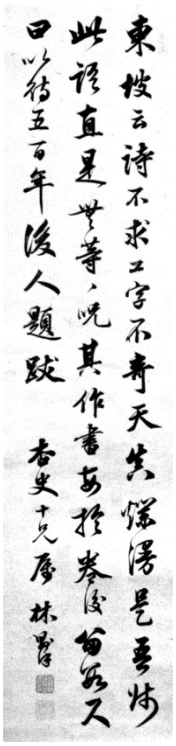


図 3

この「東坡云う、詩は工を求めず、字は奇せず。天真爛漫、これ吾師なり。この語、直にこれ無等等呪なり。」とあるように、董其昌の書論『画禅室随筆』の文言が多数残されていることからも、董其昌が最も思慕した米芾、その思想を経由していたことは明らかである。つまり、林則徐の米芾風の行書は、董其昌の系譜で捉えるべきものと言える。

そもそも董其昌の書法思想は、「真」や「奇」を尚ぶ、陽明学の思想の反映であり、林則徐の書も陽明学の書と言えよう。

陽明学者としての面貌

龔自珍、魏源、黄爵滋など、経世の学を提唱する今文公羊学派の人びとと親交を重ねた林則徐の思想は、一般的に開明的な経世学と言われている。無論、地方長官として数多の内政改革を提言実施し、国家財政の再建、民生の安定に尽力、その農業、水利政策などの行

政的足跡を顧みれば、異存はないというべきかもしれない。特に経世思想家、魏源とのつよい絆を考えれば、その影響は看過できないだろう[3]。

しかし一方で、その魏源は『大学古本』を上梓するなど、理学にも関心を抱いていた。そして魏源や龔自珍の陽明学的な思想は、「独立」や「心力」といった近代的意識の萌芽であったとする指摘が、既に学術界ではなされている。[4]

そして、彼らと思想を共有していた林則徐の書を分析すると、その書風や書論だけでなく、やはり陽明学的な色彩の濃い内容が多く残されている。

また林則徐が学問を修めた鰲峰書院、所謂「閩学」は、朱子学を奉ずる学派であり、その基本思想は理学にあったことも忘れてはならないだろう[5]。

図4の書に於いて、

廟堂之上以養正気為先海宇之内。以養元気為本張、使賢人君子無欝心之言則正気培矣。能使群黎百姓無服誹之語則元気固矣。此万世保天下之要道也。従政有箇大体。大体阮立則小節、雖有牴牾、別作張弛、以輔吾大体之所未備、不可便改弦易轍。譬如待民貴有恩、此大体也。即有頑暴不化者重刑之而待民之大体　不変。待士有礼此大体也。即有淫肆不検者厳治之。而待士之大体不変。官雖至尊、不可以人之性命佐巳之喜怒。官雖至卑不可以巳之名節佐人之喜怒。

（大意）廟堂の上で、正気を養いて世界に先んず。元気を養うのが、本源である。賢人、君子にふさがったこころの言葉を無くさせれば、正気は培える。民衆のこころの中で非難する言葉を無くさせれば、元気は確固としたものとなる。これがいつの時代も天下を治めるかなめの道である。政治に与るものには、本質がある。本質を立てて、小節に則れば、いきちがいがあったとしても、はったり弛んだりしても、わが本質の不備なるところをたすけてくれるし、つるや轍をかえることはできない。例えば民を貴び恩があるように遇するのが、本質である。愚かで乱暴者して変わらないものは、重刑に処せば、民衆の本質は変わらない。士を遇するのに礼節があるのも本質である。淫らでほしいままな振る舞いをし、取り締まれないものに厳しく対処する。士を遇する本質は変わらない。官僚が尊に至れば、人の性命によって自分の喜怒をたすけることはできない。官僚が卑しければ、自分の名節によって人の喜怒をたすけることはできない

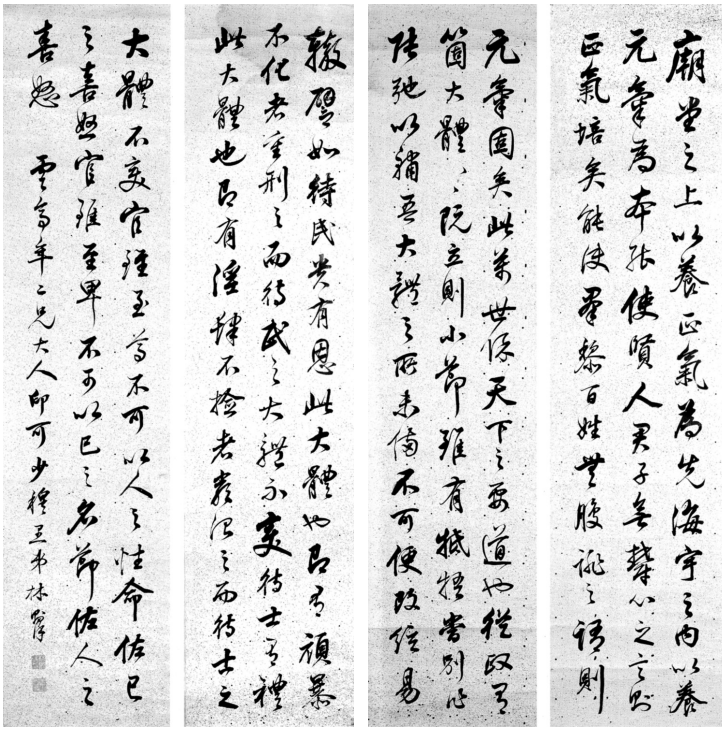


図4

とあり、経世の為の廟堂に於ける「正気」、また士大夫の心意気、人心統治の心得などは、まさに陽明学の影響下にあって、その思想が後に、日本を含む東アジアに伝播して、西洋に身構えるべき姿としての規範となったと言うべきではなかろうか。

二　曾国藩　東アジア近代の源泉。

曾国藩（一八一一－一八七二）。清の湘郷（湖南省）の人で、字は滌笙（できせい）、子城（しじょう）また居武（きょぶ）・伯涵（はくかん）と号した。一八三八（道光十八年）の進士で、翰林に入り、累官して礼部侍郎となった。太平天国の乱には、湘軍を編制して沿江の各省を復し、李鴻章・左宗棠（さそうとう）などと各地に転戦、頗る軍功があって、毅勇侯に封ぜられた。その後、両江総督となって、欽差大臣となり、江蘇、安徽、江西、浙江四省の軍務をすべ、また体仁閣大学士に任命された。穆宗の同治年間、六一歳で卒し、諡を文正という。その学は、同郷の先輩、王船山、唐鑑などの影響を受け、義理、詞章、経済のほか、考拠を重んじ、梅曾亮に従って桐城派の学風を取り、文は桐城派の空疎を救い、正大雄健で門人には呉汝綸がいる。洋務運動の推進者であると共に、朱子学者として名を馳せ、著には、『曾文正公文集』『詩集』『経史百家雑抄』などがあり、門人の李瀚（りかん）・李鴻章の編による『曾文公全集』に収められている。また座右の銘であった、四耐四不訣（冷に耐え、苦に耐え、煩に耐え、閑に耐え、激せず、躁がず、競わず、随わず、以て事を成すべし）は後世、多く人口に膾炙され、共和制へと移行する近代中国史に於いて、毀誉褒貶の中で、中華三千年来の理想、「道徳に即した権力」の施行者たる「儒將」として、西洋化に抗った姿は、身構えた東洋として、歴史的な一つの起点とされることもある。

文学と書論

曾国藩の文学論や書論は、その日記類に確認できるが、それらの融合性にその特徴が見出せるだろう。例えば、

作字之道、二者并進、有著力而取険勁之勢、有不著力而得自然之味、著力如昌黎之文、不著力如淵明之詩、著力則右軍称如錐画沙也、不著力則右軍所称如印印泥也、二者闕一不可、亦猶文家所謂、陽剛之美、陰柔之美矣。

（大意）書法の道は、二つの要素が並び進むべく、例えば力を表す所があれば、険しく強いところを取るが、力を表さない自然の味があって、韓愈の文があれば、陶淵明の詩の要素があり、王羲之の錐画沙（すいかくさ）があれば、印印泥（いんいんでい）があって、これら二者は一つも欠くべきでなく、これは文学者のいう陽剛と陰柔の美である。

とあって、これらの二元論的発想は、朱子学の陰陽論の影響と言えるであろう。

また書を論じて、

作字之道、剛健、婀娜二者華缺一不可。余既奉欧陽率更、李北海、黄山谷三家以為剛健之宗、又當参以褚河南、董思白婀娜之致、庶為成體之書。

（大意）書法の道は、強さとしなやかさとが必要で、共に一つも欠

くべきでない。私は欧陽詢、李邕、黄庭堅を強さと捉え、褚遂良、董其昌、をしなやかさと捉え、合わせて一つの体となす。

という。

つまりその書は、見るものを気圧するような猛々しさは感じられず、その厳しさと穏やかさの両者が闕かないところが、彼の真骨頂なのであろう。

次の図5の書は臨江仙の詞調のものである。款記に辛亥春日とあり、一八五一（成豊元年）四十歳のときの作である。

繞屋疎林濃蔭緑　軒窓都覚清幽　何當携客一登樓　雲山烟水際
倚檻豁吟眸　畫裏山城依峻嶺　嵐光遠共雲浮　半江涼雨入新秋
前汀墻影密　彷彿起漁謳歌　辛亥春日　曾國藩

（大意）家屋をめぐるまばらな林が濃い緑の影をやどし、のきの窓はすべて清く深みがある。どうして客とともに樓に登ろうか。雲の山の煙が水際までたどり、欄によりかかって詩人の視野がひろい。画のなかの山城はそびえたち、嵐の光が遠く雲と浮かぶ。川に降り注ぐ涼しい雨が新秋をつげ、なぎさの垣の影がこい。かすみから漁師の歌が沸き起こる。

とあるこの詩は、情況的にちょうど太平天国の乱が起こった年である。

当年、太平天国の乱が勃発し、清の正規軍である「八旗」が鎮圧にあたったが連戦連敗であった。その訳は長年のうちに八旗は貴族化し弱体していたためである。そこで、清国政府は各地の郷紳たちに「郷勇」と呼ばれる臨時の軍隊の徴募を命じた。時に命を受けた曽国藩は後に複数の団練（地方有力者が自主的に組織した自衛のための民兵組織）をまとめ、郷勇を組織させた。これが後の「湘軍」であり、後にその強さを発揮して最終的に太平天国軍を破ることになる。

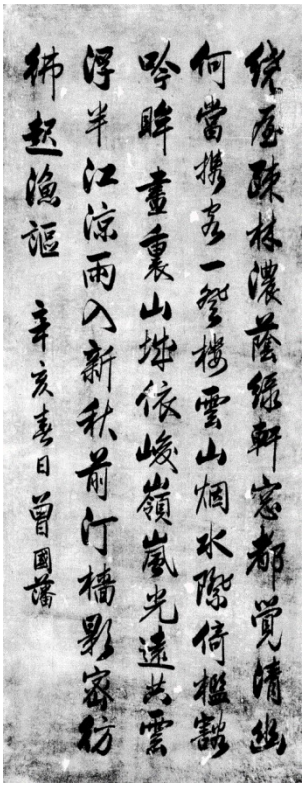


図 5

しかし当年閏八月は、太平軍が永安州城を抜き、太平天国を創建した時期にあたり、またその五月には、《敬陳聖德三端預防流弊疏》を上奏、直諫し、咸豊皇帝の行政を批判したため、怒りを蒙り緊迫した状況にあったのである。

屈原と曾国藩の詩

『楚辞』漁父は漁父辞とも称され、楚辞の諸篇の中でも最も有名なものであり、司馬遷も史記の中で、屈原の孤高を象徴する詩として引用している。その詩とは、

屈原既放、游於江潭、行吟澤畔。顔色憔悴、形容枯槁。漁父見而問之曰「子非三閭大夫與。何故至於斯。」屈原曰「舉世皆濁我獨清。衆人皆醉我獨醒。是以見放。」漁父曰「聖人不凝滞於物、而能與世推移。世人皆濁、何不淈其泥而揚其波。衆人皆醉、何不餔其糟而歠其醨。何故深思高舉、自

令放爲。」屈原曰「吾聞之。新沐者必彈冠、新浴者必振衣。安能以身之察察、受物之汶汶者乎。寧赴湘流、葬於江魚之腹中、安能以皓皓之白、而蒙世俗之塵埃乎。」漁父莞爾而笑、鼓枻而去。乃歌曰「滄浪之水清兮、可以濯我纓。滄浪之水濁兮、可以濯我足。」遂去、不復與言。

(大意) 屈原は、追放されて湘江の淵や岸をさまよい、沢のほとりで歌を口ずさんでいた。顔はやつれて、その姿は痩せ衰えている。ある年老いた漁師が彼に尋ねた。「あなたは三閭大夫さまではありませんか。どうしてこんな落ちぶれたお姿になってしまわれたのですか」と。屈原は言う「世の中の人々すべての心が濁っている中で、私一人だけが清らかだからだ。人々がみな酔っている中で、私一人だけが醒めている。だから追放されたんだよ」と。漁師は言うには「聖人というものは、物事にこだわらずに世の中と一緒に移り変わります。世の中の人々の心が濁っているならば、どうして一緒にその泥をかき混ぜて、波を立てないのですか。人々が酔っているならば、どうしてその酒かすを口にして、その薄い酒を飲もうとしないのですか。どういった理由で深く考え、お高くとまって、自分から追放されるようなことをしたのですか」と。屈原がいうには「私はこういうことを聞いたことがある。『髪を洗ったばかりの者は必ず冠についたよごれを払い、入浴したばかりの者は、必ず衣服のほこりをふるってはらう』と。どうして清廉潔白なこの身に、世俗の汚れたものを受け入れることができようか、いやできない。むしろ湘江に行って魚のエサになろうとも、どうして清廉潔白なこの身を世俗の埃の中にまみれされることができようか、いやできない」と。漁師はにっこりと笑って、(出航するために)船の縁を叩いて行ってしまった。そしてそのとき、次のような歌を詠んだ。「滄浪の水が澄んでいるのなら、私の冠の紐を洗おう。滄浪の水が濁っているのなら、私の足を洗おう」と。とうとうそのまま去ってしまい、二人はもう二度と語り合うことがなかった。

つまり先の詩の「漁歌」とは、この楚辞の漁父辞と解するべきではなかろうか。

換言すれば、西洋化する俗世が太平軍を指し、それとの苦戦続きの中で忠心から諫言に及び、節を守り続ける自身を屈原に準え、その苦悶に応えるかのように漁夫の歌が聞こえてきたのであろう。

また曾国藩は、清朝の衰退の中で悲しみを禁じえず、別の詩でも屈原を弔う詩を作っている。

例えば、「得郭筠仙書并詩却寄六首」其二に於いて、

大雅悲淪歇　斯文久不尊　至情宜屈強　吾道有離藩　仰首呼虞舜　狂歌答屈原　自非君子性　玆意固難論

(大意) 大雅は衰落を悲しみ、この文久しく尊ばれず。情は屈強なのがよく、わが道にはまがきがある。天を仰ぎ虞、舜を呼び、狂った歌で屈原にこたえる。君子の性でなければ、この意味ははじめから説明するのは難しいだろう。

と詠っている。

この詩について、張静氏は『曾国藩文学研究』の中で、

在乱世之中，他渇望能够出現虞舜太平世界，在梦想破灭之后，只得像屈原一样怀绝望之离开朝廷，自绝沉沦。此情此意何等沉重。

(大意) 乱世の中で、虞や舜の太平の時代を渇望し、その夢が砕ける中で、まるで屈原のように朝廷を離れ、自ら落ちぶれる。この気持ちはなんと重いことだろうか。

と述べている。

忠臣、曽国藩は、詩を通じて屈原と心を通わせていたことは間違いなかろう。

儒的自省の鬼

曾国藩は自らの書舎を「求闕齋」と称した。その「求闕」とは、常に自から闕けるところをもとめて、これを悔い改める努力を続けることが、天道にかなうという人生観から導かれたものである。曾国藩の日常で、過ちを自責する場合に多く用いられる語は、「可恥」「愧恨」「愧極醜極」「鄙極醜極」などが挙げられるが、それは書論の中にも垣間見られる。そしてその彼の自省とは、儒教に於ける「天」や「鬼神」に対してであって、現代的な意味での反省とは、次元を異にする厳格なものだったに相違ない。所謂、理学者としての内聖化の精神の発露である。

その曾国藩の一八四三(道光二十二年)十二月七日の日記には、己の日課として「作字」(書法)が設けられている(図6)が、その天への恭しさ、敬虔な精神が、その書境の根幹にあることは、言を俟たず、因みにその下りには、朝飯を食して半時、字を書し、筆墨の応酬をするとあって、その仕事を明日に残すと「清く」なり難しとある図7は、その筆墨の応酬の詩であり、

新篇波瀾特浩蕩　古人廉階要躋攀

(大意)新しい書物は波打つようにはびこっているが、古人の正しいみちは、攀じ登ることを要す。

とあって、程朱義理学に依拠する桐城派、中興の祖と称されるがごとき、経世を負う士大夫としての民族の気骨を反映させた見事な内容、そして書である。この書は当時、詩の応酬が教養の戦いでもあり、また風流な駆け引きであったことを物語る好資料と言えるだろう。

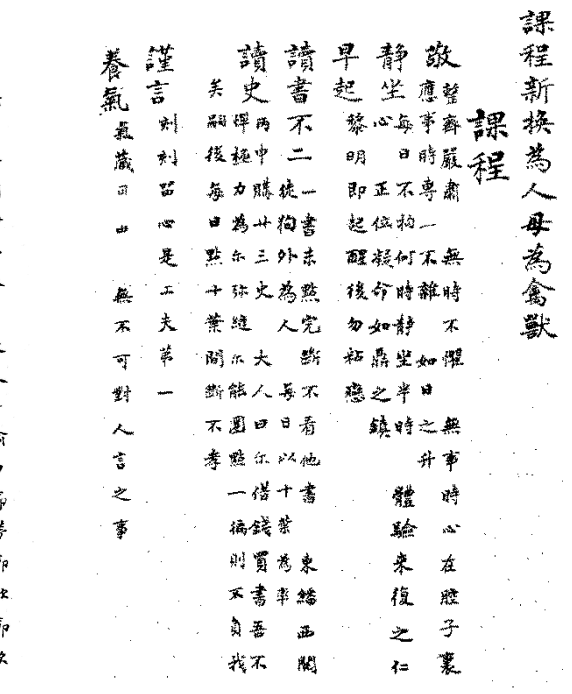


図 6

図 7

理学者としての書相と趙孟頫

曾国藩は、その書論や、漢詩にも垣間見られるように、そもそも朱子学者であった。

晩年の言〈勧学篇示直隷士子〉には、

為学之術有四。曰義理、曰考拠、曰辞章、曰経済。義理者、在孔門為徳行之科、今世目為宋学者也。考拠者、在孔門為文学之科、今世目為漢学者也。辞章者、在孔門為言語之科、従古芸文及今世制義詩賦皆是也。経済者、在孔門為政事之科、前代典礼、政書、及当世掌故皆是也。

（大意）学問の方法は四つある。義理学、考証学、修辞学、経済学である。義理とは、孔子門下の徳行の科目で、今の世で言えば宋学である。考証学は、孔門の文学の科目で、今の漢学である。修辞学は、孔門の言語学で、今の八股文、詩、賦である。経済学とは、孔門の政治学で、前代の典礼、政治文書、時代のしきたりである。

と明確に語られ、また黄進興『従理学到倫理学―清末民初道徳意識的転化』では、曾の義理学を整理して、

简而言之，曾氏义理学的特色有二，其一，在于躬行实践，不在于竞奇斗艳，其二，在于以礼代理，不尚谈空说玄。

（大意）簡潔に言えば、曾氏の義理学には二つの特徴があり、一つは自らが行う実践であり、艶やかさを競わず、二つ目は、礼によって理を代行し、空談をたっとばなかった。

とあるそれであり、自ら、

一宗宋儒、不廃漢学。

（大意）宋学を宗とするが、漢学を廃するものでもない。

と標榜するものであった。

つまりは、彼の思想は宋学を基本にした、漢学（樸学）の「託古改制」主義者であったと言えるだろう。

そしてその思想は書にも顕著に表れ、その書論に於いて、

生平欲将柳誠懸、趙子昂両家合為一爐。

と唐の柳公権と元の趙孟頫の二家を合せることを基本としていたことにも影響があり、さらにはその書相からも説明できる。

そもそも儒将と称された曾国藩の書は、時折見せる猛々しさの印象よりも、穏やかさにその本質があるのは、その中核に趙孟頫の書法が内在していたことを意味する。

そしてその趙孟頫の書とは、朱子学の太極の宇宙を体現した書であると言えるだろう。つまりは趙孟頫の書画同源の思想も、その淵源にはその朱子学的な宇宙思想があり、その穏純な形貌が、後に朱子学を敵視した陽明学者であった董其昌らによって、「奴書」などと

酷評されることによってネガティブな視角に惑わされることになる。
つまりはその奴書とされた内実は、貴族化、形骸化した朱子学者に対する批判であり、その書の「妍」の部分だけが拡張された批判に過ぎない。しかし、古来の朱子学者たちは、その修身主義、内聖の性情ゆえに、趙孟頫を基礎にしたことは、近世来の書の伝統として保守され、その骨格とされていたことは紛れもない事実であり、曾国藩もまた例に漏れなかったのである。

正・偏兼鋒の王羲之書法

さらに、『求闕齋学書日録』の中で、

作書、思偃筆多用之於横、抽筆多用之於竪。竪法宜努抽並用、横法宜勒偃並用。又首貴有俊拔之気、後貴有自然之勢。大約書法不外羲献父子。余以師羲、不可遽幾。

(大意)書法は、考えてみると側筆は多く横に用い、引く筆使いは、多く竪に用いる。竪画は努法と抽法を併用すべきだし、横画は、勒法と側筆を併用すべきである。また初めは、すぐれてつきつける気をたっとび、あとは、自然の勢いをたっとぶ。あらまし書法は、王羲之、王献之父子から外れない。私は王羲之を師とするが、にわかには近づけない。

とあるのは、先に見た松村説。清朝帖学派の系譜にあることの証であり、その正鋒を前提とする偏法、王法が、曽国藩にとっては、その正鋒、偏鋒の両者が、朱子学的二元論として哲学化されていると言えるだろう。

東洋の誇り

清国公使館員の中で、曾国藩の属僚であった黎庶昌の随員でもあった楊守敬と明治の文人、日下部鳴鶴との関係は有名であるが、日下部が曾国藩の書論を信条としていたことはあまり知られていない。その書論の一則とは、

作書之道寓沈雄於静穆之中、乃有深味。雄字須有長剣快戟、龍拏虎踞之象。鋒鋩森森不可逼視者為正宗。不得以剣拔弩張四字相鄙。為一種郷愿字、名為含蓄深厚、非之無挙、刺之無刺、終身無入処也。作古文古詩亦然。作人之道亦然、治軍亦然。

(大意)書法の道は雄々しさを静寂のうちに寓すべきで、それで深みが出る。雄字は武器、龍や虎のようであって、鋒鋩が厳しく、迫り見えないのが正しい。剣抜弩張の四字がいやしいのではない。一種の偽善者の字を、含蓄あって深いというのは、これは謗るにも値せず、一生悟るところがない。古文、古詩、教育、軍事もまさに同じ。

である。

この「書」を儒將の教養の一環として捉えた、凄味を感じさせる文句を背景に、厳しい求闕の人が鄙としない、朱子学的な静けさの中に秘めた「雄」の書の調べ、その精神こそが、近代に於ける「東洋人の誇り」だったのではなかろうか。

さらに、犬養毅は、「道徳の修養」の中で、

然らば支那は昔からさういう国柄かといふに、さうではない、明末には節義の為に死んだ人が澤山ある、宋末にも澤山ある。之は何の為めかといふに、学問の変化が、其の主なる原因を為して居ると思ふ。清朝にも道学者はある、朱学者も陸王学者も

あるが、比較的少数で、乾隆、嘉慶頃から漢学が盛んに行はれ、言わば考古の学問であつて、宋学即ち静座求道という功夫体得の学問は衰えてしまつた、これが清末に節義の士の出来ない原因であると思ふ。節義の士の道学者より出でたる一例としては、長髪賊の乱に大功を樹てた曽国藩の如きが尤も著しいものである。曾は近年罕にみる人傑であつたが、あの人の本領は朱子学者であつた。死に至るまで修養を怠らず、日々向上を勉めて已まない人であつた事は、其の日記を見ても分かる[10]。

とあり、曽国藩を朱子学者として、顕彰し、さらにその書論、『木堂翰墨談』の中でも、道学者（程朱学）の書を推奨し、最も規範とすべき書を趙孟頫と述べていることからも、その思想と書との関係が読み取れるだろう。

三　朱子学者の苦悶　李鴻章[11]

理学者の本領

李鴻章（一八二三-一九〇一）。原名は章銅、字は少荃、漸甫、号は儀叟、諡は文忠。安徽省盧州府合肥県東郷（現在の肥東県）出身。清末の官僚、政治家である。父の文安の本姓は許、母は李氏だった。李家に嗣子がなかったため、一家は許李両姓を称し、文安が科挙を受験するにあたり、李氏を称することとなった。父の文安は、一八三八年の進士で曾国藩とは同期であり、刑部督捕司郎中、死後に李鴻章の功によって光禄大夫、大学士を追贈される。李鴻章は一八四五年、上京して曾国藩に師事し、四七年、殿試十三位で合格後、翰林院に入り、五〇年編修となる。四七年合格の際の正考官は、のちに林則除、馮桂芬らを推挙した蘇州出身の軍機大臣・潘世恩であった。この時の状元は張之万、同期としてほかに、沈桂芬、沈葆禎、郭崇燾らがいる。

このような環境の中でも、特に青年期以降、李鴻章に大きな影響を与えたのは、やはり曽国藩である。彼は生涯、曽国藩を師と称した。曽国藩は清末の著名な理学者で、清朝初期に流行した考証学を看過しなかったが、義理学が最も大なるもので、義理を明らかにすれば、自らの行いは要を得て国に治める根本ができると考えた。

儒学は「修身、斉家、治国、平天下」という人生理念を掲げ、「修身」とは学問の修養を意味し、「内聖」すなわち聖人になるよう修行する。「斉家」「治国」「平天下」は、「外王」、すなわち他者に影響を与え、世界を安定させることを意味する。曽国藩は、朱子の解釈に従い、自分の勤めを全うすること(内聖)により、家、国、世界の秩序を維持し安定させること(外王)を目指し、自己の修養を中心とした宋明の義理学に心酔し、考証学をも治世に利用したのである。そのような曽国藩との出会いは、決定的に李鴻章の人生に影響を与えた。つまり曽国藩が彼の才能を高く買い、その才能を発揮できる場を提供し、その甲斐あって十九世紀中国の政治の舞台に頭角を現したと言える。

李鴻章は、「軍営にいた時、我が師と食事を取り、食後皆でテーブルを囲んで、経典を論証したり、歴史を討論したりして、飽きもせず倦まず悟してくれ、全て学問や政治に有益で実際に用いることができた。」と述べている。

そのような思想を受けた李鴻章の次の書(図8)は、まさにその影響を受けた内容である[12]。

志逸九霄風度凝遠　心統群理器宇閎深

(大意)志は高い空にあそび、威儀はきびしくあまねく行きわたっている。こころはすべての理を修め、度量は広く深い。

この書は、朱子学者に相応しく帖学派の正統、王羲之書風を継承し、やや強気な右上がりの結体を取っている。

その「群理を統べる」とは、まさに宋明理学の影響と言えるだろ

う。その内容とともにその書法が、李鴻章の気高さを物語っている。

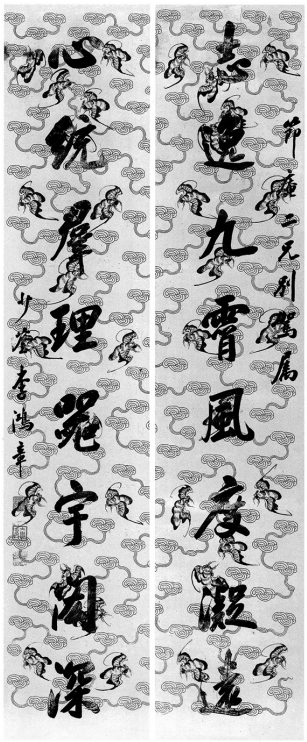


図８

洋務と公羊学

李鴻章の政治家としての活動は、江蘇巡撫として上海に赴任していたときに始まる。彼はそこで西欧の人々及びその軍事を中心とした技術に接し、また蘇州紳士と連携すべく経世思想家・馮桂芬らを幕僚とし、更には、上海の商人ともつながりをもった。そのため中国が置かれている状況に対する認識と政策方針について、彼らから深い影響をうけたと言えるだろう。

その馮桂芬は、李鴻章のブレーンとして蘇州、上海の防備の経験から西洋武器の強さを提言できたこと、また馮の「自強」思想は自国の落伍と外国の技術への認識を新たにしたこと、さらにいち早く日本の動向に注目し、洋務運動を推進した際、日本を手本にするよう講じたことなどが挙げられる。

この馮の思想は、一八二八年に正誼書院で学問を修めた際、江蘇巡撫、林則徐に師事したこと、また父の喪に服するため出身の江蘇に戻ったときに魏源と知り合ったことなどが要因と挙げられよう。

林則徐、魏源ともに西洋に対処する経世学(公羊学)に通じていた上に[13]、陽明学によって、「独立」「心力」といった近代的要素を保有していたことによって[14]、「洋務運動」が推進できたと考えられる。

外交の苦闘

中国近代史において李鴻章が果した役割として重要なものに外交がある。李鴻章が外交面でも高く評価されるようになったのは、一八七〇年の天津教案に関わる処理を契機とする。当時直隷総督・曾国藩が事件処理を担当したが、強硬な態度をとるフランス側に対し、曾国藩はその意を迎える方針をとったため弾劾され、李鴻章がこれに替って直隷総督兼北洋大臣の任に就いた。折しもヨーロッパで普仏戦争が勃発し、フランス側がひきあげたため事件は決着をみた。以後李鴻章は、当時の清朝が直面した外交問題のほとんどすべてを責任者として担当したのである。

対英仏関係としては、一八七五年のマーガリー殺害事件の交渉と芝罘条約の締結、清仏交渉と、八五年の天津条約、および八六年英国の雲南侵略に対する烟台条約の締結を担当した。対露関係としては、イリ問題の交渉に関与した。対日関係としては、七一年の日清修好条規締結、台湾原住民による琉球漁民殺害事件の処理と、それに伴う琉球帰属問題の交渉を担当した。当時の修好条規批准のため渡中した副島種臣に与えた一幅が図９である。

忠勤亮特

(大意)忠義と勤労が並外れて優れている。

道学の「五倫の徳」を持ち出した副島に対しての妥協と賛辞である。

図１０は、李鴻章の書であるが、

受質自天先以敬讓　潛神内識加之謙勤

図 9

（大意）質を天から受け謙譲を先んず。
精神を内に知りこれに加えるに
謙勤を先にする。

まさに、内聖を示す、理学の思想に他ならい。この末尾の「謙勤」は副島に与えた「忠勤」とは類似するが、「勤」という心力を尽くす部分で、共感をしたのであろう。東洋道徳の近世的外交の姿と言える。

これらの交渉が終わったのち、副島は李鴻章に漢詩を贈っている。

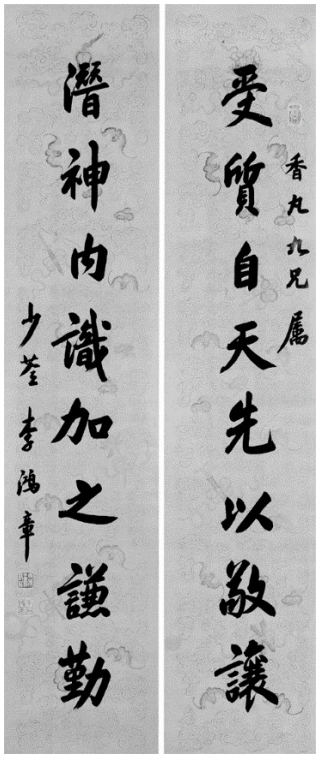


図 10

似李中堂　種臣
刻舟踪失剣　舟去踪已滅　膠柱調瑟琴　柱移調愈拙　道與治汚
隆　弊風何瑣屑　俗吏拘簿書　掊克脛膏血　儒生泥章句　陳腐
鼓口舌　所以更張事　必徯不世傑

（大意）舟に剣を失ったあとを刻み、舟は去ってそのあとはすでになくなっている。柱に膠を塗り 宴のための意琴を用意しても、柱はかわってしまって、調べはいよいよ拙い。道は政治の汚濁に関わり、悪い風習は、どうもわずらわしい。つまらぬ役人は、どうでもいい文章に拘り、過剰な税の取り立ては（過剰な勝気）は骨を折って得た利益と財産を細らせる。儒者は章句にとらわれて、陳腐なことばでしゃべりちらかす。よっていままで衰えてきたことを改めて盛んにするために、かならず世に稀な傑物をまっている。

と詠い、魯氏春秋の「刻舟求剣」の故事から、いつどきも一つに拘泥せず、時代に順応すべきと述べる。最後の「不世傑」は李鴻章を指す。副島と李鴻章との関係は、「誠」によって貫かれ、世界情勢に則して副島は別れ際に再度西洋化を促したものと考えられる[15]。

戦争の書境

外交に目を転ずると、八五年以降は、壬午軍乱に際して派遣された清朝軍の提督・呉長慶の幕下にいた袁世凱に朝鮮の外交の実権を預けた。また日清戦争に際しては、指揮下の陸軍と北洋艦隊を派遣し、当初これを統率したが、旅順港陥落によって統率権を奪われ、北洋大臣の任を解かれる。しかし戦後、張蔭桓、邵友濂を全権とする広島での交渉が決裂すると、全権として下関へ派遣され、条約締結の任に当ったのである。

そもそも李鴻章は、内実空疎な軍備に理解があり、まただからこそ、この戦争を回避したかったし、そのためにあらゆる手を尽くしていた。

つまりこれら外交における李鴻章の政策方針は、魏源以来の「夷を以て夷を制す」の思想を踏まえ[16]、列強間の利害を利用して、武力衝突を極力回避せんとするものであった[17]。しかし、この方策の

多くは成功をみず、この間清朝は、琉球、ヴェトナム、朝鮮などに対する宗主権を失い、西域の領土も縮小したのである。

つまり当時にあって、李鴻章は、理学者としての「修身斉家治国平天下」の順に終始、敬虔であったとも言える。

次の図11は、日本に残る李鴻章の書である。

落霞孤鶩供千里　馬跡車輪満四方

（大意）落ちる霞に孤独なアヒルが千里を供にし、馬の足跡や車輪が四方に満ちている。

この孤鶩とは、李鴻章自身であろうが、上句で志、ロマンを、下句では、戦争の現実を詠っている。この詩から分かるように、李鴻章自身はロマンスと現実のはざまで、常に苦悶していたのであろう。

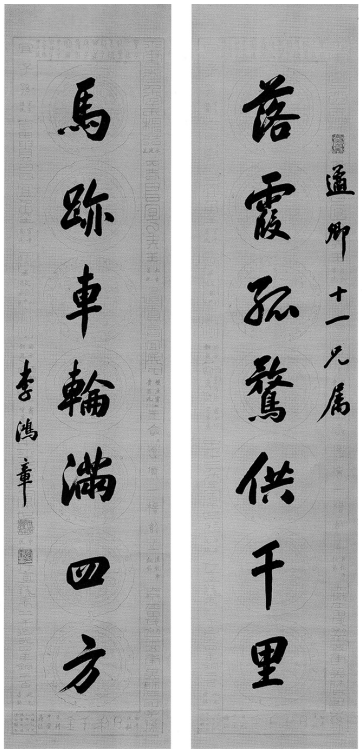


図 11

その下関条約締結後、一八九六年、ロシアはニコライ二世の戴冠式の特使として、李鴻章の派遣を要請し、セントペテルブルクで、対日防衛とロシアのシベリア鉄道（黒龍江省・吉林省）横断敷設権などを内容とする露清同盟密約が締結された。李鴻章は、締結後、ヨーロッパ、アメリカを経て帰国し、総理各国事務衛門大臣の任に就いている。

露清密約締結以後、租借地と鉄道利権を要求するなど、列強の中国に対する要求の内容は一変し、こうした状況に対し、国内で「変法」を求める声が高まった。

李鴻章も従来から体制改革の必要を認識しており、総理各国事務衛門大臣在職中には、科挙の廃止など「変法」を主張し、康有為らの「変法」の動きに対し、その性急さを懸念しつつもこれを支持していた。

李鴻章は、来たる「変法」の時代の橋渡しもしていたとも言えるだろう。

四　後期桐城派文学の展開（黎庶昌・吳汝綸）[18]

―曽国藩からの二つの水脈（外交と教育）

桐城派の文学と外交

黎庶昌（一八三七―一八九七）。清末の貴州遵義の人。字は蒓斎。曽国藩に師事した。光緒初年欽差大臣の書記官として欧州に渡り、一八八一（光緒七年・明治一四年）三月欽差大臣として日本に駐在した。部下の楊守敬が古書を蒐集したのによって、忘佚した書物二十六種二百巻を摹刻し、『古逸叢書』と名づけた。また古文をよくし、『続古文辞類纂』二十八巻を編し、著に『拙尊園叢稿』『曽文正公年譜』『春秋左伝杜注校勘記』『広韻校札』『論語坿録』『訪徐福墓記』などがある。

この黎庶昌ら当時の官僚にとっての課題を端的に言えば、如何に儒教（体制）を保守しつつ、洋務化するかという問題であったと言えるだろう。そして黎庶昌が、その儒家として、曽国藩から受け継いだ思想は、桐城派のそれに他ならなかったと言える[19]。とくに散文が得意であったと評価され[20]、その書風も古文に相応しい、碑学の

楷書が白眉である。

また黎庶昌は、文章家としては、本土で習得した桐城派アイデンティティと、洋行して受けた西洋文明との葛藤が顕著に表れた散文家とも言える[21]。さらに彼の外務経験は、曽国藩の「师夷智以造船炮(夷狄の知恵で武器を作る)」の「自强御夷(自らが強くなって夷狄を御す)」から「择善而从(善を選んで従う)」「酌用西法(西洋の方法をくみ取る)」へと、やや軟化した思想の持主だったと考えられるだろう[22]。

日本での経世と外交活動

明治十四年に来日した黎庶昌にとって、喫緊の日本との外交課題は、琉球と朝鮮半島の問題であった[23]。またその軋轢の処理と、日本との親善、価値観(儒教)の共有化、中華文明の拡大化がその任務だったと言える。日本との親善、価値の共有化は、当時の公使館員と日本の文人との交流[24]、中華文明の拡大は、部下の楊守敬を使っての古書蒐集によってなされた「古逸叢書」の編纂[25]、書道の啓蒙によって遂行された[26]。

また日本事情への諜報活動は、その調停役であり日本側のスパイ的役割を担っていた宮島誠一郎との交流が象徴的であるが、黎はその宮島の息子、詠士を同門の張廉卿のもとへ留学させるよう斡旋している。

これは、無論、友好関係の構築であると同時に、日本側スパイの人質を預かるという春秋以来の古典的な外交手腕の一面とも言えるだろう。

図12の黎庶昌が、宮島誠一郎に送った漢詩は、三年ぶりの再会を祝う内容である。

黎庶昌が一八八一年、何如璋の後任の公使として日本に派遣され、一八八四年に一度帰国し、一八八七年に再び駐日公使に就任した際のものであるが、

索居離別已三季　握手相逢一惘然　信有断金能礪石　可曽蒼海変為田　榑桑浴日花争綬　楓樹成林葉媚煙　興子鞠町区咫尺　更聯情話早櫻天

(大意)居を分かちて、すでに三年。握手してともに再会を果たし茫然自失だ。信用は金を断ち石を磨ぐことができ、蒼海を変じて田にすることができるほど。扶桑は日に浴し、花は官職をきそい、楓の樹が林になり葉は煙に媚びる。あなたと麹町のすぐ近くに住み、さらに情話を連ねて桜の空に早くしたいものだ。

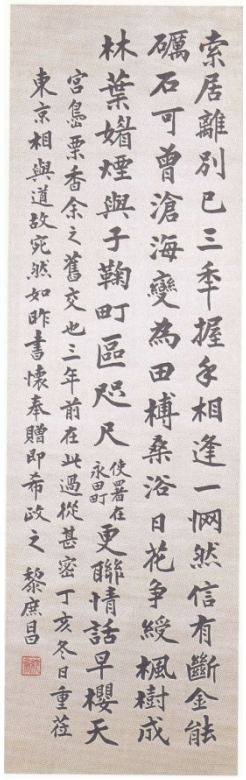


図 12

と、その信義が碑学的な楷書で強く詠われている。因みに黎の書風を古文運動家の一人、蘇軾に擬する研究者もいる[27]。

そして、この一八八七年に息子、宮島詠士は渡清することになる。

中華文化への尊敬を持ち、外交上の打算、駆け引きの中でも信(理)を最も重んじていただろうことは、後に政治家、犬養毅がその桐城派の学問(道学)や書法の影響を強く受け、自分の墓碑をその伝承者、宮島詠士に託していたことからも、明らかであろう[28]。

曽国藩門下から出た外交家の手腕は、見事に日本の政治界にも影響を与えていたのである。

桐城派の教育観の変貌

呉汝綸（一八四〇-一九〇三）。清の桐城（安徽省）の人。字は摯甫。同治（一八六二-一八七四）の進士。古文に長じ、久しく曽国藩の客となり、李鴻章の下にあって奏議を掌った。冀州の長官となり、光緒（一八七五-一九〇八）年間、北京大学堂総教習となった。日本にも来遊し、教育制度を観察して『東游叢録』を書いた。著に『易説』『詩説』『深州風土記』『詩文集』などがある。光緒二十九年没、年六四。

科挙合格者で、曽国藩に認められたほどの文才の持主、呉汝綸が後年に直面した課題は、西洋化教育の推進という難題だった。当初、総教習の役を堅く固辞していたが、ついに一九〇二年、張百熙の熱意におされ承諾した。一九〇五年の科挙の廃止に至るまでの、下準備の役に付き、一九〇二年六月には来日し、日本の教育制度の調査を行い、報告書『東游叢録』を刊行、それに基づいて張之洞が起草した『奏定学堂章程』が、一九〇四年一月に中国最初の学校章定として制定される。

結果的に清政府は、伝統的な儒教思想を温存しながらも、国家主義的な富国強兵路線にのって西洋の科学文化を導入し、日本明治中期以後の国家主義的教育方針、「教育勅語体制」が中国の実情にもっとも即していたと言えるだろう[29]。

来日中の呉汝綸と森塊南との漢詩のやり取りが、それを象徴しているが、清が西洋の文化や制度を学ばなかったため、軍事力が衰え、西洋列強の進出を許し、後世に禍根を残したことを述べ、清と日本がともに旧習に囚われず、それぞれに強くなり、助け合って存在することの必要性を唱えるが、結びは、

自強要在撥雲霧　五嶽一一呈青嵓　若遺其本廃儒術　恐類魏晋尊荘聃

（大意）自強のかなめは雲霧をひらき、五山のひとつひとつ青い凹凸をあらわせることにある。しかしその根本を忘れ、儒教を廃すれば、恐らく魏晋の類の荘老を尊ぶようになるだろう。

と清国が国力を増し、独立を守るためには、儒教を軽視してはならないと述べている。

呉汝綸も儒教教育の一切廃止の発言の中、旧来の儒学、文学の伝統を新教育に取り込むことを重視していたと言われている[30]。

保守と崩壊への道程

そもそも呉汝綸は、桐城派の古文の特徴を、

桐城諸老、気清体潔、海内所宗、独雄奇瑰瑋之境尚少（『与姚仲実』）

（大意）桐城派の諸老は、気が澄み体は清潔で、雄々しさやめずらしさ、すぐれて立派な境地は、やや少ない。

と評価し、曽国藩はその平易の文を矯正し、漢賦の広大な気を注入したと捉えた[31]。

そして「雅潔」を宗とするその文体は、徐々に変貌を遂げ、その後継者、呉汝綸は、

吴汝纶就是提倡一种将“气”“才”“奇”融为一体的那种气势雄奇，底蕴深厚的古文创作。

（大意）汝林は、「気」「才」「奇」を融合して気勢を雄奇にし、内容の深い古文創作を提唱した。

と言われている[32]。無論これは、晩年の心境かもしれないが、次の書幅はその風格を具えていると言えよう。その図１３には、

大海弧舟風万里　一船以外動相危　夜来駭浪掀天地　卻是沈

冥睡夢時

（大意）大海の一つの船が万里の風に一船以外は動けば危うし、夜からとどろくような波が天地をあおぎ、かえってひっそりと睡夢のとき。

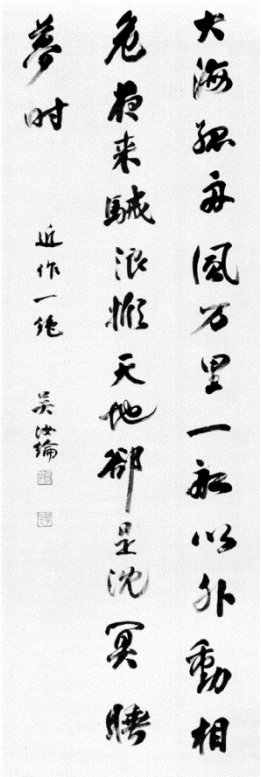


図 13

とある。この詩をどう解釈するか。危険を告げる、とどろくような波は西洋化する時勢ということだろうか。それには無関心でいるというのは、あくまで儒教を保守するという自負をあらわしているのかもしれない。

その文体は雄奇に溢れ、その書風も、桐城派の正統に相応しく帖学的のそれであるが、正義感にはやってか内聖が甘くなり、かなりの性急感が伝わってくる。

張廉卿や黎庶昌とは違う、保守派の在り方の違いを示すとともに、桐城派が崩壊してゆく過程をよく物語っている。曾国藩の継承者であり、その洋務運動の展開を担った呉にとっても[33]、もはや理学の内聖の思想だけでは、対応できなくなったのではなかろうか。

この書は、まさに洋務派から制度を重んじる変法派へと移る過渡期の書と言えるだろう。

五　変貌する桐城派　張廉卿[34]

曾国藩の後継者

張裕釗（一八二三 - 一八九四）。字（あざな）は廉卿、濂亭と号した。湖北武昌の人。一八四六（道光二十六年、二三歳にして湖北省の挙人となって北京に上り、一八五〇（同三〇年）には、国子監学生学録に及第し、運命の出会いともいうべき曾国藩の知遇を得、彼の門人となったのもこの年である。咸豊二年（一八五二）、太平天国の乱侵攻により、進士の道を断念して郷里武昌に帰り抗戦にあたるが、その間、曾国藩幕僚として頭角をあらわし、曾国藩の篤い信任を得た。

一八五二（咸豊九年）張裕釗の求めに応じ、曾国藩が祖父張以諸のために「武昌張府君墓表」を撰び、また、一八四六（同治三年）に没した父張善準のためにも「張君樹程墓誌銘」を撰び、一八六八（同治七年）、張裕釗が曾国藩の側近として南京入りし、同年「湘郷相国曾公五十有八寿序」を記したこと、一八七一（同治十年）、曾国藩より直隷主講としての招きをうけたことは、その関係性を端的に象徴するものである、

李鴻章は政治家として曾国藩門で傑出していたが、文事に関しては、張裕釗が第一人者であった。『清史稿』に「国藩文を為る、義法を桐城に取り、益々閎むるに漢賦の気体を以てす。尤も裕釗の文を善しとす。嘗て言ふ。吾が門人の成る有るを期す可き者、惟だ張呉両生のみ」と述べているのがその証である。張とは張裕釗、呉とは呉汝綸である。

曾国藩の没した翌年の一八七三（同治十二年）、張裕釗は官を離れ、南京の鳳池書院主講に就任した。さらに、一八八三（光緒九年）には、李鴻章の招請に応じ、直隷省の保定蓮池書院主講に就任した。

そして、一八八八（同十四年）、蓮池書院主講を辞してからは、

上海の梅渓書院、武昌の両湖書院、襄陽の鹿門書院等に足を留め、一八九二（十八年）、西安に隠棲。一八九四（光緒二十年）二月十九日、西安において没した。

著書には『左氏服賈注考証』『今文尚書考証』等があり、また、彼の詩文を編纂したものとしては、還暦を祝して門人 査燕緒によって編まれた『濂亭文集』、裕釗の没後、黎庶昌の手によって早急に編まれたと思われる『濂亭遺詩遺文』がある。

桐城派の内実

桐城派とは清代古文の一派で、明の帰有光（震川）をうけついで、唐の韓愈、宋の欧陽脩の古文を主張し、典雅醇正な文を作って一世を風靡した。方苞（望渓）がまず出て基礎を作り、劉大魁、姚鼐（姫伝）がこれをうけついで発展させたが、みな安徽省の桐城県の出身なので、その名がある。古文の義法を説いて厳格であり、儒学思想を根底にして、儷句・駢文・俚語の類を排し、文飾を去って簡潔で質実な文章を主張した。また漢学者の訓詁に専念するのに反対し、義理・考拠・詞章の相待つべきことを主張した。姚鼐の門からは管同・梅曾亮・方東樹・姚瑩が出て、嘉慶から道光に至る文壇で活躍し、その師法を伝えたが、その他、曾国藩・呉汝綸・林紓・厳復などもまたこの派の人である。ただし、民国初年の新文学運動、白話運動には、桐城派はその直接の攻撃目標となって亡びてしまった。

そして、張廉卿の師であり桐城派中興の祖、曾国藩の基本姿勢は、

曾国藩认为，汉学不行，明学不行，颜李学不行，只是以宋学程，朱学思想内容而采取了韩欧古文形式的”桐城派”始得谓之正宗。

（大意）曾国藩は、漢学でもなく、明学でもなく、顔李学でもなく、ただ宋学の程子、朱子の思想を取って韓愈や欧陽脩の古文の形式で表すのが桐城派であって、はじめてこれで正宗と言える。

とあるように[35]、理学者的面貌が強かったと言える。よってその書風も、帖学派、所謂王羲之風の様式で書されることが多かった。

それに対して、張廉卿の書は、一見碑学派の様相であり、また書論に於いても碑学派の書として、康有為によって喧伝されたことによってそのイメージが定着している。

康有為は、『広芸舟双楫』体変第四の中で、

国朝書法凡有四変。康雍之世、専仿香光、乾隆之代、競講子昂。率更貴盛於嘉道之間、北碑萌芽於咸同之際。至於今日碑学益盛。多出入於北碑率更間、而呉興亦蹀躞伴食焉。吾今判之、書有古学有今学。古学者晋帖唐碑。所得以帖為多。凡劉石奄姚姫伝等皆是也。今学者北碑漢篆也。所得以碑為主、凡鄧石如張廉卿等是也。

（大意）わが清朝の書法は、およそ四度の変遷がある。康熙・雍世の世は、もっぱら香光を手本とし、乾隆の世は、あらそって子昂（趙孟頫）を学んだ。率更（欧陽詢）の碑は嘉慶・道光年間に貴ばれて盛行し、北碑は咸豊から同治の移り際に芽生えて、今日になって碑学はますます盛んになった。多くは北碑と率更の碑とをまじえているが、呉興（趙孟頫）の方もこれにのろのろとお伴をしている。今、私の判断では、書には古学があり、今学がある。古学というのは晋帖・唐碑である。帖から習得されることが多い。劉石庵（劉鏞）・姚姫伝（姚鼐）らはみなそうである。今学というのは北碑と漢代の篆隷である。碑から習得されることが主である。鄧石如・張廉卿（張裕釗）らがそうである。

と述べている。

しかし魚住和晃氏はこの評価に対して異論を唱え、

張裕釗が王羲之に傾倒していたこと、欧陽詢、米芾を好んでいたこと、それが碑学派の諸家と学書の態度を異にするところは既に述べたが、これらの態度は、曽国藩の態度とはよく一致している。つまり張裕釗は書法に関しても、曽国藩のもとにあっては、曽国藩の考え方を遵守し学んでいた。それは曽国藩の意に留まるところではなかった。そして、その述懐の中で最も注目されるのは、張裕釗が碑学派的な文字を書き始めたのは、かなり晩年に入ってからということである。張裕釗は曽国藩と死別して、はじめて古法研鑽にうちこみ、独自の書風、境地を切り開き始めたのである。

と述べられている[36]。

思想、文学、書の連関を知る上で、貴重な見解と言えるだろう。

師の死と新たな道

曽国藩は、書牘「与張廉卿」の中で、

足下為古文、筆力稍患其弱。昔姚惜抱先生論古文之途、有得於陽与剛之美者、有得於陰与柔之美者、二端判分、画然不謀。余嘗数陽剛者、約得四家。日荘子、日揚雄、日韓愈柳宗元。陰柔者、約得四家。日司馬遷、日劉向、日欧陽修曾鞏。然柔和淵懿之中、必有堅勁之質、雄直之気、運乎其中、乃有以自立。足下気体近柔、望熟読揚韓各文、而参以両漢古賦、以救其短何如。

(大意)あなたが、古文をつくると、筆力がやや弱いのを患う。昔姚惜抱先生が古文のみちを論じたが、陽剛の美と陰柔の美があって、二分できず、はっきりとはかることができないと。私はかつて陽剛を、およそ四家から得た。荘子、揚雄、韓愈、柳宗元である。陰柔も、およそ四家から得た。司馬遷、劉向、欧陽修、曽鞏である。しかし柔和の中に、必ず堅勁の質、雄直の気があって、その中で運筆すれば、自から立ち上がってくる。あなたの気体は柔に近いので、揚韓の各文を熟読し、そこに両漢の古賦を交えれば、短所は救われるだろう。

と述べ、張廉卿の書の柔弱さを諫め、揚雄、韓愈、両漢の古賦を学べば、その書風は是正されるという言葉を残している。

曽国藩亡き後、張廉卿の書が一変するのは、この遺言ともなった指導に基づくものとも考えられる。晩年の弟子である宮島詠士、宮島家に残る習書資料をここに挙げると、

【詩】(詩経以外は詩人名)

詩経　陶潜　韓翃　王維　岑参　李白　杜甫　王昌齢　厳維　皇甫冉　自居易　蘇軾

【文】

司馬相如「子虚賦」

司馬遷『史記』留侯世家・貨殖伝

班固『漢書』礼楽志「両都賦」

周興嗣『千字文』

韓愈「平涯西碑」「柳子厚墓誌銘」「河南令張君墓誌銘」「国子監司業竇公墓誌銘」「贈太傅董公行状」「班堅封燕然山銘」

欧陽修「尹師魯墓誌銘」「南京欧陽公墓誌銘」「胡先生墓表」「大理寺丞狄君墓誌銘」

とある[37]。

これらは、まさに曽国藩の指導に基づいた古文学習の足跡と言えるだろう。

図14の両漢の古賦である班固「東都賦」の書を見れば、彼の文学、書法観の変貌が如実に表れていると言えるだろう。

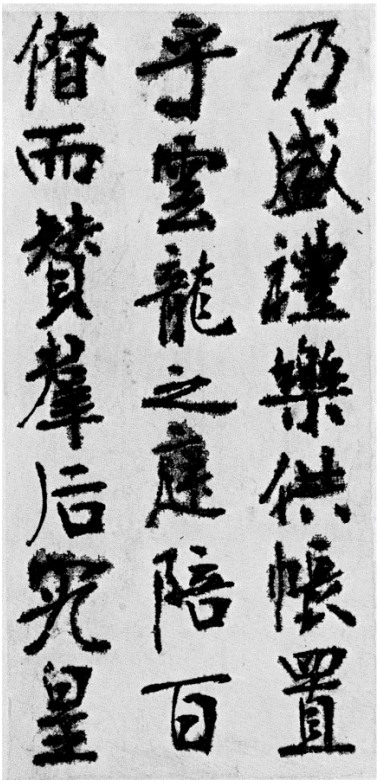


図 14

渾沌とする窮理

曽国藩の死後、張廉卿が鳳池書院にあった、一八七四（同治十三年）に詠じたものである。

読松雪斎集　　松雪斎集を読む
文章翰墨総翩翩　　文章　翰墨は総べて翩翩
典午風流紫府仙　　典午の風流　紫府の仙
可惜江南好風日　　惜しむ可し　江南の好風日
衣冠不是永和年　　衣冠は是れ永和の年ならざるを

（大意）文章翰墨はすべてひらひらと、六朝の風流、神仙の宮殿、惜しむらくは江南の風日、衣冠は永和の東晋ではない。

『松雪斎集』とは元の趙孟頫の文集を指し、趙孟頫は南朝宋室の後裔で、書画に傑出した力量を示し、とくに書においては王羲之に強い傾倒を見せた。蘭亭序にはひときわ執着を示し、定武本蘭亭序に十三の跋文を書いたことで知られる復古主義者であり、その書は風流で朱子学的な妍美さを備えていたと言えるだろう。この書は、趙孟頫への哀惜と訣別とをよく表す内容であり、曽国藩以後の張廉卿の心境をよく捉えている。

また図１５の書は、

一樽濁酒有妙理　半牕梅影助静歓

（大意）ひと樽の濁酒に妙理あり。半窓の梅の影に静かなよろこびをたすけてくれる。

とあり、その書は、晩年の碑学を踏まえた峻厳な行書で書されている。

理学の語である「妙理」の佇まいも、その理学の片鱗は残すものの帖学的な朱子学性を逸脱している。張廉卿の理学は、朱子学的な趙孟頫を超え、古文と渾沌とした、新たな様式（スタイル）を提起していたと言えるだろう。

図 15

古文運動としての碑学と日本への伝播

先に見たように、張廉卿の碑学は、所謂「樸学」とは違った、曽

国藩の韓愈観や[38]、その古文文学観の反映とも言える碑学である[39]。その古文は士大夫の意気、俗に言う「漢らしさ」に満たされたものであると言える。

その張廉卿が日本人弟子宮島詠士の父誠一郎に与えた書幅が、図16である。内容は、厳維の「丹陽送韋参軍」であるが、

丹陽郭裏送行舟　一別心知両地秋　日晩江南望江北　寒鴉飛尽水悠悠

（大意）ここ丹陽の城のほとりに旅立つ舟を見送る。ひとたび別れをつげては、やがておのおの別の土地でむかえる秋のわびしさを、今からはっきりと心に感じる。夕ぐれに江の南より、はるか北岸の方を眺めやれば最早鴉の飛ぶ姿もなくなり、水が悠々と流れているばかり。

とあり、書風は帖学と碑学の融合、詩風は雅重で、魏・晋の風があると言われている。

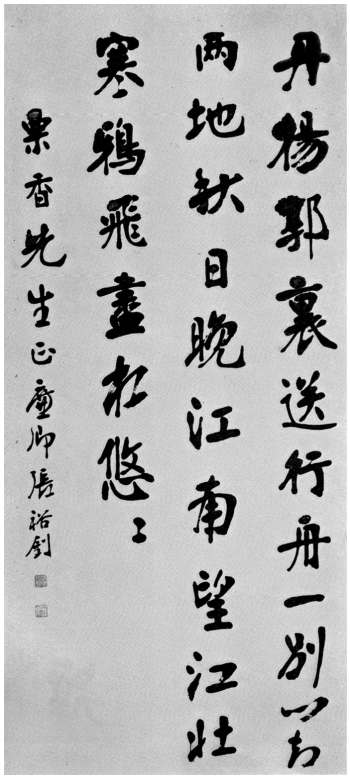


図 16

また図17の張廉卿の継承者の一人である宮島詠士の書、「漢魏遺風」は、張廉卿の理念を、高らかに謳ったものに相違なかろう。

図 17

六　鄭孝胥　満州に至る書の変貌[40]

その生涯

鄭孝胥（一八六〇-一九三八）。清の詩人、福建省閩県の人。字は太夷、また蘇戡（蘇龕）。一八八二（光緒八年）の挙人。駐日公使館員として日本にわたり、神戸駐在領事となってのち、広西辺防大臣などになった。民国になってからは宣統帝の侍講となり、一九三二年満洲国ができてからは国務総理として活躍した。詩を得意として江西詩派の作風をうけつぎ、清末詩人の代表として陳三立と並び称せられた。『海蔵楼詩集』八巻があり、また書家としてもすぐれている。民国二七年没、年七九。

書に因む人々とその書論

鄭孝胥は、主に上海時代のときに、康有為や呉昌碩とも交わっている[41]。当時鄭孝胥は、その高い学識によって、上海文墨界の中心的な存在となり、その清剛たる書は引く手あまたで、売字の年間収入は数千元にのぼったという[42]。康有為とは、主に『広芸舟双楫』

を通じて、六朝文字の受容を促進せしめ、また呉昌碩とは、解元（科挙の地方試験である郷試の首席合格者）出身であった鄭の封建時代の感覚のままで、上海という特異な場に於いて、「書」「詩」「画」「篆刻」などを介して交流した。

そしてその書風の形成過程については、その日記の分析から、二十代は篆書、隷書に興味を持ち、三〇代はその興味が楷書、行書に移り、四〇代は、宋、元、明、清の書家を好んで鑑賞したという分析がなされている[43]。またこれらの変遷は、後に昭和三年十月に清浦奎吾の依頼で、上野精養軒に於いて書道作振会のグループを前に披瀝された書論、先に「北碑南帖論」に触れ、北碑から楷書や隷書をよく学び、またさらに唐や宋の時代に下って全体を包み込むべきとした書道論とも符合するものである。図18の隷書の作は、

奉魁承杓　綏億衙彊　春宣聖恩　秋貶若霜

（大意）北斗の星を奉じて、国の境を安んず。春には天子の恵みを宣布し、秋には初秋の霜を取り除く。

とあり、あの漢の「石門頌」の臨書作品である。

鄭孝胥の、隷書などの金石への関心、学書姿勢を示す作品と言えるだろう。

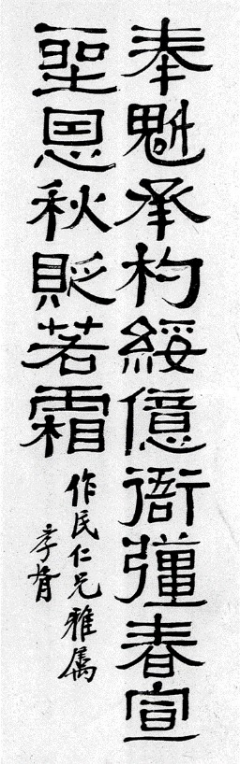


図 18

同光体様式の確立

鄭孝胥の詩風は、一般的に同光体と称される。それは近代詩派の一つで、“同”と“光”に分けられ、特に清代“同治”と“光緒”の両年号を指す。一八八三（光緒九年）から一八八六（十二年）までの間、鄭孝胥、陳衍が北京でこの詩派の宣伝を開始した。民国以来の文学史家は競って“同光体”使い、或いは広範に定義し、近代桐城詩派もその範疇に含むとする説もある。また近代以来の“宋詩派”とも並び称されることもある。近年では“同光体”を晩清から民国の歴史変遷の中で、詩体が形成され、一定の政治に参与した学術集団とも目され、同光体は当初同光時期の“清流”政治と相関して活動し、張之洞などの支持を得たとされる。

次の書は（図19）、京都学派の神田喜一郎が、上海東洋路の海蔵楼に鄭孝胥を訪ねた際、鄭氏から送別の記念として近作の詩を書いて送られたもので、『海蔵楼詩集』にも収められている。

夸父康回事有因　触山逐日各忘身　羲和弭節崦嵫迫　奈此蒼茫独立人

（大意）太陽を追いかけて、のどがかわいて死んだ伝説の巨人夸父（こほ）はそうなったことに理由があり、山をかき分け太陽を追い吾身を忘れた。太陽を運行させる御者、羲和は節度を守り、太陽の沈む山に迫った。この果てしなく広々とした独立した人はどうだろうか。

一九二三（民国十二年）当時の鄭孝胥の心境を物語るもので、その不遇に於いて渋味と力強さの気分を醸し出している。

このように、鄭孝胥の書は、晩年に確立すると言える。もともと

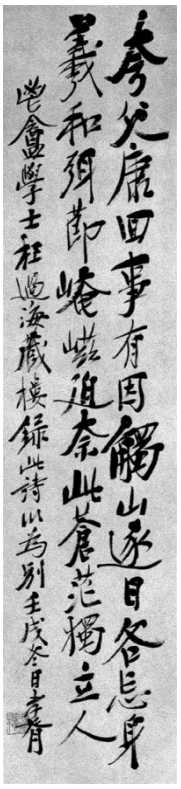


図 19

桐城派の流れを汲む鄭の書は帖学を基調とする。またその日常科挙文字と榜書の融合過程に於いて、その帖学書風の中に、金石や唐宋諸家の要素がちりばめられた。その「楷隷相参」と称された書風は、彼のアイデンティティとなって変貌した書風を意味する。

まさに同光体様式の確立と言える含蓄に富んだ書風と言えるだろう。

日本の漢詩人との関係と満州の夢

鄭は日本で駐日公使時代から、多くの文人と交流した。国分青崖、細田謙蔵らの漢詩人や長尾雨山などの京都学派の流れを汲む学者など、清朝保守派を支持する勢力と満州国成立に至るまで密に連携していた側面がある[440]。

次の図２０は、一九三四年の初め、満州国の総理大臣として日本に招聘された時、国分青崖宅に訪れ、揮毫した書である。

雨中来訪石楠荘　只話劉基與李綱　怪道青崖髭似雪　猶将忠義悩詩腸　示誠意書且贈忠定文集　甲戌仲春十八日　青崖詩老教正　孝胥

（大意）雨の中、国分邸「石楠荘」に訪れて、ただ明の開国の元勲劉基や宋の忠臣李綱について話をした。道理で青崖の髭は雪のごとく、忠義が詩情を悩ましている。李綱の文集を送って誠意を示した。

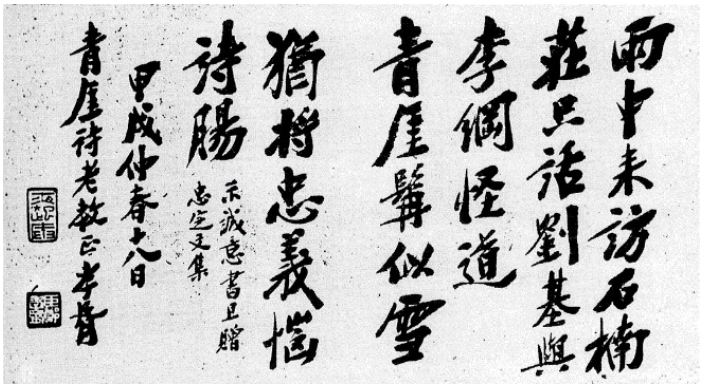


図 20

この書のように鄭孝胥の書は晩年に気骨が充実する。またその屈折した心理の中でも「忠義」への執着は、日本と満州に於いて、その「東洋道徳」が共振していたことを如実に物語っている。

小結

本章では、清政府の保守派、実権派の書を中心に、その思想、文学を垣間見た。

その書の内容は、経世致用的に社会情勢を詠う詩もあるが、内聖を志向する理学者的な内面を詠うものも多いと言えるだろう。また時の主流派であった理学者＝帖学派は、現代の中国史研究では疎外されがちであるが、むしろこちらが、本流派であり、日本政府が正式に相手としていたのは、彼らの方である。

林則徐、曽国藩、李鴻章、呉汝綸、張廉卿、鄭孝胥の流れは、通じて最後の王朝の姿であり、彼らは内聖と実学の葛藤の中でもがいた人々であり、それがその書にも見事に反映されている。

また正式な日本政府の相手であった彼らは、日本人との関係も深く、先に見たように李鴻章などは、副島種臣から、近代化、つまり実学化を促されたり、呉汝綸は、日本の教育制度に啓発されたり、

日本との関係の中で経世致用を促進させた。また逆に曽国藩の弟子、張廉卿の元に、宮島詠士は留学し、本場の内聖論を学ぶなど、相互に影響し合っていたと言えるだろう。

書は、政治・文学・書論・思想との関係のなかで醸成されるものであり、中国の正統派から日本人は多くの伝統的な教養を授かり、また実学、科学制度の進んだ日本から清朝保守派たちも多くの知識を学び、同じ東洋人としての在り方を模索していたとも言える。

対西洋、特にロシアへの抵抗という一枚岩として形成された同朋意識は、まさに彼らに於いて実現されており、それが後に北洋軍閥、満洲国へと繋がる宿命にあったのである。

日中両国の正しい歴史認識のためには、彼らの日中の保守派同志の相互関係の研究は、今後も深められるべきだと考える。

---

1 松村茂樹「帖学派の書法」(『墨』二五四号 芸術新聞社 二〇一八年九月)

2 拙箸『中国の政治家と書』(雄山閣 二〇一七年九月)「林則徐」の章に加筆、修正を加えた。

3 大谷敏夫著『魏源と林則徐：清末開明官僚の行政と思想』(山川出版社 二〇一五年 〈世界史リブレット人 七〇〉) 伍君「龔自珍、林則徐、魏源经世致用思想之比较」(『湖南农业大学学报(社会科学版)』二〇〇七年四月) 田田叶「传统文化对林则徐、经世致用、思想的影响」(『世纪桥』二〇一二年六月)

4 李亜「幕末の陽明学と梁啓超」(『比較日本学教育研究センター研究年報』一〇巻お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター 二〇一四年三月)

5 许维勤「鳌峰书院的学术传统及其对林则徐的滋养」(『清史研究』二〇〇七年八月) 林怡「林則徐的闽学师承及其为官之道」(『中共福建省委党校学报』二〇一五年七月)

6 拙箸『中国の政治家と書』(雄山閣 二〇一七年九月)「曽国藩」の章に加筆、修正を加えた。

7 张静『曾国藩文学研究』岳麓书社二〇〇八年

8 黄進興『従理学到倫理学—清末民初道徳意識的転化』(允晨文化実業股份有限公司 二〇一三年一月)

9 同注1

10 鷲尾義直編『犬養木堂伝』下《明治百年史叢書》(原書房 一九六八年)

11 拙箸『中国の政治家と書』(雄山閣 二〇一七年九月)「李鴻章」の章に加筆、修正を加えた。

12 陳敏「李鴻章の思想形成についての一考察—教育が彼に与えた影響」(『立命館文學』六一五号 二〇一〇年三月)

13 白春岩「李鴻章の「自強」思想—馮桂芬からの影響を中心として」(『ソシオサイエンス』一九号二〇一三年三月)

14 李亜「幕末の陽明学と梁啓超」(『お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター研究年報』一〇号 二〇一四年三月)

15 拙稿「書と漢詩からみる日清修好条規—副島種臣の古典的外交手法に秘められたダイナミズムとその思想」御厨貴、井上章一編『建築と権力のダイナミズム』(岩波書店二〇一五年三月)

16 大谷敏夫『魏源と林則徐—清末開明官僚の行政と思想』(山川出版社二〇一五年四月)

17 岡本隆司『李鴻章—東アジアの近代』(岩波新書一三四〇 二〇一一年一月)

18 拙箸『中国の政治家と書』(雄山閣 二〇一七年九月)「黎庶昌」吳汝綸の章に加筆、修正を加えた。

19 成晓军「试论黎庶昌对曾国藩文学观点继承和发展」(『湖湘论坛』一九九三年第六期)

20 王燕玉「黎庶昌及其散文」(『贵州师范大学学报 社会科学版』二〇〇〇年第一期 总第一〇六期) 康文「简论黎庶昌散文创作」(『贵州文史丛刊』二〇〇七年第四期)

21 汪太伟「黎庶昌“使外文学”作品的新因素及其对中国近代散文发展的意义」（『重庆师范大学学报 哲学社会科学版』二〇一二年第一期）

22 成晓军「试论黎庶昌对曾国藩洋务思想的继承和发展」（『贵州社会科学』一九九四年第二期 总第一二八期）

23 西里喜行「黎庶昌の対日外交論策とその周辺-琉球問題・朝鮮問題をめぐって」（『東洋史研究』第五三巻第三号 平成六年十二月）

24 石田肇「東洋の学芸 藤野海南と黎庶昌-二人の交友を中心に」（『東洋文化』第八三号 一九九九年九月 無窮会）・薄培林「中村敬宇と清末中国の官僚文人」（『アジア文化交流研究』第四号 二〇〇九年三月 関西大学アジア文化交流研究センター）・石田肇「黎庶昌をめぐる人々」（『中国近現代文化研究』第一一号 二〇一〇年三月）

25 陳捷『明治前期日中学術交流の研究-清国駐日公使館の文化活動』（二〇〇三年二月 汲古書院）

26 『書論-特集 楊守敬』第二六号（一九九〇年九月 書論研究会）

27 方全国・龔义龙「黎庶昌墨宝鉴赏」（『牡丹』二〇一六年第二期）

28 信廣友江「宮島大八書丹《故内閣総理大臣犬養公之碑》の書法—執筆の背景と宮島大八の晩節」（『表現文化研究』第六巻一号 二〇〇六年十一月 神戸大学表現文化研究会）

29 汪婉「京師大学堂総教習呉汝綸の日本観察」（『中国研究月報』（通号五四一 一九九三年三月）

30 合山林太郎「森塊南と呉汝綸—一九〇〇年前後の日中漢詩唱和」（堀川貴司・浅見洋二・編『蒼海に交わされる詩文』東アジア海域叢書十三 二〇一二年 汲古書院）

31 張静『曾国藩文学研究』（二〇〇八年 岳麓书院）

32 代利萍「论吴汝纶古文创作中的“重文轻理”说」（『淮南师范学院学报』二〇一五年第四期 第十七巻 总第九二期）

33 张涛「论曾国藩对吴汝纶的影响—以用人思想为例」（『湖南人文科技学院学报』第六期二〇一一年十二月）

34 拙著『中国の政治家と書』（雄山閣 二〇一七年九月）「張廉卿の章」に加筆・修正を加えた。

35 魏际昌・吴占良「桐城古文学派与莲池书院」（『文物春秋』一九九六年第三期 总三三期）

36 魚住和晃『張廉卿-悲憤と憂傷の書人』（一九九三年七月 柳原書店）

37 魚住和晃『張廉卿の書法と碑学』（二〇〇二年六月 研文出版）

38 李文博「曾国藩与韩愈」（『书屋』二〇一四年三月）

39 前掲 魚住両書参照

40 拙著『中国の政治家と書』（雄山閣 二〇一七年九月）「鄭孝胥の章」に加筆・修正を加えた。

41 松村茂樹「『鄭孝胥日記』に見える呉昌碩との交友」（『大妻国文』第二九号 一九九八年三月 大妻女子大学国文学会）

42 陳貞寿「鄭孝胥（朱信泉・厳如平主編『民国人物伝』第四巻 一九八四年 中華書局所収）

43 平野和彦「鄭孝胥と康有為」（『群馬女子短期大学紀要』二二号 一九九五年 群馬女子短期大学）

44 深澤一幸「鄭孝胥と東京の漢学者たち」（『言語文化研究』三四号 二〇〇八年三月 大阪大学大学院言語文化研究科）

第四章　日本と影響関係にあった「経世致用」思想と書法への反映
―亡命、留学中国人を中心として

Ⓒ　中国共産党員と日本

中国共産党の創立メンバーは創設者の陳独秀や董必武をはじめ、多数が日本への留学経験がある。マルクス主義理論家の李大釗や東京生まれの廖承志は早稲田大学で、毛沢東体制で長期にわたり首相（国務院総理）を務めた周恩来も一九一七年から一九一九年まで東京の専門学校（のちの明治大学）で修学している。中国共産党の設立会議である第一次全国代表大会を自宅で開催した李漢俊は東京帝国大学の卒業生であり、当時その会合に日本への留学生の代表として出席した周仏海は京都帝国大学出身だった。

中国共産党の対日政策は一九三五年の抗日戦争の呼びかけに始まる。中国共産党はコミンテルン（ソ連共産党が中核を担う国際共産主義組織）の指示で、当時の国民党の蒋介石政権に抗日戦争を呼びかけて第二次国共合作に導き、日中戦争（支那事変）で最後は日本を敗北に至らせた。日本共産党でも中国共産党と協力して抗日運動に協力した例が多く、野坂参三はコミンテルンの日本代表として延安で日本人民反戦同盟を指揮した。

一　斉白石[1]

社会変革の象徴

斉白石（一八六三―一九五七）。現代の書画家。湖南省湘潭県の貧農の出身。はじめ名を純芝、号を渭清、蘭亭といったが、のち改めて名を璜、号を瀕生、また白石道人といった。小さいときから病弱で、指物大工となり、その間、花鳥をほることを覚えた。近代の能書家たちが科挙出身者であるという社会的身分を保証の上に成り立つ傾向があったのに対し、彼は貧農出身でありながら、中年期にエリート集団の仲間入りを果たしたことにより、当時に於ける地位概念の柔軟性と身分制度の流動性を考える上での、見事なサンプル的存在とされた。二〇歳のころから芥子園画譜を自習して、三〇歳（一八九三年）以後、ようやく画家として認められた。三二歳、友人と詩社を結成して詩作にふけり、また印を刻することを覚えた。その後、売画刻印の生活を続け、もっぱら旅を常とした。その時代を「五出五帰」と言われていている。一九一七（民国六年）夏、兵乱を避けて北京に移り、そこで湖南出身の名画家、陳衡恪（ちんこうかく）と交わり、評価が一段と高まった。さらに一九二〇年には桐城派の大家、林紓（りんじょ）によって「南呉北斉」（南の呉昌碩と北の斉白石）と激賞されたが、斉白石自身も制作の上で呉昌碩をかなり意識していたと言われる。ただし、呉昌碩が石鼓文などの伝統古典に重心を置いていたのと比べて、当時の現代感覚の方が多く織り交ぜられている。また革命派の書のように西洋化の影響を受けたというよりも、庶民的な感覚に傾いていたと言うべきだろう。一九二七年、北京の国立芸術専門学校の教授となり、解放後は人民芸術家として、一九五二年、全国文学芸術界連合会主席団委員となり、五四年には全国人民代表大会代表に選ばれ、五五年には世界平和評議会から国際平和賞を受賞し、五七年九月十六日没した。

斉白石の書論

書画家である斉白石の書論は、図1の書に先ず垣間見られる。

吾書意造本無法　此詩有味君勿伝

（大意）私の書は意によって作ったもので、法則がない。この詩に味があっても、君は伝えないで。

図 1

一九二二（民国十一年）に書されたこの幅は、前句「吾書は意造にして本より無法」とあり、これは蘇軾の書論の踏襲でもある。また紙幅の書き込みには、自分の書が、「怪」であることにも拘りを見せている。この行書作品を鑑賞する場合、その「意」とは、蘇軾のような「士大夫」の意というよりも、「人民」の意を意味するのであろう。

また斉白石の書作品の下地には、自ら語るように李北海、何紹基、金冬心、鄭板橋と《天発神讖碑》の影響が看取される。但し、啓功の回想録に、

齐先生对于写字，是不主张临帖的。他说字就那么写去，爱怎么写就怎么写。

（大意）書法に関して、斉白石先生は法帖の臨書をすべきなどとは、主張されなかった。書はどのように書こうと自由で、書きたいように書けばいいと言うのが持論だった。《啓功叢稿所収　記斉白石先生軼事》

とあるように、古典はあくまでも絶対的なものでなく、消化されるべきものであったようである。但し敢えて、斉白石の書の特徴を言えば、その消化の深みに欠け、やや呼吸が速いと言えるだろう。

戦争と書

図2の一九二九年に書されたこの書は、一九一九年に故郷の湖南省での争乱を避けて、みたび北京に来たときに作られた詩である。

図 2

一日飛車出帝京　衡陽何処着斯民　園荒孤亦営巣穴　世変人偏識姓名　愁似草生焼又発　盗如山密刻難平　三年深負紅梨樹　北地非無杜宇声

（大意）ある一日、車に乗って北京を出たが、衡陽のどこにこの民を着かせてくれようか。園は荒れ、みなしごは洞窟に住んでいる。世は人の名を変えさせ、愁いは草の焼けるがごとく発してくる。盗みは山の密のようで治まらない。三年間、抗力の強い紅梨を深く負った。北の地には、ウグイスが鳴いていた。

この望郷の思いが述べられた詩が、一九二九年にまた書されたのは、当時、湖南では農民運動が展開されていたこととの関係性が指摘できる。書風は、何紹基風の行書であるが、呉昌碩の書風とも通じるところがある。

次の図3の書は一九三八(民国二七年)に書されている。

保民徳乃大　道国行維艱

(大意)民を保つ徳が、つまりは大きく、道徳の国がまかり通るのは、難しい。

図3

日中戦争時の作であるが、その愛国心が吐露されている。その書風は、《祀三公山碑》の特徴がみられるが、この書風の淵源は、文学の師、王闓運(おうがいうん)がそれを愛好していたことに因るのであろう。

革命家の書の特徴として、その個人の癖を肯定する傾向があるが、斉白石は比較的古典に準拠し、そこにモダニズム的な新しい感覚と軽妙さが看取される。

二　陳独秀　儒教の批判の内幕[2]

新文化運動と生涯

陳独秀(一八七九-一九四二)。民国の思想家。安徽省懐寧の人。原名は乾生。一名、仲。字は仲甫。独秀は郷里の独秀山に因んで号としたもの。十八歳のとき江南の郷試に応じ、このころから康有為・梁啓超の説に共鳴して西洋文明に接した。浙江求是書院を出てから日本に渡り、東京高等師範学校速成科を卒業。その後、フランスに遊学して、その思想文化の影響をうけた。帰国後、安徽高等学堂教務長となり、辛亥革命には安徽都監柏文蔚の秘書として革命運動に参加し、安徽教育司長になった。一九一三(民国二年)、袁世凱に反対して失敗し、日本に亡命した。袁世凱の死後、帰国して一九一五年、雑誌、新青年を創刊して健筆をふるった。翌年北京医専校長湯爾和の紹介で、北京大学校長蔡元培に招聘されて文科科長となり、胡適・李大釗などの人材をあつめて新文化運動の中心となった[3]。中でも孔子教排撃に力を入れて、「吾人最後の自覚」「孔子の道と現代生活」「憲法と孔子教」「復辟と尊孔」などを新青年誌上に発表して急先鋒となった[4]。新文学運動もまた彼によって推進せられ、胡適の文学改良芻議に呼応して発表した文学革命論は新文学運動の方向を示したものとして注目される。五四運動ののち、十月革命の影響を受けて次第にマルクス主義に接近し、一九一九年、保守派の教授の排撃をうけて北京大学を退いた。以後、革命運動に奔走して一九二〇年五月には、上海に共産主義小組を組織して段祺瑞のため捕えられた。釈放されてのち、一時陳炯明の下にあって広東省教育委員になったが、その後追われて上海に潜入し、同年秋にはコミンテルン代表ウオイチンスキーと相識って、その援助のもとに中国共産党を李大釗らとともに創立した。一九二一年、中国共産党中央委員長に挙げられ、一九二三年、中国共産党総書記となり、以来共産党最高幹部として久しく党の全権を掌握したが、一九二七年、国民党・共産党の分離後、日和見主義者としてコミンテルンの排斥をうけ、党中央部から遠ざけられ、翌年には総書記の職を免ぜられ、一九二九

年にはトロツキー派として共産党から除名された。しかしその後も中国共産党の元老として重きをなし、執拗に潜行運動を続けて、一九三二年秋、ついに上海フランス租界において逮捕され、一九三四年六月二〇日徒刑八年の判決をうけ、江蘇第一監獄にいれられた。

抗日戦が勃発するに及び、一九三七年八月二一日人民戦線派の巨頭たちとともに釈放され、抗日戦線の陣頭にたったが、一九四二年病死した。著に『独秀文存』三巻がある。

伝統中国との対決者の書

儒教批判を行ったことで著名な陳独秀に伝統的な教養が備わっていなかった訳ではない。例えば次の図4の書は、その款記に「啓明に正さんを請う」とあるように、つまりは周啓明、魯迅の次弟周作人に陳独秀が与えたものである[5]。

その漢詩は清の陳恭尹《崖門謁三忠祠》であり、その三忠とは、南宋の時代、元の侵略に抗った文天祥、陸秀夫、張世傑のことであり、この詩は、もともと明清の易姓革命の際の亡国の悲痛を詠い上げている。

山木蕭蕭風更吹　両崖波浪至今悲　一声望帝啼荒殿　十載愁人来古祠　海水有門分上下　江山無地限化夷　停舟我亦艱難日　畏向蒼苔読旧碑

（大意）山木にきびしい風が吹き付け、両崖の波浪が今にまで至り悲しい。忠祠の荒涼とした正殿の上に、突然一羽のホトトギスが伝来して泣いて、国が滅びる悲しい心を思い出させている。十年もの憂人が古祠に礼拝する。海水に上下を分ける門があり、国土が消え失せ、外国との境界も別けることができない。舟で逃げる逃亡生活を終えたが、しかし生活は依然として苦難に満ちている。たとえこのようになったとしても、畏れて青色の苔を被った古碑を読む、つまり三人の勇ましく気性が強い碑文を読んで顕彰するのだ。

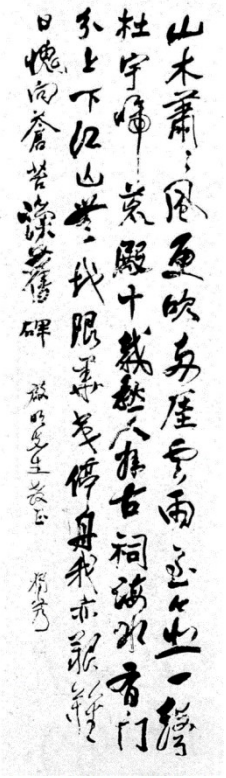


図4

言わんとするところは、自分に対して忠臣三人が自分を犠牲にしてまでも遂げようとした志を自分たちの愛国心に照らし合わした内容である。

その周作人は、ヒューマニズム思想を『新青年』で発表し、五四運動直前に、その代表作である「人の文学」が陳独秀に評価されて、『新青年』に掲載された。この作は、中国初の重要な近代文学理論と見なされ、郁達夫が、五四運動の最大の成功はその「個人」の発見だと称えたほどである[6]。

そのような五四新文化運動の担い手にとっても、その心の拠り所は、伝統中国の国家への忠義心であったと言えよう。

その書は、書の基本を備えた章法によって行書で書かれ、筆触も濃厚、近代前の士大夫たちに、そう引けを取らない力作である。ただし、やはり革命派の書だけあって、どこかに解放感があって、オリジナリティ豊かである。

また先に少しく触れたように、一九三一年に上海に於いて、「中国共産党左派反対派」という組織を作り、総書記の任に就くが、翌年の十月には国民党当局によって上海にて逮捕される。一九三七年釈放され、中共からの呼びかけがあったがこれを拒否し、その後は独自で抗日的な著作活動などに従事する。そして一九三八年からは四川江津に住み始める。

図5はその江津で書されたものである。十八才にして「秀才」になってから、一九一五年『青年雑誌』を創刊し新文化運動を発動し、一九四二年四川省の江津で落ちぶれて世を去るまでの一生は、「康党」「乱党」「共産党」という道を歩み、波乱万丈であった。その晩年の抗日戦中で唐の李益「夜上受降城聞笛」を書したのである。

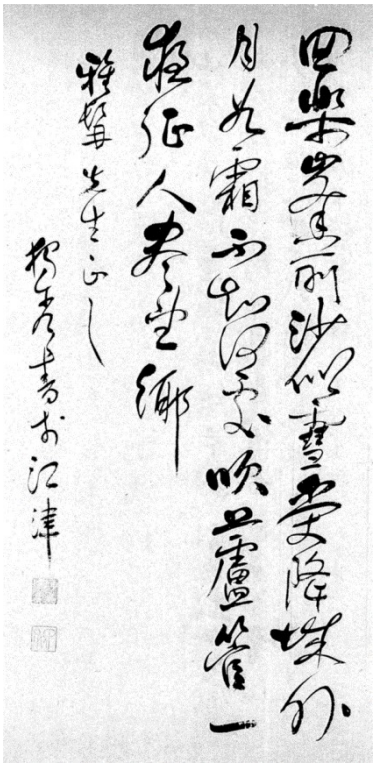


図5

回楽峰前沙似雪　受降城外月如霜　不知何処吹芦管　一夜征人尽望郷

(大意)回楽峰の前の沙漠地帯は月光が降りそそいで、真っ白に見えて、まるで雪のようである。受降城の城外は、月光に照らされ、霜が降りたかのようである。胡人がどこで葦笛を吹いているのか、分からないが。胡人の吹く、もの悲しげな胡笳の音を聞いて一晩中、出征兵士は、ことごとく望郷の念に駆られてしまった。

日中戦争の最中、望郷の年、故郷の安徽省懐寧に想いを遣って想っての詩心であったと言えるだろう。

そしてその書風は、所謂「狂草」で書かれている。狂おしいまでの感情の表白、そのスタイルは意外にも伝統的な書法を一応は踏まえている。ただしやはりここも共産主義者の書だけあって、些か伝統への慎みは欠けているとは言えるかもしれない。

三　魯迅　革命と書の在処。

魯迅の生涯

魯迅(一八八一-一九三六)。民国の文学者。浙江省紹興の人。清の光緒七年生まれ。本名は周樹人。魯迅は筆名。筆名はこのほか五十種以上あるが、その理由は、一つに名誉や栄達を欲しなかったことから、もう一つには言論の自由を奪われて変名を必要としたからである。一九三三(民国二二年)から翌年にかけて最も多く用いている。

幼年時代は比較的豊かな読書人の家に育ったが、十三歳のとき官吏の祖父が入獄してから家が没落し、十六歳のとき父(周儀炳)が若く病死してから一層窮乏して苦難をなめた。戊戌政変のあった一八九八(光緒二四年)感ずるところがあって、新思想の習得と洋学の修業のため、南京に出て江南水師学堂(海軍兵学校)に入ったが、翌年礦路学堂に転じた。このころ愛読したものに厳復訳の『天演論』や、維新思想を鼓吹した『時務報』があり、多くの影響を受けた。一九〇二年一月卒業すると、翌年三月日本に渡り、弘文学院に入った。このころ、特に生物・科学に興味を持ち、科学小説の翻訳をした。それは中国大衆の進展を望むなら、まず科学小説から始めるべきだという考えに由来するものであった。

弘文学院を卒業すると、医を志して、一九〇四年九月仙台医学専門学校に入学した。目的とするところは西洋医学によって中国人を救い、ひいては国民の維新に対する信仰を深めることにあったが、途中感ずるところがあって文学に転じた。この辺のことは『吶喊』の序や仙台で世話になった藤野厳九郎教授のことを綴った『藤野先生』に詳しい。それは要するに中国を救う道は人々を病気から救う

ことでも、また身体を強固にすることでもなく、一に 中国人の精神を改造することにあり、それには文学が第一であるということであった。

仙台を去った魯迅はその一九〇六年七月、帰国して母の命ずるままに朱安と結婚したが、数日してまた弟の周作人をともなって東京にまいもどった。東京では亡命中の章炳麟から革命思想を学び、一九〇七年、雑誌の『新生』を計画した。「文化偏至論」「摩羅詩力説」はそれに載せるため書いたものであるが、これは費用の点で失敗した。次いで周作人と小説の翻訳を計画し、『域外小説集』を出したが、これもまた売れ行きが悪くて失敗した。

魯迅はここに深い懐疑と寂寞に沈潜し、一九〇九八月、帰国して浙江両級師範学校や紹興の中学校の教員となった。一九一二（民国元年）革命が成功して臨時政府が成立すると、一月教育部総長蔡元培（同郷の先輩）に招かれて教育部に入り、五月政府とともに北京に移った。しかし革命が真の革命をもたらさない現実にひどく失望して、再び深い寂寞と懐疑におちこんだ。この苦を避けるため、一時、金石拓本の蒐集に専念したが、やがて一九一八年五月、銭玄同の勧めによって最初の小説『狂人日記』を発表した。それは狂人の口をかりて中国の礼教を激しく攻撃したものであり、それは陳独秀や呉虞の反孔教運動が激しく展開され、また陳独秀の「文学革命論」や胡適の「文字改良芻議」「歴史的文学観念論」「建設的文学革命論」が相次いで発表される時期に当たっていた。これ以後、五・四運動の波にのって代表作の『阿Q正伝』以下を発表し、それらは小説集の『吶喊』『彷徨』に収められている。一方、時代の進展とともに雑文に鋭いものを見せ、それらは『熱風』『墳』などの雑文集に収められている。この間、北京大学・師範大学・女子師範大学の教壇にたち、中国小説史略（中国で最初の小説史）を刊行。また周作人らと語絲社（一九二四年）を作り、外国文学研究を主とした未名社（一九二五）を作った。

しかし一九二六年、三・一八事件（軍閥政府の文化弾圧に抵抗した学生運動）ののち、急進的な文化人への逮捕令が出るに及び、長年住みなれた北京を脱出して八月厦門に赴き、厦門大学教授となった（当時、林語堂が文科科長をしていた）。厦門には半年ばかりいて広東に赴き、中山大学の文学系主任兼教務主任となったが、折から北伐の最中で（蒋介石を総司令とする北伐軍は一九二六年七月広東を出発した）、やがて一九二七年四月、蒋介石の反共クーデターが行われて革命派や共産党への弾圧が激しくなると、九月広東を去って上海に逃れた。これ以後、許広平と同居して著作に専念したが、この間創造社・太陽社の革命派と論争したり、右翼の梁実秋らの新月派と論争したりした。一九三〇年、中国左翼作家連盟が結成せられると、その中心となって活躍し、また一九三六年には、中国文芸工作者を組織して抗日民族統一戦線を主唱したが、同年十月十九日午前五時二十五分宿痾の肺結核と喘息が急変して上海施高塔路大陸新邨の寓で没した。享年五六。中国最初の民衆葬が行われ、万国公墓に葬られた。

なお、瞿秋白は『魯迅雑感集』の序で、魯迅は進化論から階級論に進み、無産階級の真の味方となり、さらに戦士となったと言っているが、この魯迅の方向こそ正に人民文学の方向として新中国では高く評価され、尊崇せられている。延安には魯迅師範学院、魯迅芸術学院など、その名を冠した学校が作られ、毛沢東も「中国第一等の聖人」（魯迅論―一九三八年 十月 魯迅逝世二週年記念日における講演）と言い、「中国文化革命の主将」（新民主主義論）と言って、その民族解放の急先鋒として革命に大きな助力を与えた点を高く評価している。よって一九四九年の解放後、魯迅研究は急激に盛んになり、魯迅全集も一九五六年十月以降、注釈付のものが新たに刊行されている。

章炳麟からの継承と断絶

師弟関係にあった、章炳麟と魯迅、その弟子魯迅は章炳麟について「学問のある革命家」と評価した。「文学復古」を提唱し、古代書面語の「文言文」を重視した章炳麟と現代書面語「白話」を推進した魯迅は、実際に信頼関係で結ばれた師弟であった。魯迅は章炳麟を尊敬し、章炳麟が袁世凱政府に軟禁された時も、蔣介石に指名手配にされた時も、その親交を保っていた。しかし一方で新文化運動の急進派の代表として、守旧派の重鎮であった章炳麟とは、意見が真っ向から対立することもあったようだ。

ただ「国学大師」と称された章炳麟の学問は、伝統的な精神の全面的継承ではなく、具体的には主に諸子百家に対する研究と特に左伝を中心とする儒学の経書、そして言語学に対する研究の三種類の内容である。またその儒学は、宋明理学ではなく、考証学の系統にある。

換言すれば、彼の「国学」とは、清代以来の考証学を骨格に、諸子学や儒教の経学、「小学(文字の形体・音韻・訓詁について研究し、経学を基礎づける学問)」の昇華にあったのである。その章炳麟の小学研究は音韻を基礎に据えたものであって、文字はまず音があってその後に字形が作られたというそれまでの伝統的小学と異なるスタンスを取り、こうした小学という言語学の成果を歴史・社会研究に積極的に活用した点が特徴的である[10]。

魯迅は、日本でその小学の基本テキスト『説文解字』の講義を章炳麟から受けており、彼の言語、音への執着とその卓越した金石学の源泉は、章炳麟に負うところが大きいと言えるだろう。

旧詩と書の在処

新文化運動の担い手であった魯迅が、旧詩の使い手であったことは、意外にも取り上げられることは少ない。つまり彼の小説や雑感の類、革新的な部分がのちに評価されたことによって、旧文化の継承部分の問題の分析は、大きな課題として残されていると言えよう[11]。それは詩、思想だけでなく、書もまた然りである[12]。

魯迅は、一九三四年八月二十五日《中华日报・动向》「汉字和拉丁化」に於いて、

> 为了这方块的带病的遗产，我们的最大多数人，已经几千年做了文盲来殉难了，中国也弄到这模样，到别国已在人工造雨的时候，我们却还是拜蛇，迎神。如果大家还要活下去，我想：是只好请汉字来做我们的牺牲了。现在只还有“书法拉丁化”的一条路。
>
> (大意)この四角い字の弊害を伴った遺産のお蔭で、我々の最大多数の人々は、すでに幾千年も文盲として殉難し、中国もこんなザマとなって、ほかの国ではすでに人工雨さえ作っているという時代に、我々はまだ雨乞いのため蛇を拝んだり、神迎えをしたりしている。もし我々がまだ生きて行くつもりならば、私は、漢字に我々の犠牲となって貰う外はないと思う。今はもう「書き方をラテン化する」一筋の道があるきりだ。

と唱えた一九三〇年代の上海時代に、矛盾するかのように、多くの詩と書を残している。

魯迅の旧詩は、一切の好詩は唐で終わったという認識の上に、人からの依頼のため、革命同志や、特に日本人に贈ったものが多く、それは旧時代の教養の中で育った生い立ちがせしめた産物であったと言えるだろう。

図6の書は、一九三二年に浜之上学士のために書かれたものである。

> 故郷黯黯鎖玄雲　遙夜迢迢隔上春　歳暮何堪再惆悵　且持卮酒食河豚
>
> (大意)故郷は闇黒で、黒雲が鎖し、長夜はいつ明けるとも知らず、

来たるべき上春は隔てられ、わが手にふれることもできない。
年の暮れどうして悲しみを再び思い返すに堪えられようか。
しばらく酒を飲み河豚を食べせめて心の憂さを晴らそう。

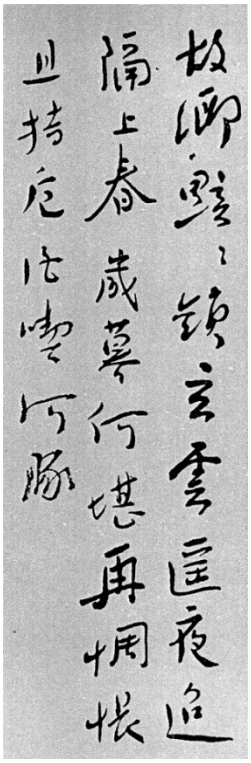


図6

その書は、章炳麟の行書の様式を踏まえ、さらにそれを庶民的に愛らしくした佇まいである。

さらに図7は、一九三三年に西村真琴博士のために書かれたものだが、

奔霆飛熛殲人子　敗井頹垣賸餓鳩
偶値大心離火宅　終遺高塔念瀛洲
精禽夢覚仍銜石　闘士誠堅共抗流
度尽劫波兄弟在　相逢一笑泯恩讐

（大意）飛行機の爆撃、飛び交う火が人の子を襲い、敗頽しくずれ落ちた村の井戸と人の住む家の垣の中に、ただ飢えた鳩が一羽残された。偶然に慈悲深き西村博士に出会い、餓鳩が火宅を離れることができ、その鳩が死んだあと、日本人の高貴なる心によって、日本に三義塔という塚を残した。西村博士から手厚く葬られたこの鳩は、大夢、すなわち死から蘇り精衛という島になって日本と中国との間に横たわる溝をうめつづけるであろう。闘士は堅き誠によって共に流れに抗って、劫波、四十三億三千二百万年を超えて彼岸に達し、日中が兄弟となり、積み上げられた恩讐がすべてほろび去り、互いに一

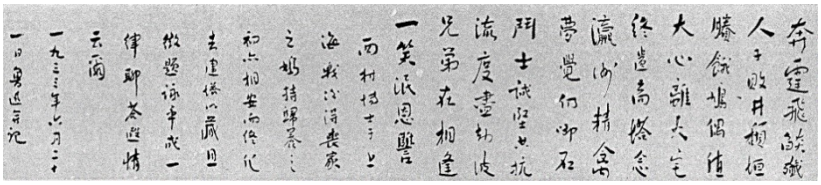


図7

笑しうる再会の日が必ず来るであろう。

上海事変の最中、西村博士が当地で飢えて飛べなくなった鳩を見つけ、見捨てるに忍びなく大阪に連れ帰った。日本の鳩との間に子が生まれ、その日中の愛の鳩を平和の使者として上海に送ることを念じ養ったが、死んでしまう。博士は、その鳩を自宅に埋葬し、石碑を立てて三義塔と名付けた。その記念として鳩の遺影を描き魯迅に送り、題詠を請うたのが、この詩に当たる[13]。

魯迅の書は、このように日中戦争期のものが多く残されている。しかもその特徴として、日本人の依頼によるもの、それは著名な中国人である魯迅からその伝統中国の文化の継承者的な側面から、詩や書を請い求めたのであろう。そしてそれに答えるように日本人との友好関係を築かんと欲した内容がその詩、書として残されている。

つまり、魯迅の詩文、書は、特に章炳麟のそれを換骨奪胎し、晩年の日中戦争の中にあって、その書の在処は、日本人との友好、その絆として表出したと言えるだろう。

四　郁達夫　小説家の書[14]

郁達夫の道程

郁達夫(一八九六-一九四五)。民国の小説作家。浙江省富陽県の人。名は文。字は達夫。父が早く亡くなり貧乏であったため十三歳のときから漂流生活を始めた。学校を転々と変わり、杭州中学では徐志摩と同級であった。翌年退学して長老会のミッションスクール育英書院に転入したが、間もなくストライキの主謀者として除名された。その後は家にあって独学し、一九一三年九月、北京政府司法部の役人であった長兄にともなわれて日本に渡り、東京の小石川で長兄一家と同居した。翌年夏、第一高等学校の特設予科に入学し、一九一五(民国四・大正四年)長兄の勧めで医科に入るつもりで名古屋の第八高等学校理科に入学した。このころからツルゲーネフをはじめ西欧近代文学に親しみ、高校在学中に読んだ小説は一千部にものぼったと言われている。文学への関心が深まると、やがて理科から文科に転じ(一九一五年)、一年おくれて一九一九(民国八年)、東京帝国大学経済学部に入学し、一九二二年に卒業した[15]。この間一九二一年に書いた『沈淪』は出世作となり[16]、一躍名をあげる。また郭沫若(九州大学在学)張資平・成仿吾(東京大学在学)田漢(東京高等師範学校在学)らと純文芸雑誌の発行をはかり、文学団体創造社を結成した。一九二二年に帰国後は安慶法政学校で英語を教えながら、雑誌、『創造季刊』の編集にあたった。翌年九月、北京大学講師となり、このころの作品に、「蔦蘿行」「還郷記」「春風沈酔的晩上」がある。一九二五年、武昌大学文科教授になる。翌年三月国民革命の波が最高潮に達し、その属する創造社も革命文学に急転回しようとしたとき、郭沫若らとともに革命の中心広東に移り、広州大学の教壇に立ったが、国民革命軍の軍閥にも等しい醜悪な実情に絶望して、十二月上海に帰り、雑誌『創造月刊』『洪水』などを主宰した。その後は、郭沫若ら創造社の同人と途を異にして脱退し、『語絲』『大衆文芸』によって創造社一派の革命文学を批判する立場をとり、魯迅に近づいた。一九三二年、安徽大学教授となったが、間もなく辞職して杭州に隠棲した。この間、林語堂のあとをついで雑誌を編集したり、また当時上海で発行された小品文雑誌『人間世』『宇宙風』に投稿したりして、日本の『徒然草』も翻訳したが、一九三六年二月福建省政府参議になってからは文筆から離れた。抗日戦発生後は武漢で軍事委員会政治部設計委員となり[17]、また一九三八三月には漢口で全国文芸界抗戦協会理事となったが、その後シンガポールに移り、『華僑新聞』『星洲目報』副刊を編集した。一九四二年二月シンガポールを脱出してスマトラ島に移り、趙廉という酒屋を経営、また日本軍の通訳にもなったが、一九四五年八月二十九日終戦時に行方不明になった。日本の憲兵に殺されたともいわれる。作品は私生活の記録といったものが多く、青年の病的な心理や頽廃的な行動を表現しているが、とりわけ青年の現実社会に対する不満や性的苦悶を大胆に描写したのが特色である[18]。

小説家、郁達夫の漢詩と書

小説家として名高い郁達夫は、漢詩もいくつか残している。それが書として残るのは、一九四一年の夏にシンガポールで書かれた漢詩、書で、軍閥政治家の馮玉祥に与えた詩である。その馮玉祥(一八八二-一九四八)は、中国の軍閥政治家。安徽省出身で、民主化の方向を志向し、クリスチャン将軍とよばれた。初めは段祺瑞(安徽派)に従い、のち直隷派に接近し、一九二四年十月に北京で突如兵変を起こし、自ら国民軍と称して直隷派の曹錕を追い、一時、北方の実権を握った。一九二六年、国民党に入って西北国民軍総司令となる。一九二八年北伐に呼応して奉天軍を追い、国民党中央執行委員となるが、一九三〇年には反蔣介石運動を展開し失敗して除名された[19]。抗日戦争中は復党し、重慶にあって蔣介石のもとで軍事委員長に任じられた。しかし蔣のファッショ化には反対した。一九四六年外遊してアメリカで反蔣声明を発表、一九四九年人民政治協商会議に参加するため、当時のソ連経由で帰国の途中、黒海で乗っていた船の火災のため死去した。夫人の李徳全は中華人民共和国初代の衛生部

長、中国紅十字会長に任ぜられた。

その漢詩の内容(図8)は、

馮煥章先生今年六十万裏来書乞詩為寿戯効先生詩体

馬二先生真好漢　能屈能伸能苦干　昔従西北練精兵　今天中央弄筆杆　莫嗤丘八変詩人　杜甫傷時涕淚新　萁豆相煎何太急　英雄雖老豈輪囷　抗戦今年将勝利　加強団結全民意　同室操戈大不該　先生呼吁声声涙　六十年間教訓多　従頭収拾旧山河　預期真搗黄竜日　再誦南山祝寿歌

(大意)反蒋運動を行った閻錫山と馮玉祥は本当に好漢だ。屈し、伸び、よく働く。昔は西北から精兵を鍛え、今は中央で筆をもてあそぶ。軍人が詩人なることを嗤ってはいけない。杜甫は時を傷み新しい涙を流した。豆を煮るように詩を作り、どうしてこんなにはやいのか。英雄は老いても、どうして曲貌することがあろうか。抗戦は今年、まさに勝利せんとし、強く団結し、民意を全うする。同じ部屋で武器を使うことは、あってはならない。先生の呼ぶ声が涙声で、六十年間、教訓が多い。あらためて旧き山河を収拾し、攪乱することを期待する中華の日、再び南山の祝寿の歌を朗誦する。

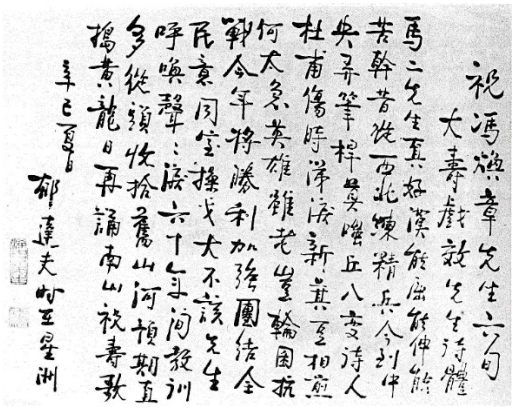


図8

とある。さすがに小説家ならではの語彙使い、それは今の現代中国語に繋がる要素が強く、平仄はなおざりだが、押韻はなされている。

その書は、粘りのある筆触で、古典的な章法を備えてはいる。清の何紹基にも通じるところもあるが、歴史の規範を逸脱した右下がりの構成になっており、そういう歴史を軽んじるという意味でも、やはり彼の書は、革命家の書と言えるだろう。

小結

中国共産党は、実際は実学思想が飛躍的な進展を見せていた日本で醸成されて後に産声を上げている。

その創始者である陳独秀、後に見る郭沫若と関係の深い郁達夫、革命文学のシンボル的存在の魯迅、そして工人出身の書画家として共産党プロパガンダに利用される斉白石など、多彩な書相を残している。

但し彼らに共通する点を敢えて挙げるならば、歴史への慎みの少なさ、白話的な要素、共産党的な芸術観に発展する人民的美意識などが列せられよう。

但し彼らに於いても、一応の旧学の教養を保守はしていたし、そこは民族としてのアイデンティティー、更に言えば、中国人としての矜持、そして誇りだったと推察できる。

次章では、碑学派、帖学派、共産党派、総合的に彼らの系列に於いて、実学思想家としての郭沫若の書の位置付けを行いたい。

---

1 拙箸『中国の政治家と書』(雄山閣　二〇一七年九月)「斉白石」の章に加筆、修正を加えた。

2 拙箸『中国の政治家と書』(雄山閣　二〇一七年九月)「陳独秀」の章に

加筆、修正を加えた。

3 鄧紅「中国現代思想史における陳独秀-新文化運動の場合」(『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』三四巻　一九九六年十二月)

4 鄧紅「陳独秀の儒教批判についての再検討」(『Studies in Chinese Philosophy』二二巻　九州大学中国哲学研究会　一九九六年十二月)

5 長堀祐造「魯迅と陳独秀-魯迅の陳独秀観と陳独秀の魯迅観」(『慶応義塾大学日吉紀要・言語・文化・コミュニケーション』三四号　二〇〇五年)

6 鄭恵「五四運動前後における周作人のヒューマニズム-「人の文学」の考察を中心に」(『Issues in language and culture』十二号　名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻　二〇一一年三月)

7 注3参照。

8 拙箸『中国の政治家と書』(雄山閣　二〇一七年九月)「魯迅」の章に加筆、修正を加えた。

9 黄斌『近代中国知識人のネーション像――章炳麟・梁啓超・孫文のナショナリズム』(二〇一四年一月　御茶の水書房)

10 林義強「古音、方言、白話に託す言語ユートピア―章炳麟と劉師培の中国語再建論」(『東洋文化研究所紀要』一四八巻　東京大学東洋文化研究所　二〇〇五年十二月)

11 今村与志雄『魯迅と伝統』(一九六七年十二月　勁草書房)

12 蕭振鳴『魯迅的书法艺术―魯迅研究新前沿丛书書』(漓江出版二〇一四年六月)

13 高田淳『魯迅詩話』(中公新書二四九　一九七一年四月　中央公論社)参照。

14 拙箸『中国の政治家と書』(雄山閣　二〇一七年九月)「郁達夫」の章に加筆、修正を加えた。

15 胡金定「郁達夫における外国思想・文化の受容」(『言語と文化』三巻　一九九九年　甲南大学国際言語文化センター)

16 桑島道夫「郁達夫における社会と芸術」(『中國中世文學研究』二八号　一九九五年)、鄧紅「郁達夫と「沈淪」」(『大分県立芸術短期大学研究紀要』第三六巻　一九九八年　大分県立芸術文化短期大学)

17 池上貞子「武漢における郁達夫」(『共栄学園短期大学研究紀要』第三号　一九八七年　共栄学園短期大学研究紀要委員会)

18 李麗君「日本における郁達夫研究」(『言語文化論究』二十九号　九州大学大学院言語文化研究院　二〇一二年)

19 李麗君「郁達夫の「左翼化」問題に関する考察」(『同志社女子大学　学術研究年報』第五九巻　二〇〇八年　同志社女子大学教育・研究推進センター)

第五章　近代からの北碑南帖の学と共産党員の書からの郭沫若の位置付け

一　市川での学書の傾向

郭沫若が亡命時に千葉の市川で過ごした際の多くの資料は、東京都三鷹市のアジア・アフリカ図書館に収蔵されている。同館は、一九五七年に「郭沫若文庫」建設を機に開設され、アジア・アフリカ世界との文化交流や協力を進め、長い歴史と伝統を持っている[1]。

同館所蔵の書についての分析は画像の所有権の問題等があり、別稿に譲ることにしたいが、あらましの状況を述べると、後に見る一九三七(昭和一二年)、日中戦争開始直後の抗日宣伝活動期の書風とは一線を画し、書の古典に基づいた伝統的な書風のものが多い。

またその当時の郭沫若所蔵書籍をその文庫目録から見ると、中村不折の手掛けた書の法帖類を多く所有しており、郭沫若は市川に於いて多彩な書の古典を学び、当時の作品にはそれが反映されていたと言えるだろう。また当時、古文字研究に邁進する中、中村不折所有の甲骨文を利用したことへの謝辞を示す書簡も残っており、その奇縁を裏付けることができる。

郭沫若が市川で学んだと思われる書道関係資料は、『沫若文庫目録』によると、

中村丙午郎　編　唐撫晋帖月儀　楊凝式神仙起居法　昭和九(一九三四年)　東京　孔固亭真蹟法書真蹟刊行会
中村丙午郎　編　蔡襄書謝賜御書詩　昭和九(一九三四年)　東京　孔固亭真蹟法書真蹟刊行会
中村丙午郎　編　張瑞図書後赤壁賦　昭和九(一九三四年)　東京　孔固亭真蹟法書真蹟刊行会
中村丙午郎　編　趙子昂書送季愿歸盤谷序　昭和九(一九三四年)　東京　孔固亭真蹟法書真蹟刊行会
中村丙午郎　編　虞集詩書　明賢尺牘　昭和九(一九三四年)　東京　孔固亭真蹟法書真蹟刊行会
中村丙午郎　編　文徴明書千字文　昭和九(一九三四年)　東京　孔固亭真蹟法書真蹟刊行会
中村丙午郎　編　文三橋草書詩巻　昭和一〇(一九三五年)　東京　孔固亭真蹟法書真蹟刊行会
中村丙午郎　編　董其昌書詩巻尺牘　昭和一〇(一九三五年)　東京　孔固亭真蹟法書真蹟刊行会
中村丙午郎　編　王鐸書草書詩巻　昭和一〇(一九三五年)　東京　孔固亭真蹟法書真蹟刊行会
中村丙午郎　編　梅道人墨竹譜草書　昭和一〇(一九三五年)　東京　孔固亭真蹟法書真蹟刊行会
中村丙午郎　編　顔真卿書告身帖　昭和九(一九三四年)　東京　孔固亭真蹟法書真蹟刊行会
中村丙午郎　編　漢老女人経　魏譬諭経　晋王献之地黄湯帖　昭和九(一九三四年)　東京　孔固亭真蹟法書真蹟刊行会
中村丙午郎　編　梁蕭偉書摩訶般若波羅蜜経　唐賢首国師書尺牘　昭和九(一九三四年)　東京　孔固亭真蹟法書真蹟刊行会
中村不折　十七帖の研究及口譯(法帖書論集)　昭和八(一九三三年)　東京　雄山閣
中村不折　原石初搨缺一七行本一七帖(法帖書論集)　昭和八(一九三三年)　東京　雄山閣
中村不折　石鼓之詳説　上下　二冊　(法帖書論集)　昭和八(一九三三年)　東京　雄山閣
藤原楚水主幹　三省堂　編　書苑　第一巻第六号　昭和一二(一九三七年)　東京　三省堂

などが挙げられる。

総じて言えば、中村不折の編纂に拠るものが大半を占めており、時代も東晋から明清までと多岐にわたっているが、帖学派のものが多いとは言えるだろう。

二　今文経学思想と碑学派の観念

しかし同館所蔵の書作品も楷書・行書・隷書と多彩である。郭沫若は、後に郭体と呼ばれる行草書で有名になるが、アジア・アフリカ図書館に残る市川時代の書には、隷書や楷書の作も多く、それは、建国後にも時折見せる作品の基底をなすものと考えられる。また当時の代表作的なものに『荘子』を碑学的に残したものもあり、その地下活動時代に警察監視下で、『荘子』の自由な精神にカタルシスを得ていたことは、容易に推察されよう。

また当時、傾注していた甲骨金文研究も、羅振玉同様、金石学の領域とも言え、更に一九六五年時に発表された蘭亭偽作説もその拠り所は、碑学の思想である。郭沫若は嘉定府中学堂時代に既に包世臣の『芸舟双楫』を教材に使っており、青少年期に碑学派の薫陶を受けている。そしてその今文学の「経世致用」の精神は、康有為を経て郭沫若にも演繹されているという説が、既に提出されている[2]。

郭沫若が成仿吾に送った手紙の中には、

我対今日的文艺，只在它能够促进社会革命之现实上承认它有存在的可能。

(大意)私は今日の文芸に対して、そこで社会革命の現実上、促進することができるだけで、そこに可能性の存在が承認される。

とあるのは、今文学からの「経世致用」の精神であり、それが「換骨奪胎」されて、郭沫若に継承されていくのである。

総括的に言えば、碑学派が進歩派、帖学派が保守派、白話派は超進歩派と言え、それらを飲みこんで、郭沫若の書は、所謂「郭体」として、生成したと考えられよう。

三　帖学派と陽明学

一九三七年年以前の書系列を大別すると、古典を遵守したもの(碑学・帖学)と、所謂、日常メモ・執筆等に使った白話体の実用体の二系統に分類することができる。

図1・図2は、二〇〇九年六・七月に岡山県立美術館で行われた「日中友好の架け橋　郭沫若」展の図録に収録された一九三六年時の作品である。

図1「荘子　逍遥游句」一九三六年

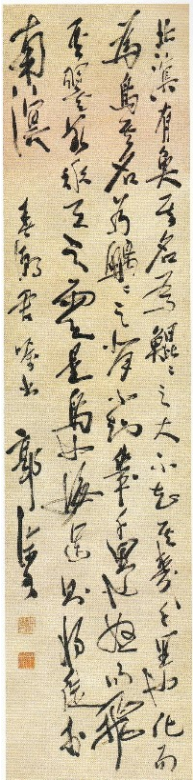


図 1

当時に於いて古文を書く場合と白話文を書く場合とでは、明らかに書風が違っていることが分かる。つまり古文の場合は、書の古典に立脚した書風であり、白話文の場合は丸みを帯びた独自の書風であると言える。これらの相違は、近代文学と筆記具、そしてそれに押し遣られる伝統用具の在処の道程を物語っていると言えるだろう。

さらに図1の帖学風の書は、当時郭沫若が入手した中村不折の刊行物の影響、また蒋介石との決別以前、私淑した陽明学の影響が指摘できる。換言すれば、郭沫若も清朝以来の実学化した理学の影響を受けていた。その詳細は、次章以後で見て行きたいが、市川時代にもその影響は残っており、それが抗日戦期の郭体に合流する宿命にあると言える。但し、当時郭沫若は、『荘子』の内容をよく書の作

品として手掛けている。この現象は、篠原昭雄先生にご助言頂いたように、その行動が県警の監視下にあって、その精神は自由でありたいと謳歌したものであった証かもしれない。

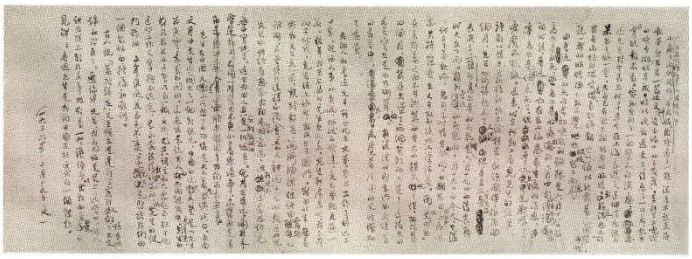


図 2　魯迅を悼む　１９３６年

四　共産党員としての白話体

先に見た共産党系の書の特徴の一つに白話体様式の影響を挙げた。郭沫若の書法研究史を確認する際、『女神』に代表される白話詩の担い手である一面と、近代文学として登場する白話詩と筆記具との関係を辿らねばならないだろう。これに就いては稿を改めて詳論することにしたい。

五　蔣介石との比較[3]

蔣介石　理学の革命者

蔣介石（一八八七―一九七五）。中国の政治家。中華民国総統。字は中正。浙江省奉化県の由緒ある塩商の家に生まれる。郷里の学堂で学んだのち一九〇七年に保定軍官学校に入学。一九〇八（明治四一年）には日本へ留学して東京の振武学校（中国留学生のための陸軍士官学校予備学校）を一九一〇年に卒業、新潟県高田の野砲兵第一三連隊に配属された。留学中に、東京で孫文らの中国同盟会に加入し、一九一一年の辛亥革命に際しては張群とともに帰国して革命に身を投じた。孫文の信用を得、一九二三年、孫文の命令でソ連の軍事事情を視察後、翌一九二四年に黄埔軍官学校初代校長に就任した。一九二五年の孫文死後は国民党二全大会で中央執行委員となり、同時に国共合作下の国民革命軍総司令に選ばれた。一九二六年三月、最初の反共事件としての中山艦事件で政治的地位を強化、同年七月、北伐を開始したが、翌一九二七年四月、上海クーデターを起こして反共攻勢に転じ、以後一貫して共産党を攻撃した。一九二八年、南京に国民政府を樹立して主席となって以来、国民党内での汪精衛との対立や閻錫山、馬玉祥らの反蔣軍閥による数次の抵抗に出会いながらも、国民党の実権をほぼ一貫して掌握した。一九三四年には一種の精神復興運動である新生活運動を唱導し、この間、蔣・孔・宋・陳のいわゆる「四大家族」を中心とした浙江財閥を育成して自己の財政的支柱とした。一九三六年の西安事件で捕らえられ、抗日民族統一戦線の形成に同意したが、一九三七年の日中戦争で政府を重慶に移したのちの抗日戦争中もしばしば反共政策を断行した。一九四五年、抗日戦争勝利後は重慶で毛沢東との国共和平交渉に臨んだが、翌一九四六年にはふたたび国共内戦が勃発、一九四八年には新しい憲政下の初代総統に就任。一九四九年一月いったん辞任。同年大陸を失陥し台湾へ逃れた。一九五〇年総統に復帰。以後、台湾での統治に意を用いつつ反共復国を目指し、アジアの代表的な反共政治家として活躍した。一九七五年四月五日台北で八七歳にて死去。彼の独裁を非難する声がある一方、第二次世界大戦終戦に際し「暴に報ゆるに怨をもってせず」と放送して日本軍の降服を受け入れたことを評価する声も高い。一九二七年、それまでの妻を離別して浙江財閥出身で孫文夫人（宋慶齢）の妹、宋美齢と結婚。前妻の産んだ長男の蔣経国が総統の地位を継いだ。

蔣介石と近現代アヘン戦争以降の中国の潮流は、一面では国内の洋務化と、冊封とは一八〇度違えた不平等条約の解消が急務の課題であったと言える。そして辛亥革命後、中華世界の解体の中にあって、国民党は一九二〇年代半ば、この国の武力統一に乗り出すことになる。その目標とするところは、統一国家の建設と主権の回復・確立にあったが、諸勢力の渦巻く渾沌たる政情・軍情の中で、この

運動を現実に主導したのは、紛れもなく蒋介石だった。彼は軍と財政の統一を目指し、北伐戦争を勝ち抜き、南京政府を樹立、軍閥を糾合し、満州事変以降「安内攘外」の方針の下で、孫文の三民主義と伝統的儒教倫理を統治の工具としつつも、一方でドイツ・ファシズムの思想を援用して、ソ連との複雑極まる連携や、またアメリカの軍事支援を受けながら、あらゆる戦術を用いて抗日戦争に勝利した。しかし毛沢東率いる紅軍（中国共産党）に対しては、徹底的な反共主義に立ちその潰滅をもくろんだが、戦後の国共内戦の末に敗れ、台湾へと退却を余儀なくされたのである。

彼はその軍事的実権のもと、新たに打ち立てられた南京国民政府を基盤に、中国の武力統一を目指したが、その先には、孫文同様三民主義―民族の独立（民族主義）、民主制の実現（民権主義）、地権平均・資本節制による経済的不平等の是正（民生主義）の政治理論に準じた近代立憲国家の建設を模索していた[45]。

その孫文が首唱した三民主義は、中国への西洋思想の移植とも解せるが、実際は先にも触れた「中国固有の道徳」について肯定的であり、そしてその 後継者であった蒋介石が、幼時、旧来の村塾において 儒学の経典を学び、青年期から壮年期に至るまで、自らの哲学として儒学的な道徳の達成に理想的な人間の姿を見出していたことは、彼の読書目録、その言論や回顧録からも明らかである。

新生活運動の原点と書

新生活運動とは、中国で、一九三四年に蒋介石が提唱した儒教的理念に基づく国家総動員のための精神運動で、世界的なファシズムの風潮と、国共内戦の第五次江西ソビエト包囲攻撃最中のもので、きわめて政治的な色彩を帯びていた。その内容は、古典的な礼、義、廉、恥を理念とし、生活を整斉、清潔、簡単、素朴、迅速、確実にすべしとするものであり、徳目自体は、早くは一九三二年に国民の中の悪習の一掃、国民の思想的道徳的統合、現代国際社会に通用する国民づくりを目指して掲げられたものとする見解も提出されている[47]。その「礼義廉恥」の所謂、「四維」とは『管子』牧民第一が出典である。図3の書は、そのスローガン的な書であり、

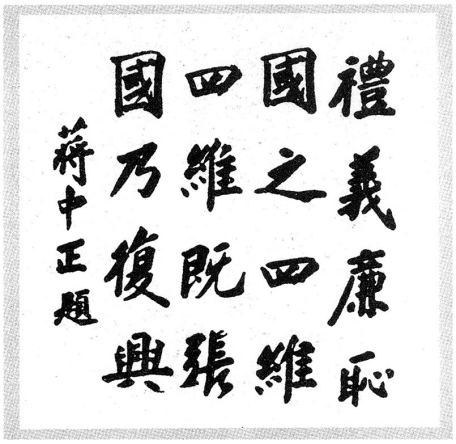


図 3

礼義廉恥　国之四維
四維既張　国乃復興

（大意）礼（人間関係や秩序を維持するため必要な倫理的規範・様式）、義（倫理道徳にかなっていること）、廉（無私無欲であること）、恥（恥を知ること）が、国の四つの規範である。この規範がいきとどけば、国は復興する。

とあり、その徳目を示した書は「重厚」且「沈着」であると同時に、軍人らしく幾分の隙もなく佇んでいる。次の図4の「奮闘」は、抗日戦争時の戦意の鼓舞、称揚を目的としたものであり、迫力に富んでいる。蒋介石の書の役割は、一面で政治的なプロパガンダの性格を担うものだったと言えよう。そもそも政治家の書とは、作品主義的な完成度を問うものではなく、その書がそのまま世界に風を吹かす、「呼吸」だったと言える。

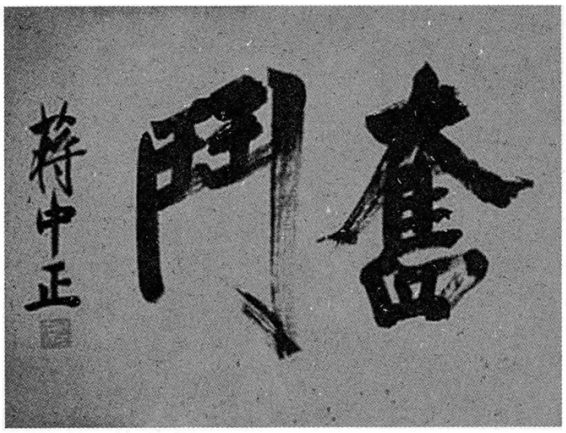


図 4

理学者としての思惟と書姿

『大学』の「正心誠意」「修身斉家治国平天下」という命題について、蔣介石は「人生と政治の基本哲学」「軍事の根本哲学」とまで規定しており、その思想に強い影響を及ぼしたのは、朱子学、陽明学という学系であって、取り分け曽国藩に私淑した。これは、北洋政府との継承の部分であり、逆に上海クーデターを機に、その内聖外王論に於いて、郭沫若と袂を分っている[8]。朱子学者でもあった程若庸の思想を記した書（図5）には、

主敬以立其本　窮理以致其知　反躬以踐其實

（大意）敬意によってその本を立て、窮理によって、知を致し、身を省みることによって、実践する。

とあり、まさに理学者として蔣介石の「内聖」の姿を示すものである。民主制に於ける陶冶された個の内面を示すがごとく「謹直」であり、その書風は、欧陽詢や柳公権の影響があると評されることが多い。

また図6の王陽明の『大学問』への意見を書した足跡は、宋明理学の下に自身を位置付けんとした彼の心の葛藤の軌跡に他ならない。

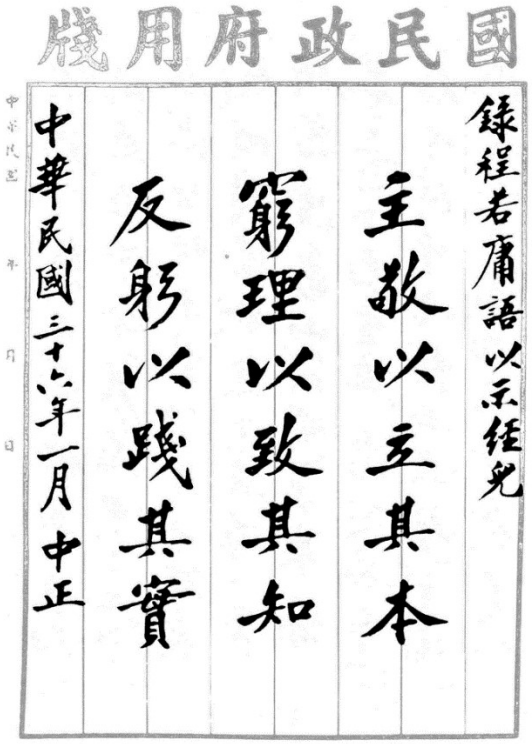


図 5

陽明「大学問」曰「物者事也、凡意之所発、必有其事。意所在之事謂之物」。此其此謂「物者事也」以物包括於事之中、而抹煞実物之存在。此謂「意所在之事謂之物」乃以事包括格物之中、否定其事態之演進。皆有語病・・・

（大意）陽明の「大学問」に「物とは事であり、およそ意の発するところには、必ずその事がある。意のあるところの事を物という」と言う。この「物とは事である」という意味は、物を事の中に包括し、実際の物の存在を抹殺している。この「意のあるところの事を物と言う」というのは、事を格物の中に包括して、その事態の進行を否定しており、語弊がある・・・

図 4

この理学の境地を示す書の様式は、欧陽詢風を基盤とし、まさに「峻厳」且つ「性急」であり、それは蒋介石の「窮理」の速度とその力動の姿を現している。

彼の「内聖外王」の書は、そのような時代・政治背景に於ける思想の表明手段であり、近代化に於いて儒教的伝統が追いやられ、また反動として立ち上がった姿であると言えるだろう。さらに言えば、孫文の遺り残した「内聖」という領域に於いて、民族主義に加担し、強く自他に戒めを発したこの「君子」の姿は、ひとつの民主制に於ける書境とその表現の在処を、未来にも暗示しているのかもしれない。また内聖の道を捨てなかった北洋系を継ぐ人たちと、それを放棄し、実学的に人民に奉仕した郭沫若と見事に反比例する足跡を残すことになる。

---

1 私は元館長である篠原昭雄先生のご高配を賜り、平成二七年八月に、同館所蔵の郭沫若の書作品を観覧する機会を得た。まずその学恩に感謝を述べておきたい。

2 呂金光「郭沫若的今文经学思想与碑学观念」(『中国书法』二〇一三年五月)

3 拙箋『中国の政治家と書』(雄山閣 二〇一七年九月)「蒋介石の章」に加筆 修正を加えた。

4 野村浩一『蒋介石と毛沢東―世界戦争のなかの革命』(現代アジアの肖像二)(一九九七年四月 岩波書店)

5 斎藤道彦「蒋介石と「礼・義・廉・恥」」(『中央大学論集』第二五号 二〇〇四年二月 中央大学論集編集委員会)

6 次章「在日時代の郭沫若の学問―五四運動期から反蒋運動に至るまでの郭沫若に於ける孔子観と儒教道徳の継承問題について」参照。

B　在日時代から抗日戦までの郭沫若の学問と書法

第六章　在日時代の郭沫若と学問

ー　五四運動期から反蒋運動に至るまでの郭沫若に於ける孔子観と儒教道徳の継承問題について

一　緒論

ここで、改めて郭沫若の略歴を確認しておきたい。

郭沫若(一八九二―一九七八)は、近現代の学者・文学者・政治家。四川省楽山県の中地主兼商人の家に生まれ、名は開貞。筆名に、杜衍(とえん)・易坎人(えきかんじん)　麦克昂(ばくこうこう)・鼎堂(ていどう)がある。一九一四(民国三年)に、成都の中学を卒業し、四川省の留学生として日本に渡り、第一高等学校の特設予科(中国人のためのもの)を経て、岡山の第六高等学校に入学した。当時、佐藤とみ子(中国名、安那)と同棲し、一九一八年九州帝国大学医科に進む。このころすでに文学に傾倒し、タゴール、ゲーテ、ホイットマンの影響を受け、さらに故国における五・四運動の刺激を受け、一九一九(民国八)年には、朝鮮を舞台に民族問題を扱った『牧羊哀話』を、一九二一年に最初の詩集『女神』の発表によって文壇に登場した。このころから留学生仲間の郁達夫・成彷吾・張資平などと、創造社を結成し(四月に一時帰国)、翌年三月、九州大学を卒業し、妻子とともに上海に帰国する。二四年再度来日し、福岡で河上肇『社会組織と社会革命に関する若干の考察』を翻訳、同年十一月に上海に戻る。一九二五年の五・三〇事件後は南方の革命的機運に導かれ、翌年春、広東大学の教授となり、この年発表した「革命与文学」は創造社の転進宣言であるとともに、中国の革命文学への出発をなすものとされている。

蒋介石を総司令とする国民革命軍の北伐がはじまると従軍し、国民革命軍政治副主任として軍内の政治思想教育と民衆に対する宣伝工作を担当したが、一九二七年蒋介石の反共クーデター直前の三月に「请看今日之蒋介石」なる檄文を書いて蒋と決裂。同年八月南昌蜂起に参加、同月蜂起軍の撤退中に共産党に入党し、その後香港、上海を経てソ連行きを断念、二八年二月に日本に亡命し、千葉県の市川に居を構えた。

本章はこの日本留学期から帰国、亡命期までの郭沫若の思想の変遷を辿ること目的とする。

郭沫若は、科挙試験が廃止され、その学問の舞台が日本を始めとする国外留学に移った時期に、青年期を過ごし、戦中の動乱の中で西洋化の影響化を受けつつ、中国の伝統文化を研究する反面、開かれた新しい文学を創造した、近代化した「文人」と言えるだろう。

ここで郭沫若の儒教観に就いて、日本留学時を中心に一九二七年の蒋介石の反共クーデターに於ける初期の「転向」に至るまでの意識の変遷を追い、その実像に迫りたいと思う。

二　中国革命と帝都日本

明治維新の成功と日露戦争の勝利、さらに科挙制度の廃止(一九〇五年)といった国際情勢の推移に伴い、明治・大正の東京には中国から多くの亡命者や留学生が訪れた。「戊戌の政変」の失敗後、悲嘆にくれて亡命してきた梁啓超、漱石に憧れて本郷区西片に住んだ魯迅、受験に失敗して失意のうちに帰国した周恩来をはじめ、彼らにとって東京は特別な場所(トポス)であった。

中国革命の祖、孫文が日本に逃れ、日本人の有志から資金援助を

受けながら革命を準備したことは殊に有名であるが、居住したのは彼のみならず、一九〇〇年代初頭から二〇年代にかけて、日本には中国人留学生があふれ、最盛期の一九〇五年には一万人近く、また常時数千人が滞在していたと言われている。明治維新を成し遂げ、アジアでいち早く近代化を実現した日本から成功の秘訣を学ぼうとするブームが起きたことが原因とされるが、清国人専用の日本語学校だった東亜高等予備学校や清国留学生会館のあった神田、本郷、そして早稲田界隈はさながら清国チャイナタウンの様相を呈していた。

日本留学組の多彩な顔触れに、政治組では蒋介石、周恩来、梁啓超、他に中国共産党を作った陳独秀に李大釗、文学組では魯迅に弟の周作人、郭沫若、郁達夫などが挙げられる。

中国近現代史を彩る巨星が日本に集っていたと言っても過言ではないが、中国の近現代史は非常に複雑であり、後に日中両国が敵対関係になったことにより、寄り添った蜜月時代があったことを双方が認めにくい時期が長く続いており、その扉を再び開かんとする模索が、戦後あらゆる形で試みられている[1]。

カリスマ性があり集金力に長けた孫文、そんな孫文に嫉妬し悲運の人生を辿った宋教仁、日本になじめなかった慈愛の人、周恩来、入学条件を把握しないまま日本に渡ってきた一本気な蒋介石、芥川龍之介にその日本語を認められた社会主義者の李漢俊、中国の西郷隆盛的な存在であった黄興、日本文学の影響を受け「近代化」した文学形式を樹立した魯迅、硬骨の美貌人・秋瑾、病院で看護師と恋に落ちた郭沫若等。かれらの有り様は、譚璐美氏の論によって、感性と概念が融合された等身大の姿が浮かび上がり、彼らが動かした歴史の姿がユーモラスに伝わってくる[2]。

繰り返しになるが、一九一四年に郭沫若は日本に留学し、第一高等学校予科で日本語を学んだ後、岡山の第六高等学校を経て、九州帝国大学医学部を卒業。在学時から文学活動に励み、一九二一年に文学団体「創造社」の設立に参加し、この設立の仲間に、郁達夫や成仿吾、張資平、鄭伯奇などがおり、時に処女詩集『女神』を発表。その後国民党に参加するが、反帝国主義運動によって発生した五・三〇事件で左傾化しつつ、北伐軍の総政治部主任となり、一九二七年蒋介石と対立後に南昌蜂起に参加し、直後に中国共産党に加入。蒋介石に追われ、一九二八年二月日本へ亡命した。千葉県市川市に居を構え、西洋考古学の手法によって中国史の研究に没頭、『中国古代社会研究』『両周金文辞大系考釈』『我的幼年』などを執筆した。

また郭沫若と日本人士との関係で主だった人物として内山完造が挙げられる。一九一七年、内山完造氏は中国の上海に渡り、内山書店を開いた。この書店は、当時、上海で活動していた左翼作家の書籍の主要な販売店であり、中日の進歩的文化人が集まるサロン的存在でもあった。

一九二七年年十月五日、魯迅が内山書店を訪れたことがきっかけとなり、内山と魯迅は親交を深め、内山は、当局にマークされていた魯迅を四度も匿ったことがあり、郭沫若、陶行知などの左翼文化人も官憲の追及を逃れるため、内山書店に身を寄せている。一九三二年年から、内山書店は魯迅の著作の発行代理店になり、魯迅は「三閑書店」の名義で多くの本を出版していたが、それらの本は内山書店が代理で販売していた。一九三六年に魯迅が逝去すると、内山は「魯迅文学賞」を発起し、《魯迅全集》の編集顧問にも選ばれた。一九三五年、内山完造の弟の内山嘉吉が東京で内山書店を開店し、魯迅を中心とする書籍の販売を始めた。その入り口に掲げられた「内山書店」の扁額は、本論でテーマとする郭沫若が書いたものである。

一九四五年に戦争が終わり、内山は日本に帰国したが、その後も日中友好に尽力し、日中友好協会の創立メンバーの一人になっている。一九四九年の新中国建国後、内山は二度中国を訪問し、一九五

九年に訪問先の北京で急死した。内山の遺言に従い、その遺体は上海の万国墓地に埋葬されている。[3]

郭沫若は、一九六五年には内山書店成立三〇周記念のために漢詩を残している。

三　日本に於ける五四運動期の儒教観とその構造

―ドイツ文学との反照としての孔子像

一九四五年九月二八日付け、『十批判書』の后記「我怎样写《青铜时代》和《十批判书》」に於いて郭沫若は自身の学習過程を以下のように回顧している。

少时四五岁起所受的教育是旧式的，《四书》，《五经》每天必读，虽然并不怎么懂，但毫无疑问，从小以来便培植下了古代研究的基础。我和周，秦诸子接近是在十三四岁的时候，最先接近的是《庄子》，起初是喜欢他那汪洋恣肆的文章，后来也渐渐为他那形而上的思想所陶醉。这嗜好支配了我一个相当长远的时期，我在二十年前曾经讴歌过泛神论，事实上是从这儿滥觞出来的。在《庄子》之后，我读过《道德经》，《墨子》，《管子》《韩非子》。对于《墨子》我从前也曾讴歌过他，认为他是任侠之源。《墨经》中的关于形学和光学的一些文句，我也很知道费些心思去考察它们，就和当时对于科学思想仅具一知半解的学者们的通习一样，隐隐引以为夸耀，觉得声光电化之学在我们中国古人也是有过的了。十七八岁时做过一些诸子的抄录，把警粹的文句摘取下来，目的自然是在供给做文章时可以运用的辞藻(五年前我曾经回过我峨嵋山下的老家，发现了这样的抄本，现今我还把它保存着在)。这些虽然说不上是研究，但也总可以说是我后来从事研究工作的受胎时期了。

我是生在过渡时代的人，纯粹的旧式教育在十二三岁时便开始结束，以后便逐渐改受新式教育。尤其在一九一三年出国，到日本去留学之后，便差不多完全和旧式教育甚至线装书都脱离了。在日本的学生时代的十年期间，取得了医学学位，虽然我并没有行医，也没有继续研究医学，我却懂得了近代的科学研究方法。在科学方法之外，我也接近了近代的文学，哲学和社会科学。尤其辩证唯物论给了我精神上的启蒙，我从学习着使用这个钥匙，才认真把人生和学问上的无门关参破了。我才认真明白了做人和做学问的意义。学生时代完结(一九二三)，中国大革命的浪头逐渐高涨，解放祖国应该是每一个中国人民的使命，一九二六年我便参加了北伐。不幸仅仅一年多，我又不能不向日本去度亡命生活了。…

(大意)幼き四、五歳のときから受けた教育は旧式で、『四書』『五経』を理解できなくとも、なんの疑いもなく、毎日必ず読み、それが古代研究の基礎を培った。私が周や秦の諸子に接近したのは、十三、十四歳の時で、中でも『荘子』に近しくなり、彼の洋洋たる無尽の文章に憧れ、後に次第にその形而上思想に心酔した。この嗜好は一定期間の長い間私を支配し、二十歳前に既に汎神論を謳歌したのも、事実上そこから始まったと言える。『荘子』の後、『道徳経』『墨子』『管子』『韓非子』を読み終えた。『墨子』に対してもかつて謳歌したことがあり、任侠の源泉と見なしていた。『墨子』中の幾何学と光学の文句について、苦心して考察を進めたが、当時の科学思想に対して一知半解でしかなかった学者たちと同様、私もひそかにそれを誇りとし、近代科学がわれわれ中国の古代にもあったと考えた。十七、十八歳のとき、諸子の書物から抜き書きをつくって、警句金言を取り出したことがある。目的はもちろん文章を作る際に利用できる綺麗な言葉を、そこからもらおうというものであった。(五年前に峨眉山

麓の生家にたちよってことがあり、そうした抜き書きを見つけたが、今も私はそれを手もとに保存している。)こんなことは、研究をやったことにはならないが、やはり私が後になって研究の仕事に従事するようになる萌芽期であったと言ってよい。私は過渡期に生まれた人間である。純粋の旧式教育は、十二、十三歳で終わりをつげ、それから次第に新式教育に変わっていった。とくに一九一三(民国二年)に国を出て、日本に留学してからは、ほとんど全く旧式教育、さらに漢籍から離れてしまった。日本留学中の十年間に医学士の学位を取った。私は開業したこともないし、つづけて医学を研究したこともなかったが、科学研究の方法を理解することができた。科学方法のほかに、近代の文学、哲学また社会科学にも親しんだ。とりわけ唯物弁証法は精神上の蒙をひらいてくれた。この鍵の使用を学んだことから、はじめて人生や学問上の公案を解き、学問することがいかなるものであるかの本当の意味を悟った。学生時代を終えた時(一九二三年)、中国大革命の波頭がだんだん盛り上がり、祖国解放が中国人民の使命とならねばならなくなり、一九二六年私も北伐に参加したのであるが、不幸にも僅か一年余りで、私はまた日本に帰り亡命生活をおくらざるをえないことになった。

ここでは五四運動から、亡命反蒋運動までの意識の変遷を辿るが、この回顧談は、郭沫若の思想の総体的な流れを観る上で、重要な手掛かりとなるだろう。

そもそも五四運動の発端となったのは、第一次世界大戦に於いて日本が占領した青島を中国に返す要求や、山東省における諸権益を日本に与えないとの中国側の要求が、パリの講話会議で受け容れなかったことから、北京大学を中心とする学生及び大衆が、一九一九(民国八年)五月四日に袁世凱の後継者に当たる北京の軍閥政府を糾弾し、暴徒化したことによる。時に親日派外交責任者の曹汝霖の邸宅が焼き打ちされ、駐日公使の章宗祥が襲撃されたが、この運動はその後、拡大し各地学生の全国的な組織化をうながし、六月十九日には上海にて全国学生連合会総会が結成され、反軍閥・反帝国主義の国民運動へと発展した。この運動は五四文化運動とも言われ、一面で、封建的な古い制度や儒教的な旧倫理への反抗を叫ぶ解放運動として展開し、それを導くものはデモクラシィとサイエンスであった。

陳独秀が「新青年罪案之答弁書」(新青年六-一)の中で、

这几条罪案，本社同人当然直认不讳。但是追本溯源，本志同人本来无罪，只因为拥护那德莫克拉西（Democracy）和赛因斯（Science）两位先生，才犯了这几条滔天的大罪，要拥护那德先生，便不得不反对孔教、礼法、贞节、旧伦理、旧政治。要拥护那赛先生，便不得不反对旧艺术、旧宗教；要拥护德先生又要拥护赛先生，便不得不反对国粹和旧文学。大家平心细想，本志除了拥护德、赛两先生之外，还有别项罪案没有呢？

…西洋人因为拥护德、赛两先生，闹了多少事，流了多少血，德、赛两先生才渐渐从黑暗中把他们救出，引到光明世界。我们现在认定只有这两位先生，可以救治中国政治上道德上学术上思想上一切的黑暗。

(大意)このいくつかの罪案につき、本社同人は避けえない。ただし突き詰めれば、無罪であり、デモクラシーとサイエンスを擁護しようとすれば、その大罪を犯してしまい、デモクラシーを擁護しようとすれば、孔教、礼法、貞節、旧倫理、旧政治に反対せざるをえない。サイエンスを擁護しようとすれば国粋、旧文学に反対せざるをえない。みなさんは平静に考えて、デモクラシーとサイエンスの擁護を除いて、他に別の罪案がありますか。・・・西洋人はデモクラシーとサイエンスを擁護していくための騒動を起こし、多くの流血を流し、両者はようやく暗黒

の中から彼らを救いだし、光明の世界に引き出した。私たちは、今この両者のみが、中国の政治、道徳上の一切の暗黒から救い出すことができると認識している

という言説が、それを象徴している。さらに胡適などの提唱した新文学の運動も、自分の言葉で自由に操ることを主張する白話(国語)の運動も、みなこれを契機に大きく展開し、解放後に五四運動については新しい解釈がなされて、それを中国人民革命の新しい起点とする説が提起されるまでに及んでいる。

この大正日本のデモクラシーから凡そ十年遅れ、さらに反体制、反儒教として進展した運動時、郭沫若は、日本留学中の九州帝国大学にいた。その渦中で、郭沫若は、一九二一年には創造社を結成し、処女詩集『女神』を発表、白話運動を牽引する一方、その潮流に抗うかのように、儒教に対しては、肯定的なスタンスを保っていたと言えるだろう。

一九二〇年一月十八日「郭沫若致宗白华」の中で、

我常想天才底发展有两种 Typus, 一种是直线形的发展，一种是球形的发展。直线形的发展是以他一种特殊的天才为原点，深益求深，精益求精，向着一个方向渐渐展延，展到他可以展及的地方为止，如象纯粹的哲学家，纯粹的科学家，纯粹的教育家，艺术家，文学家…都归此类。球形的发展是将他所具有的一切的天才，同时向四方八面，立体地发展了去。这类的人我只找到两个，一个便是我国底孔子，一个便是德国底哥德。

(大意)私は常に天才の発展には二種類のタイプがあると思う。一種は、直線的な発展であり、もう一種は球的な発展である。直線的な発展はその特異な天分を原点とするものであり、物事を深めればさらにその奥を求めるし、磨けばさらに向上に向上を重ね、一つの方向へますます延びて、延ばせる所まで延びていく。例えば純粋な哲学者、科学者、教育者、芸術家、文学者・・・すべてこの類型に属す。球形的な発展は、その生まれつきのすべての才能を同時に四面八方へ、立体的に発展させていく。この類型に属する人は私には二人しか見つけられない。一人はわが国の孔子であり、もう一人はドイツのゲーテである。

とあるように、孔子が球形型天才の一人として、ゲーテとともに表れる。さらに

孔子这位大天才要说他是政治家，他也有他的〃大同　〃底主义，要说他是哲学家，他也有他 Pantheism 底思想，要说他是教育家，他也有他的〃有教无类　〃，〃因材施教〃底 Ki-netisch 的教育原则，要说他是科学家，他本是个博物学者，数理底通人，要说他是艺术家，他本是精通音乐的。要说他是文学家，他也有他简切精透的文学。便单就他文学上的功绩而言，孔子底存在，是断难推倒的。

(大意)孔子という大天才は政治家と見れば、彼はそれなりの「大同」主義を持っている。もし哲学者と見なせば、彼自身の汎神論の思想を持っている。教育者と見なせば、彼は「有教無類(いかなる人にも等しく教育を与える)」「因材施教(その人に適した教育を施す)」という動態的な教育理念を持っている。科学者と見なせば、元々彼は博物学者であり、数理に通ずる人である。芸術家と見なせば、元々彼は音楽に精通していた。文学者と見なせば、彼には確かにシンプルかつ精細な文学がある。文学の上での功績を簡単に言えば、孔子という存在は断然無視することは困難である。

と述べ、孔子の球型天才としてその実像を分析し、評価している。また、

他删《诗》,《书》,笔削《春秋》,使我国古代底文化系统的存在,我看他这种事业,非是有绝伦的精力,审美的情操,艺术批评底妙腕,那是不能企冀得到的。我常希望我们中国再生出个纂集《国风》的人物-或者由多数的人物组织一个机关-把我国各省各道各县各村底民风,俗谣,采集拢来,才其精粹的编集成一部《新国风》,我想定可为〃民众艺术底宣传〃〃新文化建设底运动〃之一助。

(大意)彼は『詩経』『書経』を添削したり、『春秋』に手を加えたりして、中国の古代文化に系統的な存在を持たせてくれた。私から見れば、彼の偉業は、絶倫の精力、審美的な情操と芸術批評家の絶妙な手腕がなければ、それこそ望んでもやり遂げられるものではない。私は常々わが中国に再び『国風』を編纂する人物が生まれ、或いは多数の人で一つの機関を組織して、わが国の各省、道、県、村の民風と俗謡を集め、その精粋を一つの『新国風』を編纂してほしいと望んできた。必ず「民衆芸術の宣伝」になり、「新文化建設の運動」の一助になると思う。

とし、孔子の編纂事業を称え、今後の新文化運動の一助にすべきと述べ、孔子を総括し、

话太扯远了,在再回头来说孔子。我想孔子那样的人是最不容易了解的。从赞美他方面的人说来,他是〃其大则天〃,从轻视他方面的人说来,他是〃博学而无所成名〃。我看两个评语都是对的,只看我们自己的立脚点是怎么样,可是定要说孔子是个〃宗教家〃,〃大教祖〃,定要说孔子是个〃中国底罪魁〃,〃盗孔〃,那就未免太厚诬古人而欺示来者。

(大意)話がまた脇道にそれてしまった。孔子に戻そう。孔子のような人は最も理解されにくいと思う。彼を賛美する立場にいる人々たちから見れば、彼は「その大きさ、すなわち天」であり、彼を軽視する立場にいる人々たちから見れば、彼は「博学であるが、何か一つの専門で名を成していない」である。私はこの二つの評価を両方とも正しいと思う。ただ私自身の立脚点がどこにあるかによると思う。しかしどうしても孔子を「宗教家」「大教祖」或いは「中国の諸悪の元凶」「盗儒」だと言いなすなら、それは余りにも古人をおとしめすぎで、未来の人を欺くことだと言わざるをえない。

と述べ、五四運動期の孔子批判を窘めている。さらに先に見たゲーテとの対照を踏まえ、

他这名称似乎可以译成〃人中的至人〃,可是他的概念终竟还是不易把捉的。可是他比我国底〃大诚至圣先师〃等等徽号觉得更得妥当着实些。哥德是个〃人〃,孔子也不过是个〃人〃。孔子对于南子是要见的,〃淫奔之诗〃他是不删弃的,我恐怕他还是爱读的!我看他是主张自由恋爱(人情之所不能已者,圣人不禁)实行自由离婚 (孔子三世出其妻)的人!我看孔子同哥德他们真可是算是〃人中的至人〃了。他们的灵肉两方都发展到了完满的地位。孔子底力量〃能拓国门之关〃,他决不是在破纸堆里寻生活的B-u cherwurm,决不是以收人余睡为能事的臭痰盂!

(大意)〔ゲーテについて〕この言葉はおそらく「人の中の至人」と訳せる。その概念はやはり把握しにくいものである。しかしわが国の「大誠至聖先師」などの尊号より更に妥当で、実際的であると思う。ゲーテは一人の人間であり、孔子も一人の人間であるに過ぎない。孔子は南子に会おうとした。「淫奔之詩」も削除しなかった。孔子は『詩経』編纂の際の、鄭国の詩を「淫」と批判しながら削らなかった。私はおそらく彼はそれを愛読し

たと思っている。私からみれば彼は自由恋愛を主張し、自由離婚を実行した人である。孔子とゲーテらは本当に「人の中の至人」だと言える人たちだ。彼らの霊魂と肉体は両方ともすべて完璧な地点まで発展した。孔子の力量は「国門の関を拓くことができた」。彼は決して紙くずの山の中ですべてを探す生活をするむしではないし、人の唾を納めることしかできない臭い痰壺でもない。

とあり、一九二〇年の段階でゲーテ同様、一人の人間として孔子を観ていたことが分かる[15]。

それが同じくドイツ文化との比較論である一九二三年五月二〇日「论中德文化书-致宗白华兄」の中では、

我国的儒家思想是以个性为中心，而发展自我之全圆于国于世界，所谓〃修身，齐家，治国，平天下　〃，这不待言是动的，是进取的。

(大意)わが国の儒教思想は個性中心であり、その自我を世界に円満に展開してゆく。いわゆる脩身、斉家、治国、平天下とは、動的であることは言うまでもなく、それは進取のことある。

と儒教が「東方精神」を「静観」を代表するとした宗白华説の反例とし取り上げ、さらに孔子については、

孔子的人生哲学正是以个人为本位，它的究竟是望人人成为俯仰无愧的圣贤，能够〃博施于民而能济众〃

(大意)孔子の人生哲学はまさに個人を基準とし、彼は人に恥ずることない聖賢になることを望み、それによってひろく民に施し、大衆を救うことができる。

と些か聖人たる政治家としての評価に傾いている。本章では、この変遷の経緯についてさらに論究することにしたい。

四　陽明学の解釈

一九二一年六月十七日に「伟大的精神生活者王阳明」が脱稿、一九二五年十二月『文艺论集』初版に所収されるが、一九二九年七月上海光华局订正四版『文艺论集』では改名され、「儒家精神之复活者王阳明」となった。後に一九二五年六月十七日脱稿の署名で「王阳明礼赞」として『郭沫若全集』歴史編第三巻に所収されたこの論文は、郭沫若の儒教観を知る上で、重要な位置付けにある論文である。

しかし管見では、一九三〇年の改定版の『文艺论集』では郭沫若自身によって取り下げられ、『沫若文集』(人民文学出版社)の出版にあたり、再びその第十巻に収められた経緯がある。その理由は表向きには共産党に気遣い「この文章が私が以前に唯心論と唯物論の間をふらついた思想の歩みをたどったことを表すのが気になった」からであろう[16]。

本邦では一九二五年時の『文艺论集』「伟大的精神生活者王阳明」は管見では確認できなかったので、ここでは一九二四年六月十七日脱稿と署名されている一九二九年七月上海光华局订正四版『文艺论集』所収の「儒家精神之复活者王阳明」、それと合わせて『沫若文集』に所収される「王阳明礼赞」をもとに考察を進めざるを得ない状況である。

先ずそこには、一九一四年正月に来日し、第一高等学校の特設予科を卒業した頃、極度の神経衰弱症を患っており、一九一五年九月岡山第六高等学校に入学するが、その中旬に東京の古書店で『王文公成公全集』『岡田式静坐法』を購入し、その後、静坐の時間とその読書をするようになって、心身が回復したと述べており、後に触れる蒋介石同様、陽明学に強い啓発を受けたのは、日本でのことで

あった。

以下その捉え方の特徴について見て行きたいが、先ず、

我素来喜欢读《庄子》，但我只是玩赏他的文辞，我閒却了他的意义，我也不能了解他的意义。到这时候，我看透他了。我知道〃道〃是甚么，〃化〃是甚么了。我从此更被导引到老子，导引到孔门哲学，导引到印度哲学，导引到近世初期欧洲大陆唯心派诸哲学家，尤其是斯皮诺若(Spinoza)。我就这样发现了一个八面玲珑的形而上的庄严世界。

(大意)私はもともと『荘子』を読むのが好きだったが、その文言を賞玩するだけで、もてあそんでおり、その意味を理解することができなかった。この時にその意味が分かった。私は「道」とは何か、「化」とはなにかを知ったのである。これによって老子、孔門哲学、インド哲学、近世のヨーロッパの唯心論哲学者に導かれた。私はひとつの八面の精巧な形而上の荘厳な世界に気付いたのである。

とあり、荘子の「道」と「化」への理解を促し、老子、孔門の哲学、さらにインド哲学や西欧近代初期の観念哲学者、とりわけスピノザへと導かれていたことが認められる。また王陽明の思想を汎神論的に看る視座が、外来の汎神論の思想を受け入れさせ、荘子の汎神論への理解を深めたとする説が、既に提出されている[6]。

さらに郭沫若は、陽明学を以下のような世界観で捉えている。

王阳明所解释的儒家精神，乃至所体验的儒家精神，实实是孔门哲学的真义。我在此且把阳明思想的梗概来撮录如下列的表示罢。

一　万物一体的宇宙观

公式-〃心即理〃。

二　知行合一-的理论

公式-〃去人欲存天理〃

工夫（1）〃静坐〃

（2）〃事上磨炼〃

这样虽是简单的表式，但我觉得是阳明思想的全部，也便是儒家精神的全部。此处所说〃理〃是宇宙的第一原。是天，是道，是本体，是普遍永恒而且是变化无定的存在，所谓〃亦静亦动〃的存在。自其普遍永恒的静态而言谓之〃诚〃，《中庸》所谓〃诚者天之道。…诚者物之终始〃。自其变化无定的动态而言谓之〃易〃，《易传》〃生生之谓易〃〃神无方而易无体〃。名目尽管有多少不同，本体只有是一个存在。这个存在混然自存，动而为万物，万物是它的表相。它是存在于万物之中，万物的流徙便是它的动态。就如水动为波，波是水之表相。水是显现在波中，波之流徙便是水之动态。所以理不在心外，心即是理。这是王阳明的万物一体的宇宙观，也是儒家哲理的万物一体的宇宙观。

(大意)王陽明の儒教精神の解釈は、体験的な儒教精神に至り、まさに孔門哲学の真義であった。ここに王陽明の思想を図示すると、

1　万物一体の宇宙観

公式―心即理

2　知行合一の理論

公式―人欲をすて天理を存す

工夫①静坐

②何事も錬磨する

このように簡単な図式とはいえ、私は王陽明の思想の全体、また儒家思想の全体像だと思う。ここで説く「理」とは宇宙の根源。天であり、道であり、普遍永遠の変化定まることのない存在、いわゆる静であり、動である存在のことである。この普遍永遠の静態を「誠」と言い、『中庸』の所謂「誠とは

天の道である。・・・誠は物の終始」である。その変化定まることのない動態を「易」と言い、「易伝」の「生生これを易という」「神に方なく易に体なし」である。名目は多少異なるが、本体はただ一つである。この存在が混然と自ずから存し、動けば万物となり、万物はその表象である。それは万物の中に於いて、万物の流浪する動態である。それは水が動き波となり、波が水の表象であり、水が波の中に表れ、波の流浪が水の動態であるとの同様である。つまり、理は心の外になく、心がつまり理である。これが王陽明の万物一体の宇宙観であり、また儒家哲学の万物一体の宇宙観でもある。

と述べ、理を「静であり、また動である」としながらも、やや「動態」に重きを置いていることが分かる。さらに、天理は「無善無悪」である定義しつつも、それは絶対善であって、王陽明の説く教義四句

〃无善无恶性之体，
有善有恶意之动。
知善知恶是致知，
为善去恶是格物。〃

とある、前の二句の善悪は相対的善悪であって、それは私欲から発生するとし、後ろの二句の善悪は絶対的善悪と論じた上で、

知道这绝对的恶是人欲，知道这绝对的善是天理，便努力〃去人欲而存天理〃，努力於体验〃天地万物一体之仁〃，努力〃致良知〃，这便是阳明学的知行合一的伦理了。入手工夫，一方面静坐以明知，一方面在事上磨炼以求仁，不偏枯，不独善，努力于自我的完成与发展而同时使他人的自我也一样地得遂其完成与发展。-孔门的教义便在这儿，王阳明 也正正见到了这儿了。

（大意）絶対悪が人欲であることを知り、絶対善が天理であることを知り、人欲をすて天理を存ずるように努力し、万物一体の仁を体験せんと努力し、良知を致すよう努力する、これこそが、王陽明の知行合一の倫理である。それを入手する工夫は、ひとつに静坐によって明らかに知り、一つに何事においても錬磨して仁を求める、偏らず独善にならず、自我の完成、発展せんと努力し、同時に他人の自我も同じように完成、発展するようする。孔門の教義はここにあって、王陽明もまさにここに至るのである。

と真の孔門の人格形成論として、把握していることが分かる。

在这儿我在王阳明学中与近世欧西的社会主义导出了一致点。王阳明主张〃去人欲而存天理〃，这从社会方面说来，便是废去私有制度而一秉大公了。在这儿西方文化与东方文化才可以握手，在这儿西方文化才能生出眼睛，东方文化也才能魂归正宅。所以在我 自己是肯定孔子，肯定王阳明，而同时更是信仰社会主义的。我觉得便是马克思与列宁的人格之高洁不输孔子 与王阳明，俄罗斯革命后的施政是孔子所说的王道。

（大意）ここに於いて私は陽明学と近世西ヨーロッパの社会主義と一致点を見出した。王陽明が主張する人欲をすて天理を存するとは、社会方面から言えば、私有制度を棄て公をとる。ここにおいて西洋と東洋は、握手することができ、西洋文化は目を開くことができ、東洋は魂の正宅にやっと帰ることができる。よって私自身孔子を肯定し、王陽明を肯定し、同時に社会主義を信仰する。私は、マルクスやレーニンの人格の高さは孔子や王陽明に劣らず、ロシア革命の

施政は孔子のいう王道だと思う。

と述べ、王陽明の思想は、社会主義に一致し、孔子や王陽明は、マルクス、レーニンに比し、ロシア革命は孔子の王道の実現だと認識している。

ただしこの一文は、一九二九年七月上海光华局订正四版『文艺论集』所収の「儒家精神之复活者王阳明」では確認できず、一九二五年脱稿とされる全集所収の「王阳明礼赞」で加筆されたものと考えられ、郭沫若の心の揺れ動きを読み取ることができる[7]。

郭沫若は、後に当時を回想して一九三七年執筆の『続創造十年』の中で、以下のように述べている。

私はある時期王陽明の崇拝者だったことがあった。それは一九一五年から一九一七年にかけて私が岡山の第六高等学校で学んでいた時期のことだった。そのころは汎神論の思想に染まっていたので、スピノザ、ゲーテを崇拝しており、タゴールの詩を耽読し、中国の古人の中では荘子と王陽明を崇拝していた。荘子の思想は一般に虚無主義と考えられているが、私は彼をスピノザときわめて近いと思う。彼は宇宙万物を一つの実在する大体のあらわれと考える。人はこの大体を体験し、万物を一体と見なし、個体の私欲私念を排除すべきである。これによって生命を養えば平静たりえ、これによって政治を行えば争乱がない、というのである。彼はむしろ宇宙主義者ということができる。そして彼の文筆は、私の見るところによれば、中国の古文中で古今独歩のものである。王陽明の思想は禅理を本質として儒家の衣裳をまとっているけれども、実は荘子と異なるところはない。彼は荘子の本体、いわゆる「道」を、「良知」と命名し、一方では静座を主張して、知行合一の生活を求める。その出発点に問題はあるにしても、彼の「事において錬磨する」という主張は、一切の玄学家(一種の神秘主義的空論家)の歪曲を救うに十分である。そして彼自身の実践、昔のいわゆる「経論」も、まさしく彼の学説の保証である。私は当時静座を学び、彼の「伝習録」と詩を耽読したものだった。のちに捨ててしまったが、私は彼に対する崇拝は依然として断ち切れていない。彼は何といってもわが民族の発展における一人の傑作たるを失わない、と私は信じている[8]。

つまり彼は一面で荘子と王陽明を折衷し、それをスピノザの汎神論と重ねていたと言えるだろう。そしてもう一面で彼は陽明学を儒家の真の人格形成論として捉えており、一九二〇年から一九二三年にかけて、孔子の捉え方がゲーテの反照から政治家へと移行した機縁は、この一九二一年の陽明学論が一つの重要な役割を果たしていたと考えられる。それが如何に進展したか次章でみていきたい。

五　内聖外王論への展開

先に見た陽明学を内包した儒学解釈がより顕著に表れたのが、一九二三年一月一日・二日と『大阪朝日新聞』に掲載された「芽生の二葉(上)(下)」である。この論考は後に「中国文化之传统精神」として、中国語訳されて発表されているが、一次史料として日本語で書かれた前者を用いて、中国の伝統文化を如何に思想化したかを見てゆきたい[9]。

先ず「芽生の二葉(上)」の中で、中国の古代認識について、

三代では神は人間の形を取つて超在的になつて来た。霊魂不滅の説や祖先崇拝の慣習は表れ吉凶、亀卜等の迷信観念は黒潮の様に湧いて来て遂に千年以上の時期を横領してしまつた。その時代の思想は一番系統的に『洪範』の中に現れて居るが、国家は神権の表現として表れ、行政者は神の代表者として立つ。倫理思想も総て他律的であつて、無数の礼法の形式が設けられ、人間の自由の一切を束縛されてしまつた。私共は西洋の歴史家

に倣つて、此時期を『暗黒時代』と名付けたいものである。
とし、一九二七年以後本格的に古代研究に着手する以前の認識として特記すべきであろう。またさらに、
私共は老子の時代に於いて支那思想上の一つのルネツサンスを見出した。即ち宗教的、迷信的、他律的な三代思想に反抗して個性を解放し、沈潜した民族精神を覚醒し三代以前の自由思想に復帰してそれを発展さして行く一つの再生運動を見出したのである。
と述べ、その暗黒時代の転換期に老子を持ちだしている。そしてそれを受け継ぐ形で孔子について、孔子自身は全然形而上の知識を持たなかったのではないとした上で、
彼は古代の説を解明しそれを調和させて以て自己の倫理思想の根底とするに満足したのである。彼の晩年には『易』を好み、老子の教へを受けたことがあつた。彼は三代思想の人格神の観念を改造して汎神論的宇宙観を復活させた。彼は、老子と同じく形而上的実在を『道』と認め、而も彼はそれをして『易』の観念に等しからしめた。
と後に自己批判の的となる『易』を使い、さらに老子の道との違いについて
然し彼の本体観の老子と大に違ふ点は
第一、老子では無目的に機械的に見られた本体は、彼には『善』を以て進化の目的として居る。
第二、老子は神の観念を否定して居たが、彼には本体は即ち神であつた。
・・・「善」に向つて日々自ら新にして居る。然し本体の此の「善」に向つての進化は彼には神の意識の発露としてではなく神の本性、即ち本体の必然性として考へられて居た。
とし、孔子の本体を無意識に進化していると認めた点は、スピノザの汎神論とも少し違っていることも指摘している。このような孔子理解を受けて、五四運動の潮流を意識してか以下のような批判を述べている。
極端のものになると孔子を盗賊と罵り、支那民族の堕落は総て孔子の罪に帰しやうとする。かう云ふ様な暴論を唱える新人達は私共の祖国には可なり多数にある。甚だしい哉、古人を誣ふる者共よ、汝等の蒙も何時かは啓発される時が来るであろう！
と批判を投げかけていることが分かる。さらに
茲に於いて私共は告白する。私共は孔子を崇拝するものである。私共が孔子を崇拝して居るのは、決して盲目的に骨董品を玩味するような心理状態と論ぜられるべきではない。私共の見たる孔子はカントとゲエテを兼ねた様な偉大なる天才、円満な人格、永遠に生命のある巨人である。
とする、宣誓にまで及んでいる。そしてその実像について、「芽生の二葉(下)」で詳論される。先ず『易』の文言を挙げ、
『天の行い健にして君子以て自強不息なり』孔子の人生哲学が即ち彼の道的な汎神論的な宇宙から出発して、精神の独立自主、人格の自律を高調して居る。彼は人間の個性をば神の必然的表現と認めた。神が彼には完全無欠でない様に見えると同じく、人間の性もその儘の姿では決して『善』であるとは彼には考へられて居ない。
とあり「性」を必ずしも「善」と捉えず、道学者に反して「性悪論」に近い独特のスタンスが彼の特徴である。そして『大学』を持ちだして、
「まごころにて日に新たにせ、日に日に新たにせ、またもや日に新たにせ」かくて間断なく自己を励み、自己を向上せしめ、自己を新化さして行く。彼は人間の一切の本能を無節制に放縦させるを決して許さない。彼は人間の本能的衝動或いは官能的享楽を出来得る限り、正しい道に於いて、至善の道に於いて音楽的に調整する事に自ら努め、他人に教へて居る。

とし、さらに「克己復礼」について、

彼の所謂『礼』は決して形式的な既成道徳ではない、それは人間の本性に内在する道徳律であつて、カントの語を借りていへば、「良心の最高命令」を出すのであろう。

とし、「克己」についいては、

「克己」と同じ意味の語は私共は『大学』に於いて発見するであろう。即ち「格物」の一語である。私共は此語に就いて宋儒の「窮理」の解釈には同意し得ない。それは明らかに「官能的欲望を正しい道に於て調節する」意味である。

と述べ、やはりここでも陽明学的解釈に因って宋儒を一蹴している。また『大学』『中庸』を聖典と見なし、

配・・・天(神)
参・・・天地
賛・・・化育
脩身ー斉家ー治国ー平天下
正心　格物↓仁(情)
　　　致知↓智(勇)
　　　誠意↓勇(意)

と図式化し、老子、孔子や彼ら以前の原始宗教において二つの心音を聞いたとし、

ー把一切的存在看做动的实在之表现
ー把一切的事业由自我的完成出发![10]

(大意)すべての存在は動的実在の表現として認めること。すべての事業を自我の完成から出発させること

と宣言している。これらの伝統文化の解釈が、陽明学を踏まえた、一九二一～一九二三年時の郭沫若独自の「内聖外王」論であったことは、言うまでもなかろう[11]。

六　亡命と唯物論に於ける「内聖外王」論の否定

一九二七年の上海クーデターや南昌蜂起などの一連の反共クーデターによって[12]、蒋介石と袂を分かつことを決意し一九二八年二月に日本に亡命した郭沫若の思想は、当時の蒋介石について一九二七年三月三一日に書いた「请看今日之蒋介石」と同年五月七、九、十一、十四、十七、二三日に発表した「脱离蒋介石以后」によって、その蒋介石観として確認できるが、その思想的な側面は一九二七年八月七日に書き終えた「《周易》时代的社会生活」によってその批判が露わにされている[13]。

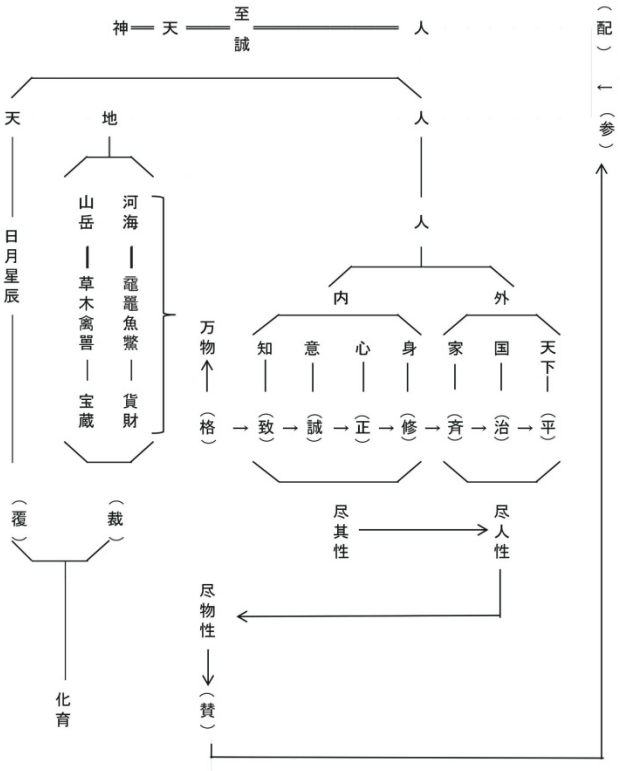
特に後半部の『大学』『中庸』『易経』の解釈を踏まえた「内聖外王」論批判は、郭沫若の一九二〇年代前半の自己否定であるとともに、蒋介石の思想への批判であって、両者の思想史上の交差を示す歴史資料としての意味を担う重要な論拠となる性格を有していると言えるだろう。

以下分析してみると、

《大学》、《中庸》与《易传》是同性质的书,当然不是孔子做的,但也不敢说就是曾子、子思。不过它们总可以算是儒家的一部分重要典籍。特别是《中庸》,那简直把孔仲尼当成了通天教主,在极端赞扬,可见儒家在当时的确是成了一个宗教。《中庸》的理论差不多是一全完整的宗教体系,《大学》只是实践伦理的一部分。《中庸》是包含了一个形而上学在里面的。
(一)本体即诚
〝诚者天之道也。・・・・・・诚者物之終始,不诚无物。〞
(二)本体自因
〝诚者自成也,而道自道也。〞
(三)本体自变

“诚者非自成己而己也,所以成物也。・・・・・・・不见而章,不动而变,无为而成。〃
本体不期然而然地发育万物,万物有终有始而它自己不动不变,悠久无彊。这就是“易者不易”的道理了。
圣人就是要学它这种诚,就是要达到这种不动不变悠久无彊的目的。要达到这目的，那是只好采取中道。所以说“誠者不勉而中,不思而得,從容中道,圣人也。〃“从容中道”这就是《中庸》的本旨。《大学》的“知止而后有定,定而后能静〃,也就是这个意思。因为你要得着重心才能够静止,才能够不动不变,才能够永恒。但是你要采取中道,你要求得重心,那是非有知识不可,非知道自然的变化的轨迹不可,所以根本要看重理智,而出发便在研究自然(“格物致知〃)。自然的变化知道了,晓得物盛而衰,事极必反,所以才能够执中乘时,而自己的意志才有把握[意诚],而自己的心理才有权衡(“心正”)。就把这样的 把握、权衡来齐家、治国、平天下,那是元住而不适用的,(注意“齐〃字和“平〃字)就这样便与天地的化育工夫相参赞，甚至于超过天地而与本体合一了。
(大意)『大学』『中庸』『易伝』は同質の書であるが、孔子が作ったものでもなく、曽子や子思が作ったものではないだろうが、それらは儒家思想の一部分の重要典籍と言うことが出来るだろう。特に『中庸』からは、孔子をトップとして教主とする、極めてほめたたえる、儒家が当時の確かな宗教であったことが分かる。『中庸』の理論体系はほとんど完全な宗教体系であり、『大学』はただ実践倫理の一部分である。『中庸』は現在の形而上学を内包している。
① 本体は誠である。誠は天の道であり、誠は物事の終始であり、誠でない物はない。
② 本体の原因は誠は自分で自分を完成し、その道自体が、誠に導いてくれる。
③ 本体は自ずから変化する。

誠は自分で自分を完成するだけではなく、すべての物事を完成させる。見せびらかしてないのにはっきりあらわれ、動かしていないのに変化し、ことさらに作為しないのに成し遂げられる。本体は期せずして万物を発育し、万物に終わりも始めもあって、自分では動かず変化せず、悠久で限りがない。これこそが「易に変わりがない」という道理である。
「聖」はこの種の誠を要し、それでこそ不動不変で悠久で限りない。この目的を達成すれば、中道を得、いわゆる「努力しなくとも的中し、思慮をめぐらさなくても達成し、自由にのびのびしてそれで道に適っている。これこそが聖人である。」「自由にのびのびしてそれで道に適っている」というのが、『中庸』の本旨である。『大学』の「ふみ止まるべきところがはっきりわかってこそしっかり落ち着くということになり、しっかり落ち着いてこそ平静であることができる」これもその意味である。こころが落ち着いてから、平静であることができ、動かず変わらないから、永遠であることができる。しかしあなたが中道をとり、心を重んじえれば、それが知識であり、自然の変化を知ることができる。だから基本的に理智を重んじ、自然を研究することから出発するのである（格物致知）。自然の変化は、物事の盛衰、極まれば反することを明らかにし、その中道をとれば自分の意思を把握でき（意誠）、自分の心理を平衡（心正）できる。このような把握と均衡によって家をととのえ、国を治め、天下を平らぐ。これは何処へ行っても適用できる。(斉字と平字に注意)このように天地の化育の工夫に参画し、ひいては天地を超越し、本体と合一できる。



就这图表看来好象是很严整无缺的一个系统,但是我们要晓得它是包蔵着几个骗局的。

第一个是神的骗局…

我们知道,这个系統的出发点是在格物致知,就是肯定了客观的存在,由这客观的存在而生出自己的知识。知识本是从客观来的,但是渐渐渐渐把它升华起来,化成了神明。回头再由这神明来创化天地万物。这是世界的倒置。世界是立在头脑上了。

(大意)この表は厳正無欠の系統図のようにみえるけれども、私はこれらが内蔵するペテンを明らかにすることができるだろう。

第一は神のペテン

我々は、この系統の出発点が「格物致知」であって、これが客観的存在を肯定し、この客観的存在から自己の知識が生まれることを知っている。知識はもともと客観的存在から次第に昇華され神明に至る。しばらくしてこの神明から天地万物が創造される。これは世界がさかさまである。世界は脳の中の出来事である。

第二个是尽性的骗局:

我们知道,这个系統所致的知,只是在知道执中,知道乘时,就是在知道妥协,知道把捉机会,知道零碎的改良。那末它所说的尽性是甚么呢?尽其性就是发挥自己妥协的个性。尽人性就是叫人要妥协。尽物性或者就是爱惜,就是节用罢?物是所谓宝蔵貨財。“何以守位?日仁。何以聚人?日財。理財正辞,禁民为非曰义。(《易传》)“生財有大道。生之者众,食之者寡;为之者急,用之者舒,则財恒足矣。仁者以財发身,不仁者以身发財。”大学,)“来百工则財用足。・・・・・・日省月試,既禀称事,所以劝百工也。”(《中庸》)大约这些款項就是所谓尽物性罢?生众食寡,为急用舒,在从前的人视为天经地义的大道理,其实只是棒榨取阶級的心理罢了。它根本是注重在財上而不注重在人上。以財发身就是散財聚民,就是多用些钱去招些百工来,当一个大大的榨取家。以身发財,就是聚財散民,就是只是自己动手而当一个小小的守財奴。

(大意)第二は尽性のペテン

私たちはこの系統の知を致すことが、ただ中を執ることだと知っている。これはまさに妥協であって、機会を把握し、こまごまとした改良であることを知っている。ならばここでいう「尽性」とは何か。「その性を尽くす」とは自己の妥協の個性を発揮することであり、人性を尽くすとは人に妥協をしていることである。物性を尽くすとは、愛惜であり、節用ではないか。物とはいわゆる宝蔵貨財である。何をもって高い地位、天子の位を守って失わないようにするかと言えば、それは仁である。いかにして人民を心服させるかといえば、物資である。物資を増産

し生活を安定させ、是非を正しくすることを民に教える。刑を明らかにし、法を正して民の非行を禁じる。これを義という。《易伝》国家の財政を豊かにするにも、法則がある。農作物を作るものが多く、農作物を食いつぶすものが少なく、耕作するものは精励し、税を使用するものは慎重にする。かくすれば、国家の財用は常に十分である。つまり仁者は財によって自分を高めるが、不仁者は自分を犠牲にすることによって財を富ますのである。《大学》工人をねぎらい励ませば、国家の器物調度に事かかなくなる。・・・日々月々に、製作者の精度・出来高などを検査するとともに、その仕事の能率に扶持米を与えるようにする、これが工人を精出させる方法である。《中庸》だいたいこれらが、いわゆる物性を尽くすことであろうか？生むものが多く食うものが少く、急いでつくりゆっくり用いる。昔の人の天地の義、大道理であるが、実際は搾取階級者の心理である。これは根本的に財を重んじ人を重んじていない。財を使って自分を高めるとは財を撒いて人をあつめ、つまりは多くのお金を使って工人を招くというのは、一人の大搾取家である。つまり身を犠牲にして財を富ますとは、それは財を集めて民に撒く、これは自分の手を動かすことだけによって、一人の小さな守財奴隷を管理することである。

第三个是阶級的骗局…

这个系統根本是支配阶级的心理。新兴的支配阶级要使自己的支配枚合理化,要使自己的支配权恒久不变,所以创造出一个合理的至上神出来,使他统治万物,回头又使自己和这至尊的统治者相等。至上神是一成不变的,所以自己的統治权也就一成不变。所以神就是他自己的化身,就是他自己支配欲望的化身,就是他自己了。他自己“开物成务,見几而作,知微知彰,知柔知刚,损益盈虚,与时偕行”,既元亨而且利貞了。

（大意）第三は階級のペテン

この系統は、根本的に支配階級の心理である。新興の支配階級は自己の支配権の合理化を行い、自己の支配を永遠不変のものとする、つまり一個の合理的な至上神を創造し、万物を統治させ、しばらくして自己を絶対の統治者とする。至上神は一たびなれば変わらず、よって自己の統治権も一たびなれば変わらない。よって神は自己の化身であり、つまりは彼自身が支配欲の化身であり、彼自身のことである。彼自身「閉じふさがって通じないものを開いて発展させ」「吉凶の兆しをみればすぐ行動し」「まだ微弱であるが他日顕著になることを前もって知り、いまだ柔弱であるが他日剛強になることを前もって知っている」「増せば減らし、欠ければ満たし、常にその時のよろしきに従って行う」。すでに、善の根源、物美の集合、かつ義の調和、物事の根幹であるとする。

儒家理论的系統,全体就是这样的一个骗局。它是封建制度的极完整的支配理论。我们中国人受它的支配两千多年,把中国的国民性差不多完全养成了一全折衷改良的机会主义的国民性。一直到现在都还有人改头换面地表彰着儒家的理想,想来革新中国的社会,有意识地执行着它的“絜矩之道”,有意识地在“执其两端用其中于民”。本来在阶级对立着的社会,一切立在支配阶级上的理论,在每个进展的阶级上多少都是可以适用的。在每个阶段推移的时候,新旧虽然略有冲突,但到支配权的转移对象一固定,在旧的里面所发现的昔日的桎梏,会发着很庄严的辉光而成为今日的武器。所谓“昔日之事子为政,今日之事我为政”,“易地则皆然”了。昨天敌人准备下来斫我头颅的青龙偃月刀,今天我不可以利用来斫敌人的头颅吗?所以原始公社社会的犹太教,一经耶稣的改革便成为奴隶社会的信仰,再经烦琐哲学家的钩通便为封建时代的护符,三经马丁·路德的今个人主义的改

革便成为今日的資本社会的武器。《易经》的道理不也就是一样吗?本来是奴隶社会的中行之道,一变而为封建思想的儒家中庸,再变而为現行資产阶级革命的所渭“中正主义”了。

(大意)儒教理論系統は、全体的にこのような一つのペテンである。それは封建制度の完璧な支配理論である。我々中国人は二千年のこの支配をうけ、その国民性はひとつの折衷改良の機会主義を養成されてきた。現在に至るまでずっとうわべだけ変えて、儒家の理想を顕彰している人がいる。中国社会の革新を想い、この絜矩の道を意識し、両端を執ってその中を民に用いることを意識する。本来の階級対立の社会に於いて、一切は支配階級上の理論に立ち、それぞれの進展する階級にあって、すべて適用されている。それぞれの階級が推移するとき、新旧は少し衝突があるが、しかし権力を支配する推移の対象は固定的で、古い中に気付いた昔の桎梏は、とても厳粛な光をなす今日の武器になっている。所謂「昔は天子に仕え政治をし、今日は自分に仕え政治をする」「たがいに立場が違うからおこなう事も違うわけで、その立場を取り替えればおこなうことは同一になる」のである。昨日の敵が私の頭をたたき切るつもりであった蒼竜半月の刃で、今日の私は敵の頭をたたき切りに用いるのに利用することができるだろうか(聖書)?だから原始共同体社会のユダヤ教、ひとたびイエスの改革を経れば奴隷制社会の信条になり、またこまごまと煩わしい哲学家のかぎを通せば封建主義のお守りとなり、みたびマーティン・ルターの個人主義の改革を経れば、今日の資本主義の武器になる。《易経》の道理も同じではないだろうか?もともと奴隷制社会の中行の道で、ひとたび変わると封建思想の儒家の中庸となり、また変わると資産階級革命のいわゆる“蒋介石主義”となる。

折衷主义根本是立在支配阶级上了。所以名目虽折衷,而实际是偏袒一个阶级。我们回头还是来讨论《易传》罢。…不消说他也有他的温情主义,所渭“君子以明慎用刑而不留狱”所谓“君子以议狱缓死”。但他的温情是有权衡的,权衡是操在他的手里的啦。折衷主义对于工贼的收买是诉干温情,对于乱党的惩治是利用恐怖,所谓“君子怀德小人怀刑”,就是这个把戏了。折衷主义根本是披着一件羊皮的虐杀主义。一九二七年八月七日

(大意)折衷主義は根本的に支配者階級の立場にある。名目は折衷と雖も一階級に加担している。我々は振り返り『易伝』を討論しよう。・・・言うに及ばず彼の温情主義は、所謂「君子は明らかに慎んで刑罰を実施し、裁判を滞りなく速決する」「裁判の判決はよく評議してから定め、刑の執行はできるだけ寛大にする」である。しかし彼の温情をはかるのは彼の手によるので、折衷主義はスト破り(労働運動の裏切り者)の買収に温情で訴え、乱党の懲罰に恐怖を利用するので、所謂「君子は徳を思い、小人は刑を思う」のペテンである。折衷主義は根本的にヒツジの皮をはおった虐殺主義なのだ。

以上が、郭沫若の反共クーデターに対する思想的批判とみて大過なかろう。つまり単に古代思想を批判しているのではなく、この思想そのものが、郭沫若からみた蒋介石像であり、蒋介石思想であったことが分かる。亡命後、宗教を忌避するマルクス主義に基づく歴史検証が行われるが、この論文が郭沫若の唯物論歴史学の端緒を開くものとも言えるだろう。

蒋介石は『大学』の「修身斉家治国平天下」の徳目を自らの基本的な倫理規範としていたと言われているが、一九二七年時に於いて郭沫若には、その体系が上述のように見えたと言える。

七　小結―市川に於ける古代儒教史の構築へ

日本留学中は、五四運動の潮流と一線を画し、西洋文化の反照としての中国文化として、儒教文化、道徳に対して郭沫若は、肯定的なスタンスを保っていた。

一九二〇年の段階ではゲーテの反照として孔子を捉え、一九二一年には陽明学の整理に因って、孔子の教義の正統な継承をそこに見出し、一九二三年には、やはり宋儒を一蹴しつつも『大学』『中庸』を聖典と見なした上で、そこで郭沫若独自の政治家としての「内聖外王」論を展開した。

しかし一九二七年の蒋介石による反共クーデターによって、儒教理論系統は、一つのペテンであってそれは封建制度の完璧な支配理論であるとされ、また一変すると資産階級革命の“蒋介石主義”となると断じ、その唯心論的哲学を徹底的に批判し、後は日本の市川に於いて唯物論的な歴史研究に専心することになる。

換言すれば、蒋介石との決裂以前は、郭沫若も陽明学を中心にした儒教道徳の体現者であり、郭沫若的には宋儒に近い思想と見えた蒋介石とこの時点で、決定的に思想の上でも袂を分かったと言えるだろう。

学問は、純粋学問と言うよりも、俗世間の中で、実際の政治状況と密接な関係にあり、本件は時事の影響を受けて、変貌してゆく思想の象徴的な例証だと言えるだろう。

1　星野博美　書評「帝都東京を中国革命で歩く　譚璐美著　留学中の足跡で見直す近現代　日本経済新聞朝刊(二〇一六年九月四日付)を参照　改編

2　譚璐美『帝都東京を中国革命で歩く』(白水社　二〇一六年七月)

3　「２００５　感知中国―中国・日本両国人民の友好の絵巻物」内山書店と魯迅(http://japanese.china.org.cn/japanese/185468.htm)を参照、改編。

4　山下剛「郭沫若とドイツ文学」(『東北薬科大学一般教育関係論集　十二』東北薬科大学　一九九九年三月)に於いては、郭沫若のゲーテ観の変遷について論述されている。

5　『沫若文集』第十巻(一九五九年)前記。

6　姚南「郭沫若と初期文芸思想の形成―外来文化受容の要因に関する一考察」(『国際学論集』上智大学　一九九二年一月)の中で、郭沫若の初期文芸思想に於けるスピノザ、荘子、王陽明等の影響関係については既に論述されている。

7　张顺发「从伟大的精神生活者王阳明看郭沫若思想的转换」(『贵州社会科学』一九九七年第四期)に於いて、郭沫若の王陽明に対する思　想転換の論究あり。

8　小野忍・丸山昇訳『続創造十年他(郭沫若自伝三)』(東洋文庫一五三　平凡社　一九六九年十二月)

9　武継平「论五四运动时期的郭沫若的传统文化观」(『創造社作家研究』中国書店　一九九九年一月)に於いて、当該期の郭沫若の伝統文化観について詳述されている。

10　本文は、日本語で新聞に掲載されているが、判読が難しいため、後に中国語訳された、「中国文化之传统精神」を用いた。

11　『郭沫若谈创作』黑龙江人民出版社，一九八二年に、「在那个时期我在思想上倾向着泛神论的，在少年时所爱的《庄子》里面发现了洞辟一切的光辉，更进而开始了对于王阳明的礼赞，学习请坐。有一次自己用古语来集过一副对联，叫着〃内圣外王一体，上天下地同流〃，自己非常得意。」とある。また郭沫若の内聖外王論については、喻天舒『王国维，郭沫若与儒教』第三章「内圣外王一体，上天下地同流―郭沫若与儒教」(北京大学出版社　二〇〇九年三月)に詳しい。

12 蒋介石の反共クーデターについては、家近亮子「蒋介石の「反共化」構造と「四・一二クーデター」(『津田塾大学紀要』№二八　津田塾大学紀要委員会　一九九六年三月)に詳しい。

13 郭沫若の儒教観の変遷については、艾津・邱文治「论郭沫若的儒家研究」(『天津师大学报』一九九二年第二期)に於いて既にその論究の端緒がなされている。

七章　郭沫若「《周易》時代的社会生活」に於ける階級史観の発見とその政治性について

―「《周易》時代的社会生活　上篇」の分析を中心として

一　緒論

前章までみてきたように郭沫若は、蒋介石と袂を分かつことを決意し一九二八年二月に日本に亡命するが、当時の郭沫若の蒋介石観については一九二七年三月三一日に書いた「请看今日之蒋介石」と同年五月七、九、十一、十四、十七、二三日に発表した「脱离蒋介石以后」に先ず確認できる。その思想的な反映は、一九二七年八月七日に書き終えた「《周易》時代的社会生活」から顕著に表れると言えるだろう[1]。

特に先章で見た後半部の『大学』『中庸』『易経』の解釈を踏まえた「内聖外王」論批判は、郭沫若の一九二〇年代前半の自己否定であるとともに、蒋介石の思想への批判であって、両者の思想史上の交差を示す歴史資料としての意味を担う重要な論拠となる性格を有していると言えるだろう[2]。

本章では、当時書かれた『中国古代社会史研究』に於ける「《周易》時代的社会生活」と「自序」との対照を考察することから始め[3]、彼の「奴隷制」観や儒教道徳批判が、一九二七年、一九二八年当時に於いて、どのような政治性を有していたかを論じていきたい。

二　『中国古代社会史研究』の「自序」の分析

―「国故整理」へのスタンスを中心として

一九二九年九月二〇日夜に書き終えた「自序」は、一九二八年一〇月二八日付けの「导论 中国社会之历史的发展阶段」、一九二七年八月七日付けの「《周易》時代的社会生活」[4]、一九二八年八月二五日初稿、一〇月二五日改作の「《诗》《书》時代的社会变革与其思想上之反映」、一九二九年九月二〇日脱稿の「卜辞中的古代社会」の総括として書かれたことは、先ずは間違いなかろう。この著作時期について整理すると、

一九二七年八月七日「《周易》時代的社会生活」
一九二八年八月二五日初稿、一〇月二五日改作「《诗》《书》時代的社会变革与其思想上之反映」
一九二八年十月二八日「导论 中国社会之历史的发展阶段」
一九二九年九月二〇日脱稿「卜辞中的古代社会」
一九二九年九月二〇日夜「自序」
一九二九年十一月七日夜「周代彝铭中的社会史观」

つまり「自序」は「卜辞中的古代社会」までの総括として、書かれていることが分かる。

さらにその内容を分析すると、いくつかの歴史研究に於けるテーマ性を浮き彫りにすることができる[5]。

先ず、

> 对于未来社会的待望逼迫着我们不能不生出清算过往社会的要求。古人说…“前事不忘，后事之师。”认清楚过往的来程也正好决定我们未来的去向。只要是一个人体，他的发展，无论是红黄黑白，大抵相同。由人所组织成的社会也正是一样。中国人有一句口头禅，说是“我们的国情不同”。这种民族的偏见差不多各个民族都有。然而中国人不是神，也不是猴子，中国人所组成的社会不应该有甚么不同。我们的要求就是要用人的观点来观察中国

的社会，但这必要的条件是须要我们跳出一切成见的圈子。中国的社会固定在封建制度之下已经二千多年，所有中国的社会史料，特别是关于封建制度以前的古代，大抵为历来御用学者所湮没，改造，曲解。在封建思想之下训练抟垸了二千多年的我们，我们的眼睛每人都成了近视。有的甚至是害了白内障，成了明盲。已经盲了，自然无法挽回，还在近视的程度中，我们应该用近代的科学方法来及早疗治。已经在科学发明了的时代，你难道得了眼病，还是要去找寻穷乡僻境的巫岘？已经是科学发明了的时代，你为甚么还锢蔽在封建社会的思想的囚牢？巫岘已经不是我们再去拜求的时候，就是在近代资本制度下新起的骗钱的医生，我们也应该要联结成一个拒疗同盟。

(大意)未来社会に対する展望そのものが、我々に向って既往社会の清算をなさざるを得ない要求に突き付けられている。『前事忘れざるは、後事の師なり』-これは 古人の言葉だ。既往の行程をはっきりと見究めることは、同時に我々が未末への動向を決定するに役立つものである。一個の人体は、その生物学的発展は、皮膚の紅黄黒白に関わりなく、大体に於いて同じである。人によって組織されるところの社会もまたまさにそれと同様である。由来、中国人の間には次のような口頭禅的言い廻しがある-『我々の国柄は特別である』。このような民族的偏見は、殆んどすべての民族に共通しているようである。しかしながら中国人は 神様でもなければ猿でもない。中国人が組織されるところの社会は、まさに特別とか独特とか称さるべきものではありえない。我々の要求は、人間の観点から中国の社会を観察しようとすることである。だが、そのために必須的な条件は、我々が一切の古陋(ころう)な偏見の国内から躍り出ねばならないということである。中国の社会が、封建制度の下に固定してから、既に二千餘年が過ぎた。あらゆる中国の社会史料、特に封建制度以前の古代に関するそれは、殆んどすべてが、歴代の御用学者によって湮滅され、改造され、曲解されている。封建思想の下で訓練され、煉瓦のように塗り固められること二千餘年に亘った我々は、一人一人がみな近視眼となってしまっている。中でも重症のものは白内障の明き盲とされている。既に明を失ったものは、もはや挽回の道はない。しかし、なお近視眼の程度に在るものに対しては、我々は近代科学の有する方法によって、速やかに治療しなければならない。既に近代科学が発達している今日、眼を患う君は、なおかつ寒村辺境に巫女や行者を尋ねて行こうとするのか？ 既に近代科学が成長している今日、何故にまた君は、封建社会の思想的監房に閉じ籠っているのか？巫女や行者は、既に我々が礼拝に行くべき対象ではない。しかし近代資本主義制度の下には、新しく生じた金儲け主義の医者がいる。我々はこれに対応する拒療同盟を結ばねばならない。

これは、中国の学問が、国粋主義から脱却し、世界共通の公理の中で、分析されるべきこと、その二千年来の封建主義の迷信から、近代科学によって相対化されるべきことが説かれている。末尾の新しく生まれた金儲け主義の医者とは、新興のブルジョワジーを言うのであろう。続いて、

胡适的《中国哲学史大纲》，在中国的新学界上也支配了几年，但那对于中国古代的实际情形，几曾摸着了一些儿边际?社会的来源既未认清，思想的发生自无从说起。所以我们对于他所“整理”过的一些过程，全部都有从新“批判”的必要。我们的“批判”有异于他们的“整理”。“整理”的究极目标是在“实事求是”，我们的“批判”精神是要在“实事之中求其所以是”。“整理”的方法所能做到的是“知其然”，我们的“批判”精神是要“知其所以然”。“整理”自是“批判”过程所

必经的一步，然而它不能成为我们所应该局限的一步。

（大意）胡適の『中国哲学史大綱』は、中国の新興学界をも数年に亘って支配しているが、それは中国の古代社会の実相に対して、その周縁の一箇所たりとも撫で得ているであろうか？社会的根源について些かも見究めるところがない以上、思想の発生について何等言うべきところを持ち得ぬことは勿論である。それ故に、我々は彼が『整理』したところの若干の過程に対して、全部、新たに『批判』し直す必要を感じるのである。我々の『批判』は彼等の『整理』と異なる。『整理』の究極目標は『事実そのものを求める』に在る。我々の『批判』の精神は『事実の中にその必然性を追求する』ことにあるのだ。『整理』という方法が果たし得るところは『その然るを知る』だけだ。我々の批判の精神は『その然る所以を知ろう』とする。『整理』はそれとして『批判』の過程が是非とも経過しなければならぬ一歩ではある。しかしそれは決して我々が局限されねばならぬ一歩とはなり得ない。

これは、胡適らの国故整理との違いを高らかに宣言している。『整理』と『批判』を峻別し、胡適の中国哲学の相対化の限界を説き、自らの唯物史観の正統性を主張している。さらに、

在中国的文化史上实际做了一番整理工夫的要算是以清代遗臣自任的罗振玉，特别是在前两年跳水死了的王国维。王国维一生的学业结晶在他的《观堂集林》和最近所出的名目实远不及《观堂集林》四字冠冕的《海宁王忠愨公遗书》。那遗书的外观虽然穿的是一件旧式的花衣补褂，然而所包含的却多是近代的科学内容。这儿正是一个矛盾。这个矛盾正是使王国维不能不跳水而死的一个原因。王国维，研究学问的方法是近代式的，思想感情是封建式的。两个时代在他身上激起了一个剧烈的阶级斗争，结果是封建社会把他的身体夺去了。然而他遗留给我们的是他知识的产品，那好像一座崔巍的楼阁，在几千年来的旧学的城垒上，灿然放出了一段异样的光辉。罗振玉的功劳即在为我们提供出了无数的真实史料。他的殷代甲骨的蒐集、保藏、流传、考释，实是中国近三十年来文化史上所应该大书特书的一项事件。还有他关于金石器物、古籍佚书之搜罗颁布，其内容之丰富，甄别之谨严，成绩之浩瀚，方法之崭新，在他的智力之外，我想怕也要有莫大的财力才能办到的。大抵在目前欲论中国的古学，欲清算中国的古代社会，我们是不能以罗、王二家之业绩为其出发点了。我们所要的是材料，不要别人已经穿旧了的衣裳；我们所要的是飞机，再不仰仗别人所依据的城垒。我们要跳出了“国学”的范围，然后才能认清所谓国学的真相。清算中国的社会，这是前人所未做到的工夫。清算中国的社会，这也不是外人的能力所容易办到。不是说研究中国的学问应该要由中国人一手包办。事实是中国的史料，中国的文字，中国的卜传统生活，只有中国人自身才能更贴切的接近。

（大意）中国の文化史の上で、実際に整理と目されるべき成果を示したものとしては、満清の遺臣を自任している羅振玉、特に三年前に溺死した王国維を挙げねばならない。王国維の一生の学業の結晶としては、彼の『観堂集林』及び最近、名目だけで内容は遙かに劣りながら、しかも『観堂集林』の四字を冠して出版された『海甯・王愨忠公遺書』がある。この『遺書』の外観こそ、古風な紋織の帙を着けてはいるが、その内部に包含しているものは、逆に近代的内容である。これは正しく一個の矛盾である。この矛盾こそは、まさに、王国維先生をして投身自殺をせざるを得なかつた原因である。王氏は、頭脳は近代的、感情は封建的な人であった。二つの時代が、彼の身躯の中で劇しい階級闘争を激起させたその結果、封建社会は彼の身体を奪い去ってしまったのである。しかしなが

ら、彼が我々に遺してくれたものは、彼の智識の結晶であって、それは恰も魏峨たる楼閣のように、幾千年来の古き学問の城壁上に燦然として異様な光輝を放っている。羅振玉の功労は、我々のために無数の真実の史料を提供してくれた点に在る。彼による殷代甲骨文字の蒐集・保蔵・流布・考釈の仕事は、実に最近の三十年間に於ける中国文化史上に特筆大書さるべき事項である。更に、金石器物や、古典逸書の捜集分類に関する彼の努力の跡を見れば、その内容上の豊富さ、類別の謹厳さ、成果の浩瀚さ、方法の斬新さ、その智力以外に、彼の如き大なる財力がなければ、恐らく所期し難いであろうと思われる。現在のところ中国の古学について論じ、中国の古代社会についてこれを清算しようとするものは、何人も羅・王二氏の業績を出発点とせざるを得ないと考える。我々が有するものは材料であって、他人が既に着古した着物ではない。我々が有するものは 飛行機である以上、他人が立てこもっている域塞に頼る要はない 。我々は『国学』の範囲を躍り出でねばならない。躍り出て然る後に、はじめて国学なるものの実の様相を見究め得るのである。

中国の社会を清算すること、これは従前の学者が未だ曾って果たし得なかつた事業である。中国の社会を清算すること、これはまた外国人によっては容易に途げられる事ではない。中国を研究する学問は、中国人の一手引請でなければならぬと主張するのではない。ただ、事実上、中国の史料・中国の文字・中国人の伝統生活は、中国人であってはじめて緊密な接近をなし得るといふだけの事である。

ここでは、王国維、羅振玉の古文字研究を評価し、また彼らの限界を指摘している。これは、一九二九年九月二〇日脱稿の「卜辞中的古代社会」、更には、後の古文字研究のスタンスを明快に物語っている。さらに、中国の文化の研究は、その生活体験を知る中国人によってこそなされるもので、外国人研究者を牽制していることが分かる。続いて、

世界文化史的关于中国方面的记载，正还是一片白纸。恩格斯的《家庭私有制和国家的起源》上没有一句说到中国社会的范围。外国学者对于东方情形不甚明隙，那是情理中事。中国的鼓睛暴眼的文字实在是比穿山甲、比娟毛还要难于接近的逆鳞。外国学者的不谈，那是他们的矜慎；谈者只是依据旧有的史料、旧有的解释，所以结果便可能与实际全不相符。在这时中国人是应该自己起来，写满这半部世界文化史上的白页。外国学者已经替我们把路径开辟了，我们接手过来，正好是事半功倍。本书的性质可以说就是恩格斯的《家庭、私有制和国家的起源》的续篇。研究的方法便是以他为向导，而于他所知道了的美洲的印第安人、欧洲的古代希腊、罗马之外，提供出来了他未曾提及一字的中国的古代。

恩格斯的著作中国近来已有翻译，这于本书的了解上，乃至在“国故”的了解上，都是有莫大的帮助。谈“国故”的夫子们哟!你们除饱读戴东原、王念孙、章学诚之外，也应该知道还有马克思、恩格斯的著作，没有辩证唯物论的观念，连“国故”都不好让你们轻谈。然而现在却是需要我们“谈谈国故”的时候。我们把中国实际的社会清算出来，把中国的文化、中国的思想，加以严密的批判，让你们看看中国的国情，中国的传统，究竟是否两样！对于未来社会的待望逼迫着我们不能不生出清算过往社会的要求。目前虽然是“风雨如晦”之时，然而也正是我们“鸡鸣不已”的时候。

（大意）世界文化史のうち中国に関する部分は、まさに一片の白紙に止まっている。エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』でさえも、中国社会に関する限り、一言半句も触れら

れていない。奴隷制の研究に於ける世界的権威イングラムは、その『奴隷制度と農奴制度の歴史』の附録に於いて、中国の奴隷制度に論及しているが、それとて二十行足らずであり、しかも重大なことには『中国には古来から階級制度がなかった』などと言っている。外国の学者が東洋の情態にあまり明瞭でないことは、それこそ有りえるべき事である。中国人が書き立てる『漢字』こそは、実に外国の学者にとっては、穿山甲がその硬毛を蝟集さしたよりも、もつと甚しく近より難いものであろう。外国の学者で中国の古代に関して何事も語らない者は、彼等の慎重さの故であり、語る者は、単に旧来の史料に根拠し、旧来の解釈をたどっているだけであるから、従ってその結果は、実際と全く符合しないことに立ち到るのである。今こそ中国人自身が起つべき時である。そして世界文化史に於ける空白の頁を書き埋めよ。外国の学者は、すでに我々のために小路を通じてくれた。我々がその後を続けて完成するならば、仕事の量は一半であっても、その功労は逆に二倍するものと言われえるであろう。本書の性質はエンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』の続編に当たると言うことが出来る。研究の方法は彼をパイロットとしつつ、しかし彼によって取扱われたアメリカ・インデイアン、欧洲の古代ギリシャ、ローマの外に、彼が一言半句も言及しなかった中国の古代を取上げたものである。エンゲルスの著書は最近中国でも既に翻訳されている。これは本書を理解する上にも、乃至は所謂わが国の『国粋』を理解する上にも、限りなき助力を与えてくれるであろう。『国粋』について論じる諸先生よ！諸君は戴東原・王念孫・章学誠等の著書に食傷するだけで止まっていないで、マルクス・エンゲルスの著書について知らねばならない。唯物弁証法的観念なくしては、『国粋』でさへも、諸君の理解から縁遠いものとなるからである。しかも今こそ『国粋について論じる』ことを要求せられている時なのだ。我々は、中国社会の実相を露わにし、中国の文化・中国の思想に対して厳密な批判を加えることによって、中国の国情と中国の伝統が、果して全く別個の独特のものであるか否かを、諸君の前に明にしよう。当来社会に対する展望そのものが、我々に向って、既往社会の清算をなさざるを得ない要求を突き付けている。今や目前に展開されているのは『風雨、晦むが如き』時ではあるが、しかも同時に我々にとってはまさに『鶏鳴してやまざる時』でもある。

ここでは、外国人社会学研究者の批判を行う。エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』でさえも、中国社会に関する限り、一言半句も触れられておらず、奴隷制の研究に於ける世界的権威イングラムは、その『奴隷制度と農奴制度の歴史』の附録に中国の奴隷制度に論及しているが、足らないこと、この書が、しかしエンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』の続編に当たり、その思想の枠組みを、下敷きにしていることを述べている。そして唯物弁証法的観念なくしては『国粋』でさえも、理解できないことを説いている。

以上のことを踏まえ、この序文での思想、特に①これは、中国の学問が国粋主義から脱却し、世界共通の公理の中で分析されるべきこと。封建主義と新興のブルジョワジーの批判がどのように投影されているか②胡適の国故整理との違い③下敷きにしたエンゲルスの「家族・私有財産・国家の起源」ら外来思想の影響の三点を踏まえ、それが一九二七年八月七日付けの「《周易》時代的社会生活」にどのように反映されているか分析、整理し、中国の現状批判とどのような相関関係にあるか、述べていきたい。

三　一九二七年から一九二九年に於ける中国の概況

孫文没後、国民党は広東に国民政府を組織するが、一九二六年三月二〇日中華民国の広州に於ける軍艦中山艦の回航を機に、黄埔軍官学校長蔣介石が中国共産党員らの弾圧を開始した中山艦事件から、蔣は急速に台頭する。そして一九二六年七月一日、国民政府は「北伐宣言」を発表、第一次北伐が開始された。郭沫若もそれに従軍することになる[6]。北伐軍は、全国統治を望む世論を背景に北京政府や各地軍閥を圧倒し、翌一九二七年には南京、上海を占領した。しかし、中国国民党内部で中国共産党が勢力を拡大したことの危惧から、四月十二日蔣介石は、党内の中国共産党員の粛清、所謂、上海クーデターを起こす。その後、郭沫若は蔣介石と訣別することになり、再度来日し、天皇制の国体維持のため、共産主義思想による赤禍を恐れる警察と憲兵の監視下のもと、多くの学術業績を残した[7]。

因みに一九二七年一〇月、共産党の毛沢東は、「労農紅軍」を組織し、翌年には南昌蜂起以来各地を転戦していた朱徳の軍と、彭徳懐の軍などが合流、井崗山根拠地で一九二八年十二月から土地改革に着手し、地主の土地を没収して農民に分配を行い、革命の実験を進めている。

戻り中国国民党は、上海クーデター後、武漢と南京とに分立したが、共産党の発展を恐れる武漢政府は一九二七年七月共産党と手を切り、九月南京国府に合流した。国民党内部の政変で北伐は一時停滞するが、蔣介石が事態の収拾に成功し権力を掌握すると、一九二八年四月八日に第二次北伐を再開した。

一九二八年五月日本の田中義一首相は、中国にある既得権益及び治安の維持のため、居留民の保護の名目で山東省に軍を派遣するが、その際、済南に入った北伐軍との間で武力衝突する済南事件が起こる。その後、国民革命軍は日本との衝突を避け閻錫山、馮玉祥らの軍閥を傘下に加えて進撃し、一九二八年六月四日奉天派の首領である張作霖が北京から撤退、爆殺された後、六月十五日に北京を占領した。父の死の真相を知った張学良が一九二八年十二月二九日に降伏、「易幟」によって、北伐は一応完了した。

しかしこの「北伐」完成は、地方の軍閥勢力を残存させたままでの妥協的統一であったため、一九二九年三月から六月の間に、中華民国国民政府内部での新広西派（新桂系）軍閥と蔣介石の勢力との間で蔣桂戦争が勃発するなどの事態を招く。

このような第一次北伐、第二次北伐後の中国に於ける内戦、国民党、共産党、諸軍閥、日本軍が入り乱れた時期に、これらの著書は書かれたことになる[8]。

四　「《周易》時代的社会生活」の論理構造と「自序」との対応

ここでは、①これは、中国の学問が国粋主義から脱却し、世界共通の公理の中で、分析されるべきこと。封建主義と新興のブルジョワジーの批判がどのように投影されているか②胡適らの国故整理との違い③下敷きにしたとされるエンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』ら外来思想の影響の三点を主に踏まえ、それが一九二七年八月七日付け[9]の「《周易》時代的社会生活」にどのように反映されているかを検証する。

A　「发端」

《周易》是一座神秘的殿堂。因为它自己是一些神秘的砖块-八卦-所砌成，同时又加以后人的三圣四圣的几尊偶像的塑造，于是这座殿堂一直到二十世纪的现代都还发着神秘的幽光。神秘作为神秘而盲目地赞仰或规避都是所以神秘其神秘。神秘最怕太阳，神秘最怕觌面。把金字塔打开，你可以看见那里只是一些泰古时代的木乃伊的尸骸。

（大意）周易は一字の神秘の殿堂である。何となればそれ自身が

若干の神秘の磚塊ー八卦をもって築かれているからであり、同時にまたそれ以後に表れた三聖・四聖の幾柱からの偶像によって粉飾が加えられているからである。このために、この殿堂は二十世紀の現代に至っても、なお神秘なる幽光を発している。神秘が神秘として盲目的に讃仰あるいは禁忌されることは、神秘なるがゆえに神秘なりとされているからである。神秘は最も太陽を恐れる。神秘はその面をさらすことを最も恐れる。ピラミッドを内開け！そこにはただ若干のミイラとなった太古の屍をみるに過ぎないだろう。

これは、中国の古典たる『易経』が、歴代の御用学者によって改造、曲解され、封建思想に益するために、二千余年の間、封印され続け、神秘化されてきたその盲目性を批判している。

B「《周易》時代的社会生活」の分析

① 周易の本質

伏羲が卦を画したことは、明文化されているが、これは明らかに神話的伝説とし、また後世の人は、儒教の神秘性を加えるために、易伝は孔子の作ったものと称して聖人の作とするが、これらは偶像を担ぎ上げた粉飾とする。そしてその周易の本質は、

八卦的根柢我们很鮮明地可以看出是古代生殖崇拜的孑遺。画一以象男根，分而为二以象女阴，所以由此演出男女，父母，阴阳，刚柔，天地的观念。古人数字的观念以三为最多，三为最神秘（三光，三才，三纲，三宝，三元，三品，三官大帝，三身，三世，三位一体，三种神器等等）由一阴一阳的一划错综重叠而成三，刚好可以得出八种不同的方式。

(大意)八卦の根底には我々が甚だ明瞭に看取される、古代の生殖器崇拝の残存である。一を画して男根に象り、二に分けて女陰を象った。したがって、これから男女・父母・陰陽・剛柔・天地等の観念が演繹されたのである。原始人の数的観念は三をもって最も多きものとし、最も神秘とした。一陰一陽の一画が錯綜し、重畳として三になり、たまたま八種の異なる方式を得ることができた。

として、八卦の神秘性は二重の神秘性、一は生殖器的秘密、一は数学的秘密を内包していると述べている。このように当時にあって封建的な潤色を排除して、周易の原初の姿について考察している点は特筆に値しよう。

② 郭沫若の『周易』の考察法とスタンス

『周易』は古代卜筮の稿本であり、現代の各種の神祠、仏閣から出す神籤、符呪と同様、その作者は必ずしも一人で作られたものでも、同時代に作られたものでもない。ただし郭沫若は、そこには当時の現実生活が反映されているという認識である。

这些文句除强半是极抽象，极简单的观念文字之外，大抵是一些现实社会的生活。这些生活在当时一定是现存着的。所以如果把这些表示现实生活的文句分门别类地划分出它们的主从出来，我们可以得到当时的一个社会生活的状况和一切精神生产的模型。

(大意)これらの語句のその大半を占めるのは極めて抽象的な、また簡単な観念的な文字を除けば、その他は、大抵は現実生活であり、その生活は必ず当時現存していたと言える。よって我々はこれらの現実生活を表示する語句を分類し、その主従、本末を区別することによって、当時の生活社会の状態及び精神的生産の模型を手にすることができる。

と述べる。郭沫若は、易経の神秘の衣裳を剥ぎ、それを野性の裸体

のまま舞踊させようと試みたと言えるだろう。そして、漁猟、牧畜、交通、耕作、工芸と分類し、工芸を以下のように結論付けた。

1　人类还在自给时代，工艺是人人所必为，还未成为独立的生活手段。

2　这些工艺是让奴隶童仆专攻，不为君子(当时的贵族)所挂齿。

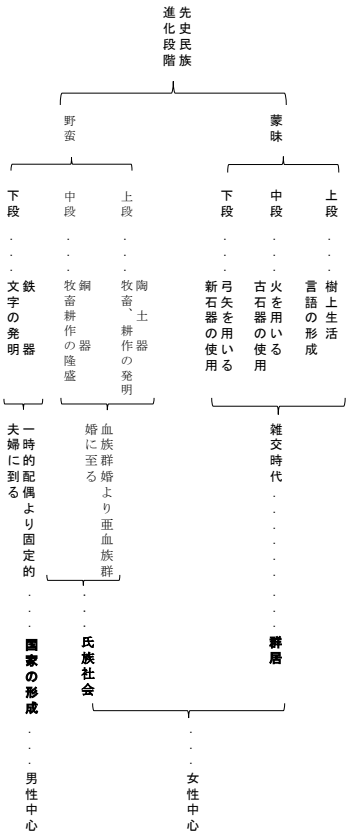
(大意) 1　当時の人類はほぼ自給時代であり、工芸は人々によって必須のなすべき業であり、未だ独立できる生活手段となっていない。

2　これら工芸は専ら奴隷、童僕をして行わせ、君子(当時の貴族)が進んでその所為とするところとなっていない。

ここで、君子と奴隷という階級性に着眼したのは、ルイス・ヘンリー・モルガンやフリードリヒ・エンゲルスの影響はあっても、郭沫若の創見と言えるだろう。

③ 古代中国社会とモルガン

モルガンの『古代社会研究』によれば、先史民族の進化段階は、左記の如くである。



そして周易の時代は右に表示した野蛮時代の中下段に該当し、鉄器の存在には根拠を欠くが、文字は発明されていたので、当時の社会は、変革過程の現象を呈しているとする。

さらにその結婚の痕跡を分析し、「男子の出嫁」「女酋長の存在」「母系制から父系制の推移」を論証している。これは明らかに、モルガンの思想的な枠組みによる反照と言えるだろう。

④ 私有財産の発生と政治モデルの変化

フリードリヒ・エンゲルスの『家族、私有財産および国家の起源』に於いて、エンゲルスは「文明批判」をおこない、文明が金属貨幣と利子、商人、私的土地所有と抵当、奴隷労働を「発明」し、文明の基礎は一階級による他の一階級の搾取と定義した。

郭沫若は、その私有財産の形成によって、それを安定、確保するために刑罰・行政制度が発生したと考え、周易にその思想を投影したのである。そしてその行政事項として、特に祭祀と戦争を挙げ、その私有財産の形成に伴った武人の力を戦争の根源と考え、自然と武力が権力を専らにし、男子と女子の主従は入れ替わり、母系制度は漸次、破壊されたとしたのである。

これらの現象に伴って、戦争捕虜の奴隷化が進み、一は祭祀の犠牲に、二には激増した捕虜は、人間の生産的価値の発生のために生産上に於いて使役され、よって奴隷制が誕生し、奴隷は財産であり、売買される商品となったと分析したのである。

⑤ 階級の発生

当时已经有国家刑政的成立，阶级在理论上是必然存在，而在事实上也公然存在。经文里面除上举政治上的位阶― 天子王侯等之外，还有一般的抽象的社会上的阶级，那就是大人君子和小人。

(大意)当時すでに私有財産・国家＝司法及び行政が形成されていたならば、階級は、理論上、必然に存在していたと言わねばならない。しかも事実についてこれを見れば、顕然と存在した。

周易の本文には、上述した政治上の位階ー天子・王侯等の他に、さらに一般的・抽象的な社会上の階級が見出せる。すなわち大人・君子及び小人である。

周易全体の中では、大人が十二箇所、君子が十九箇所、小人が十一箇所表れるとするが、大人・君子は支配階級であり、小人・刑人は被支配者階級と断じている。これは、二〇〇〇余年来の儒教に於ける封建道徳への真っ向からの挑戦と言えるだろう。

⑥ 宗教に対する認識

産業が漁猟・牧畜から農業へと進化の過程をたどり、原始的氏族社会の一族は統制に耐えきれず、造産者の財産に対する私有権が認められるようなる。そうすると造産者と衛産者との分業が生まれ、これによって国家の基礎が確立した。国家の基礎は階級対立の上に築き上げられ、当時の階級社会は明白に奴隷制的組織であり、支配者は奴隷の所有者であったという前提で、郭沫若は宗教、芸術、思想を論じる。

郭沫若は、周易を一つの宗教上の書と定義し、それは魔術をもって背梁骨とし、迷信をもってその全体の血肉とした上で、それは、支配者側の意識・無意識的な『民を愚かにすること』のために、原始人の思想は必然的に宗教、或いは魔術、或いは迷信として表現されたと考えていた。そして、

在原始时代起初是“人知有母而不知有父”的母系社会，由母系社会转化成父系社会，又才生出父子的关系来。所以在社会历史上，父是由子所产生的，就是先有子而后有父。同样，天是天子所产生的，要先有天子而后有天。天子因为要固定自己的权威，要固定自己父子相承的产业，所以才把自己的模型转化到天上，成为永恒不变的万事万物的支配者。他不称他做天兄天母，而要称他作天父，便是在父系社会成立以后，要使财产继承权神圣化的原故。于是乎天子有双重的父亲，而世界也就成了双重的世界。

（大意）原始時代に於いては、初めは『人、母あるを知って父あるを知らず』母系社会であったが、母系社会から父系社会へと転化するに及んで、はじめて父子の関係が生じた。したがって社会の歴史の中では、父は子から生まれたものであり、先ず子があって然る後に父ができた。

同様に天なるものは天子が生み出したものであり、先ず天子があって然る後に天が生まれたのでなくてはならない。天子は自己の権威を固定化し、その父子承継の生業を固定化せんがために、自己の模型を天に転化し、永劫不変なる万事万物の支配者たらしめた。彼はそれを、天兄・天母と称せずして、天父と称したが、これは父系社会の形成に於いて、財産継承権を神聖化するためのものであり、天子は二重の父親を持つことにより、世界もまた二重の世界となってしまったのである。

とし、また上帝は、天子が産み出したものであり、上帝の聖旨とは、その実は天子の意旨に他ならず、吉凶禍福の権利は天子にあり、その結果として、服従するものに利益を、服従しないものには災害を下るとした。そして、正当化のために亀卜・筮竹の力を借りて、神秘的な霊験を纏ったと考えている。

また原始共産主義の時代にあっては、庶物崇拝、自然現象に対して、万時万物は霊妙不可思議なものと感じ、男女の生殖器、自然の諸現象、すべてに神が潜んでいると考え、群神共産の時代であって、一神私有の時代でなかったとする。さらに祖先崇拝の風習も、私有財産の以後のものであって、『周易』の中に、共産時代の痕跡を認めている。

そして私有財産制度が確立されてからは、世界は二つの世界ー霊の世界と肉の世界とに変化した。霊魂不滅の観念、上帝の永存の観念に従って生まれ、幽と明との二つの境界は、紙一枚を隔てたもの

とされ、宇宙は幽鬼と人間の共有するものと考えられた。幽鬼は人間の延長であり、よって財産も永遠に所有することができ、生命もまた永遠に保つことができるとされるようになったのである。

⑦ 芸術の意味

郭沫若は、先ず古代に於ける芸術論の原則を、二つに分類した。

1　芸術は当時の物質的生産と対応する。

2　芸術は時代の生活と密接な関係を持つものである。

そして、

当时的生活基调是宗教是战争，所以鼓歌不是用之祭祀，便是用之祝捷。

(大意)当時の生活の基調は宗教であり戦争であった。したがって鼓を打ち歌をうたうことは、祭祀のためでなければ、戦勝祝賀のために用いられた。

そして具体的には、

屯如たり、邅(てん)如たり馬に乗りて班如たり、寇せんとするに匪(あら)ず、婚媾せんとす(屯六二)

賁如たり、皤如たり、白馬翰如たり、寇せんとするに匪ず、婚媾せんとす(賁六四)

突如たり其れ来如(き)たり、焚(やき)如たり、死(しに)如たり、棄(すて)如たり(離九四)

などを挙げ、これらを有閑階級の情感と捉え、一種の支配階級的な要素を嗅ぎ取っている。

そして総括として、

这些例子总可以算是诗罢？总可以算是艺术罢？但它们是用来做甚么的？它们是用来装饰迷信的符箓的啦。艺术本来是支配阶级的宣传工具。这是千古如出一辙。谁个是甚么“为艺术而艺术”的艺术家？谁个的艺术是“为艺术而艺术”的艺术？

(大意)これらの例はすべての詩として、芸術作品として数え上げ得るだろう。だが如何なるものとして使われたのか。それらは実に迷信を装飾するための呪符として使われたのだ。芸術は支配階級の宣伝のための道具であること、これは数千年も前から一貫した事実なのだ。だれが真に芸術のための芸術に生きる芸術家たりえただろうか。まただれが芸術が真の芸術のための芸術であるところの芸術たり得たか。

と述べる。

つまり、私有財産の発生に伴い、武力が重んじられ、男性中心的な父子関係、母系社会から父系社会へと転化し、階級社会、奴隷制が成立した。また宗教はその支配者側の財産を守り、その永続を担保するために利用され、変貌する。そして芸術は、その宗教祭祀や、戦争祝賀のために用いられ、権力に奉仕する役割で作られることになる。つまり当時の郭沫若にとって近代的な「芸術のための芸術」、芸術至上主義とは、まったく異相のものだという憤慨が根底にあるのだろう。

⑧ 思想-弁証法と周易

『自然は弁証法の証明である-エンゲルス』

1自然界に於けるすべての事物はみな絶え間なく進展している。一切の事物はすべて発生し、死滅する。弁証法とはこの動態の中で事物を観察しようとするものである。

2動態の成因は内在する相対物の推移に由るものである。

3すべての事物は相関連して、恰もフイルムの場合と同様に、その関連する全体を観察せねばならない。もしもそれらを切り離した部分として観察するならば、それは忽ち死んだものとなってしまう。

弁証法とはこの全体性の上に立って事物を観察しようとするものである。

ここで、ヘラクリットの有名な言葉、『万有は実在しまた実在せず。何となれば万有は流転し、不断の変化と、不断の生成と、不断の過程に於いて把握されるが故に。』を引用する。そして、周易もまた弁証法的観察であると、郭沫若は分析する。

宇宙整个是一个变化，是一个运动，所以统名之曰“易”。“易者变易也”

(大意)宇宙全体はそれ自身一つの変化であり、運動である。それ故にこの意味を、統括的に集約して『周易』は『易とは、変易することなり』と名付ける。

以上のように周易は、幼稚ではあるが、自然に対する観察から把握しえるところの一個の弁証的宇宙観であるとする。しかし、周易の作者は、誤謬の一歩を進めたと考えた。そして、

辩证的宇宙观是很平凡的，一切都有生成，一切都有毁灭，天下没有一成不变的东西。这真是再平凡也没有的一个观念。但是这对于那支配阶级是怎么样的一个危险的观念呢？

(大意)弁証法的宇宙観は、あらゆるものは悉く生成し、悉く破滅する。天下には、一つとして恒久不変なものはない。これは当たり前であるが、支配階級にとって危険な思想であるではないか。

とした上で、支配階級は、私有財産は国家＝司法・行政はすべての壊滅すべき時期を持つために、自然に於ける論理過程を改めたとする。

それは、「大なるものが去れば、必ず小なるものが来て、陂(かたむ)いたものが平らかなれば、平らかなるものは陂く」ことを知った故に、彼らの目的は、一定不変にすることであり、去らず、来たらずという状態にすることであり、そのために、

…那刚刚是只有中道了，就是所谓“中行”。于是乎而一切都静止了，辩证法也就死灭了。

(大意)なれば先ほどは、『中道』を保つだけで、それは所謂『中行』である。つまり、一切のものはみな静止し、弁証法を死滅させた。

とし、よって「易は不易なり」となり、これによって、鬼神及び鬼神の代表者・分身たる上帝、天子は永久に世界を支配し、宇宙はたちまち五百七十六片の長短の煉瓦となってしまったと比喩する。

よって周易の実践論理は、結果として折衷主義、日和見主義、改良主義であると断じる。

そして具体的には、「龍が高く登りつめて後悔するとき〔乾上九〕、それに冠して『群龍、首なきを見るは吉なり』〔乾用九〕である」とするのは、周易の作者が前記の如く支配者としての実践的要求から、被支配者を潜龍に仮託し、それが高く登りつめることを戒める意図で〔乾上九〕の語句を録し、統制、勢いなき群龍に首なきを見る喜ぶ感情を、〔乾用九〕で皮肉しているとする。

つまりは発展し、あたまになることを妨げており、このような解釈を郭沫若は儒教の根本義として、出発点もまたここにあるとしている。

五　小結

本論では、郭沫若の初期の史学、「《周易》時代的社会生活　上篇」を対象として分析した。儒教の経典である『易経』は、従来、聖人の教えであり、人間学（理学を含む）でもあったが、それを史学的に解釈した先駆的な業績と言えるであろう。そしてそれは、支配者が、体制保持のために作り上げ、解釈を施した書物であり、それを唯物史観からその欺瞞を炙り出し、不断に変貌する唯物弁証法、革命史観によって批判したのである。

この試みは、まさに北伐時期の蒋介石との訣別を契機に行われており、裏返せば、蒋介石の思想への批判であったこと、また中体西洋の軍閥、保守派、また当時の日本にも向けられていたことは、容易に判断される。

但しこの哲学的解釈は、一九二〇年代後半の東アジアに於ける時代の産物ではあるものの、多くの普遍的な真理が見出されているとも言える。後に郭沫若は、新たな視角に基づいて、儒教を再評価することになるが、その前提としての市川在住時の学問的業績は、正しく評価されねばならないだろう。

引き続き学問と時代、地域、思想、普遍性との関係を不断に問いながら、次章では甲骨金文の研究へと進展した郭沫若の歴史学の過程を追い、再評価することにとしたい。

---

1 林甘泉「郭沫若早期的史学思想及其向唯物史观的转变」（『史学史研究』一九九二年〇二期）　魏晓丽「成就与不足—浅议郭沫若的《周易》研究」（『郭沫若学刊』二〇〇二年〇二期）

2 拙稿「郭沫若に於ける孔子観と儒教道徳の継承問題について—五四運動期から反蒋運動に至るまで」（『中国文化研究』十五号　佛教大学中国文化研究会　二〇一五年八月）

3 本稿での翻訳は、郭沫若著・藤枝丈夫訳『支那古代社会史』（成光館書店　一九三一年十二月）を参照、依拠した。

4 程乃胜「关于郭沫若《周易》时代的社会生活》一文的写作时间」（『安徽师大学报（哲学社会科学版）』一九八六年〇四期）

5 鈴木啓造「郭沫若の歴史研究」『社会科学討究』（第十三号　早稲田大学社会科学研究所　一九六八年二月）　牧角悦子「郭沫若の古代研究—近代学術におけるその位置づけ」（『神話と詩』第七号　日本聞一多学会　二〇〇八年十二月）

6 北伐時の郭沫若の動向については、武継平「北伐時の郭沫若」（『言語文化論究』第一六号　九州大学大学院言語文化研究院　二〇〇二年七月）「北伐時の郭沫若（続）—広東大学における郭沫若の活動に関する考察」（『言語文化論究』第一七号　二〇〇三年）に詳しい。

7 当時の警察の監視の実態については、武継平「郭沫若に対する警察監視の実態—「日支人民戦線派諜報網」の検挙から」（『野草』第七七号　中国文芸研究会　二〇〇六年二月）に詳しい。

8 蔵居良造『近代中国史』（紀伊国屋書店　一九六五年九月）　岩村三千夫著『現代中国の歴史—国民革命の展開と挫折＝アヘン戦争から北伐』1（徳間書店　一九六六年一月）『現代中国の歴史—内戦から抗日へ』二（一九六六年三月）

9 注4参照

10 芸術は美だけを目的とする自律的な存在であり、その他のいかなる目的によっても規定されるべきではないとする主張。V・クーザンは「芸術が芸術のためにあるべきであるのと同様、宗教は宗教のために、道徳は道徳のためにあるべきである」（『真美善論』*Du vrai, du beau, et du bien*　一八三六。一八一八年の講義の記録）と述べ、「芸術のための芸術」の命名者とされる。

第八章　郭沫若の「辛」字論の是非と展開を巡って

一　碑学派の発展と、金石学の西洋考古学との接触にともなう変質

郭沫若は、碑学への関心を青年期からもっていた。それが、嘉定府中学堂にて包世臣の『芸舟双楫』をテキストにしていた時からの影響だとしても、問題はなかろう。その一端として、市川在住期の金石の作品、それ以後の多くの金石拓本への跋文が、その造詣を物語っており、それが、当時の西洋考古学との接触に伴って、後の蘭亭論争へと展開したとも言える。

郭沫若は、特に市川在住期、西洋考古学の影響を受けた古代史再編に精力を傾けた。その中で、甲骨・金文の文字学的研究は、従来の説文文字学からの脱却を示すものであった。

図1の金文の書も、説文学以来の黄帝時代を夢想し、その神話、宗教に参与せんとした古代空想的臨書ではなく、一史料として、科学的に古文字に向き合った、郭沫若の立ち位置を物語る資料と言えるだろう。

図 1

二　郭沫若の「辛」字思想の展開と客観性

先の章で見たように、郭沫若は、エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』、奴隷制の研究に於ける世界的権威イングラム『奴隷制度と農奴制度の歴史』の附録に論及し、郭説の当時の研究性質はエンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』の続編に当たると明言し、さらに唯物弁証法的観念に拠ると宣言した。

そして、その一環としての卜辞研究の中で、中国に於ける殷代の奴隷制の発見に至るのであるが、その思想を背景とした文字考証、研究に、一九二九年八月脱稿の『甲骨文字研究』がある[1]。

その中で、甲骨文中の「辛」字について、

辛辛本為剞劂，其所有転為愆辠之意者，亦有可説。蓋古人于異族之俘虜或同族中之有罪而不至于死者，毎黥其額而奴使之。（大意）辛辛は、もともと曲がった刀、曲がった鑿の意味で、転じて罪人の意とも説明できる。多分古人は異族の俘虜あるいは同族中の罪人を殺さないで、常に額に入れ墨して奴隷としたのである。

とし、さらに同じく同年の書『支那古代社会史論』「「卜辭」を通して見たる古代社會」〈奴隷の用途について〉の中で、[2]

用途の一――雑事に使役する。これは、僕といふ字の字形そのものが最も明瞭に表現してゐる。甲骨文字の僕の字は であって、全體の形は立っている人の側面に象っている。〔これを仔細に點檢すると〕頭の上に辛（しん）〔痛苦・罪の義あり〕を載せてゐるが、これは天〔頭部に入墨する刑〕であり黥〔面部に入墨す

る刑〕である。面部に入墨するといふ形を表示することが出来ないために、黥を施すための刑具をもつてこれを表示したのである。辛とは、取りも直さず、古代の剞劂〔剞は曲刀・劂は曲鑿で孰れも彫り物に用ふるもの〕である。…さて、右の人形は頭部に黥されて居ることが判つた。更に臀部に尾の形があり、手に捧げ持つてゐるものは、掃除の結果棄つべき物(箕)の中に塵埃を盛つた形である。さすれば、僕なるものが、古人によつて、掃除などの賤役を受け持つものとして使役されてゐたことを知り得るわけでる。

と解釈した。

またそれらの論考の影響を受けて、白川静は、『字統』に於いて[3]、

把手のある大きな直針の形。これを文身・入墨に用いるもので、その関係の字は多く辛に従う。〔説文〕一四下に「秋時、萬物なりて熟す。金は剛、味は辛なり。辛通して即ち泣出づ。一に辛に従う。辛は辠なり。辛は庚に承く。人の股に象る」とするが、その説くところは五行説によるもので、全く要領を得ない。辛は直刀、辛は曲刀であるが、辛は辟のように肉を切るときもあり、また章のように入墨に用いるものもあって、その形から必ず一義を定めうるものではなく、その従う字形によって、その器形とはたらきとを区分しなければならない。辛は童・妾・辠・辜において明らかに入墨に用いる針の意であるが、新・親では神位を作る木に標識として加える辛であり、辞(辭)・薛においては曲刀、また商においては、王朝の刑罰権と神聖権とを示す儀器である。他にも龍(竜)・鳳・虎などの冠飾に用いることもあるが、それらは聖獣を示す文飾とみてよい。辛の初義は文身に用いる針。それで辛痛の義となる。十干において、庚辛とならんで「金のえ・金のと」に用いる。十干は甲乙が甲骨、丙丁は鋳冶の器、戊己は刃器と工具、庚辛もまた対待の義をもつはずであるから、庚は杵の形、辛は針器ということになる。

と述べている。詳細は、『甲骨金文学論集』所収の「辠辜関係字説―主として中国古代における身體刑について」にて論述されている[4]。

しかしその客観性については、未だいくつかの課題が残されている。

先ず甲骨文の「辛」字の用例は、専ら十干として用いられ、入れ墨を直接表す用例は存在しないこと。また落合淳思氏は『甲骨文字辞典』において「辛」「辛」字に於いて敢えて入れ墨に言及されていない[5]。

そこで甲骨文中の墨刑と「辛」字の関係があるとすれば、屯一一二二に[6]。

辛伊尹、眔酒十宀羊。

の祭祀を表す用例があり、墨刑と祭祀との関係があるとすれば、その可能性は指摘できる程度に止まるであろう。

つまりこの説は、当時の郭沫若を取り巻く情勢、政治環境から、奴隷制の発見への促しが性急であったが故に、生まれた着想、産物

であったとも言えるだろう。

三　「辛」と「墨」の隔離

入れ墨を意味する文字は、「辛」ではなく、中国古典籍に於いては、「墨」「黥」に代表される。後に少しく考察するが共に部首「黒」が要素となっている。

例えば、それは『左傳』昭公十四年（前五一〇年）に、

貪以敗官為墨。

（大意）貪欲で官職を汚すものを「墨」という。

とあって杜預注に、

墨、不絜之称

（大意）墨とは、不潔のよびなである。

とあり、時代は下るが『書経』伊訓に、

臣下不匡、其刑墨

（大意）臣下が上の者を諫め正さないなら、その者に墨刑を加える。

とあり、偽孔伝に、

臣不正君、服墨刑。鑿其額、涅以墨。

（大意）臣下が上の者を正さなければ、墨刑とする。その額を切り裂き、墨で染める。

とあることによって、確認できる。これらの用例は枚挙に暇がなく、「墨」の観念はより古くは「入れ墨刑」を強く意味していたことは明らかである。

さらに郭沫若は『青銅時代』に於いて、その「墨」字から演繹して、

近人钱穆谓“墨”本刑徒之称，又解“墨子兼爱，摩顶放踵”一语，以为“摩顶者摩突其顶。盖效奴作髡钳，所以便事。放踵则不履不綦，出无车乘”。这种解法颇近情理。或者他的先人是职司刺墨的贱吏，后世以为氏。总之墨子和老子、孔子比较起来，出身当得是微贱的。

（大意）最近のひと銭穆は、“墨”は本と刑徒の称といい、また又「墨子は兼愛し、頂（いただき）を摩（ま）して、踵（きびす）に放（いた）る」の一語を解して、「摩頂」とはその頭髪をすり減らし禿頭にすること。多分奴隷として丸坊主で、事に便じた。「放踵」とは、履かずつけずに、出て車に乗らなかった」と解している。この種の解析は大変筋道に近い。或いは彼の先人の職は、入れ墨を施す賤吏とし、後世、氏を成したとした。総じて墨子と老子は、孔子と比較すると、出身が賤しいとすべきである。

と墨子の「墨」の字も入れ墨と解している。

それに対し「辛」字は文献的には、入れ墨を直接表す用例は見当たらず、入れ墨を施す際の痛みからの引伸義「辛い」の可能性は挙げられるが、未だ想像の域を出ていない。また『説文詁林』をみても、それに関するような解釈が、為されていないのが、現実であり、それが従来の「説文学」だと言えるだろう。

四　唐蘭「黒」字説の可能性

さて、近年の文字学の成果として、入れ墨刑を表す字義解釈として、唐蘭説を挙げることができる

例えば辞書的な解説を挙げると、「黒」字について、

甲骨文從「大」從𠂆，𠂆象人面部受墨刑之貌(唐蘭)。墨刑指在人臉上刺字塗墨的刑罰。「黑」後來專門用來表示黑白之「黑」的引申義，墨刑之本義就專門用「墨」來表示。

(大意)甲骨文は、「大」に従い「𠂆」に従う。「𠂆」は人面に墨刑を受けた様態(唐蘭)。墨刑は、人の顔に字を刺し墨を塗る刑罰。「黒」は後に専ら黒白の黒いを表すのは引伸義。墨刑の本義は、専ら「墨」を用いて表すようになる。

【詳解】上圖的甲骨文，據于省吾，當釋為黑字。唐蘭以為字象一正面站立之人(大)接受墨刑。墨刑指在人臉上刺字塗墨的刑罰。「黑」後來專門用來表示黑白之「黑」的引申義，墨刑之本義就專門用「墨」來表示。參見「墨」。《白虎通．五刑》：「罪者，墨其額也。」早期金文承甲骨文之形，亦從「大」從𠂆。後來字形首部中豎兩邊和下部「大」形外側或加裝飾點劃。後來「黑」字下半部「大」訛變為「炎」，《說文》所列小篆以此為據，因此《說文》認為：「黑，火所熏之色也。從炎上出囱。囱，古窻字。凡黑之屬皆从黑。」由於小篆已訛從「囱」從「炎」，故許慎誤以為字會煙囪被火煙燻以致變黑之意。

甲骨文「黑」與𡗜形近，屬異字同形，唯可據辭例上下文判別兩字。「黑」從墨刑刺字塗墨引申作黑白之「黑」，因此甲骨文用來表示黑色，如《合集》29544：「黑犬。」《合集》29508：「黑羊」。《合集》30022：「𦥑雨叀黑羊」，指祈求下雨，用黑色的羊來祭神。金文「黑」字用作地名和人名。

(上図の甲骨文は、于省吾に拠れば、まさに黒字に釈すべきである。唐蘭は、正面に立つ人の姿で、墨刑を受けた人と考えた。墨刑は、人の顔に字を刺し墨を塗る刑罰。「黒」は後に専ら黒白の黒を表すのは引伸義。墨刑の本義は、専ら「墨」を用いて表すようになる。墨字を調べてみると、『白虎通　五刑』に「罪あるもの、その額に墨す」とある。早期の金文は、甲骨文の形を承け、また「大」「𠂆」に従う。後に字形の首部中画の両辺と下部「大」形に、点画を装飾している。後に黒字の下部「大」が「炎」に変形し、『説文』は、小篆のこれによって、「黒は、火の薫ずるずる色。炎上に従い囱より出す。囱は、古の窻字。凡よ黒の属は皆黒に従う。」とし、小篆によって已に変形し「囱」「炎」に従い、よって、許慎は誤って字義を煙囪、火煙と燻じて、黒の意と変じた。　甲骨文「黒」と𡗜の形は近いが，異字同形に属す。ただ上下の判別によって両字を分かつ。「黒」は墨刑の字を刺し墨を塗ることから引申して、黒白の「黒」となりよって甲骨文の用例で黒色となる。例えば《合集》29544：「黒犬。」《合集》29508：「黒羊」。《合集》30022：「𦥑雨叀黒羊」，は下雨を希求して，黒色の羊を用いて祭神を来すを意味する。金文の「黒」字は地名と人名である)

と「漢語多功能字庫」にある[9]。

五　金文の用例と甲骨文字

「亻朕匜」銘文については、発掘簡報の釈文と注釈の他に、著名な金石学者唐蘭や李学勤も別に注釈と釈文を施し、小さな相違はあ

るが、概ね主要な方向性は一致している。本文の主要な紹介は、唐蘭が一九七六年に《文物》に於いて発表、《陝西省岐山县董家村新出西周重要铜器铭辞的译文和注释》中で翻訳している。

図 2

釋文

隹三月既死霸甲申，王才莽上宫，伯𩛥父廼成貿曰：『牧牛！𠭯乃可湛，女敢𠂤乃師訟。女上卬先誓，今女亦既又卬誓。專趞啬覭儥寄，亦兹五夫，亦既卬乃誓，女亦既從讞從誓。弋可。我義俊女千，𪉖𪉖女，今我赦女義俊女千，黜𪉖女。今大赦女，俊女五百，罰女三百寽。』白𩛥父廼或吏牧牛誓曰：『自今余敢𡢁乃小大史。』『乃師或𠂤女告，則到。乃俊千、𪉖𪉖！』牧牛則誓。乃𠂤告吏𢦏、吏曶于會，牧牛辭誓成，罰金。倗用乍旅盉。

（釈文）

（唐蘭訳）三月既死魄甲申，王在方邑的上宫，伯扬父定下了判词，说：“牧牛！你被谴责为诬告。你敢和你的师打官司，你上面违背了先前的誓言。现在你已经有了办理的誓，到啬去见亻朕，给这五个奴隶，也已经办理你的誓言了，你也已经听从讼词，听从誓约了。最初的责罚，我本应鞭打你一千下，给你黑蔑黑屋之刑（墨刑的一种，在颧骨处用刀割破并填上墨，另外还用黑巾蒙在头上）；现在我赦了你，还应该鞭你一千下，给你黜黑屋之刑（除了黑屋刑外，只是罢免，不蒙黑巾了）；现在更大赦你，鞭五百下，罚铜三百锊（合汉时的秤两千两）。”伯扬父就又叫牧牛立誓说：“从今以后，我大小事不敢扰乱你”伯扬父说：“你的师再把你告上来，就要给你鞭一千下，给你黑蔑黑屋之刑。”牧牛立了誓。于是把这告知官吏邦和曶参加了会。牧牛的案子和誓约都定下了，罚了铜。亻朕用来作宗派的盉。

（大意）三月既死霸〔第三週〕（初吉、既正霸、既死霸、既望）に死に甲申に魄した。王は方邑上宮におり、伯父は判決文を下して言うに

は：“牧牛！あなたは誣告によって厳しく非難させた。あなたはあなたの師と訴訟を起こし、あなたは以前の誓いの言葉に背いた。今あなたはすでに誓いがあって、嗇まで朕に会いに行き、この五人の奴隷をささげ、すでにあなたの誓いの言葉を行い、あなたもすでに訴訟の内容に従って、誓約に従った。最初の処罰は、私はあなたの一千の鞭打と、更に墨刑を施すことだった。今私はあなたを許し、また一千の鞭打と墨刑を施すべきである。今更にあなたを大赦して、五百の鞭打と、銅三百を罰とする。”伯父は牧牛に誓いを立てて言う“今後、私の大小の事であなたをかき乱すことはない。”伯父が言う“あなたの師はまたあなたを訴え、あなたを一千の鞭打と墨刑を施せと。牧牛に誓いを立てた。そこでこれを官吏の国と曶に告知して会に参加した。牧牛の訴訟事件はすべて決まった。銅を罰する。朕は宗派の盉を作りなさい。

そこに、表れる墨刑を意味する「 」という文字構成に、「黒」が見られることが、唐蘭説の根拠を補強していたとも考えられる。

因みに甲骨文に於ける「黒」字の用例は、殆どが色としての黒の意味であり、敢えて言えば「花三五二」に[10]

于挿黒、左。

と、動詞の用例が見られるが、現段階では、それ以上は想像の域を出ないと言えるだろう。

六　殷墟に於ける入れ墨関係文物とその意味について

殷墟から出土した文物の内で、文身、つまり入れ墨を表すと観念する議論がなされた嚆矢は、陳仁濤『金匱論綜合刊』第一期（香港　一九五五年）の金匱論古初集補正で、高去尋が図３についてのアメリカのカール・スチュスター論を基に展開したものが挙げられよう。さらに図４は小屯で発掘された手足のない彫像であるが、これも、李済によって、文身と認識されている。

この図３の饕餮文を文身とした上で、くるぶしの十字文を海南黎人の習俗と合致すると見て、殷の時代にその習俗があり、小屯のこれについても可とし、李済もそのように認識していると論じた。ただし、本邦では林巳奈夫氏がその説に触れるものの、慎重な姿勢を見せている。

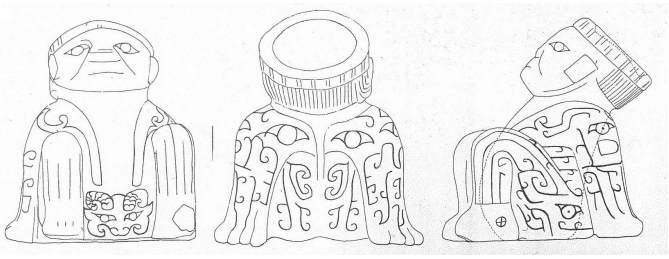


図 3

図 4

七　郭説を端緒とする殷代墨刑説

郭説に於いて中国古代の奴隷制、それに付随する形で墨刑について、メスが入れられ、更にそこから白川静は、殷に於ける入れ墨社会を夢想した。また夙に陳仁濤は、当時の文物に見られる文様を入れ墨と解釈しており、その説は入れ墨社会論を補強しうると言えるだろう。

ただし籾山明氏は、殷代に於いてそれが、刑罰として存在したことについては、根拠が皆無に等しいとして、当時の墨刑の有無については、棚上げされている。

私は拙著『書論の文化史』に於いて[11]、更にそこから古代中国の刑罰、処刑の意味を問い直した上で、入れ墨刑についての新たな解釈、仮説を提起した。ここでその説を披瀝したい。

古代中国に於ける刑罰の実相

刑罰とは、罪を犯したものに加える制裁であることは言を俟たないが、それは歴史的に形成されたものであり、「罪」という観念自体、その背景となる文化、時代によって多くの分類がなされるべきであろう[12]。よってここでは古代中国に於ける刑罰の原初形態を探ることに目的を限定し、後に「入れ墨」の刑たる所以を論ずる序章としたい。

そもそも刑罰とは、一つの共同体という認識を前提として存在するものであり、それが他の民族に施行される場合は「実力制裁」、いわゆる「戦争」という状況が想定される。また特に中国王朝時代にあっては「王」に対する咎がそのまま刑罰の対象になることを忘れてはならないだろう。『書経』堯典に、

帝曰、皐陶。蠻夷猾夏、寇賊姦宄。汝作士、五刑有服、五服三就、五流有宅、五宅三居。惟明克允。

（大意）帝がいう、皐陶（こうよう）よ。野蛮なものどもが乱れさわいで、他人を害い傷つけたり、他人のものをかすみ取ったりしている。そなたは士となって、悪人どもをその犯罪の程度によって五刑につけ、五刑につけたものを三つの場所で処分せよ。また五種の流罪にすべきものはそのどれかにおき、それぞれ国外の三つの地方におられるようにせよ。刑罰を行うには、その罪状を明らかにしてよくその刑が適当となるようにせよ。

とあり、その偽孔伝に、

五刑、墨（ぼく）、劓（ぎ）、剕（ひ）、宮（きゅう）、大辟（たいへき）。

（大意）五刑とは、入れ墨、はなきり、あしきり、去勢、死刑である。

とあることによって、蠻夷（野蛮な異族）に対しての入れ墨刑が確認できる。さらに『国語』晉語六で范文子によって、

夫戦刑也、刑之過也。

（大意）戦争は刑であり、その国の過ちを刑するのである。

と明言され、また『左傳』僖公二五（前七〇六年）の倉葛の言に、

德以柔中國、刑以威四夷。

（大意）徳は中国をやわらげ、刑罰（兵力）は夷狄をおどしつける。

とあることからも、当時の兵刑未分の状況を窺うことができ、それが法強制の手段としての刑ではなく、敵対者に対する力に訴えた実力制裁であったことが見て取れる[13]。

ではこれら被刑者となる敵対者、つまり戦争に於いて敗北を喫した異族の行方を辿ってみると、『春秋』経文・昭公十一（前五〇七年）に、

冬、十有一月丁酉、楚師滅蔡、執蔡世子有以歸、用之。

（大意）冬の十一月二一日、楚の軍が蔡を滅ぼし、蔡の世子有を捕えて連れ帰り、これを用いた。

とあり、その杜注に

用之、殺以祭山。

（大意）これを用いたとは、殺して牲として山を祭った。

とあり山を祭るいけにえに用いられている。さらに『春秋』経文・僖公十九年（前七〇〇年）に、

己酉、邾人執鄫子用之。

（大意）六月二二日邾（ちゅ）の人が鄫子を捕え、これを用いた。

とあって、その『公羊傳』に、

惡乎用之。用之社也。其用之社奈何。蓋叩其鼻以血社也。

（大意）どこにこれを用いたのか。これを社に用いた。そのこれを用いたとは、どのようにしたのか。その鼻を叩いて社に血ぬった。

とあって、五刑の一つの劓刑が、人血を社廟に塗布する風習として行われていたことが確認できる。このように社廟や礼器、武器、楽器、さらに亀卜の際に塗血する風習は、神聖化を目的とした儀礼として古代中国で広く行われていたようである[14]。

また当時の兵刑未分の状況下に於いて戦争での馘首（かくしゅ）は、刑罰としての斬首との範疇の同一性を指摘できよう。ではその首級の行く先は、『詩経』魯頌、泮水に、

明明魯侯　克明其德　皀旒作泮宮　淮夷攸服、
矯矯虎臣　在泮獻馘　淑問如皐陶　在泮獻囚

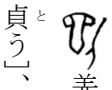
（大意）よく勤めし魯侯、よくその徳を明らかにし、すでに泮宮を作り、淮夷を征服した。勇猛な家来が泮宮に敵の馘をたてまつる。調べ問うこと皐陶に似て、泮宮に虜囚をたてまつる。

とあり、凱旋の儀式が挙行され、俘虜とともに神前に供され祭られていることが分かる[15]。

以上のように古文献に散見する刑罰の実相を見ると、それは敵族に対する実力制裁としての一面を有し、帰するところは「祭祀」であったことが確認できる。

祭祀儀式としての処刑

前章では古文献に見られる刑罰関係資料から、当初の刑罰が、即ち異族への実力制裁であり、さらにそれらが祭祀空間の中で施行されていたことを垣間見た。ここではこれらの事象を前提とし、時代をさらに遡り殷代に特定し、甲骨文中に見える刑罰の実態について確認し、其の中での墨刑について考えていきたい。五刑の「五」という数字は、戦国期以来の観念であり、殷代にはそういうカテゴリーではなかったと考えられるが、ともあれ先ず五刑中の「宮刑」についてであるが、甲骨文の用例に

庚申卜、王[貞]、朕  羌死。（前・四・三八・七）[16]

（大意）庚申にトい、王[が貞う]、我が去勢した羌は死んだかどうか。

とある。この事例について注意すべきは、その対象が「羌」族であることである。後に見るように甲骨文に於いて羌族は戦争俘虜として神への人身供犠に用いられる象徴的な氏族であった[17]。よって先に見たように刑罰が敵族への実力制裁であったことがここでも確認できたと言えよう。またこのように征服した俘虜から男性のシンボルである性器を断ち切ることは、戦闘意欲の喪失、彼等の絶対服従を誇示するとともに、生殖機能を失うことにつながり、延いては自己の血族、子孫を絶やすことに繋がるという意味でも、儀式性の強い刑であったと考えられる[18]。次に「大辟」つまり「殺」であるが、ここでは当時の主要な死刑が斬首であったことから、その行為を示す「伐」字の用例を分析したい[19]。甲骨文に、

甲辰貞、又且乙、伐羌十。（粋・二四六）[20]

（大意）甲辰に占い、且乙[祖先神]を祭り、羌を十人斬首しようか。

とある。これによって異族である羌族が祭祀に於いて人身犠牲として斬首されていたことが分かる。また他にも羌族に限らず異族の人身供犠に纏わる用例は多数存在し、その実態は殷墓からの発掘報告、その中でも頭部と肢体が分離した多くの遺骨によっても裏付けられている[21]。また図5に見られる儀礼用の斧鉞のレリーフ、取り分けその人頭図像は、当時にあって斬首という処刑がなんらかの儀式の内に行われていたことが看取される。以上これら古代刑罰の実態から推せば、入れ墨刑、つまり「墨刑」についてもその儀式的要素を抽出する必要があるのではなかろうか。また図6に見られる神獣と目される動物が、人頭を食らわんとしている図像様式は図7の鼎の耳の部分にも見られ、その儀式について多くのことを示唆している。

図 5

図 6

人身供犠と「食」の観念

神獣が、人を食らうという文献に於ける用例は、『山海経』に頻繁に現れる。たとえば「中山経」に、

有獸焉。其名曰馬服。其狀如人面虎身、其音如嬰児。是食人。

（大意）獣がいる。その名を馬服という。その顔は人間のような顔をしていて体は虎、その鳴き声は赤子のようである。この獣は人間を食う。

とあり、「海内北経」に、

窮奇狀如虎有翼。食人從首始。所食被髪。

（大意）窮奇は形が虎のようで、翼を持つ。人を食うとき頭から食べ始める。食べられる者は髪を振り乱している。

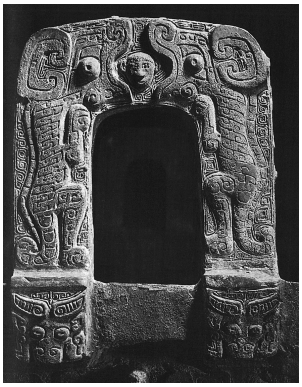


図 7

図 8

図 9

彫題黒歯、得人肉以祀、以其骨為醢些。
（大意）〈楚国の南で〉額に入墨し、歯を黒く塗って、人肉をえて祀り、その骨を塩漬にする。

とある。

また社廟に犠牲（いけにえ）を供することを「血食」「廟食」ということからも、当時の祭祀と「食」の観念の関係性が如何に重要であったかが見て取れる。

さらに『楚辞』招魂に、

とあるのは、まさに入れ墨と食人の関係を示す貴重な史料と言えるだろう。

また図6の祭器にみられる人身を食らわんとする神獣図像は、当時の祭祀裡に人身供犠が行われたことを如実に示している。以上のことを前提として図8・9に見られる斧鉞に施された口や牙を考えれば、それが「食」という行為と直結していたことは明らかであろう。サラ・アランはこれらの図像解析の結果として、儀礼の中で食べることと犠牲を捧げるために首をはねることは、同等視さていたという見解を提出している[23]。また宗廟に生け贄を供えることを「血食」と言い、さらに現実に敵族を食さんとしたいくつかの文献事例は、中国に於けるカニバリズムの系譜とともに儀礼の実態を示す傍証となるのではなかろうか[23]。よって当時の処刑という儀式が人身供犠の一環として行われ、それが神獣に「食」されることに収斂されていくと考えられる。

従来の墨刑解釈と入れ墨の本義

先行研究に於ける中国古代に行われた「墨刑」の刑罰としての根拠を巡る議論をみると、凡そ幾つかに類型化できる。それは

1　入れ墨を施される際の身体的苦痛及び精神的侮辱[24]
2　民事死実現のための刻印[25]
3　夷狄の習俗である文身（入れ墨）を施すことによる漢族からの追放[26]
4　捕らえた異族に文身したのち隷役に[27]

の大まかに四つに分類できる。因みに入れ墨は、漢語で「黥（げい）」や「文身（ぶんしん）」とも呼ばれる。ところで以上の説は、中国史全体の時代変遷の中で段階的に位置付けると、何れも妥当性を有するものと言えるが、その原義を考えたときその批判は可能である。つまりその反証として殷代以前に於ける入れ墨の有していた聖的な意味合い、例えば甲骨文の「文」字が挙げられる。上字について、多くの先達がその字形を「文身を施した人形」と解しており[28]、また白川静は「奭（せき）」字も同様とし、その用例が宗廟に於いて先王を祀るのに冠することが多く、文身が当時にあって最高の権威と神聖性とを表象するものであ

ったとみている。また入れ墨用の針を示す「辛」字が罪に関する字義要素に多く用いられたことは言を俟たないが[29]、それが殷の正名である「商」の上部のかたちに相当し、王朝の刑罰権と神聖権を示す儀器をあらわしているとする見解もある。また文化人類学的な文身の意義を考えると、それは種族の紋章、祖先との関係を示す死や他界の意味が重要な役割を果たしたとされており、さらにそれが始祖としてのトーテムを意味したとする例証が存在する。

これらのことから殷代に於ける入れ墨の刑たる所以は、従来の説を根底から覆しかねず、別の解釈、つまり聖俗が混濁する時空を想定する必要があるのではなかろうか。

墨刑の新解釈

古代中国に於いて、トーテミズムという観念に相当する実態が存在したかどうかという議論はあって然りであろうが、個々の痕跡から動物若しくはそれに類する生き物を神聖と考え、それらに供犠をしていたことに異論はなかろう。また例えば入れ墨によって龍形に象ることは、それがかれらのトーテムであるからであり、換言すれば、自分が「龍種」であり、「龍性」を備えていると考えたからであろう[30]。またそれは種族の紋章をも象徴したものであったと解釈される。

前章までみてきたように刑罰が戦争であり、処刑が神への人身供犠であった時代、俘虜・奴隷が神への生け贄、スケープゴートであり、その聖俗混濁する食人儀式が祭祀の一環として行われていたのであろう。それを踏まえれば図１０の青銅刀、図１１の卣（ゆう）、図１２の青銅器、觥の脚部の人物にみられるモチーフも腑に落ち、さらにそこに施されている入れ墨こそ、墨刑の原形と考えられる。では人身供犠に於いて何故に、入れ墨を施す必要があったのであろうか。それは『左傳』僖公十（前六九一年）に

神不歆非類、民不祀非族。

（大意）神は非類のものを饗（う）けないし、民は他族の祭りをしない。

とあるように、同類でないと「饗（う）け」ない神に対して、供犠の際にその紋章を示す入れ墨を、聖化し食してもらうための不可欠の装飾として施したものと考える。であるならば、入れ墨を忌避する「身体髪膚」観念は[31]、かなり古い時代に求めるべきであろう。

入れ墨と墨の観念の重なりと殉葬から殉文へ

前節まで、古代中国に於いて墨が「墨刑」を意味し、その入れ墨の由緒が祖霊に受け入れてもらうために不可欠な装飾であったことを見てきた。以上のことから入れ墨は「祖先」「他界」との通用観念を有していたものと考えられる。さらに言えば現在でも葬祭に際し、墨が用いられることが多いのは、それが祖霊との交渉の場に於いて連綿と受け継がれていることを如実に物語っている。つまり墨とは、単なる物質的な意味を超え、祖先と時空を共有するという歴史的に積み重ねられた観念を有しており、よって『周礼』占人に、

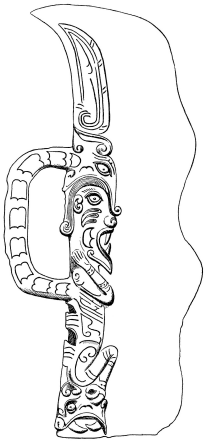


図 10

図 11

史は、墨を占う。

とあるように、祖先と消息を通じ合う占卜のときに、まちかたに墨が加えられたという事象は、その文化伝承の一端を示し得ると言えるだろう。つまり即物的な墨の存在は、呪術的な入れ墨の用途となることによって、神秘的な宗教性を纏うようになったと考えられる。

図 12

さらに言えば、人身供犠の奴隷の入れ墨、その殉葬が、次第にその悼ましさ故に減少し、それに比例するように身体髪膚観念が拡大され、人身ではなく墨の文字による殉葬へと分化していったとも考えられる。

八　小結

郭沫若の殷代奴隷制社会論によって、その奴隷に施される入れ墨に着眼されたことを起点に、当時の入れ墨の俗、賤的な奴隷的な負の役割りについて啓蒙され、さらに後の研究者によって文物、他の文字の考証、文化人類学、民俗学的な研究に拠って、その逆の意味合い、その聖的な側面にも光が当てられた。

私論では、その両極の結合点を、当時の刑罰の内実、「供犠」というトポスに求めたが、それは、エリアーデの言う「聖なる力の周期的再生」「再生のための供犠は、創造の儀礼的くりかえし」に求めるべきではなかろうか[32]。

それは、中国に於いても「儀礼」という形態であらゆる変貌を伴いながら収束し、継承される宿命にあったとも想像できる。

また、「人身供犠＝殉葬＝奴隷」とする判断が成立した上で、「食人儀式」がつながらないとする反証もあるだろう。それはそもそも、殉葬とは生前に仕えていた従者を死後にも仕えさせるという発想であり、その担保として宗教観念が醸成されてきたとすれば、神に食べさせてしまっては、その役割を果たせなくなるからである。

しかし、それは当時の人身供犠、殉葬を、「人牲（人を殺し、神霊や祖先を祭るための犠牲にすること）」と「人殉（人を死んだ氏族の首長や家長、奴隷主あるいは、封建領主のために殉死させること）」の二系統で捉えると、「人殉」が死後の従者として、「人牲」が当説として、解消されるものと観念されるのではなかろうか。

---

1 郭沫若『甲骨文字研究』（一九七六年　中華書局）
2 郭沫若著・藤枝丈夫訳『支那古代社會史論』（一九三〇年　内外社版）
3 白川静『字統』（一九九四年　平凡社）
4 白川静『甲骨金文学論集』（一九七三年　朋友書店）
5 落合淳思『甲骨文字辞典』（二〇一六年　朋友書店）
6 中國社會科學院考古研究所編『小屯南地甲骨』（一九八〇―一九八三　中華書局）
7 郭沫若『郭沫若全集　歴史編　第一巻』（一九八二年　人民出版社）
8 銭穆『墨子　惠施公孫龍　莊子纂箋』（一九九八年［臺北］［聯經出版事業公司］）
9 漢語多功能字庫 https://humanum.arts.cuhk.edu.hk/Lexis/lexi-mf/
10 中國社會科學院考古研究所編著『殷墟花園莊東地甲骨』（二〇一六年十一月　雲南人民出版社）
11 松宮貴之『書論の文化史』（雄山閣　二〇一〇年）
12 阿倍謹也『刑吏の社会史―中世ヨーロッパの庶民生活』（中公新書五一八）

13 籾山明「法家以前ー春秋期における刑と秩序」『東洋史研究』第三十九巻第二号(一九八〇年　所収)
14 佐藤廣治「釁と盟詛の歃血とに就いて」『高瀬博士還暦記念支那学論叢』(弘文堂、一九二八年　所収)
15 貝塚茂樹「中国の古代社会」『貝塚茂樹著作集』第一巻(中央公論社、一九七六年)
16 羅振玉『殷墟書契前編』(一九一二年)
17 白川静「羌族考」『甲骨金文学論集』(朋友書店　一九七三年　所収)
18 三田村泰助『宦官』(中公新書　一九六三年)
19 趙佩馨「甲骨文中所見的商代五刑」『考古』第二期　(一九六一年)
20 郭沫若『殷契粹編』(一九三七年)
21 容媛編「二十四年(二十三年十二月至二十四年五月)国内学術界消息」『燕金学報』第十七期(一九三五年　所収)
22 サラ・アラン　渋谷瑞江訳「芸術とその意味ー饕餮を中心として」『饕餮』第二号(北海道大学文学部中国文化論研究室　一九九四年)
23 桑原隲蔵「支那人間に於ける食人肉の風習」『桑原隲蔵全集』第二巻　東洋文明史論叢　(岩波書店　一九六八年　所収)
24 劉海年『戦国秦代法制管窺』(北京・法律出版社　二〇〇五年)
25 滋賀秀三「刑罰の歴史ー東洋」荘子邦雄・大塚仁・平松義郎編『刑罰の理論と現実』(岩波書店　一九七二年　所収)
26 冨谷至『古代中国の刑罰』(中公新書　一九九五年)
27 籾山明「甲骨文中の五刑をめぐって」『信大史学』第五号(一九八〇年　所収)
28 白川静「釋文」『甲骨金文学論集』(前掲書)
29 白川静「皐辜関係字説ー主として中国古代における身体刑について」『甲骨金文学論集』(前掲書)
30 聞一多著　中島みどり訳注『中国神話』東洋文庫(平凡社　一九八九年)
31 『孝経』「身體髮膚、受之父母、不敢毀傷、孝之始也。立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也。」
32 ミルチャ・エリアーデ著『エリアーデ著作集』第三巻　聖なる空間と時間(せりか書房　一九七四年十月)

第九章　民国抗日戦争期に於ける郭沫若の「書」及び「文学」の論理

―郭沫若に於ける「言語」「文学」「思想」の表出としての「書」様式の史的変遷について

一　緒論

郭沫若(一八九二―一九七八)は一九三七(昭和一二年)、日中全面戦争開始直後、日本から脱出して抗日宣伝活動に従うが、その間、戯曲『屈原』等の文学作品を執筆した。本稿では、この全面戦争、抗日宣伝活動期を中心に、その書作の足跡を追いたい。

敢えて言えば、郭沫若の学芸を考える時、当該期がむしろ後の建国期よりも大きな転機になっている。それは郭沫若の政治的な与野党的立場の変化、つまり「時代に支配的な発想」を構成する責を負ったことに起因することに留意が必要である。さらに建国以後の書法変遷の胎動の核は、この抗日戦期に培われており、政局こそが郭沫若文芸のいくつかの転向を語る際に、不可欠な視角と言えよう。

例えば郭沫若は、中華人民共和国成立後、政務院副総理、中国科学院院長、中日友好協会名誉会長を歴任し、親日派として知られるが、抗日戦期に現在に連なる反日思想の骨格を作った人物であることも忘れてはならない。

国民党左派から共産党右派へと華麗に転身した、その玉虫色ぶりに郭の特徴があり、その「時代に支配的な発想」と「作家固有の発想」の拮抗と変貌が顕著に表れた時期に、近現代中国の断続と継承の、複雑な内実が隠されているとも言える。

それでは、以上の前提を踏まえ、本章では、その抗日戦線での彼の文化活動、取り分け書を中心にみていきたい。

二　詩作の分布

『郭沫若旧体詩詞系年注釈』(王継権・姚国華・徐培均編　黒竜江人民出版社　一九八二年)に拠れば、

【四川にて】
一九〇四年　三首　一九〇五年　一首　一九〇六年　一首
一九〇七年　三首　一九〇八年　一首　一九〇九年　一首
一九一〇年　九首　一九一一年　一首　一九一二年　一三首
一九一三年　一首
【日本留学期】
一九一四年　一首　一九一五年　五首　一九一六年　四首
一九一七年　二首　一九一八年　三首　一九一九年　六首
一九二一年　一首　一九二二年　三首　一九二四年　三首
一九二五年　五首
【北伐期】
一九二六年　三首

図版は『二十世紀书法经典 郭沫若』(河北教育出版社 广东教育出版社一九九六年十二月)『郭沫若书法集』(郭沫若书法集编委会 四川辞书出版社出版发行 一九九九年)『依据教育部中小学书法教育指导纲要编选 中国最具代表性碑帖临摹范本丛书 郭沫若卷』(人民美术出版社二〇一七年十一月)参照。

(●は、図版あり。)

但し、ほぼ作詩時に書されたものと、回想としての回顧的に時間を経てから書されたものがある。

【市川亡命期】
一九三五年　三首　一九三六年　五首
【日中戦争期】
一九三七年　一六首　一九三八年　一四首
一九三九年　一六首　一九四〇年　一五首

日時	漢詩名	場所	目的	書の有無
1904年	邨居即景	四川	感慨	
1904年	早起	四川	感慨	
1904年	茶溪	四川	感慨	●
1905年	茶天岗扫墓中途雨口占一律	四川	感慨	
1906年	苏溪弄筏口占	四川	感慨	
1907年10月15日	九月九日赏菊咏怀	四川	感慨	
1907年夏	晨发嘉州返乡舟中赋此	四川	感慨	
1907年秋	夜泊嘉州	四川	感慨	
1908年秋	咏佛手柑	四川	感慨	
1909年冬	咏蜡梅	四川	感慨	
1910年2月	泛舟谣	四川	感慨	
1910年春	澡室狂吟	四川	政治	
1910年暮春	落红	四川	感慨	
1910年3月14日	同友人游恰园	四川	感慨	
1910年夏	商业场竹枝词 三首	四川	感慨	
1910年	寄吴君尚之 二首	四川	感慨	
1910年	和李大感怀 二首	四川	政治	
1910年	有怀	四川	政治	
1910年	咏秋海棠	四川	感慨	
1911年	舟中闻雁哭吴君耦逖 八首	四川	感慨	
1912年農歴正月20日	舟中偶成　三首	四川	感慨	
1912年春	对联二十二副	四川	政治　辛亥革命	
1912年初夏	咏牡丹	四川	政治	
1912年	咏绣毬	四川	政治	
1912年秋	述怀 和周二之作 三首	四川	政治	
1912年	代友人答舅氏劝阻留学之作 次原韵	四川	贈答	
1912年9月	和王大九日登城之作原韵二首	四川	贈答	
1912年冬	感时 八首	四川	政治	
1912年	感李大和鄙作感时八章赋诗以贈之	四川	贈答	
1912年	锦里逢毛大醉后口号叠韵 四首	四川	政治	
1912年	寄先夫愚 八首	四川	政治	
1912年	无题	四川	政治	
1912年	无题　五首	四川	政治	
1913年11月	即兴	北京	感慨	
1914年6月～8月	房州北条　三首	朝鮮	感慨	
1915年5月	七律	上海	政治	
1915年	新月	岡山	感慨	
1915年	晚眺	岡山	感慨	
1915年	月下	岡山	恋愛	
1915年	蔗红词	岡山	恋愛	
1916年春	与成仿吾同游栗林园	四国	政治	
1916年夏	凭吊朱舜水先生墓址	岡山	弔詩	
1916年10月	游操山	岡山	感慨	
1916年	寻死	岡山	政治	
1917年	残月黄金梳	日本	感慨	
1917年	夜哭	日本	感慨	
1918年	咏博多湾	九州	感慨	
1918年秋	游太宰府　二首	九州	感慨	
1918年除夕	十里松原 四首	九州	感慨	
1919年	春节纪实	九州	感慨	
1919年	新月与晴海	日本	感慨	

日時	漢詩名	場所	目的	書の有無
1919年2、3月	怨日行	日本	政治　五四運動	
1919年	春寒	日本	政治	
1919年3、4月	春愁	日本	政治	
1919年	少年忧患		政治	
1921年夏	暴虎辞		政治	
1922年4月2日	笙歌漾天宇		文化	
1922年4月2日	牛郎织女之歌		文化	
1922年9月19日	哀时古调　九首	日本	歴史・政治	
1924年10月1日	纪行诗二十韵	日本	感慨	
1924年10月3日	日之夕矣	日本	感慨	
1924年4月1日	采栗谣	日本	感慨	
1925年	春桃	日本	恋愛	
1925年	依冷如春冰		恋愛	
1925年	依本枝头露		恋愛	
1925年	薄花生树		恋愛	
1925年	在昔有豫让		文化	
1926年3月18日	题刘海栗山水画	広東	文化	
1926年8月25日	过泪罗江感怀	湖南	戦争　北伐	
1926年	悼德甫 四首	中国	弔詩	

一九四一年　三九首　一九四二年　三八首
一九四三年　二八首　一九四四年　二九首
一九四五年　一九首

【第二次国共内戦】

一九四六年　七首　一九四七年　五首　一九四八年　一六首

日中戦争の勃発に伴い再度亡命生活を切り上げて帰国、軍事委員会政治部第三庁庁長、文化工作委員会主任となる。これによってその書の持つ意味も、単なる趣味ではなく、経世致用の政治的役割を担い、プロパガンダ化し、第一次郭体を形成する。その第一次郭体とは、書法様式の旧文化（文語）への白話体の導入と位置付けられよう。つまり中華民族にとっての文化の生命線を、日本など周辺諸国の漢文とは一線を画し、郭沫若は白話体に求めていたとも解せられる。よって本稿で言う「郭体」とは、抗日戦以後の、実学的な政治性を帯びた書法様式から行った定義である。

それは、郭沫若が政治家という立場で、国民政府軍事委員会政治部第三庁に入り、「文化」を政治利用する「経世致用」をこのように担う為政側の任に本格的に就いたことを意味し、それ以前の書は、概ね例外はあるものの、所謂、伝統中華的な「文人趣味」「国学」「国粋主義」による個人的な「趣味」によって解消できるものであるからである。

この後者の文脈は、全く潰えた訳ではないが、「もし文化が滅びるなら、民族そのものが、永久に敵の手に落ちることになる」いう危機感の上で、個人レベルの中華文化の継承者としてだけではなく、民族レベル、ないし政治レベルで「文化」を考えて書にも向き合い、また歴史劇、学術著作、詩歌散文等を出版し、戦争の時代に於ける中国文化の建設と学術思想の活発化に努め、芸術創作を遂行した。

中華民族の復興、その文化の顕彰を、政治レベルという意味で行ったという文脈に於いて、この時期に郭沫若の書法様式が決定的

日時	作品名	場所	目的	書の有無
1935年初夏	信美非吾土	日本	感慨	
1935年8月6日	举世浮沉浑似海	日本	政治	
1935年	题渊明估酒图	日本	文化	
1936年10月	挽鲁迅先生	日本	弔詞	
1936年10月	赞挽鲁迅先生	日本	文化	
1936年11月中旬	赠达夫	日本	政治	
1936年12月16日	断线风筝	日本	文化	
1936年冬	题画红緑梅 二首	日本	文化	
1937年初夏	题兰	日本	文化	
1937年7月14日	写给横滨友人 归国杂吟之一	日本	感慨	●
1937年7月24日	又当投笔　归国杂吟之二		感慨	●
1937年7月27日	黄海舟中　归国杂吟之三		感慨	●
1937年8月7日	有感　归国杂吟之四		戦争	
1937年7月	悲歌燕赵　归国杂吟之五	上海	戦争	
1937年8月13日	雷霆　归国杂吟之六	上海	戦争	
1937年7月	春申江上　归国杂吟之七	上海	戦争	
1937年7月	对鲁迅的赞美诗	上海	追悼	
1937年10月26日	悼郝军长		弔詩	
1937年11月	看 梁红玉	上海	抗日プロパガンダ	
1937年7月	七律	上海	抗日プロパガンダ	
1937年	题山水画小帧		抗日プロパガンダ	
1937年	上海沦陷后弔于立忱墓	上海	弔詩	
1937年12月	南下书怀 四首	香港	抗日プロパガンダ	
1937年12月	广州郊外	広州	抗日プロパガンダ	
1938年1月	陕北谣	広州	抗日プロパガンダ	
1938年1、2月	赠某女士	武漢	抗日プロパガンダ	
1938年1、2月	五光图	武漢	抗日プロパガンダ	
1938年2月	长沙有感 二首	長沙	抗日プロパガンダ	●
1938年春	挽刘湘	長沙	弔詞	
1938年	弹八百壮士大鼓词 书付潜修	長沙	抗日プロパガンダ	
1938年	沙场征战苦	武漢	抗日プロパガンダ	
1938年	赠重庆 新民报	武漢	抗日プロパガンダ	
1938年	登南岳		抗日プロパガンダ	●
1938年	在南岳避空袭寄怀立群桂林十首	衡陽	抗日プロパガンダ	
1938年	舟游阳朔 二首	桂林	抗日プロパガンダ	
1938年12月25日	望海潮	桂林	抗日プロパガンダ	
1938年	挽张曙诗 二首		弔詩	
1938年	挽张曙 挽联四副		弔詩	
1939年正月	为 救亡日报 复刊作	重慶	抗日プロパガンダ	
1939年3月	登尔雅台怀人	四川	抗日プロパガンダ	
1939年3月･5月	重游乐山草堂寺	四川	感慨	●
1939年5月12日	惨目吟	重慶	抗日プロパガンダ	
1939年5月	铭刀	重慶	抗日プロパガンダ	
1939年6月19日	有感	重慶	抗日プロパガンダ	
1939年6月20日	题竹扇		文化	
1939年6月24日	喜雨书怀	重慶	抗日プロパガンダ	●
1939年	登乌龙山 用寺字韵	四川	感慨	
1939年9月	别季弟	四川	抗日プロパガンダ	
1939年9月	晨浴北碚温泉	重慶	感慨	
1939年	对联	重慶	抗日プロパガンダ	
1939年9月23日	题花卉画 二首		文化	
1939年10月15日	石池	四川	抗日プロパガンダ	
1939年10月	游北碚	重慶	抗日プロパガンダ	

日時	作品名	場所	目的	書の有無
1939年	题先兄橙坞先生诗文手稿		感慨	
1940年4月	豪气千盅酒	重慶	感慨	
1940年7月1日	蝶恋花	重慶	抗日プロパガンダ	
1940年7月15日	和朱德同志韵 四首		抗日プロパガンダ	
1940年8月5日	司徒慧敏导演 白云故乡 题赠	重慶	抗日プロパガンダ	
1940年8月26日	水调歌头 弔广东艺人		抗日プロパガンダ	
1940年 8月28日	夜会散后	重慶	抗日プロパガンダ	●
1940年8月	苏子楼	重慶	歴史	●
1940年9月14日	鹧鸪天四首 弔杨二妹	重慶	抗日プロパガンダ	
1940年9月19日	读方志敏自传 次叶剑英韵	重慶	抗日プロパガンダ	
1940年9月19日	题饮马长城图	重慶	抗日プロパガンダ	
1940年10月9日	解佩令 贺友人结婚		抗日プロパガンダ	
1940年10月19日	题慰劳前线书	重慶	抗日プロパガンダ	
1940年	题路工图		抗日プロパガンダ	
1940年春	喜雨	重慶	感慨	
1940年	汉相	重慶	歴史	
1941年1月	诗寿冯将军六十大庆		抗日プロパガンダ	
1941年1月	闻新四军事件书愤 二首	重慶	国共衝突 皖南事件	
1941年	联语		国共衝突	
1941年3月6日	送田寿昌赴桂林		国共衝突	
1941年3月15日	建设行	重慶	抗日プロパガンダ	
1941年3月22日	鞭石谣	重慶	抗日プロパガンダ	
1941年4月	题李可染画 二首		文化	
1941年4月7日	感诗 四首	重慶	国共衝突	
1941年4月17日	百虎图	重慶	抗日プロパガンダ	
1941年4月20日	华禽吟		抗日プロパガンダ	
1941年4月27日	题 画云台山记图卷		抗日プロパガンダ	
1941年5月1日	奔涛		抗日プロパガンダ	
1941年5月2日	百蝶图 四首		文化	
1941年5月17日	为陈望道题画		文化	
1941年5月21日	和沈衡老		抗日プロパガンダ	
1941年7月16日	和老舍原韵并赠 三首	重慶	抗日プロパガンダ	
1941年7月16日	赠谢冰心		抗日プロパガンダ	
1941年7月18日	秋风		国共衝突	
1941年7月20日	纪念日本人反战同盟一周年		抗日プロパガンダ	●
1941年7月21日	天鹅蛋		文化	
1941年8月26日	寄赠南洋吉打筹赈会	重慶	抗日プロパガンダ	
1941年8月28日	回报马叔平用原韵		感慨	
1941年9月12日	抗日书怀	重慶	抗日プロパガンダ	
1941年9月18日	九一八十周年书感		抗日プロパガンダ	
1941年9月30日	文化工作委员会成立一周年		抗日プロパガンダ	
1941年10月2日	题天溟山遗墨		文化	
1941年10月	传湘北大捷		抗日プロパガンダ	
1941年10月	贺十月革命二十四周年		抗日プロパガンダ	
1941年10月24日	浓雾垂天 贺友人结婚	重慶	抗日プロパガンダ	
1941年11月14日	祝焕章先生六旬大寿		抗日プロパガンダ	
1941年11月19日	步原韵谢沈先生	重慶	蒋介石批判	
1941年11月	和亚子诗	重慶	抗日プロパガンダ	
1941年11月29日	题伍蠡甫先生山田图		文化	

日時	作品名	場所	目的	書の有無
1941年12月5日	和鸳湖老人 二首	重慶	感慨	
1941年12月23日	别母已三载		抗日プロパガンダ	
1941年12月23日	明日何皎皎		抗日プロパガンダ	
1941年12月23日	寸心始可灰		抗日プロパガンダ	
1941年	题傅抱石画山水小幅	重慶	文化	
1941年	司派狂		抗日プロパガンダ	
1942年1月11日	奉朱梓年兄大衍之庆	重慶	抗日プロパガンダ	
1942年1月24日	题画红綠梅 二首		文化	
1942年	题画翎毛花卉 三首	重慶	文化	
1942年	张果老		抗日プロパガンダ	
1942年2月15日	倔强赞		抗日プロパガンダ	
1942年3月17日	无题		抗日プロパガンダ	
1942年4月1日	偶成		抗日プロパガンダ	
1942年4月11日	和黄任老观 屈原 演出二首	重慶	抗日プロパガンダ	
1942年4月13日	和李仙根观 屈原 演出一首		抗日プロパガンダ	●
1942年4月16日	赠 屈原 表演二十一首		抗日プロパガンダ	●
1942年4月18日	和无名氏观 屈原 演出后二首	重慶	抗日プロパガンダ	
1942年4月23日	题吴碧柳手稿		感慨	
1942年4月26日	题璧山途中再和黄任老观 屈原演出韵二首	四川	抗日プロパガンダ	
1942年4月27日	平生多负气 二首		抗日プロパガンダ	
1942年4月29日	三和黄任老观屈原演出后		抗日プロパガンダ	
1942年5月1日	赠朴园	重慶	抗日プロパガンダ	
1942年5月5日	听唱湘累曲 四首		抗日プロパガンダ	
1942年5月7日	夜和高鲁诗二绝		感慨	
1942年5月11日	题冯玉祥先生画	重慶	抗日プロパガンダ	
1942年5月14日	有赠		抗日プロパガンダ	
1942年5月22日	牧童与水牛唱和 西江月		抗日プロパガンダ	
1942年6月6日	钓鱼城怀古		抗日プロパガンダ	●
1942年6月17日	荆轲慷概别燕丹		抗日プロパガンダ	
1942年6月17日	白渠水		抗日プロパガンダ	
1942年6月27日	雨	重慶	抗日プロパガンダ	
1942年7月7日	和亚子		抗日プロパガンダ	
1942年8月1日	感怀		抗日プロパガンダ	
1942年8月	题傅抱石画 八首		抗日プロパガンダ	
1942年8月12日	烛影摇红		抗日プロパガンダ	
1942年9月1日	气朔篇		抗日プロパガンダ	
1942年9月18日	题画莲		文化	
1942年9月19日	崇德小学校歌		インフラ	
1942年10月22日	亚宁盛意	重慶	抗日プロパガンダ	
1942年12月9日	题峡船图		抗日プロパガンダ	
1942年12月9日	弔友		弔詩	
1942年12月12日	丹娘魂		抗日プロパガンダ	
1942年12月14日	咏王晖石棺		抗日プロパガンダ	
1942年12月15日	题王晖棺玄武象		文化	
1942年	满红江	重慶	抗日プロパガンダ	
1943年1月	祝新华日报五周年		抗日プロパガンダ	
1943年2月	大明英烈见传奇		抗日プロパガンダ	
1943年3月12日	黄山探梅 四首	重慶	感慨	
1943年3月12日	求仁得仁者		抗日プロパガンダ	
1943年3月14日	铭张天虚墓		抗日プロパガンダ	
1943年3月20日	游特园 六首		抗日プロパガンダ	

日時	作品名	場所	目的	書の有無
1943年3月21日	题李可染画 二首		文化	
1943年3月30日	咏水仙		抗日プロパガンダ	
1943年4月1日	山容		感慨	
1943年4月23日	题人物画 二首		文化	
1943年4月末	题延光砖五首		文化	
1943年5月19日	寿柳亚子先生	重慶	抗日プロパガンダ	
1943年5月22日	和冰谷见赠却寄 二首		抗日プロパガンダ	
1943年6月2日	题风景画二首		文化	
1943年6月6日	孔丘		抗日プロパガンダ	
1943年	白杨来		抗日プロパガンダ	
1943年6月7日	猪与石 二首	重慶	抗日プロパガンダ	
1943年6月18日	灯台守		第二次世界大戦	
1943年6月23日	咏月 八首		感慨	
1943年7月3日	反七步诗		第二次世界大戦	
1943年7月18日	原来寿母是同乡 四首		感慨	
1943年10月28日	题良庄图		第二次世界大戦	
1943年10月29日	吊姜爱林		弔詩	
1943年10月29日	题梅怪画梅残幅		第二次世界大戦	
1943年12月10日	看 南冠草演出后		第二次世界大戦	
1943年12月18日	题巫峡图		第二次世界大戦	
1943年12月19日	题沈衡老象		文化	
1943年12月29日	次田寿昌韵寄赠		第二次世界大戦	
1944年1月1日	题赠董老画二绝		第二次世界大戦	
1944年1月	董老行	重慶	第二次世界大戦	
1944年2月24日	帝子二绝		感慨	
1944年3月13日	詠秦良玉四首		政治	
1944年3月16日	题幼女图		文化	
1944年3月30日	题画虎		国民党風刺	
1944年4月1日	赠舒舍予		感慨	
1944年4月6日	忆嘉州	四川	感慨	
1944年4月10日	拟屈原答渔父辞		第二次世界大戦	
1944年4月21日	题富贵砖拓墨		文化	
1944年5月4日	题天发神谶碑		文化	
1944年5月21日	题新莽权衡 二首		文化	
1944年5月21日	题打渔杀家图		文化	
1944年5月21日	观两面人 四首		文化	
1944年6月15日	叠和亚子先生 四首		国民党風刺	
1944年11月15日	詠虎 二首		国民党風刺	
1944年11月17日	题刘伶醉酒图		国民党風刺	
1944年11月17日	喻仿石涛者		文化	
1944年11月17日	题傅抱石薰风曲图		文化	
1944年11月19日	题伯夷叔齐图		文化	
1944年11月22日	题夏山图		文化	
1944年11月22日	题柳浪图	重慶	文化	
1944年11月22日	题湘君与湘夫人 二首	重慶	文化	
1944年11月23日	补题湘君与湘夫人 二首	重慶	文化	
1944年12月3日	题水牛画册	重慶	文化	
1944年12月25日	双十一	重慶	政治	●
1944年12月26日	赠张瑞芳	重慶	政治	●
1944年	题关山月画 六首	重慶	文化	

日時	作品名	場所	目的	書の有無
1944年	题彝器图象拓本 四首		文化	
1945年2月5日	访徐悲鸿醉题		文化	
1945年2月6日	磐磐大器		政治	
1945年2月19日	赠国际友人	重慶	抗日プロパガンダ	
1945年	詠兰		国民党風刺	
1945年3月7日	詠梅		政治	
1945年3月7日	题画梅 二首	重慶	文化	●
1945年3月18日	贺友人在巴黎公社纪念日结婚	重慶	政治	
1945年3月18日	泰山不让壤	重慶	感慨	
1945年3月28日	和金静庵		感慨	
1945年4月20日	忆樱桃树	重慶	国民党風刺	
1945年4月23日	题书画册	重慶	文化	
1945年夏	苏联纪行 五首	ソ連	感慨	
1945年10月21日	为 文协 联谊晚会 题诗	重慶	感慨	
1945年10月	沁园春和毛主席韵 二首	重慶	政治	●
1945年11月	祭昆明四烈士	重慶	国民党風刺	
1945年	詠史 四首		感慨	
1945年	松崖山市		感慨	
1945年	题 特园		国民党風刺	
1945年	题敦煌画展		文化	
1946年5月	诗一首	上海	反国民党 国共内戦	
1946年	赠于伶	上海	反国民党	
1946年11月15日	疾风知劲草		反国民党	
1946年	送茅盾即席赋诗		反国民党	
1946年11月29日	题 南天竹 二首	上海	文化	
1946年12月21日	送茅盾赴苏联		ソ連追慕	
1947年1月	为捉鬼传赋诗		反国民党	
1947年3月12日	祝田汉五十寿辰		民主化	
1947年7月	三十六年七月偶成 题赠黄裳先生	上海	反国民党	
1947年11月	海上观日出	香港	共産主義	
1947年	十月感怀诗 四首		共産主義	
1947年11月	再用鲁迅韵书怀		共産主義	
1948年4月27日	为蔡贤初五七寿辰题诗		共産主義	
1948年7月	赠林林		共産主義	
1948年9月3日	论诗文七绝 六首		共産主義	
1948年	题王晖棺刻画		文化	
1948年	为上海韬奋图书馆成立题词		共産主義	
1948年11月	赴解放区留别立群	香港	共産主義	●
1948年11月	咏金鱼		共産主義	
1948年	金环吟		共産主義	
1948年	舟行阻风 三首		共産主義	
1948年11月26日	和夷老 二首		共産主義	
1948年11月29日	和丘映芙 二首		共産主義	
1948年	船泊石城岛畔杂成 四首		共産主義	
1948年12月	渔翁吟		反日プロパガンダ	
1948年12月4日	送翦伯赞		共産主義	
1948年12月6日	和阎宝航		共産主義	
1948年12月8日	为刘澜波题手册四绝		共産主義	
1949年	北上纪行 十首	沈陽	共産主義	●

日時	作品名	場所	目的	書の有無
1949月1月3日	火龙吟		共産主義	
1949年1月21日	寄立群		感慨	
1949年1月22日	书为李一氓联语		共産主義	
1949年1月22日	题灯罩诗三首		共産主義	
1949年1月22日	题木偶半身像		文化	
1949年1月25日	为周铁衡题印草第二集		文化	
1949年1月29日	吊冯裕芳		弔詩	●
1949年1月29日	为李初梨题画 二首		文化	
1949年2月3日	为谭平山题画马		文化	
1949年2月5日	龙凤喜瓶		共産主義	
1949年2月10日	题画		文化	
1949年2月21日	赠中国医科大学		共産主義	
1949年2月25日	抵北平感怀	北京	共産主義	
1949年2月	题 樱花		文化	
1949年5月	在莫斯科过五一节 四首	モスクワ	ソ連視察	
1949年5月15日	为烈士纪念馆题诗		共産主義	
1949年5月15日	咏杨靖宇将军		共産主義	
1949年5月15日	题哈尔滨烈士馆		共産主義	
1949年9月20日	新华颂		頌歌	

に変わったと考えられる。

また北伐期の作詩の少なさに対して、抗日戦期の多作は、その立場の差を如実に表していると言える。

漢詩数を統計的に見れば、郭沫若の旧体詩の制作年代は、その変遷に応じ、日本留学以前を四川期、日本留学期、北伐期、市川市滞在期、抗日期のように分けることができる。その制作数を統計的にみると市川滞在期以前の作品は比較的少なく、日中戦争期以後、特に多くなった傾向がある。そして抗日戦争期は、抗日のプロパガンダとしての作品がほとんどである。

三　郭沫若書法変遷についての先行研究

本邦に於いて郭沫若の書法についての研究は、河内利治氏の『郭沫若書法管見』(『現代中国文化与文学』二〇一三年第〇一期)が嚆矢と言えるだろうが、未だほぼ未着手と言っても過言ではない。そしてその中で、河内氏はその「郭体」と称される書風の要素に王羲之の「集字聖教序」や顔真卿の「祭姪文稿」「争坐位文稿」の影響を看取されている。

対して中国の研究では、二〇〇〇年代に既に論文が発表されているが、ここに主だったものを一覧し、郭沫若の書風の変遷についての言説を確認しておきたい。

① 彭玉斌「试论郭沫若书法与文学作品的美学特征」『郭沫若学刊二〇〇一年第二期(总第五六期)

② 唐进 龙鸿 「郭沫若书法艺术探析」 『重庆大学学报 社会科学版』 二〇〇四年第一〇卷第四期

③ 奎荣「大力推广“郭体”字型 弘扬郭沫若书法艺术」『郭沫若学刊』二〇〇五年第三期(总第七三期)

④ 巩蒙「郭沫若书法流变论纲」『郭沫若学刊 』二〇〇六年第三期(总

第七七期）

⑤ 高文 杨志立 李尧「郭沫若书法年表」『郭沫若学刊』二〇〇六年第四期 总第七八期

⑥ 李建森「反逆中的诗人性情—谈郭沫若书法」『小说评论』二〇〇六年

⑦ 曾韶翔「郭沫若书法艺术的美学特征探析」『郭沫若学刊』二〇一〇年第四期 总第九四期

⑧ 河内利治「郭沫若書法管見」『郭沫若研究会報』十二号 二〇一一年三月

⑨ 徐立昕 宣海生「郭沫若楷书研究」『郭沫若学刊』二〇一二年第一期 总第九九期

⑩ 吴胜景「关于“郭体”“逆入平出 回锋转向”的用笔特征驳议」『郭沫若学刊』二〇一五年第一期 总第一一一 期

⑪ 徐立昕 宣海生「郭沫若行草书平议」『郭沫若学刊』二〇一五年第二期 总第一一二期

まず、これらの論文に於ける「郭体」の使用例について見て行くと、

① 彭玉斌論文では、「郭体」という語は使われていないが、その書風について、

郭沫若的书法，以“颜体”为基础，继续了其大气磅礴的气势，但又不落窠臼，自成一体，犹如天马行空，不失独来独往的气概。

（大意）郭沫若の書法は“顔体”を基礎にし、その気迫に満ちた勢いを継ぐが、しかしまた旧套に陥らず、おのずと一つの体（スタイル）を形成しており、独創の風格を持って、一体を成しており、天馬が空翔けるように独立の気概を失っていない。

と述べられ、②唐进 龙鸿論文では、

总观郭沫若书艺演进变化历程，大概有过三次大的转折。少自颜而入，从谨严有度，楷法初具到溢而为行草，舒放自如，风流倜傥。此其一。 书家黄苗子说“后来在天官府郭老家，我印象最深的是一个长形镜框里，挂着郭老为于立群同志以小字书写的《胡笳十八拍》，用笔由方变圆，很象苏轼和米芾那种北宋风格，虽是楷书，笔调却十分豪纵自由，略带行书的味道。可见郭老在中年时代，书法又是一变”，沉鹏先生也认为“郭沫若对米字用功颇深”“米芾书法艺术中还有具有生命力的东西可供发挥，郭沫若的行书就受过米芾的影响，也许不是偶然的吧”！此其二。再后来，他醉心于甲骨文，石鼓文，诅楚文乃至秦汉诸刻石的考释研究，以学养书，博采众长、碑帖互掺，自出机杼，气慨豪迈，终使他自成一体，人誉之为“郭体”。此其三。

（大意）総じて、郭沫若の書法芸術の変転過程をみると、およそ大きな三度の転換がある。早年に顔真卿から入り、謹厳で法度があり、楷書が盈溢して行草となり、のびやか自在で、風流洒脱である。これがその一つ目である。書家の黄苗子がこう言っている「後に天官府の郭老の家で、私の最も印象深かったのは、長形の額縁で于立群同志のために書いた小字の《胡笳十八拍》が掛かっていたことだ。用筆が丸く、角張ったものから丸みに変じており、すこぶる蘇軾と米芾のような北宋の風格があった。楷書ではあるが、筆致が非常に豪快自由で、行書の味わいがある。郭老が中年でまた書法が一変したことが見て取れる」と。沈鵬先生も「郭沫若は米芾の字に対して、すこぶる深く勉強している」「米芾の書芸には生命力を提供するような要素が発揮されているから、郭沫若の行書が米芾の影響を受けたことは、偶然ではないであろう」と見なしている。これがそのふたつ目である。さらに後になると、彼は甲骨文、石鼓文、詛楚文、さら

に秦漢は諸刻石の解読研究に心を奪われ、学問によって書を養った。他人の長所を広く吸収して、碑文、法帖を互いに混じえ、おのずと文字構成は豪胆なものとなり、終には一つの書体を確立した。世人はこれを“郭体”とたたえている。これが三つめである。

とその形成過程について言及している。そして③刘奎荣論文に於いては、

郭沫若在书法艺术上的探索与实践历时70余年。他在少年时代就心仪“苏(东坡)体”，又受民国书法主流“碑帖结合”的影响。关于书法的学习，他在回忆录《洪波曲》中说，“我从前也学过颜字，在悬肘用笔上也是用过一番功夫的。”正是因为他早年师法颜鲁公的刻苦用功，所以他的作品中依稀可见颜鲁公的精神，比如线条的朴茂，敦厚，结构的宽博。20世纪20年代末，郭沫若东渡日本后，探奥于晋唐书法以及明中后期一些书法加以消化与吸收，致力于金甲骨文的研究，以字辨史，借史鉴今，谙熟了祖国文字，书法的演进轨迹，创立了古文字研究的科学模式。在民族危难之中，他于1937年毅然回国，为抗战而书，书法作品幅式走向大众化，字型结体，笔法起运，章法行气等，都有了新的面目，格调刚柔并举，或含蓄温和，或疾厉昂扬。其诗词创作常与书法相结合，翰墨间包含了深厚的时代气息和自强不息的民族精神。新中国成立以后，郭沫若在繁重的国事之余从事了更为丰富的书法创作。其作品“以行草为胜，是典型的文人才子书法”，学术界赞誉郭沫若是建国以后三十年间与毛泽东，舒同齐名的三位最著名的书法之一。郭沫若以”回锋转向，逆入平出“为学书执笔八字要诀。其书体既重师承，又多创新，被世人称为”郭体“，在其书法里头，充分表现出大学者，大文豪风范。

（大意）郭沫若の書法芸術の探求と実践は七〇数年に及ぶ。彼は少年時代に蘇体（蘇東坡の書体）を敬慕して、また民国書法の主流“碑帖の結合”の影響を受けている。書の学習に関して、彼は回想録《洪波曲》の中で、“私は昔、顔真卿の字を学び、肘を浮かせて字を書く技法でもひとしきり修練を積んだ”と言っているが、まさに早年に顔真卿の書法を手本に苦労して学んだので、彼の作品の中にその精神がはっきりと表れ、たとえば線の質朴さ、重厚さ、結構の広さがそれである。二〇世紀の二〇年代の末、郭沫若が日本へ渡った後に、晋唐から明中後期のあれこれの書法を深く探り、消化して吸収して、金文、甲骨文の研究に力を尽くして、字で歴史を区分して、歴史を今の鏡とし、祖国の文字と、書法の発展変化の軌道を深く知って、古代文字研究の科学モデルを創立した。民族の危難の中、彼は一九三七年に毅然として帰国して、抗日戦争のために書を制作し、書の作品の幅式は大衆化に向かって歩み、字形結体（字形の構成）、筆法起動（用筆の運動法）、章法行気（総合的な書法原理に基ずく流れ、気脈）など、すべて新面目を生み出しており、格調は剛（の書体や筆致）と柔（の書体や筆致）が二つながら作品のなかに併存し、書全体の味わいはおだやかで、筆遣いは、早くはげしく、また高揚した。その旧詩詞の創作は常に書法と結びついており、翰墨の間に深い時代の息吹と自強不息の民族精神を包み含んでいる。新中国創立後、郭沫若は多忙な国事の合間にこれまでよりさらに多くの書作品の創作をおこなった。その作品は“行草が楷書より優れていて、典型的な文人才子の書”であり、学術界は、郭沫若は「建国後三〇年間における毛沢東、舒同と名声を等しくする三人の最も有名な書法の中の一つだ」と称賛した。郭沫若は、「回鋒転向　逆入平出（筆鋒を回転させる遠心展開、筆を逆に入れ平たく出す蔵鋒的要素）」の八文字を書を学ぶ際の要訣と考えた。その書体は師承（師伝／師の教えの継承）を重

んじるものであり、また新たな要素を多く作り出すものでもあって、世に「郭体」と称された。その書の中には、人々の鏡となるような大学者、大文豪の風格が示されている。

と述べ、はじめ蘇軾、顔真卿の影響を受け、日本留学後、晋唐から明中期の書法を消化、さらに古文字の研究によって科学的な研究モデルを確立した。抗日戦争で帰国した後は、大衆化の方向に向かい、民族精神を鼓吹した。新中国建立以後は、行草を主として文人才子の書を披露し、毛沢東、舒同とともに三人の代表的な書家と目されたとあり、さらに「回鋒転向　逆入平出」に象徴されるような用筆的な定義も見られる。さらに④巩蒙論文では、摘要の中で、

郭沫若是学者型书法家，高擎宋“尚意”书法大旗，对传统书法进行广泛的继承和借鉴，于传统进行了一次“新变”，终形成自家风格。郭沫若的书法早年受到碑派以及苏东坡和颜真卿的影响，中年后，在苏，颜基础上参以米芾笔法意趣终成“郭体”书法面貌，尤以行草书为长。晚年因一味“跟随”，学习借鉴怀素失败，又由于各种客观原因形成了重“宣情”的书法取向，导致书法出现衰退。

(大意)郭沫若は学者型の書家で、高く宋の“尚意(形式よりも感情表現を重んじる)”の書法の旗を掲げ、伝統の書法に対して広範な継承と参考を重ね、伝統を一歩進めて“新変”を行い、遂には自己の風格を形成した。郭沫若の書法は若い頃、碑学から蘇東坡と顔真卿までの影響を受け、中年以降に、蘇、顔の基礎の上に米芾の筆法の面白みを加味し“郭体”の書法の面貌を形成し、とりわけ行草書に長じた。晩年はひたすら“毛沢東に付き従”い、唐代の書家懐素を手本として学んだが失敗し、その上各種の客観的な原因によって「プロパガンダ」を重んじる書の方向付けを形成したため、書法の衰退が現われることになった。

と総括されており、中年期の蘇軾、顔真卿を基礎にして、そこに米芾の筆法の趣を得て、「郭体」が形成されたとある。また⑥李建森論文では、

他的书法逆入平出，回锋从容，转向自如。平中寓奇，奇正相生。疏密有致，俯仰有姿。他的书法的个体风貌是异常显明的。这种鲜明确立，已经说明他的书法语言是个人的言说，写出了自我，世称“郭体”并非因人而名，故非虚誉。

(大意)彼の書法は「逆入平出　回鋒転向」で転回が自由自在である。平凡の中に奇(非凡)を寓し、奇(珍奇)と正(正統)が互いに生じている。疎(まばら)と密(密集・凝集)の対比に致(風趣・趣き)があり、文字の上向きと下向きに趣がある。彼の書法の個の風貌(個性)は非常にはっきりしている。このような鮮明な確立は、すでに彼の書法の言語が彼個人の言説であり、自我を表出しており、世に“郭体”と称せれるのは、人によって名づけられたものでなく、従って根拠のない誉め言葉ではないことを示している。

とある。

⑧河内利治論文では、その「郭体」と称される書風の要素に王羲之の「集字聖教序」や顔真卿の「祭姪文稿」「争坐位文稿」の影響を看取されていたことは、先に触れた。

以上の考察は、「郭体」定義について、書法風格史による印象論的なものが多く、何時、どの時点、どの作風、若しくはどのような用筆が、それを定義為し得るかとう言う点が、曖昧模糊としている。その欠点について、初めてメスを入れたのが、⑩吴胜景「关于“郭体”“逆入平出 回锋转向”的用笔特征驳议」『郭沫若学刊』二〇一五年第一期 总第一一一 期である。

以下、この⑩吴胜景論文について、詳しく分析していきたい。

四　吴胜景「关于“郭体”“逆入平出 回锋转向”的用笔特征驳议」に就いての考察

先ず、吴胜景論文では、従来「郭体」の定義となっている「逆入平出 回锋转向」という用筆観について、批判を始める。そして吴氏は、

因此，可得如下结论“逆入平出 回锋转向”这种说话，是历史上大多书家共同总结出的基本书写技法，是所有书家在书法学习中都要求做到的，而不是郭沫若一人的个性特征，也不能说是郭沫若本人的书法成就，亦不能概括为郭体典型的书写特色，更不能作为郭体独创的书写的技法。

(大意)そのため、下記のような結論を得ることができる。“筆を逆に入れ平たく出す蔵鋒的要素、筆鋒を回転させる遠心展開”この種の話は、歴史上の大部分の書家が共有する基本技法であり、すべての書家が書法の学習に於いて、到達することを求めるものであって、郭沫若の一人の個性的な特徴ではなく、また郭沫若本人の書法の成果というわけにはいかない。また、郭沫若の典型的な特色だと概括することはできないし、まして郭体の独創的技法とするわけには、もっといかない。

と述べ、その用筆は、郭体特有のものではなく、「(一人や二人の書法の独創ではなく、長い書法史の歴史の中で多くの書家が積み重ねてきた努力の結果)」共同でまとめあげ、共同で作り上げた(と言っていい)また郭体の典型を為し得るものではないと、反駁する。

そして、郭沫若の「逆入平出 回锋转向」の用筆は、

这样一来，我们就只能说郭沫若曾经在学书初期(主要存在大中楷作品上)很注意“逆入平出 回锋转向”的用笔特征应该是比较合适的。那么根据郭沫若学书的各个时期的作品书写情况，现在我们仅可作此判断，或许郭沫若在学书之初，可能也是很在意这种“逆入平出 回锋转向”的基本用笔要求，但到后来形成真正的郭体书风时，却又几乎失去了这种用笔基本标准。

(大意)こうなると、我々は郭沫若が、かつて書を学び始めた最初の頃(主要には、大中の楷書作品に存在するのだが)に「筆を逆に入れ平たく出す蔵鋒的要素、筆鋒を回転させる遠心展開」の筆法に注意していたと言えるだけだ、というのが比較的適切だとすべきである。だとすれば、郭沫若が書を学んだ各時期の作品の制作の情況に基づいて、今私達はただこういう(＝以下のような)判断することができるだけである。つまりもしかしたら郭沫若は学書の初期に、このような「筆を逆に入れ平たく出す蔵鋒的要素、筆鋒を回転させる遠心展開」の基本的な用筆の求めにも大変注意を払っていた可能性があるが、後になって本当の郭体が形成した時には、却ってそのような用筆の基本標準をほとんど失ったのかもしれない、という判断である。

とし、それは学書初期の特徴であって、反って後に形成された本来の「郭体」を定義するのに相応しくないとした上で、

故而，笔者认为，与大家所公认的“逆入平出 回锋转向”书法用笔不同的是，真正意义上的郭体(也即是形成了个人书风特征时期的作品，大约是在上个世纪50年代之后的时期)，反而是缺少了尤其是“逆入”的藏锋笔法，但正是因为郭体的起始用笔中大多并没有真正体现出逆入的藏锋笔法，所以他的书体中

却因而多了一份随意，也就有了他狂放恣意的性情之用笔，当然其中过多的近于随意的笔法与质量不高的线条行笔也导致了书写诟病，从而形成了众多批判、学者因法度不严谨而把郭体视为下品的批判之实。

（大意）そこで、筆者はおもうのだが、みなさん公認の「筆を逆に入れ平たく出す蔵鋒的要素、筆鋒を回転させる遠心展開」の用筆と違って、本当の郭体（それは個人の書風特徴が表れる時期に形成された作品であり、大体は一九五〇年代の後期のものだが）、かえって特に「筆を逆に入れ平たく出す蔵鋒的要素」が少ないのだ。だが、まさに郭体の初めの用筆には「筆を逆に入れ平たく出す蔵鋒の筆法を真の意味で体現していないものが大多数であるために、彼の書体の中には随意（用筆の基本に拘束されず自分の書きたいように書いてしまう）の要素が少し増えてしまっている。また言えば彼の狂放恣意の性情にまかせた用筆が生まれているのだ。もちろんその中のあまりに多すぎる随意に近い筆法と、品質の高くない線の運筆が書写の欠点をもたらしており、それが多くの批判的学者（書を学ぶ）が、書法のきまりが厳格、厳密でないために、郭体を下等品と見た批判の実質をつくりあげたのだ。

とし、「郭体」を定義するのは、それよりもむしろ逆入の蔵鋒的要素が少ないもの、特に五〇年代後期の書風であり、そのために逆に法度を重んずる学者の批判を招いたと総括している。

この吴胜景論文の長所は、従来の印象論的な判断を批判し、より具体的に「郭体」を定義せんとする試みであることだと言えるだろう。

これまでの時間の推移、つまり書風変遷の分析の欠落を補っているが、拙論ではその検証を部分的に批判し、少しく進めた。

次に既に提出した拙論を再度解説し、またその自己批判を行い、更なる「郭体」の実像に迫りたいと思う。

五　時間の推移と書風変遷の検証

一　抗日戦争期に於ける「第一期郭体」の誕生

先にこの考察は、郭沫若の行草体に限定して論を展開することをあらかじめ断っておきたい。

郭沫若によって残された書は、楷書、隷書、甲骨金文等と実際は多岐に亘っているが、最も多く残されたのは、行草体であり、その「郭体」という認識、それに伴う議論も、この書体に限定されて行われてきた経緯がある。そして従来その行草体について、その言語性についての考察を行ったものは、ほとんどなく、唯一「白話詩」に的を絞って行われた考察として、

・徐立昕　宣海生「郭沫若行草书平议」郭沫若学刊　二〇一五年第二期（总第一一二期）

が挙げられる。

A　白話文の書相の変遷

東アジアに於いて所謂「硬筆」が、如何に普及し、その用具が如何にその文学に影響を与えたか、この問題については、既に若干の考察がある[1]。そもそも万年筆等、中国に硬筆が流入したのは二〇世紀初め、そして万年筆が工場に於いて製造され始めたのは、一九二六年、場所は上海とされているが[2]、日本でも既に明治期に流入しており、大正期に急速に普及したとされている[3]。

そのような筆記具の大きな変遷のうねりの中で、一九一四（大正三年）に来日し二〇年代前半、一度目の日本滞在期を過ごした郭沫若にどのように影響を及ぼしたのか、現在の資料では、定かではない。

因みに、一九二〇年代前半に書かれた白話詩の主だったものを挙

げると、一九二一年に「女神」が、一九二三年に「星空」などがあるが[4]これらが硬筆で書かれたのかどうかを示す資料が管見では見つかっていない。ただし、一九三〇年代に入ると硬筆で書かれた資料が確認できる。

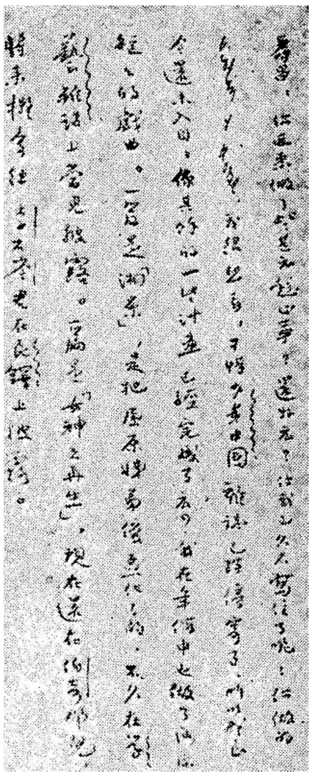


図 1

確認し得た一九二一年一月十八日の手紙文「致寿昌(田汉)函」(図1)を見ると、それが小筆で書かれていることが分かる。これは、当時の郭沫若の日常書風を知る上で貴重な資料であり、この丸味を帯びた書風骨子のまま肉付きがよくなったスタイルが、一九三六年に書された、五章の図2「魯迅を悼む」の様式と言えるだろう。また、この書風は米芾の影響があるというよりは、彼の書き癖という方が正しいかもしれない。

さらに郭沫若の白話文、白話詩資料を探すと、一九三〇年代のものは、あまり多くは残っていないが、『郭沫若研究会報』第二〇号には、郭沫若が周作人に宛てた一九三五年の年賀状が公開されている。

また郭沫若が、市川在住期に、文求堂の田中慶太郎父子と交わした書簡合計二三〇通が、すべて『郭沫若致文求堂書簡』(馬春良、伊藤虎丸編、文物出版社、一九九七年一二月)として写真付きで刊行されてはいる。これは一九三一年六月から三七年六月、日本を離れる前月までのもので、三〇年代の郭沫若の書を考察する好個の資料である。なぜならここには、世に公開するための、いわば余所行きの文字ではなく、くだけた日常の郭沫若の、くつろいだ時の書があると思われるからである。このほかに、『郭沫若書簡—致容庚』、蔡震『郭沫若成生平文献史料考弁』(社会科学文献出版社、二〇一四年)、には三〇年代の書跡の写真が載っており、郭平英、秦川編注『敝掃集與游』(中国社会科学出版社、二〇一二)年、にも、留学期の家書の写真が載っている。

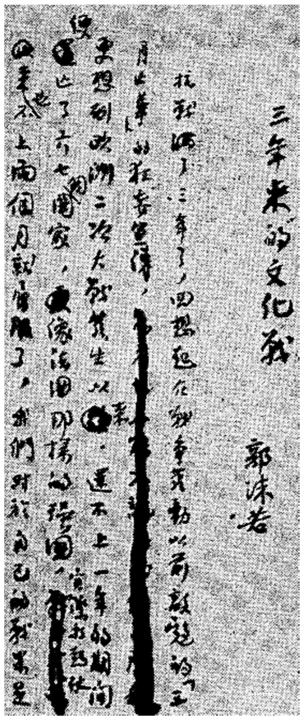


図 2

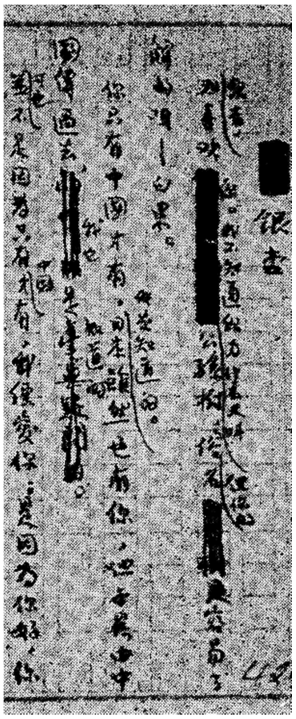


図 3

そして、一九四〇年代に入って四〇年七月七日「三年来的文化战」(図2)があり、一九四二年五月二三日の散文「銀杏」の原稿(図3)が残されており、同年六月二四日に「水牛讃」詩が白話体の様式で書作されている。また徐立昕氏、宣海生氏の指摘によると、一九三五年の「同賦失恃之痛」が一つの指標となり、それ以前はこれらの

行草様式は、ほとんど残っていないとされている[5]。つまり白話文を小筆で書くのは、既に一九二〇年代にも確認できるが、白話を硬筆で書く時期については、何時からかは定かでない。ただし手紙、散文、白話詩と同じ白話文であることからも、小筆と硬筆が同時並行的に行われていた可能性は指摘できる。また、一九三〇年代に多く残されている古文、つまり漢詩の書は、謹厳な楷書などで書かれた伝統様式と、白話詩の調子で書かれたものが存在し、一九三〇年代後半に入って、文学と書の様式が混濁していったと言うことはできるだろう。

B　一九三七年から一九四六年にかけての作品分類と様式分析―抗日戦線に於ける抗日宣伝活動下の新書風の形成

一九三五年下半年，待在日本安心做学术研究的郭沫若又开始活跃起来，他和东京“左联”成员往来密切，并在一九三六年参与到“国防文学”的提倡和宣传中来。过去，我们过多强调郭沫若赞同“国防文学”的缘由是服膺党的政策，但这并不意味着他在民族话的构建和表述中失掉了自己的主体地位，并不能说他仅仅只是一个“喇叭”，一个政策的传声筒。郭沫若自参与到左翼文学由阶级话语转向民族话语的过程中，就有他自己的一套体系建构。这从他一九三六年以来的诗文中就可看出。（张武军「民族精神家园的建构-郭沫若一九三六年以来的诗文分析」）

（大意）一九三五年の下半期、日本で身を入れて学術研究をしていた郭沫若は、また活発に活動を始める。彼と東京の“左聯”の成員との関係は密接になり、一九三六年には“国防文学”の提唱、宣伝に加わった。これまで、我々はあまりに郭沫若が“国防文学”に賛同の原因を党の政策に服膺したためだと強調し過ぎたが、これは彼が民族の言語の構築と叙述の中で自己の主体的な立場を失ったことを意味しない。また、かれが、単に一つの「ラッパ」にすぎず、党の政策宣伝を伝えるマイクロフォンに過ぎなかったと言うことはできない。郭沫若は、左翼文学に参与して階級の言説から民族の言説に転じる過程で、自己の体系を打ち立てた。これは彼の一九三六年以来の詩文の中で見抜いだすことができる。

郭沫若の民族主義的な思想が[6]、文学の上で特に顕著になるのは一九三六年以後、また一九三七年七月の盧溝橋事件が勃発して以後、国家と民族の危機に直面し、日本政府の監視の目を逃れ、帰国してから際立ってくる。第二次国共合作が実現した状況下に於いて、中国文化芸術界に於ける抗日救国運動のリーダー的存在となり、「もし文化が滅びるなら、民族そのものが永久に敵の手に落ちることになる」と宣言した抗日の英雄的存在となる。郭沫若は、特に一九四〇年代に入り『屈原』などの歴史話劇作品、『十批判書』『青銅時代』などの学術著作及び大量の詩歌や散文、書画を制作発表し、祖国の同胞が心を一つにし、生死を共にするように奮い立ち、中華民族復興のために決然と闘い抜く決意を固めるべく、所謂「運動」を行った。

つまり当時の活動とは、日中戦争の時期に於ける中国文化の建設と学術思想の活発化、芸術創作の繁栄に向けた尽力だったと言える[7]。

そして郭沫若の詩歌や、書を分析する場合も、そのような歴史的、民族的潮流の中で思惟しなければならないだろう。

C　白話詩と古文の合流と新しい民族意識としての書風

一九三七年以降、特に一九四〇年代の郭沫若の文芸作品は、「抗日文芸運動」と「文白之争」[8]の二つの文脈で見る必要がある。

まず一九四二年六月に書された図４の「水牛讃」は、完全な白話詩の表現であり、また従来の郭沫若の白話書風の延長線上にある作品と言えるだろう。また一九四三年に書された図５の「論做人」も白話文の表現として洗練されている。

ここで問題として上げたいのは、図６の一九四〇年九月に書された文語の漢詩「題蘇子樓」である。この書風は、抗日戦争以前の伝統書風ではなく、白話書風で書されていることに注意したい。つまり郭沫若は、抗日戦争以降は、文語詩も白話書風で書くようになったと言えるだろう。この原因として考えられるのは、前掲、刘奎荣「大力推广“郭体”字型 弘扬郭沫若书法艺术」に於いて述べられていたように、大衆化と民族精神の発揚として、日本とは一線を画する白話書風を基盤に文語書風にまで浸透し変化したと考えられるだろう。またこれは、先に見た共産党員の書のアイデンティティーの一脈を受けている。

またさらに詳しくは、巩蒙「郭沫若书法流变论纲」に於いても、

一九三七年卢沟桥事变后，全民族的抗日战争爆发。郭沫若别妇抛雏，涉险回国，投入到伟大的抗日战争之中。归国后郭沫若担任国民党政治部第三厅厅长，团结文化艺术界人士，以文艺为枪，宣传抗日。“为抗战而书”便成了郭沫若的历史使命。郭沫若书法创作只是余暇之事，然而他以恢弘的学养，博学约取，兼收并蓄，笼万端于笔下，化传统书法精神为己法，创作了大量书法作品。郭沫若追溯中国书法史上诸种书法字体，流派进行消化和吸收，面对国耻族恨“为抗战而书”使其书法趋向大众化，结体，笔法，章法更趋向成熟，郭沫若的书法风格在这时期基本形成。或冲淡平和，或激扬迅厉，表现出强烈的个性品格和时代精神，豪放明快，不拘绳墨，即如沉伊墨所说的“意造妙参无法法”全由个人性情而书。总体特征是终其一生所理解并付之于实践的孙过庭《书谱》句“回锋转向，逆入平出”，以王献之外拓的书法精神为主，有藏有露，有方有圆，独具特色。在章法上，大小，欹正，粗细参差错落，大部分作品布局合理，气韵流畅自然。

（大意）一九三七年の盧溝橋事変の後、全民族の抗日戦争が勃発した。郭沫若は夫人に別れを告げ、幼子を残して、危険を冒して帰国、偉大な抗日戦争の中に身を投じた。帰国後、郭沫若は国民党政治部第三庁庁長を担当して、文芸界の人士を団結させ、文芸を銃として、抗日を宣伝した。“抗戦のために書を書く”は郭沫若の歴史的使命となった。郭沫若の書法創作は、ただ余暇の事にすぎなかった、しかし彼は幅広い学殖、その博学さ、すべてを吸収し蓄え、様々な言葉となって筆下に現われ、伝統の書法を溶かし自分の法とし、大量の書の作品を創作した。郭沫若は中国の書法史上の様々な字体を遡り、流派は消化、吸収し、国恥に直面した民族の恨みとなって“抗戦のための書”として大衆化に向い、結体、筆法、章法が更に成熟して、郭沫若の書風はこの時期、基本的に形成されたのである。あるいは穏やかで、あるいは興奮し激しく、強烈な個性の品格と時代精神を表して、豪放明快で常識にとらわれていない。沈尹默が言う“意が妙を造り、無法の法に参じる”であり、個人の性情から書された。全体の特徴は、結局は一生、理解実行した孫過庭《書譜》の文句を“筆を逆に入れ平たく出す蔵鋒的要素、筆鋒を回転させる遠心展開”であり、王献之の外拓の精神を主として、蔵鋒あり露鋒有り、方あり円がありで、独自に特色を具えた。章法上の、大小、欹正、粗細は、すべて混じり合い、大部分作品の布置は理に適い、気韻は流麗自然であった。

とあり、当時の書風に、中国の古典的要素を読み取り覚醒したように捉えているが、私見では、白話書風の中に、そのような要素が元来備っていたこと、また書も余暇の遊びではなく立派なプロパガンダの役割を担っていたと判断したい。

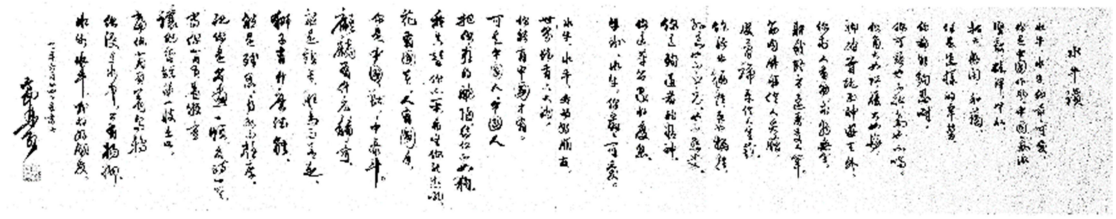


図 4

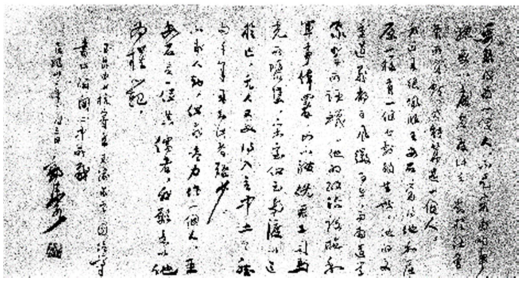


図 5

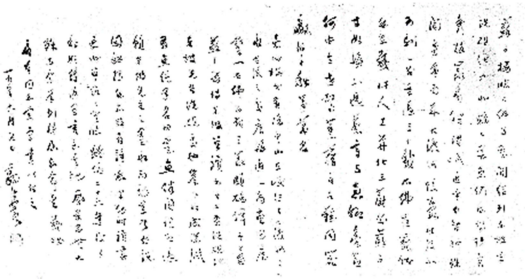


図 6

D　文学に見える思想性

一九四〇年代前半に入り、郭沫若によって本格的な中国春秋戦国時代の思想の総括が行われた。所謂一九四五年に上梓された『十批判書』の中に、その思想は顕著に表れている。郭沫若はその中で、孔孟は「人民本位」、墨子は「帝王本位」、老荘を「個人本位」と定義した。

中でも「孔孟之徒是以人民为本位」とする理由について、孔子を評価する際に、

本体上他是站在代表人民利益的方面的，他很想积极利用文化的力量来增进人民的幸福。

(大意)全体的に人民の利益を代表する立場に立ち、彼は大変積極的に文化の力を利用して、人民の幸福を増進しようと思っていた。

と述べ[9]、孔子が人民の幸福の追求したことを評価し、さらに、当時の北宋の政治家、王安石についても「人民意識の代表」と位置付けた。また王安石の『明妃曲』の「人生失意無南北」に着眼し、

“人生失意无南北”，是托为家人慰勉之辞，固不用说，然王昭君的家人是秭归的老百姓，这句话倒可以说是表示透了老百姓对于统治阶级蹂，躏女性，蹂躏人民，实在是无分东西南北的。这儿正可以看出王安石对于民间心理了解程度，也可以说就是王安石的精神，同情人民而摧除兼并者的精神。

(大意)“人生の失意に南北はない”、家族のために慰め励ます辞に託けていて、もとより言うまでもない。しかし王昭君の家族は秭帰県の百姓で、この話が却って支配階級の百姓、女性、人民への蹂躏を鮮明にして、実際には東西南北に分けることがない。ここは王安石が民間の心理についてある程度を理解しているこ

とを見抜くことができ、王安石の精神だとも言うことができて、人民に同情して、破壊、併合者の精神を排除している。

「人生の失意に南北なし」とはこれに託して家人を慰め励ます辞であるのは、もとより言うまでもない。だが王昭君の家人は秭帰県の老百姓（一般庶民）であって、この言葉は実は支配階級が女性や人民を蹂躙しており、（自分たち）庶民は実際には十分に東西南北（住所不定の流浪の民）だという庶民の【看法（見方、考え方）を示していると言っていい。ここから、まさに王安石の民衆心理に対する理解の程度を見出すことができ、また王安石の精神は人民に同情し、兼併者（土地を収奪して併合し、大地主になっていく者）を斥けるという精神だということもできる。

と述べ10、儒教の継承者としての王安石を論じている。

図7はそのような人民の儒者、王安石の詩「長千寺」を書したものである。

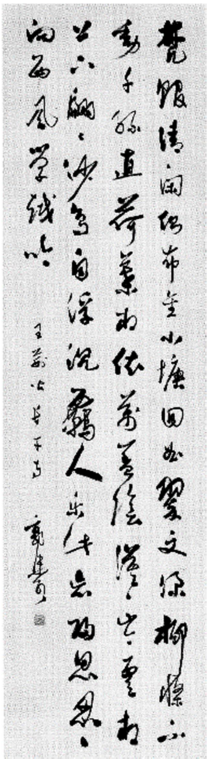


図 7

（本文）梵館清閑側布金、小塘回曲翠文深。柳條不動千絲直、荷葉相依萬蓋陰。漠漠岑雲相上下、翩翩沙鳥自浮沈。羈人楽此忘歸思，忍向西風學越吟。

大意は、旅人が帰郷を忘れ、その地の風習をならう内容だが、その書風は、白話体をベースにした、人民儒者たる王安石像が見事に反映しているといえるだろう。

E　抗日戦線に於ける経世致用「第一期郭体」の誕生

所謂「郭体」という書風を如何に定義し、それが如何に形成され、円熟したか、この問題については未だ本格的に着手されていないと言えるだろう。

「郭沫若書風」「郭体」そのものについての先行研究は、既にいくつか記されており、些か重複するが主だったものを列記すると、彭玉斌「试论郭沫若书法与文学作品的美学特征」郭沫若学刊二〇〇一年第二期（总第五六期）

刘奎荣「大力推广“郭体”字型 弘扬郭沫若书法艺术」郭沫若学刊二〇〇五年第三期（总第七三期）

吴胜景「关于“郭体”“逆入平出 回锋转向”的用笔特征驳议」郭沫若学刊二〇一五年第一期（总第一一一期）

が挙げられる。

概要を述べると、二〇〇一年の段階に於いては、郭沫若の書風は、「郭体」というタームではなく、その書風を総じて美的要素が詳しく定義され、二〇〇五年には、「郭体」という言葉が使用され、その歴史についても若干の言及が見られる。

さらに二〇一五年にはその「郭体」という定義への反駁が見られ、その書風が見られるようになるのは、五〇年代後期からだとする新たな定義による知見が示されている。

では、そもそもその一般的な中国人研究者による印象論的「郭体」とは、いかなる書風＝書法様式なのか、見ていくと、彭玉斌氏は、その書風について、

郭沫若的书法，以“颜体”为基础，继续了其大气磅礴的气势，但又不落窠臼，自成一体，犹如天马行空，不失独来独往的气概。

と述べ、また刘奎荣氏は、

郭沫若以“回锋转向，逆入平出”为学书执笔八字要诀。其书体

既重师承，又多创新，被世人称为“郭体”，在其书法里头，充分表现出大学者，大文豪风范。书法作品笔力爽劲洒脱。

（大意）郭沫若は、「回鋒転向　逆入平出」…書作品の筆力は爽やかでつよく、俗気なくさっぱりしている。

と述べ、特に六〇年代の作品にスポットを当てた上で、一九六四年の「自力更生，奋发图强」の書について、

真是老辣苍劲，骨力雄健，气势磅礴，可谓世所难求的“郭体”艺术巨作，足显一代文豪贯笔端，形神皆备的非凡功力。

（大意）本当に老練で枯れた味があって力強く、気骨の力が雄々しく健やか、気力がみなぎっていて、世に求め難い“郭体”芸術の大作と言え、十分に一代の文豪たるをさまが筆先を貫き、外見と中身の全てに非凡な技と力を具えている。

とし、評価している。

これらのことから、「郭体」とは、一つに「逆入平出 回鋒转向」、つまり「筆を逆に入れ平たく出す蔵鋒的要素、筆鋒を回転させる遠心展開のこと」であり、さらに言えば、そこに「雄大な気勢」が加われば、定義を為し得ると考えられる。

この特徴、その生成過程を考えると、まず、蔵鋒的要素は、一九三〇年代にも既に確認でき、遠心展開は、前章で見た白話様式の文語への流入期、民国期の日中戦争以後に定着し、そこに独特の激しい気勢が加わり始めるのは、図８の一九四一年六月に書された「自作詩」にその端緒が認められる。

その詩の内容を見ると、

百萬雄兵一卷詩　指揮若定兩死之　鞭龍急起興霖雨　天下蒼生望有為

民紀卅年六月録近作以應忍安先生屬　郭沫若

（大意）百万の勇敢な兵士と一巻の詩。　指揮官はともに死ぬ覚悟だ。龍を鞭打てば急に雨が降り注ぎ、天下の万民に望みがある。

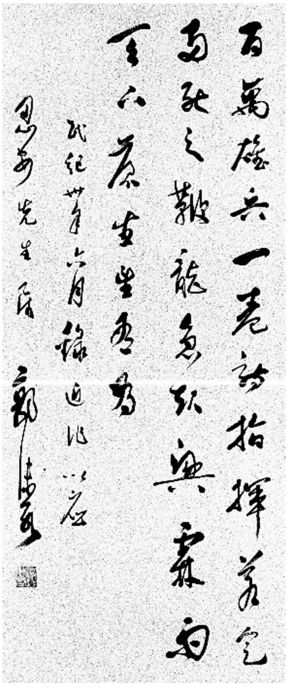


図 8

とあり、一九四一年六月に書された「自作詩」を見ると、日中戦争に於いて中国人兵士、民衆を鼓舞する内容であり、そのような抗日戦争期に於ける、中華民族意識の覚醒、その白話体が文語体に流入した書風、白話と文語の融合が一つ目の「第一期郭体」と定義できよう。

つまり、五四運動以降の、白話と文語の在り方を巡る議論、所謂「文白の争い」という葛藤は、当時の知識人が共有していた問題であり、無論、郭沫若も例に漏れなかった。

郭沫若は一九三〇年一月「文学革命之回顧」の中で、

封建时代的白话是不适宜于我们使用的，已成的白话大多是封建时代的孑遗。时代不断的在创造它的文言，时代也不断的在创造它的白话，而两者也不断的在融洽，文学家便是促进这种融洽的触媒。所以要认识文学革命的人第一须打破白话文与文言文的观念。

（大意）封建時代の白話は我々の使用しているものではなく、す

でに白話の大抵が封建時代の残存である。時代の不断の文語との創造は、両者を不断に融合し、文学者はその融合の媒介を促進してきた。よって文学革命者は第一に白話と文語の観念の打破にあると認識しなければならない。

と述べ、その融合を文学革命を担うものの使命と考えている。そして、その一つ目の決着が、書の様式としても抗日戦争期に模索されたものと考えられる。

また「郭体」を、敢えて「逆入平出 回鋒转向」という語で定義しようとするならば、「筆を逆に入れ平たく出す蔵鋒的要素、筆鋒を回転させる遠心展開」の下文「筆鋒を回転させる遠心展開」ならば、抗日戦争期の「第一期郭体」としても定義できる。

F　新しい書風と音韻意識

郭沫若の書風が、ほぼ日中戦争を境にして、変化していったことを前章まで見てきたが、彼の古詩に於ける音韻の意識はどのような様相を呈していたか、ここでは、それについて見ていきたい。

郭沫若の古詩については、王継权・姚国华・徐培均编注『郭沫若旧体詩詞系年注釈』上・下（一九八四年　黑龙江人民出版社出版）に於いて、ほぼ網羅されているが、その中でも抗日戦線期の彼の古詩、中でもその書が残っているものを確認していくことにする。

まず図９の

（●仄声　○平声　×押韻）

●　○　●×　○　●　○×　○　●　○

旋轉乾坤又一年　衝濤破浪似行船　蒙荘猶自齊生死

●　○　●×

善牧羊群重後鞭

廿九(1940)年歳暮　書懐　郭沫若

は書風自体は、在日時の伝統書風であり、平仄音韻とも遵守されていることが分かる。

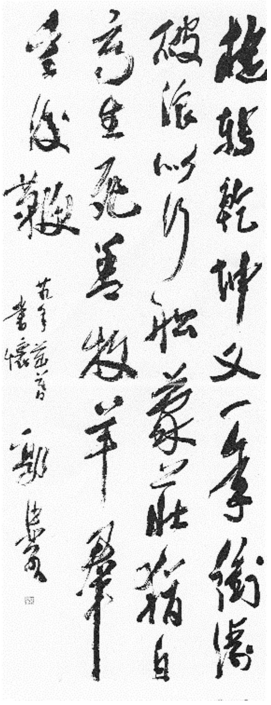


図 9

そして翌年の口語体が文語へと合流した図１０の書風の書は、

●　○　○　●×　○　○　●　○×

銀燭漸焼殘　幽光明欲滅　開門見天星　含笑悄相悦

●　○　○　●　○　●　●　○

耳塞了無聞　得非萬籟寂　涼風侵客肌　應有秋蟲泣

叔諒先生属　卅年(1941)二月録舊作　郭沫若

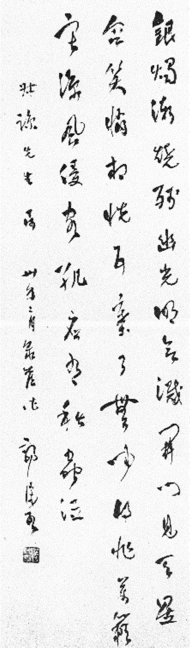


図 10

とあり、また同年の作、

●　○　●×　○　●　●×　○　●　○

百萬雄兵一卷詩　指揮若定兩死之　鞭龍急起興霖雨

●　○　●×

天下蒼生望有為

民紀卅年六月録近作以應忍安先生屬　郭沫若

も些少、平仄が乱れている。さらに、一九四二年の

○　●　○×　●　○　●×　●　○　●

江邊微石劇堪憐　受盡磋磨不計年　寧静無心随濁浪

○　●　○×　○　●　○　●　○　●×

飄浮底事問行船　内充真體圓融甚　外發英華色澤宣

●　○　●　○　●　○×

出水便嫌遺潤朗　可知籠竹亦宜烟

志斌先生雅屬　卅一年　春日　郭沫若

は、遵守され、翌年の

○　●　●　○　●　●　●　○

躊躇営四海　倚馬可千言　風霜時凜烈　肝膽仍純温

一九四三年十月一日、文化工作委員會成立三周年紀念。書贈嘯

冲同志　郭沫若

は、乱れており、当時古音の平仄への意識が甘くなっていたといるだろう。

しかし当時の書風を象徴する一九四二年の作品の図１１の書は、

●　○　●×　○　●　○×　○　●　○

曠代庸人數此王　糊涂一再太荒唐　招魂無計成哀郢

●　○　●×

坐令秦人混八方

民紀卅一年四月自三日至十七日《屈原》演出於陪都　而已兄飾楚懐王　書此奉贈以為紀念　郭沫若

○　●　○×　●　○　●×　●　○　●

深諳藝術即良心　況與詩詞協瑟琴　舞罷九歌成釣者

○　●　○×

酔人満目一知音

民紀卅一年四月自三日至十七日《屈原》演出於陪都　逸生兄飾《九歌》舞中之河伯兼釣者　書此贈之　郭沫若

とあり、厳密に順守されている。

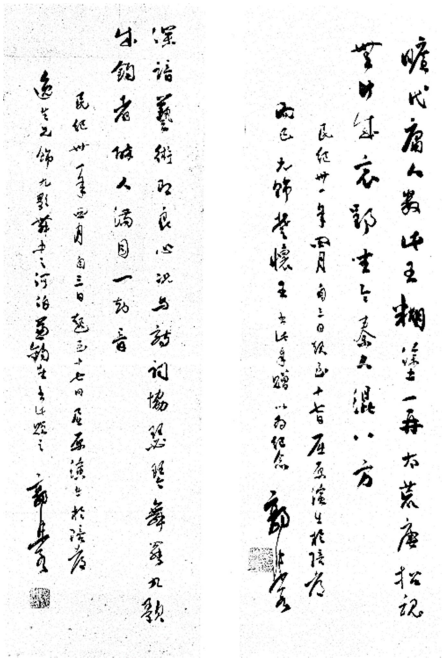


図 11

ここで注意したいのは、入声の扱いである。

少しく当時の中国での言語事情を振り返ると、一九二〇年一月、中華民国政府教育部は、各省に訓令を発し、同年の秋から国民学校一・二年の「国文」（文語体）を「語体文」（白話体）に変更するよう指示した。その後、文語文と白話文の対立は続き、所謂「文白之争」は一九四〇年代まで続くことになる11。ただし、一九三〇年代に入り注音字母から入声が消え、『国音字典』が改修し出版されるころ、大衆語運動が起こっている12。この入声とは、日本語の旧仮名使いで、「フ・チ・ツ・ク・キ」で終わる漢字を意味し、これらはすべて仄声となる。

つまり図１１の作品中にある「八」「術」「瑟」「目」などは入声であり、郭沫若の音韻意識は、抗日期の新書風形成時にも、厳格に伝統を保守した証左と言えるだろう。

つまり当時に於いて、郭沫若の口語書風の文語体への流入期にあって、些か音韻意識がアバウトになるものの、「入声」などの古音と伝統、平仄の意識は、基本的に守られていたと言えるだろう。

六　民国期と人民共和国期と款記等の変遷と意味合い

民国期後期から、郭沫若は文語体に於いても白話書体を基底にし、その上に文語書風を盛り込んだ重層的な様式（スタイル）を多用した。さらに共和国期になると、そこに気勢が増し、戦闘的になる傾向がある。共和国期の研究は別章に譲りたいが、本章では款記に於ける歴の使用について、その意味を考えたい。郭沫若は基本的には、人民共和国成立の一九四九年辺りから民国歴ではなく、西暦を使うようになるが、それ以前は通常、民国歴である。

その例外が図１２の作品である。これによると一九四三年、つまり民国三二年の段階で、郭沫若は西暦を使っていることになる。

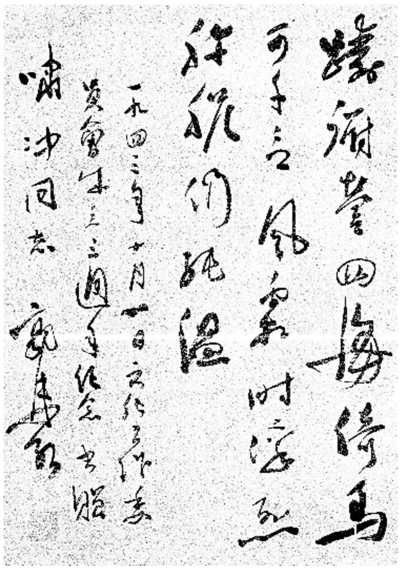


図 12

この書は、文化工作委員会成立三周年記念として書かれ、第一組（国際問題研究）の組長の一人、石嘯冲（社会学者）に書かれたものと考えられる。

そもそもこの文化工作委員会、通称「文工会」は、一九三八年四月一日、湖北省武漢において成立した国民政府軍事委員会政治部第三庁をその前身として誕生した。第三庁の下には、一般宣伝、芸術宣伝、対敵・国際宣伝を担当する第五、六、七の三処が置かれ、さらに各処を三科に分け、第五処は文字宣伝、口頭宣伝、印刷発行を、第六処は演劇、音楽、映画製作、美術宣伝を、第七処は企画、日文翻訳、国際宣伝、対敵工作をそれぞれ担当した。郭沫若の回想によれば、第三庁のメンバーは名簿上で三〇〇名、児童劇団等の付属組織を加えると二〇〇〇名以上に達したという。その後、非国民党勢力排除のため改組が行われもしたが、周恩来、郭沫若主導で、再び新組織は、「文化工作委員会」と名付けられ、一九四〇年一〇月一日に発足する。その主任が郭沫若であった。この組織は、無党派、国民党左派人士をメンバーに加え、一貫してリベラルの立場を保持していたが、一九四四年以降、共産党に急速に傾斜していく。つまり元来そのような性格を持った組織であったと言えるだろう[13]。この書には、

躊躇営四海　倚馬可千言　風霜時凜烈　肝膽仍純温

一九四三年十月一日、文化工作委員會成立三周年紀念。書贈嘯冲同志　郭沫若

（大意）痛心で天下を営み、卓絶した文才で千言をのたまう。風当りは厳しいが、肝は純温である。

とある。そしてその肝胆とは、その西暦を使用することからも左傾的な性格を有していたと言え、郭沫若も少なくとも当時、そのような意思をもっていたと考えられる。

七　小結

本稿では、従来希薄だった、「書法」と「文学」、また「歴史的背景」との関連を探るべく、一九三七（昭和一二年）、日中全面戦争開始前後から、郭沫若帰国後の抗日宣伝活動に伴う書風の変遷を中心に垣間見た。

特に郭沫若の白話書体から文語への流入、小筆書風が、書作品へと流入する経緯を一覧しようとしたものである。

「白話」は口語（話し言葉）を基礎にした文章語で郭沫若らの使った白話が、現代中国語の基礎になっているが、その書のスタイルは、概ね草書、伝統書法的要素の少ない実用重視、謂わば丸みのある癖字が多い。

この現象は、啓功ら伝統派書家が、白話と文語を峻別し、文語の書法風格論に終始するか、或いは逆に白話に伝統書法を持ち込もうとする志向と見事に対照している。

書風の変遷は、無意識の判断であったのか、自覚的な書に於ける抗日文芸運動、書の民族ユートピア構想の一端だったのか、未だ即断はできないが、明らかに中国史「洋務」「変法」「革命」の時代変遷の中で、書字文化の中でもがいた「革命」の書の一例であったことは、間違いないだろう。

そして郭沫若の「郭体(第一期)」の書は、伝統と白話体の併存から統合へとグラデーションのように鮮やかに変貌したものであり、特に白話に於ける「草書」の使用法は、文語の「回锋转向」と同義であり、彼の書き癖だったようにも思われる。

総じて日中戦争後の郭沫若書風は、戦争の文学、その書の反映だったとも言うこともできよう。

また、因みに逆に白話を文語で書く一派(文語派)、所謂、書法風格史を基軸とする伝統書法家として、その「写字」へのコミットの在り方が、共産党書法(口語・癖書派)と守旧、文語派書法(王羲之風・顔真卿風等)との分水嶺であるとも言えよう。この両軸の交差、変遷については、稿を改めて詳論したい。

さてつまりは、「書」「文学」「思想」「言語(音韻等)」、すべて相互に関連し合い、歴史の中で姿を変えていったと考えられる。

更に総括すれば、市川在住時代の書は、所謂個人的な「文人趣味(文語派)」の書の範疇を出ていないが、抗日期の書は、その政治的プロパガンダ、換言すれば「経世致用」の書となり、それが所謂「郭体」の誕生であり本質と定義できるであろう。

またここでの「郭体」は、敢えて言えば第一期のものであり、第二次国共内戦から共和国成立に於ける変化、共和国成立後の変遷、つまり「第二期」郭体以後の研究は次章以後で整理したい。

---

1 石川九楊『筆蝕の構造―書くことの現象学』(二〇〇三年　ちくま学芸文庫)

2 孙敦秀编著『中国硬笔书法简史』(二〇一一年　国防大学出版社)

3 馬場美幸「筆記具の変化から考える大正期「書キ方」教育」(『横浜国大国語研究』二〇号　二〇〇四年　横浜国立大学)

4 岩佐昌暲「日本における郭沫若『女神』の研究」(『海外事情研究』三九(二)二〇一二年　熊本学園大学付属海外事情研究所)

5 徐立昕　宣海生「郭沫若行草书平议」(郭沫若学刊　二〇一五年第二期(总第一一二期)

6 武継平「郭沫若の初期文学論考」(『比較社会文化研究』第五号　一九九九年　九州大学大学院比較社会文化研究科)、に於いては、郭沫若は既に高等学校時代から、その文学に民族主義的性格を有していたことが論証されている。

7 『日中友好の架け橋　郭沫若』(二〇〇九年　岡山県立美術館)

8 邹铁夫「上世纪三十年代到五十年代的文白之争」(『剑南文学』上半月　二〇一五年第一期　四川省绵阳市文联)

9 郭沫若『十批判书』〈孔墨的批判〉(一九五六年一〇月　科学出版社)

10 『评论报』(一九四六年第八期)『郭沫若古典文学论文集』(一九八五年　上海古籍出版社)

11 班婷「中華民国初期における国文科教育関係者の国語教育意識―教育関係雑誌を素材に」(『広島大学大学院教育研究科紀要』第三部第六四号　二〇一五年　広島大学大学院教育学研究科)

12 上野倫代「民国期の「国語」問題についての一考察ー雑誌『国語週刊』の位置付け」（『一橋研究』第三一巻一号　二〇〇六年　一橋研究編集委員会）

13 小林文男・柴田巌「日中戦争期・中国「抗戦文化」の研究　文化工作員会の組織と活動を中心に」（『広島平和科学』第一九巻　一九九六年　広島大学平和科学研究センター）

第十章　抗日戦に向けての政治活動と行書・贈《屈原》表演者二首を巡って

一　郭沫若の社会主義構想

そもそも郭沫若は、多くの他の共産党人士同様に、日本において共産主義に覚醒している。九州帝国大学時代、医学部に在籍していた郭沫若は、唯物論的な医療科学に啓発されていたことは、想像に難くなく、卒業の翌年一九二四年には、経済学者、河上肇の著書『社会組織と社会革命』を福岡で翻訳した。これによって彼の眼はそれまでの純文学の創作から社会変革の実践に向かい、郭沫若をはじめ創造社のメンバーは、北洋軍閥を打倒する第一次国内革命戦争に身を投じることになる。

しかし一九二七年春、郭沫若は工農労働者と農民革命を圧殺しようとした蒋介石の行動を暴露する文章を発表、国民党から逮捕状が出された。その後、宋慶齢ら七人と中国国民党革命委員会主席団を結成し、八月一日の南昌蜂起に参加したが、失敗。その後の革命退潮期に、中国共産党に入党した。

一九二八年、郭沫若は日本に亡命したが、その行動は日本の警視庁の監視下のもと、学問によってマルクス主義歴史学を先章で少しく垣間見たように樹立、その始祖となる。

一方で日本の作家、学者とも友人となり、中国左翼作家聯盟の活動を支持し、創作と翻訳に於いて成果を残した。

二　日本での共産党系人士との連携とその活動

郭沫若は一九二八年二月から三七年七月までのおよそ十年間、日本に亡命していた。当時を知る資料に「跨着东海」「我是中国人」「由日本回来了」などの記述、更に『郭沫若年譜』及び最近の論文が挙げられる。

その自伝に拠れば、警察と憲兵の二重監視を述べているものの、武継平氏の研究に拠れば、郭沫若は左翼社会活動家、田中忠夫と中国人篆刻家、銭崖を中心とする「日支人民戦線派諜報網」、その「日支人民戦線派」の一人であったが、中心的な人物ではなく、その反戦諜報活動に関わった可能性は少ない。つまり郭沫若は、警視庁に「共産主義者」のレッテルを貼られたものの、思想検察部門最高責任者、平田勲検事、日常の監視任務に当たっていた市川警察署の庇護により、実際は「要視察」である「重要容疑者」には認定されず、ごく一般的な「要注意外国人」として「保護性監視」を十年間受けていたとされている。

また一九三七年の市川事件「人民戦線派諜報网」逮捕者との関係を言えば、銭崖、藤原豊次郎、佐野袈裟美が郭沫若日本脱出に加担していたとされ逮捕された。その他、郭沫若と関係した主要日本人を挙げると、後に抗日戦期、「抗日反戦同盟」で活躍する鹿地亘と行動をともにした青山和夫(本名・黒田善次)、あと佐野袈裟美、田中忠夫、藤原豊次郎、岡部信次、広田義夫、野見晴夫、今関寿磨などが挙げられる。

また郭の脱出劇に資金的援助を行うのは、南京国民政府の窓口役に当たる王芃生であり、当時先の国民党との確執に拠って優柔不断でもあった郭を、民国政府の態度を示すものとして勇気付けている。

三　日本文化人との交流

ここで政治活動家と言うよりも、郭沫若と文化面で交流があった主だった日本人も一瞥しておきたい。

・藤枝丈夫、山田清三郎ら評論家との交流。

・作家の藤森成吉と学者石田幹之助との学術交流。

・彫刻家林謙三との交流。
・文求堂の田中慶太郎との交流。
・「質文」社同人との交流。
・一九三四年に翻訳された「日本短編小説集」には、芥川龍之介、志賀直哉、藤森成吉、横光利一らが紹介されている。
・竹内好、武田泰淳、松枝茂夫との文学者との交流。
・尾崎行雄らとの反戦政治家との交流。
・西園寺公望・犬養毅が郭沫若の『甲骨文字研究』を評価。
・林泰輔、中村不折、中島蠔ら甲骨文に関連しての交流。
・内藤湖南ら京都学派との考古学を通じての交流。

四　国民党左派と周恩来及び在華日本人反戦同盟

さて話は戻るが、郭沫若は、帰国後、周恩来の指揮する抗日戦争の文化工作を主管する国民政府軍事委員会政治部第三庁に入った。また鹿地亘率いる在華日人反戦同盟も実質上その傘下に入っている[2]。

つまり、郭沫若は左翼的日本人との連携の中で中華人民本位の、抗日文化宣伝活動を行っていたとも言える。

その活動は歴史劇、詩歌、旧詩、書などが、有機的な関係の中で展開されたと言えるだろう。

五　戯曲『屈原』について

戯曲　屈原

・中国の作家、郭沫若の五幕戯曲。一九四二年作。戦国時代、楚の高官であり『楚辞』の作者でもあった屈原を主人公とし、斉と同盟して秦にあたれとする彼の策が、秦の使者張儀の権謀術数、反対派の王子、奸臣、王の寵姫などの陰謀によって懐王に受けいれられず、かえって追放、投獄される悲劇を描く。屈原の愛国主義と彼を陥れる陰謀との対照に、抗日戦中の国民党による言論統制、共産党弾圧への批判を込めた作品とされている。四二年、重慶で初演されて大きな反響をよんだ。日本でも五三年（昭和二八）、前進座により初演。以後同座および同座脱退後の河原崎長十郎により数回上演されている。なお作者にはこれに先だち屈原論に「離騒」の現代語訳を付した『屈原』（一九三五）があり、屈原に対する早くからの関心を示している。

・『須田禎一訳『屈原』（岩波文庫）『日本大百科全書』七巻（一九八六年　小学館）等参考。

六　本詩の訳注と解釈

一九四二年の作品の図１の書は、戯曲『屈原』を演じた役者にあてた漢詩である。具体的にその訳注と解説を付けると、

曠代庸人數此王　糊涂一再太荒唐　招魂無計成哀郢　坐令秦人混八方民紀卅一年四月自三日至十七日《屈原》演出於陪都　而已兄飾楚懐王書此以為紀念奉贈　郭沫若

（大意）世に稀な浅薄な人としてこの懐王を数え、秦の使者、張儀や屈原の献策に反対派の王子、奸臣、王の寵姫などに騙されてむちゃくちゃで、しばしば出鱈目である。気が狂ったと陥れられた屈原の魂よせ（もしくは懐王の魂）の「招魂」も、計らずも国家への哀憤の情をあらわす「哀郢」となっていく。結果的に、秦によって全土が征服されてしまう。一九四二年四月三日から十七日まで『屈原』を重慶で上演する。顧而已が楚の懐王を演じた。書して記念に贈る。郭沫若

深諳藝術即良心　況與詩詞協瑟琴　舞罷九歌成釣者　酔人

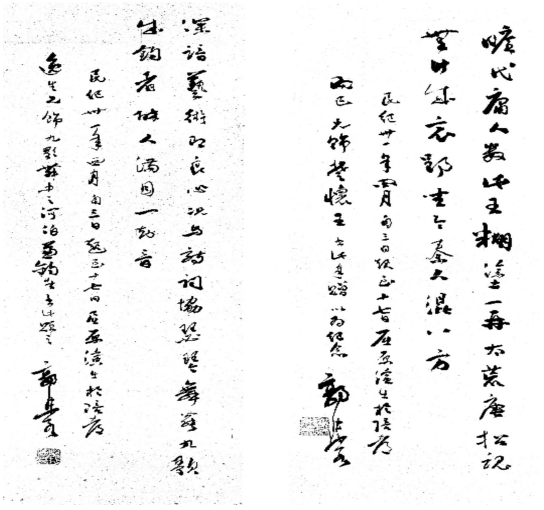


図 1

満目一知音民紀卅一年四月自三日　至十七日
《屈原》演出於陪都　逸生兄飾《九歌》舞中之河伯兼釣者　書此贈之
郭沫若

（大意）芸術に習熟するのは、良心による。詩詞を瑟琴で奏でることは言うまでもない。屈原を陥れるための九歌の舞をやめて釣り人となる。大衆は皆騙され酔いしれるが、そこに一人の分かってくれる友人がいる。一九四二年四月三日から十七日まで『屈原』を重慶で上演する。張逸生が「九歌」を舞う河伯と釣り人を兼ねて演じた、書してこれを贈る。郭沫若

七　本作と社会的背景

須田禎一訳『屈原』の解説に拠れば、

この史劇が書かれた一九四二年初頭は重慶に於ける抗戦の前途が最も暗黒だったときである。政治的に絶望的なまでに腐敗していた国民党政権は、単独では到底日本軍を大陸から駆逐する自信がなく、その意味では太平洋戦争が起って米英が対日戦にまきこまれたことをかえって喜んだ。しかし香港を占領し、マニラを占領し、シンガポールに向かって進撃を続ける軍国日本に対して、当時背後をおびやかして、戦局を転換させるべき任務を持っていた国民党政権は、ただ米英からの援助費がなくなることをおそれる他力本願に終始していた。国難をタネに発財（金もうけ）することばかり考えていた国民党政府の要人たちは、中国共産党の樹てた「辺区政府」の領域が広くなるよりも、日本の占領地域が広くなることを歓迎さえしていたのである。このような環境下における良心的な知識人の怒りと悲しみと悶えが、そのまま一瀉千里に流れ出て、五幕の史劇となったのである。とりわけ五幕における屈原の独白には、今日の我々の骨の髄にまで染み透るようなきびしさがある。それは独立と自由をもとめる人々の胸に強い共感を喚びおこさずにはおかないであろう[3]。

とある。

つまりこの背景からすれば、『屈原』劇に於ける秦は日本、斉は共産党、楚は国民党を隠喩していたことになる。

因みにこの書が贈られた俳優、懐王を演じた顧而已（一九一五－一九七〇）は、江蘇省南通市の出身で、三〇年代初期から左翼劇運動に身を投じ、一九三二年中国共産主義青年団に加わり、抗日戦期、抗日勝利後、解放後と俳優（映画を含む）として活躍した。但し一九七〇年に、四人帮の迫害を受け死亡している。

また郭沫若の日記によれば、一九四二年四月三日から十六日にかけてのその足跡が、具に記されている。中でも十日、周恩来は、「在連続不断的反共高潮中，我们鉆了国民党反动派一个空子，在戏剧舞台上打开了一个缺口。郭先生和诸位都立了大功。（連続不断の反共高潮の中で、我々は国民党反動派の一つの一つの空白に穴をあけ、戯劇の中で一つの突破口をひらいた。郭さんと諸位は大きな功績を打ち立てた）」と述べている。

このような状況下から推察すれば、懐王は言うまでもなく蒋介石を、屈原は中華文明の体現者で愛国者としての郭沫若自身を、

そして友人である知己、釣り人は、周恩来を意味していたとも推察されよう。

またこの史劇の文明論的な解釈については、周海波「民族解放战争语境中的郭沫若历史剧创作」（中国郭沫若研究会　郭沫若紀念館編『文化与抗战』四川出版集团巴蜀书社　二〇〇六年所収）に詳しい。

八　文白の争いと漢詩の役割

五四運動以降の、白話と文語の在り方を巡る議論、所謂「文白の争い」という葛藤は、当時の知識人が共有していた問題であり[4]、無論、郭沫若も例に漏れなかった。郭沫若は一九三〇年一月「文学革命之回顧」の中で、

封建时代的白话是不适宜于我们使用的，已成的白话大多是封建时代的孑遗。时代不断的在创造它的文言，时代也不断的在创造它的白话，而两者也不断的在融洽，文学家便是促进这种融洽的触媒。所以要认识文学革命的人第一须打破白话文与文言文的观念。

と述べ、その融合を文学革命を担うものの使命と考えている。

またこのような、文学意識の反映か、横打理奈氏は、郭沫若の文学の生成過程について以下のように述べている。

以上論じてきたように、郭沫若の新詩を十全に考察するにあたっては西洋文学からの影響を見るだけではなく、彼自身が作った中国の旧詩との関連をも考慮することが不可欠である。「別離」はその形式が旧詩であるが、内容面では西洋的な要素を含むことにより、新詩としての可能性を探るのに成功している。また「梅花树下醉歌－游日本太宰府」は、形式が明らかに新詩であるが、旧詩の存在があって初めて出来た作品であることを確認してきた。　郭沫若の場合は当時の詩壇では想像できないような、まったく新しい形式の詩の作品を示して中国の文学界に登場した。それが『女神』であって、人々から驚嘆の面持で迎えられることになった。その語彙や思想面では、あまりにも西洋化したものを多用していただけに、その面ばかりが強調され、他の角度からの検討をすることはあまりなされてこなかった。しかし本稿で論じたように旧詩との関連という角度から見ると、単なる物理的同時並行で創作されていたのではなく、両者の間に相互に深く関係するものが存することが見出される。

この点から考えてみると、今までの郭沫若の新詩に対する評価は、新しさだけに注目した新詩の側からする、一方的な評価であった。郭沫若は新詩創作を続ける一方で、伝統的な形式に沿った旧詩をも創作し続けていたのであって、　そのことを十分に考慮して取り扱うべきであろう。郭沫若の新詩の新しさには、彼が創作した旧詩を媒介として伝統的な旧詩の要素が受け継がれ、含まれている可能性がある。その可能性について今後、郭沫若の新詩を見直す必要があるだろう。

と述べ[5]、卓説を披見されている。

つまり図１の詩は、音韻意識は厳格に伝統を保守しているが[6]、白話で使われる語彙を多用し、なおかつ旧詩の約束事、基本を遵守している、いわば新旧の融合詩の様相を呈している。

郭沫若の「旧詩」と「新詩」を共に制作するダブルスタンダード、いわば「両刀使い」だとも評せるが、この詩は、当時の詩の贈られた相手の教養と思想、また人民を意識したプロパガンダ的な作用がせしめた産物と言え、また抗戦期に於ける「文白之争」の一つの決着の形だった言えるだろう。

九　書風の意味

最後に、書の様式からこの作品を分析すると、その詩の様式同様に、白話書体と文語書体の融合したスタイルと言える。

一九三七(昭和十二年)、日中全面戦争開始前後から、郭沫若帰国後の抗日宣伝活動に伴う書風の変遷の中で、郭沫若の白話書体の文語書体への流入、小筆書風が、書作品全般へと進展する経緯を以前、拙稿にて垣間見た[7]。その白話への執着は、同文同種政策を遂行する日本政府への忌避に拠るところもあるであろう。

そのような全面戦争以前の伝統と白話体の併存から統合へとグラデーションのように鮮やかに変貌していく中で、この書は、その内容と詩形とも相俟って、まさに文学革命の書風、文明的愛国心を中核に据えた中華人民のための書風として、白話に飲み込まれる文語という象徴的な位置付けにある書作品と言えるだろう。

---

1 武継平「郭沫若に対する警察監視の実態「日支人民戦線派諜報網」の検挙から」(『野草』七七号 二〇〇六年二月 中国文芸研究会)

2 杨定法「郭沫若与日本友人鹿地亘」(『文史春秋』 二〇〇二年十二月)

3 郭沫若作 須田禎一訳『屈原』(岩波文庫 昭和三一年) 解説を引用。

4 邹铁夫「上世纪三十年代到五十年代的文白之争」(『剑南文学』上半月 二〇一五年〇一期)

5 横打理奈「郭沫若の新詩誕生を探る―旧詩の考察から」(『東洋大学中国哲学文学科紀要』第十号 二〇〇二年三月 東洋大学文学部)

6 拙稿「民国抗日戦争期に於ける郭沫若の「書」及び「文学」の論理」(郭沫若研究会報 第十五号 二〇一六年六月) 松宮貴之著、史瑞雪译「抗战时期郭沫若的"书法"及"文学"理论―作为郭沫若"语言""文学""思想"表达的"书法"样式的历史变迁」(中国《郭沫若研究》第十四辑 二〇一八年七月)

7 注6参照

C　解放後から大躍進政策までの書の在処

第十一章　抗日勝利から中華人民共和国建国期、百花斉放時に至る郭沫若の書様式の整理

―日中戦争終結から一九五〇年代後期の様式変遷と所謂「第二期郭体」の確立時期を巡って

一　緒論

第九章「民国抗日戦争期に於ける郭沫若の「書」及び「文学」の論理―郭沫若に於ける「言語」「文学」「思想」の表出としての「書」様式の史的変遷について」に於いて[1]、民国期の郭沫若の書の様式を分析し、その時代性、言語性、文学性についての構造を解かんと試みた。その結論を導く道程に於いて、第一期郭体に至るまでの三つの様式を類型化し、その経緯につい若干の考察を行った。

その三つの類型とは、白話体様式、文語(古文)体様式、そして白話体様式をベースにした上での文語体様式の流入混淆様式の三つである。

そして文学的に言えば、白話体様式は、白話文学を、文語様式では、近体(格律)詩などの古文を、混淆様式では、白話と文語のミックス、または近体詩を内容とした、「書」「文学」の連関的構造を有していたと言えるだろう。本章では、この書の思想的構造、そしてそれらの様式が日中戦争終結から国共内戦、共和国建国、百花斉放期に至るまで、どのような変遷を辿ったかを解析する。

つまり民国期と抗日勝利、内戦時、共和国初期から一九五〇年代後期の様式の継承、異同を整理して、その展開の在り方、またはその時代背景、経緯を有機的な関係で捉え直すことを目的とする。

以下順を追って、その変遷を追い、分析を進めて行きたい。

またその社会史的分析の為に、オーラルヒストリーとして、銭理群氏の著を、今後多く引用する[2]。

二　日中戦争終結から国共内戦期の郭沫若の書の確認

現在、郭沫若の書の資料を網羅的に整理した書籍として、主に郭平英主編『二十世紀書法經典　郭沫若』(廣東教育出版社　河北教育出版社　一九九六年十二月)と『郭沫若书法集』(郭沫若书法集编委会 四川辞书出版社出版发行　一九九九年十一月)の両書が挙げられる。

その中で抗日戦勝利後の一九四六年時の作品を類型すると、図1系統の「(釈文)文化之田　易耨深耕　文化之粮　必熟必精　為益人群　不負此生」と図2系統「(釈文)争攘易尽全力、和緩則易弛方。争取民主之時、不惜衝鋒陥陣者、一朝獲得初歩勝利。便有功身退之意、殊太蚤計」の二種に分類できる。

図1系統は、刘奎荣「大力推广“郭体”字型　弘扬郭沫若书法艺术」郭沫若学刊二〇〇五年第三期(总第七三期)に於いて、

郭沫若以“回峰转向，逆入平出”为学书执笔八字要诀。其书体既重师承，又多创新，被世人称为“郭体”，在其书法里头，充分表现出大学者，大文豪风范。书法作品笔力爽劲洒脱。

と述べ、特に六〇年年代の作品にスポットを当てた上で、一九六四年の「自力更生，奋发图强」の書について、

真是老辣苍劲，骨力雄健，气势磅礴，可谓世所难求的“郭体”艺术巨作，足显一代文豪贯笔端，形神皆备的非凡功力。

とし、評価されている。

これらのことから、「郭体」とは、一つに「逆入平出　回锋转向」、つまり「筆を逆に入れ平たく出す蔵鋒的要素、筆鋒を回転させる遠心展開のこと」であり、さらに言えば、そこに「雄大な気勢」が加われば、定義を為し得ると考えられ、それが図1に該当する。この様式は、多く看板や題字、スローガンというような政治広告、その

ようなプロパガンダに使われていく傾向がある。

図 1

この一般的な中国人研究者による印象論的な「郭体」様式の端緒について、以前私は、一九四一年六月に書された「自作詩」に求めたことがあるが[9]、新資料の発掘によって、それを真筆と仮定すれば、一九三八年の書、図3にまで遡ることができる。つまり、従来の印象論「郭体」を敢えて私論の文脈で定義すれば、「白話体が文語体に流入した書風、口語と文語の融合の第一期郭体を骨格にして、そこに気迫が漲る様式」と言えるだろう。またこの落款の年紀の真偽をひとまず置けば、つまりは抗日全面戦争当初に、すでにその様式は確立されていたと是正すべきかもしれない。さらにこの落款歴のすがたについても、当時既に民歴ではなく、西暦が用いられていたことにも留意したい。これについては、この書が陳銘徳、鄧季惺に与えられたものであり、彼らが携わった『新民報』の性格との関係も推察される。

また、これら落款に見られるような「郭沫若」を三字連綿で続けて書くスタイルも、抗日全面戦争開始時から一九五〇年代初期まで遵守されており、抗日、国共内戦、朝鮮戦争と戦時の署名様式だったとも言えるだろう。

因みに一九四五年、一九四六年時の郭沫若の作詩数は、王継权・姚国华・徐培均编注『郭沫若旧体詩詞系年注釈』上・下(一九八四年　黒龙江人民出版社出版)に因れば、一九四五年に十九首、一九四六年に七首と少なく、この減少傾向は、特に一九四九年から一九五四年にかけて、政務院副総理期に顕著であり、政務が多忙であったことが背景にあると考えるべきである。

また図2系統の書には、白話文が白話体様式をベースにしたもので、少しく文語体様式も流入した混淆様式で書されている。

その内容は、一九四六年時の書だけあって、戦意の引き締め、抗日戦争の勝利と民主化への抱負が述べられている。当時この手の平易な白話文が、書の鑑賞の目的として、スタイリッシュな混淆様式で書されていたことは、その時勢、言語事情、書の在処の特徴として挙げられるだろう。

図 2

図3

三　先行研究に於ける書風変遷への見解

先章でも見た現在、郭沫若の生涯に及ぶ書法変遷について論じたものから代表的なものをここでも一瞥、要約すると、唐进 龙鸿「郭沫若书法艺术探析」(重庆大学学报 社会科学版 二〇〇四年第十卷第四期)では、一つは顔真卿の影響、二つは米芾、蘇軾などの北宋の

影響、三つめは所謂、金石などの影響を挙げ、「郭体」の成立に至ると述べている。

次いで、刘奎荣「大力推广“郭体”字型 弘扬郭沫若书法艺术」（郭沫若学刊二〇〇五年第三期总第七三期）では、はじめ蘇軾、顔真卿の影響を受け、日本留学後、晋唐から明中期の書法を消化、さらに古文字の研究によって科学的な学問様式を確立した。抗日戦争で帰国した後は、大衆化の方向に向かい、民族精神を鼓吹した。新中国建立以後は、行草を主として文人才子の書を披露し、毛沢東、舒同とともに三人の代表的な書家と目されたとある。

そして、巩蒙「郭沫若书法流变论纲」（郭沫若学刊 二〇〇六年第三期 总第七七期）では、もともと「尚意」派であって、碑学、蘇軾、顔真卿から、米芾を経由し、晩年は懐素を学んだが失敗したとする。

また当論文本文に於いても特に米芾の影響を強く捉え、それは宋代の文芸が平民化の趨勢にあり、郭沫若もその歴史認識の上で、書の大衆化を目的として宋の三大家の個性を踏襲し、その文脈で郭沫若の書は、米芾の「天然の趣」の所産であるという見解が出されている。

ただし私は先に、

また彼の書は、伝統と白話体の併存から統合へとグラデーションのように鮮やかに変貌したが、特に白話に於ける「草書」の使用法は、文語の「回锋转向」と同義であり、彼の書き癖だったようにも思われる。

と述べたように、その行草書に米芾の影響の有無を問うよりも、彼の日常白話筆記の書き癖であったと判断した。

さらに、吴胜景氏は五十年代後期から郭体が変化する説を提出したが、その変化以前の図1系統の郭体の隆盛は、五十年代に、当時多くの看板文字や記念碑的な書幅を担うことになることに起因しているとも言えるだろう。

先に見た三人の研究者は、概ね若年期、抗日戦期、人民共和国成立以後の三つ節目を以って、その書風の変化を捉えようとする傾向にあるが、具に見ると更なる紆余曲折が看取される。

よって抗日勝利期から国共内戦期の郭沫若の書の特徴は、図1系統と図2の白話体寄り系統の並行、そして未だ図1の気迫に満ちた郭体は時に用いられるものの、まだその爆発的な生産を見るには、内的及び外的な条件が整っていなかったと総括すべきである。さらに書の鑑賞の対象が、当時、旧来の知識人ではなく、中華人民へと変貌していく過渡期と捉えるべきかもしれない。

四　一九四九年、共和国成立時代の文学の姿としての書

一九四八年から一九四九年にかけて、共産党は国民政府に対する軍事的勝利を背景に地域政権の樹立を進め、一九四八年九月の華北人民政府に続き、四九年三月には、中原人民政府、同年八月には、東北人民政府を成立させた。東北の場合は、一九四五年末以降、共産党の地方政権樹立が画策されており、一九四七年には、隣接する内モンゴル地域で内蒙古自治政府が成立し、一九四九年三月に国民政府の首都である南京が、さらに四月には経済の中心地であった上海が共産党軍に占領された。そして同年一〇月には広州も共産党政権の支配下に入った。

軍事的政治的支配地域を確実に拡大する共産党は、一九四九年十月一日に、国民党政権打倒に向け連携を強めてきた他の政治勢力とともに、北京に於いて中華人民共和国の成立宣言に至る[15]。

郭沫若は、一九四九年二月に欧州に赴き、世界和平大会に参加、十月一日共和国成立後、政務院副総理（一九五四年九月まで）、文化教育委員会主任、中国科学院院長、全国文聯主席などの要職に就くことになる。

この図4の書は、初梨つまり李初梨（一九〇〇-一九九四）に、また一説〈一九四九・一・二二〉に李一氓（一九〇三-一九九〇）に与えたとされる七言聯で、

国有干城扶赤幟　民之喉舌発黄鐘

（大意）国に軍人がいて共産党の旗をたすけ、民衆の代弁者は、古代の楽器を鳴らす。

とあって、李初梨を文武兼備に国家の棟梁として、讃えた文言である[5]。

そしてその書風は、少字数に見合ってか、圧力をかけ、筆を開いた部分が見える所謂旧定義的な「郭体」系であるが、未だ後に見る第二期郭体の全盛期に顕著な蔵鋒的要素はさほど強くなく、また特異な用筆の伸縮の激しさも見られない。つまりこの書も抗日戦争以来の延長線上にあって、さほど変化はしていないと言えるだろう。

図 4

さらに図5の「弔馮裕芳」は、一九四九年二月の書であるが、

等是在強場　一死正堂堂　後有馮裕芳　前有馮玉祥　献身無保留　不用待協商　歴史開新頁　領導要堅強　視死咸如帰　百万若国殤　何為学童女　涙落霑襟裳　死貴得其時　二馮有耿光　不忘人民者　人民永不忘

（大意）ひとしく戦場にあって、一死は堂々としている。後に馮裕芳、先に馮玉祥がいる。献身留まることなく、協商を待たずに歴史に一ページを開いた。リーダー性は堅強で、死を見てみな帰るようだった。百万の戦士の霊は殉国の士、国のために命を捧げた者を悼むようである。どうして学童や女性のためでなかろうか。涙は襟やすそを濡らし、死は貴い時を得た。二人の馮、輝き光り、人民を忘れず、人民も永く忘れることがなかろう。

とあり、人民の犠牲となった馮裕芳を弔っている。

図 5

そしてこの書の佇まいは稍細身で筆の開き、つまり側筆の部分が少ないが、結体は「筆を逆に入れ平たく出す蔵鋒的要素、筆鋒を回転させる遠心展開する」という「郭体」の片鱗は確認できる。しか

しこれも抗日戦以来の系統で整理できる様式である。

また同年に書されたとされる図6「北上紀行之三」は、

人海翻身日　宏涛天際来　才欣克遼沈　又聴下徐淮　指顧中原定　綢繆新政開　我今真解放　自愧乏長才

（大意）人の海が身をひるがえす日に、ひろい波が天の際まで至った。ようやく遼が沈むのをよろこび、また徐州を手に入れたのを聞く。短時間で中国を安定させ、緊密不断に新政府を開いた。私は、今まさに解放され、おのずから特異な才能を恥じている。

とあり、これらも抗日終結時の図1系統として解消でき、やや肉厚であるが、気迫が漲っているとまでは言えない。因みにこの詩自体は、一九四八年の東北解放区に赴く時に書かれた漢詩である。

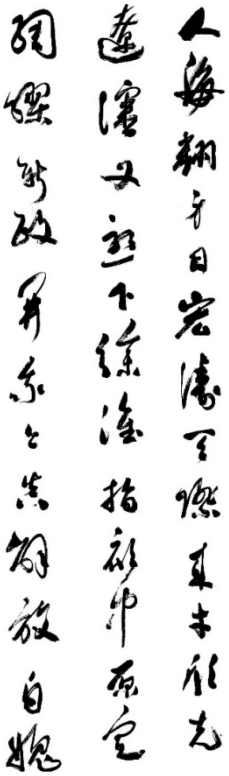


図6

このように建国期の書は、文語の表現様式によって書された、共産党宣揚の古文の書が残されている。

いわゆる建国期の文学は、岩佐昌暲氏によれば、

一九四九年十月、中華人民共和国が成立した。新国家建設にあたって、文芸面でどういう政策をとるかは、中共にとって重要な問題だった。そこで、建国前の四九年七月中華全国文芸工作者代表大会が開かれ、『講話』が示した文芸の方向が新中国文芸の「工作指針」「努力方向と任務」となった。新国家では『講話』の方向に即して「光明を賛美し、暗黒を暴露する」というモデルが確定したのである。これは延安を中心とする解放区の方向を継承するものだったが、解放区以外の国民党支配地区や香港などにいた作家たちからいえば、これは従来の「現実は〈暗黒〉である、〈暗黒〉の現実と闘って、〈光明〉を求める」という発想からの方向転換を強いられるものだった。新中国の成立はこれらの人々がそれを願い、そのために闘ってきた〈光明〉の実現を意味したからである。彼らが長期にわたって対立し、消滅させようとした〈暗黒〉、目に見えるものとしての（〈暗黒〉（たとえば、地主、資本家、国民党大官僚など）は打倒された。〈光明〉が生まれ、暴露の対象は消滅したのである。〈暗黒／光明〉モデルの内容は変化しないわけにはいかない。例えば文革までの詩の各種アンソロジーや『詩刊』などを見ると、新中国の〈光明〉賛美の詩が多い。日常生活、政治、経済建設などありとあらゆる素材がとりあげられ、社会主義になってそれがどんなに素晴らしく変化したかが賛美されている。

とあるように、当時の書は、郭沫若にとっても、追悼と〈光明〉の書風であったと言えるだろう。

五　一九五〇年代前期の白話様式の模索

「文白之争」、所謂、文語と白話の争いは、近代からの懸案であり、その決着は、中華人民共和国が建国された三年後の一九五二年、簡略字体の議論を受けて、漢字研究の機関として「中国文字改革研究委員会」が設立され、その会に於いて一九五四年に、政務院が改組されるなど新体制への変化の中で、中国文字研究改革委員会も中

国文字改革委員会に改名された。そして一九五五年に『漢字簡化方案草案』が発表されるに至り、翌年の一九五六年、この草案を基に『漢字簡化方案』が国務院より公布され、五一四字の簡体字と五四の簡略化された偏や旁が採用された時期に、それを求めることができる。

そして、その文字改革の渦中に、郭沫若も参画していたと言えるだろう。

因みに郭沫若は、一九五五年の中国国務院が設立した漢字簡化方案審訂委員会の副主任委員を、一九五六年には漢語拼音方案審訂委員会の主任を務めている。新中国成立後の一九五五年に開かれた全国文字改革会議において張奚若はその報告の中で、

汉民族共同语早已存在，现在定名为普通话，需进一步规范，确定标准。“这种事实上已经逐渐形成的汉民族共同语是什么呢？这就是以北方话为基础方言，以北京语音为标准音的普通话。”“为简便起见，这种民族共同语也可以就叫普通话。”

(大意)漢民族の共同の言語はつとに存在し、現在普通語と定義しているが、さらにその規範を一歩進める必要と、標準の確定が求められる。この種の事実に於いて、既に漸次形成されてきた言語は何か。それはまさに北方を基礎方言となし、北京語音を標準の普通語と定める。便利さから考えても、この種の民族の共通語は、まさに普通語と言っても構わない。

と述べているが、この言語改革の問題が、当時の政治家の喫緊の問題であったと言えるだろう。

更に当時の「写字」政策については、草津祐介氏によれば、

では、中華人民共和国建国期の小学校における写字教育についてまとめたい。中華民国最後の『課程標準』から中華人民共和国建国期の『課程暫行標準』および『教学大綱』にかけて、一貫して国語・語文科に写字という教育内容は含まれていたが、その位置づけには変化が見られた。中華民国の『課程標準』では楷書、行書の写字を学び、行書、草書、俗字を覚えることになっていた。学習方法も摹写、臨写、自由写字といったものが学習内容に挙げられていた。使用する筆記用具も鉛筆から始まり、第二学年からは毛筆、第五学年からは万年筆を使用することになっていた。中華人民共和国となり、『課程暫行標準』が制訂されると、俗字等の学習は退けられ、簡体字を覚えることとされ、伝統的な学習方法である紅描法や映摹法が否定され、毛筆は臨写による学習が推奨されるようになった。さらに写字は実用の文字を学ぶものであり、正確に、はっきりと、きれいに、速く、を目標にすべきで、美しさを重視してはいけないと明確に位置づけられ、言語としての正確性、言語運用上の利便的な教育が写字に求められるようになった。しかし、なお第二学年から写字の授業において毛筆が使用され、碑法帖の鑑賞も学習方法として推奨され、写字の授業時間が多く開講されていた。『教学大綱』では、小学校第一学年に「準備課」が新設され、識字教育も独立した教育内容として加わるなかで、写字も言語教育として識字教育と強く結びついていくことになる。中華人民共和国建国期の小学校における写字教育は、文字改革運動と連動し、識字教育と強く結びつき変化していった点が大きな特徴であるといえる。そのなかで「準備課」において、識字教学、写字教学がおこなわれるようになる。写字の学習にあたっては、田字格というマス目を用い、筆記用具については、最初は鉛筆を用い、次に万年筆を用いるようになる。毛筆は推奨されず、万年筆の準備ができない場合は毛筆を使用していいという位置づけになる。また、『教学大綱』の説明で書体名は使用されず、伝統的な書法教育から離れ、字源に遡らず、字形に基づいて字音を教え、字義を説明するという識字教育と強く

結びついた写字教育が作り上げられていくことになる。さらに、閲読、漢語、作文の授業のなかで写字の指導もおこなうとされ、『課程暫行標準』から『教学大綱』へと、写字の授業数が大幅に減ることになった。

と総括されている。

郭沫若の一九五〇年代前半の漢詩(文語)が少なかったのは、先に副総理という激務の中で、その作詩時間の余裕がなかったのではないかと述べたが、さらに当時郭沫若は、中国の文字改革の潮流にあって、文語よりも白話の問題についての意識の割合が、高かったとも考えられる。

よって現在残る一九五〇年代前半の書も、白話の作品が多く残されていると言えるだろう。以下比較考証していきたい。

先ず図7の一九四八年の書「惜李岩遺著失伝」を見ると、抗日戦期の白話体書風を継承していることは、一目瞭然であるが、一九五二年の書、図8の「生長在毛沢東時代的青年」の様式は、まったく新しい書風の感がある。

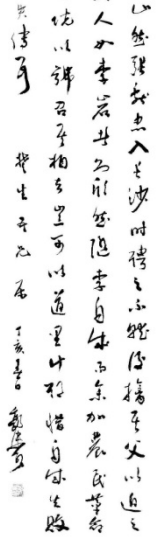


図7

因みに内容は、

生长在毛泽东时代的青年是幸福的。每一个人可以自由自在地成长，吸收必要的知识，发展自己的才能，为国家建设服务。就这样，每人都可以贡献出己的力量，促进国家的工业化，通过社会主义建设走向共产主义建设的阶段。

(大意)毛沢東時代に生まれた青年は、幸せである。だれもが自由自在に成長し、必要な知識を吸収し、自己の才能を発展させ、国家建設の服務をなせる。このようにだれもが自己の力量で貢献でき、国家の工業化を促進し、社会主義建設を通じて、共産主義建設の段階に向かうのである。

図8

とあり、その文学性は、朝鮮戦争後の社会主義への舵取りを如実に表す内容である。

さらに図9の一九五三年の書、「屈原其人及其作品」の書様式も、白話様式というよりもむしろ文語様式に近く、その内容は、

在清理古代文化的发展过程上，毛泽东主席要我们剔除其封建性的糟粕吸收民主性的精华。屈原其人及作品应该是中国古代中民主性精华的一部分，两千多年来中国人民都在纪念他，不是偶然的。

(大意)古代の文化の発展過程を整理する過程で、毛沢東主席は我々を封建主義のかすを取り除き、民主性の精華を取り入れてくれる。屈原その人、その作品は、中国古代文化の民主性の精華の一部分に相違なく、二千年以上中国人が皆彼を記念するのは、偶然ではない。

図９

とある。郭沫若は、「民主」への執着は、後の百花斉放時代まで引き続くことになるが、これらの文字改革期の白話表現は、当時の郭沫若の、一文人としてと言うよりも、中華人民の言語活動としての表現の模索を示していると言えるだろう。

さらにその後また、周恩来は、一九五八年一月十日の政協全国委員会での報告で次のように述べている。訳文を挙げると、

この他に、さらに一つ問題があり、それは漢字の簡化は我が国の書法と流伝と愛好を妨げないだろうかという問題である。私は妨げないと考える。書法は一種の芸術であり、当然漢字の簡化の規制を受けないといえる。簡体字はもともと主に印刷上で用いるものであり、我々は皆が必ず『漢字簡化方案』に基づき写字することを強制することはできない。このことから漢字の簡化は我が国の書法芸術に対して何も不利な影響はない。同時に我々はまた書法家が簡化された文字で書くことを歓迎すべきであり、簡体字の芸術レベルを高めるだろう。

と述べ、写字教育が漢字の簡化教育を担う一方、書法は写字とは異なり、必ずしも簡体字を用いる必要がないとし、書法は実用ではなく芸術であると位置づけ、繁体字の使用が容認されるに至っている点は、反右闘争以後の思想として興味深いと言えるだろう。因みに一九五〇年代前期の漢詩の傾向を示すと、

日時	漢詩名	場所	目的	書の有無
1950年3月3日	赠刘肃曾		感慨	
1951年5月	为枫鸽 画题诗		抗美援朝	
1951年5月	为梅兰竹菊画题诗		抗美援朝	
1951年11月28日	西伯利亚车中		世界和平理事会	
1952年6月	亚太和会筹备中有赠二首		亜太和会	
1952年11月10日	庆亚太和会		亜太和会	
1952年12月31日	记世界人民和平大会 用陈叔老原韵六首		世界人民和平大会	
1953年3月	为成都杜甫草堂书		感慨	
1954年3月8日	詠武昌东湖梅花盆栽	武昌	共産主義	
1954年夏	游里加湖 二十二首	黒海	紀行詩	●
1955年5月	赠陈毅同志		共産主義	
1955年	赠钱学森		感慨	
1955年5月4日	访霍去病墓	西安	視察	
1955年5月4日	题西安人民大厦	西安	視察	
1955年5月4日	华清池	西安	視察	●
1955年7月1日	赫尔辛基	北欧	紀行詩	
1955年12月	题赠东大图书馆	日本	紀行詩	
1955年12月4日	箱根即景	日本	紀行詩	
1955年12月4日	吊岩波茂雄墓	日本	弔詩	
1955年12月5日	访须和田故居	日本	紀行詩	
1955年12月5日	别须和田	日本	紀行詩	
1955年12月5日	无题三首	日本	紀行詩	
1955年12月13日	掰鉴真上人像	日本	紀行詩	
1955年12月13日	偶感	日本	紀行詩	
1955年12月14日	赠清水多荣	日本	紀行詩	
1955年12月14日	赠田中文男	日本	紀行詩	
1955年12月15日	舟游旭川 二首	日本	紀行詩	
1955年12月16日	宫岛即景 三首	日本	紀行詩	
1955年12月16日	暖意孕东风	日本	紀行詩	
1955年12月16日	访广岛 二首	日本	紀行詩	
1955年12月17日	吊千代松原	日本	紀行詩	●
1955年12月17日	访福冈 五首	日本	紀行詩	
1955年12月22日	赠东京华侨总会会长甘文芳先生	日本	紀行詩	
1955年12月23日	宿春帆楼	日本	紀行詩	
1955年12月25日	游别府	日本	紀行詩	
1955年12月27日	船入长江口	上海	凱歌	●
1956年2月	赠友人钱潮	北京	感慨	
1956年10月1日	文汇报继续出版用陈叔老韵		百花斉放	
1956年	卜算子		感慨	●
1956年10月30日	纪念孙中山先生 四首		紀念詩	
1956年11月1日	贺张元济老先生九十寿辰		百花斉放	
1956年12月	题洞头县烈士墓		共産主義	
1957年1月23日	试和毛主席韵 词三首		唱和	
1957年1月30日	题画五首		共産主義	
1957年3月	观周瑀九歌图后题		感慨	
1957年3月	赠叶恭绰		感慨	
1957年5月	赠北京中国画院		百花斉放	●
1957年7月7日	纪念 七七用鲁迅韵二首		紀念詩	
1957年9月	赠香港大公报 香港大公报复刊九周年纪念		百花斉放	
1957年9月	答叶恭绰		共産主義	
1957年秋	为刘旦宅绘屈原像题辞		共産主義	
1957年10月1日	卜算子 为文君公园题词		共産主義	

となる。

六　郭沫若の当時の文芸批判

A　沈従文批判

錢理群『毛沢東と中国』によれば、

一九四八年二月一日に香港で出版されていた、共産党の指導下にあった『大衆文芸叢刊』において、郭沫若が「反動文芸の排斥」を発表し、沈従文が抗戦期は「作家の政治活動」に反対することから、解放戦争を「民族の悲劇的な自殺行為とまで称する」ようになり、「つねに意識的に反動派として文筆活動していた」ことを指摘し、更に沈従文作品は猥褻な作品であり、「好色な」反動作家であると攻撃したのである。北京大学構内に出現した「沈従文打倒」のスローガンは、実際は一九四八年のこの郭沫若の批判の蒸し返しで、その郭沫若の背後には共産党の意向が明確に反映されていたのはいうまでもない。このことが歴史の大変動のなかで「古い自分」の無力感と「新しい自分」の不透明さを痛感させられたうえに、新政権への懐疑と恐怖を感じていた沈従文に、致命的なダメージを与えたのである。…

孤立感は二つのレベルであった。胡適らの自由主義派とは親友関係にあったものの、沈従文は田舎の人間であったから、彼らとは常に何らかのズレがあったのは確かである。胡適とは文芸のことしか話さず、政治のことを話しあったことはなかった。というのも、彼は英米流の紳士風な自由主義的な理論を摂取できなかった。…

もう一つは家庭のレベルで孤立していた。これが沈従文に更なるダメージを与えたといえよう。郭沫若が沈従文作品を破廉恥な好色作家と糾弾した時、我々はこれが全くのでたらめであるとこれまでは思っていたのだが、二〇〇八年末、ある清華大学の大学院生が香港の雑誌に発表した沈従文の作品を発見したのである。そこには彼の婚外恋愛の様子が書かれており、かなり露骨な性描写が含まれている。今日の眼から見れば、何でもないものではあるが、当時からしてみれば一大事であって、そこから沈従文に 憎悪の感情を持つものも出たぐらいであった。そのようななかで、郭沫若の「破廉恥好色作家」という糾弾は、本来は徐々に落ちついていくはずの家庭状況を新たにまた刺激してしまうのは明らかである。沈従文は道徳的な意味でも被告人となってしまったのであるが、このような道徳的な罪状が政治的な審判にはねかえってくるのは明らかである。郭沫若の糾弾における「破廉恥好色」に「反動」の 罪状が加えられてしまうのだ。このような家庭の危機と政治的ないざこざが、沈従文に致命的な打撃を与えたのである。〟

とある。一九四九年には沈従文の打倒を訴える壁新聞が北京大学に張られ、自殺未遂をおこした後に鬱病で入院した。退院するとすでに国文科教授の職はなくなっており、沈従文は北京大学博物館、のちに北京歴史博物館で文物の研究を行った。その後も沈従文は文学作品を書いたが、公刊されることはなかった。

B　胡風批判

郭沫若の胡風への批判は、「反社会主義的胡風綱領」で確認できる。その内容は、基軸を下記する。

第一　胡風は作家に向かって共産主義世界観を掌握するように提唱することに反対する。

第二　胡風は作家が、工、農、兵と結合するのに反対する。これは実質上、文芸が工、農、兵に服務すべきことに反対するものである。

第三　胡風は作家の思想改造に反対する。

第四　胡風は文芸の民族形式に反対する。
第五　胡風は題材に重要なものと否らざるものとを区別することに反対する。
一九五五年郭沫若は、これらを掲げ、全国人民の意思に違反するものであり、それは、胡適の「主観主義的精神」的「自我拡張」と根本は、一脈つうじており、徹底的に批判すべきものと断じている[10]。

七　社会主義への移行と百花斉放時に於ける文学と書の変貌

新政権の樹立以後、都市を統治することになった共産党は、一方で中華民国期の思想的文化遺産の中から、彼らの支配に役立てることができるものを選択継承し、また他方に於いて独自の思想文化を広めることに力を注いだ。
しかし資本家階級の思想的影響には、警戒感を示し、朝鮮戦争に中国が参戦した戦時体制以後は、思想統制を特別に強化した。
そしてソ連型社会主義の道を中国が目指した直後の一九五六年、そうした社会主義の将来に不安をきたす事件が起こる。つまりソ連に於いて中国がモデルにせんとしたスターリン時代の実態が暴露され、厳しい批判にさらされた。このようなスターリンの独裁批判の衝撃の中で、あくまで「プロレタリア独裁」を堅持しようとした共産党は、民主主義を掲げるプロレタリア独裁に反対する知識人らの動きへの警戒を高めるようになる。
つまり社会主義に対する信頼が揺らぐ中で、共産党指導部はスターリン批判の論文を発表するだけでなく、一九五五年末ごろから国内政策の見直しを行い、一九五六年四月末の党指導会議と五月初めの政府関係者を集めた会議で毛沢東が行った「十大関係論」なる報告を発表し、経済面では比較的穏健な社会主義路線を掲げ、思想、文化面では、思想改造のマイナス面を考慮して、自由に思索、議論、創作する方針を示した。そしてスターリン批判に先んじる一九五六年一月に、知識問題に関する会議が行われ、周恩来が知識人を信頼し、その待遇を改善し、粗暴な方法による思想改造を避ける方針を提起し、同年五月末、党中央宣伝部長の陸定一は、二〇〇〇人の学者、文化人を前に花々が一斉に咲き誇る文化の花を咲かせ、古代の諸子百家がそうであったように自由で活発な議論をと、「百花斉放、百家争鳴」と題する講演を行った。
しかしこの毛沢東の文芸界と科学界に実行したその方針は、予想を上回る厳しい批判の広がりをみせ、共産党指導部は再び思想統制の強化に乗り出さざるをえない事態に追い込まれ、一九五七年六月以降、共産党は批判分子を「人民共和国を敵視し資本主義を支持する右派」だとレッテルを貼る、反右派闘争が行われることになる[11]。
そのような趨勢の中で、一九五六年三月、郭沫若は「百花斉放」政策に対する感激の上、詩歌を創作、一九五八年四月から六月にかけて『人民日報』で連載し、翌年詩集『百花斉放』を上梓している。
そして、当時の書を見ると、先ず図１０は、当時の「百花斉放　推陳出新」とそのスローガンを書したものであり、図１１の、一九五七年　五月十四日正式成立した北京画院に題した「題北京画院」の書にも、裂帛の気魄が漲り、用筆的に伸縮の激しさが顕著である。
そしてその内容は、

十日一山五日水　由来画道不尋常　胸羅萬彙憑呑吐　筆有千鈞任歙張　漫詡百花斉放蕊　出新須待推陳後　民主発揚要共当

（大意）十日で一つの山、五日で水を、もともと画の道は尋常ではない。広範な知識、抱負や万物が、のみはきして、筆には千鈞の重みがあって、一開一合にゆだねられる。ほしいままに百花斉放のしべをほこり、古いものから精髄を取り出し新たに発する。民主の発揚は、共に当たるを要す。

とあり、政治と文学、書の有機体と言えるだろう。

つまりこの抗日期の「第一期郭体」とは異相を呈した「第二期郭体」の確立の背景には、政治キャンペーンという目的があって、そのプロパガンダ的性格が決定的な役割を担い、とりわけ、幾多の書風遍歴を経て、「百花斉放」時代に完成したといって過言ではないだろう。

つまり所謂、気迫型の「郭体」は、単発としては、未成熟ながら早く抗日戦争期(第一期)から見られたが、感情の起伏の表現たる用筆の伸縮の激しさ、最高度の気魄が盛り込まれるようになったのは、この「百花斉放」時であり、知識人の復権という精神的な興奮を背景に、この確立された様式が、次の大躍進時代(第三期)にまで引き継がれることになるのである。

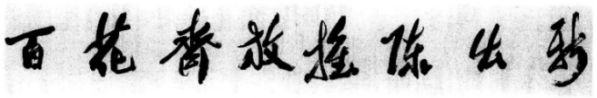


図 10

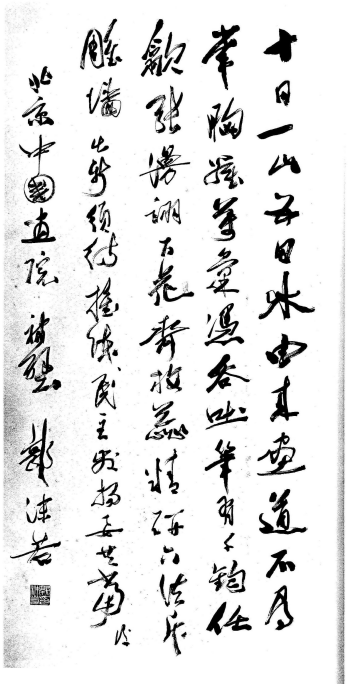


図 11

第二期郭体に至る変貌過程

図 12

先ず図１２の自作詩「登南岳」は抗日戦争期の詩を書したものであり、款記がないまでも、一九三〇年代後期、若しくは一九四〇年代前期に書かれたものと考えられる。

そしてその書風は、白話様式を踏まえた単体で、やや肉太で書かれた「第一期郭体」と位置付けられる。

対して、図１０は、一九五〇年代後期、当時の「百花斉放　推陳出新」とそのスローガンを書したものであり、図１１の、一九五七年 五月十四日正式成立した北京画院に題した「題北京画院」の書とは、明らかに異質の様相を呈している。

因みにその内容は、政治と文学、書の有機体と言えるだろう。

つまり「第二期郭体」の確立の背景には、先にも述べたように共産党の政治キャンペーンという目的があって、そのプロパガンダ的性格を担い、現代的意味を盛って、とりわけ、幾多の書風遍歴を経て、「百花斉放」時代に完成したといって過言ではなく、それについて、以前私は、

つまり所謂「郭体」は、単発としては、未成熟ながら早く抗日戦争期から見られたが、感情の起伏の表現たる用筆の伸縮の激しさ、最高度の気魄が盛り込まれるようになったのは、この「百花斉放」時であり、知識人の復権という精神的な興奮を背景に、この確立された様式が常態として、次の大躍進時代にまで引き

継がれることになるのである。

と論じた[12]。この郭体とは、やや「第一期郭体」と「第二期郭体」を混同しているが、本章にて改めて峻別しておきたい。

なぜなら郭沫若はその日記の中で、百花斉放政策が発表(一九五六年五月二日)されたあとの、当時期の一九五六年十二月十五日に、

发表《谈诗歌问题》，谈对新旧诗的认识，说“五四以来的新诗是起过摧枯拉朽的作用的”，“新诗从已经僵硬了的旧诗中解放出来”，“这对于中国的诗歌起到了起死回生的作用”，它“在受了外来影响的同时，并没有因此而抛弃了中国诗歌的传统”，而且它的出现“是适应中国社会发展的规律，也是符合中国诗歌发展的规律的”，因此“是有发展前途的”。至于旧诗，也“必须认真地去学习”，而且也可以做，但主张“在今天作旧诗，要作得不象旧诗那样才算好，这就是说，要有创造性，要自然而流畅”。总之，作者认为“好的旧诗万岁，好的新诗是也万岁”。

(大意)《談詩歌問題》を発表して、新旧詩の認識について話し、“五四以来の白話詩が疾風枯れ葉を巻くような効果を起こした”と言い、“白話詩がすでにこわばった旧詩から解放させた”“これによって中国の詩歌の起死回生の効果を果たせた”それは“外来の影響を受けたと同時に、中国の詩歌の伝統を放棄したのでは決してない”その上その出現が“中国の社会の発展の規則に適応するので、中国の詩歌の発展の規則に合う”そのために“発展の前途があるのだ”と。旧詩となると、同じく“必ずまじめに学習すべきで”、その上で作ることができるが、主張するのは“現在の旧詩は、旧詩に似ていない詩だと、ようやくよいと言える。つまり、創造性があって、自然流暢である”。要するに、作者は“良い旧詩万歳、好い新詩万歳である”。

と述べており、それは当時にあって白話詩と文語詩の在り方を改めて論じているからである。

つまり百花斉放期という新たに旧詩を謳歌することができた時代にあって、その在り方をそれぞれ定義し直す必要があったのだろう。

そういう背景のなかで旧詩の書は、今までの白話体流入様式とは、一線を画する必要があった。換言すると、新たにその内容と共に、創造性、自然流暢さを付されなければならなかったと考えられる。そこでその要素として自身の若き日(壮年期以前)の生命力豊かな文語様式が採択され、それを盛り込むことによって、従来の白話様式とは、区別できる新しい第二期郭体が形成されたと考えられる。

よって、私が先に述べた「感情の起伏の表現たる用筆の伸縮の激しさ」とは、図13に見られる用筆、結体法であり、抗日戦争以前の文語様式であって、「第二期」の郭沫若の細身の用筆、丸みの中に伸縮が内核される淵源は、抗日戦争以前の明清書風の継承期に求められる。

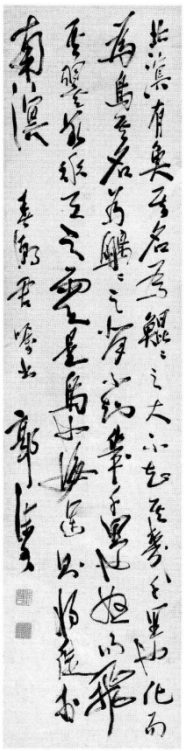


図 13

ここで書風として、復古的に文語様式が新たに注ぎ込まれた結果の重層的な新しい姿が、第二期郭体の内実であり、それは「第一期」とは全く違う意識と書相を呈していると言える。

時の文学潮流的に言えば[13]、

一九五六年五月毛沢東が最高国務会議で〈百花斉放・百家争鳴〉の方針を提起した。これは芸術の発展と科学の進歩を促進し、中国の社会主義文化の繁栄を促す長期的な方針として

打ち出されたものだった。これを受けて同月、党中央宣伝部長だった陸定一（一九〇六‐九六）が自然科学、社会科学、医学、の専門家たちに〈百花斉放・百家争鳴〉の趣旨について講演を行い、それは「工作と科学研究における独立思考の自由、弁論の自由、批判の自由、自己の意見を発表する自由」をもつことを意味すると述べた。この結果、五六年から五七年にかけて、文学には建国後姿を消していた現実の暗部を描き批判する作品が登場するようになった。これより前中国作家協会創作部では創作の現状について討論をおこなっており、その過程で「生活に関与する」という問題意識が生まれていた。「生活に関与せよ」を題名に掲げた、唐摯（唐達成、一九二八-九九）の評論によればその主旨は「作家は、自分たちの人生と生活を熱愛し、大胆に生活に関与し、全ての魂で一切の新事物を支持する闘士であれ」というもので、具体的には生活のなかにある矛盾を描き、それと闘う新しい人物を描くべし、という主張である。この主張は〈暗黒／光明〉モデルからみれば、結局「味方の中にも〈暗黒〉があることを認めよ」という延安時代に否定された発想の延長上にあるものといえた。

という復古の時期であり、知識人にとっては[14]、

…一九五六年から五七年の上半期にかけて、毛沢東が重視したのは確実に民主の強調であり、民主の拡大であった。それゆえ彼は「百花斉放、百家争鳴」という大陸では「双百方針」と称されるものを打ち出したのであり、一方で共産党以外の民主党派に「長期共存、相互監督」の方針を呼びかけたのである。毛沢東は「ソ連には一つの党しかなかった。一党がよいのか、いくつかの党がよいのか、おそらく後者だ」、「共産党が素晴らしいとすれば、民主党派もまた素晴らしいのである」と述べたのである。いわゆる「百花斉放、百家争鳴」とは何なのか？　文学的には各種の流派やスタイルなどをみな自由に発展させることが許され、また学術上の様々な見解をそれぞれが自由に議論してもよいということで、知識人にとってはある程度の解放がもたらされたといってもよい。そして「長期共存、相互監督」が民主党派にとってはある程度の解放を意味することになる。毛沢東はこのことを一言で「放」とまとめた。当時毛沢東は国務委員会で極めて重要な影響を与えることとなる演説を行う。そこである人が、百家争鳴という以上、マルクス主義も批判してもよいのか？と尋ねたのであるが、その答えが大変興味深い。彼がいうには、「共産党の思想とはマルクス・レーニン主義の思想であり」、我々は「全ての人が共産党員になることを要求もしていないし、共産党の道理とは完全に唯物主義的な世界観であるが、人にマルクス・レーニン主義の世界観を押し付けることはよろしくないことはわかっている」ということだ。この答えはやはり熟慮が必要で、また後で詳しく分析してみよう。またある人が、老幹部も、そして共産党の指導者も批判が許されるのかと問うたが、これは「あなた」（毛沢東）のことも批判してよいのか」ということが合意されている。毛沢東の答えがまた絶妙で、「老幹部が批判を受けて失脚したとしたら、それはそれまでなのだろう。批判を恐れるのは弱点があるからなのであり、弱点があるのだったら、それは批判されなければならないだろう」とし、また後に「批判があたっていることが望ましいのは当然として、批判があたってなくても、問題にはならない。人民内部の事に関して、人民は批判する権利を持っている。憲法では人民が言論の自由を、出版の自由を持つとされている」と述べた。これらは現在からすれば普通のことに思われるが、当時の知識人は狂喜乱舞し、興奮したのである。なぜなら突然マルクス主義や老幹部への批判が許され、また憲

法で規定されているはずの言論の自由と出版の自由が保障されたのであるから。しかも毛沢東自身は自由闊達かつ博学で、知識人にとっては大変魅力的な存在であったのだ。…

とあるように、図11.の漢詩の「民主」の意味もそういう渦中にあったと言えるのであろう。

八　「第二期郭体」の定義とその歴史的背景について

六章引用と重複するが、一九六九年に出された『続創造十年』（平凡社東洋文庫）に於いて、

私はある時期王陽明の崇拝者だったことがあった。それは一九一五年から一九一七年にかけて私が岡山の第六高等学校で学んでいた時期のことだった。そのころは汎神論の思想に染まっていたのでスピノザ・ゲーテを崇拝しており、タゴールの詩を耽読し、中国の古人の中では荘子と王陽明を崇拝していた。

荘子の思想は一般には虚無主義と考えられているが、私は彼をスピノザときわめて近いと思う。彼は宇宙万物を一つの実在する本体のあらわれと考える。人はこの本体を体験し、万物を一体と見なし、個体の私欲私念を排除すべきである。これによって生命を養えば平静たりえ、これによって政治を行えば争乱がない、というのである。彼はむしろ宇宙主義者ということができる。そして彼の文筆は、私の見るところによれば、中国の古文中で古今独歩のものである。王陽明の思想は禅理を本質として儒家の衣裳をまとっているけれども、実は荘子と異なるところはない。彼は荘子の本体、いわゆる「道」を、「良知」と命名し、一方では静座を主張して、「良知」の体験を求め、一方では実践を主張して、知行合一の生活を求める。その出発点に問題はあるにしても、彼の「事において錬磨する」という主張は、一切の玄学家（一種の神秘主義的空論家）の歪曲を救うに十分である。そして彼自身の実践、昔のいわゆる「経論」も、まさしく彼の学説の保証である。私は当時静座を学び、彼の伝習録と詩を耽読したものだった。のちには捨ててしまったが、私の彼に対する崇拝は依然として断ち切れていない。彼は何といってもわが民族の発展における一人の傑作たるを失わない、と私は信じている。

と述べられている。

一九三六年時の作品「荘子　逍遥游句」（図１３）は、その思想的に郭沫若の陽明学観と連繋するものであり、市川時代の古文様式の行草は、そのような思想の下で、伸縮性の強い独特の書風であったと言える。

また亡命時、千葉の市川で過ごした際の多くの資料は、アジア・アフリカ図書館に収蔵されている当時の郭沫若所蔵書籍文庫目録から見ると、董其昌や王鐸などの明清書法に因む蔵書も見られる。

つまり、再度確認すれば、この図１３の様式は、抗日全面戦争を機に、ほとんど姿を見せなくなるが、一九五〇年代中後期に別の様相を呈して、再登場することになる。

そしてそれを、「逆入平出 回鋒转向」という語彙を用いて定義しようとするならば、文語的要素として再度盛り込まれたと言えるだろう。そしてその書風は、図１４の様式のごとく、やはり大躍進時代、それ以後にも継続して用いられることになる。

また、百花斉放期の書法の変化のもう一つの背景として、一九五六年一〇月に成立されたとされる「北京中国書法研究会」の存在が挙げられる。当会は、郭沫若・葉恭綽などの著名な文化人の支持によって立ち上げられ、張伯駒が会長となり、「書法という芸術の花を継承し発揚する」ことを会の宗旨とし、金石学・篆刻を書法芸術の研究範囲に取り入れた[15]。そのような伝統性を標榜する書法団体等が林立する気運も何らかの影響を与えた可能性も指摘できる。

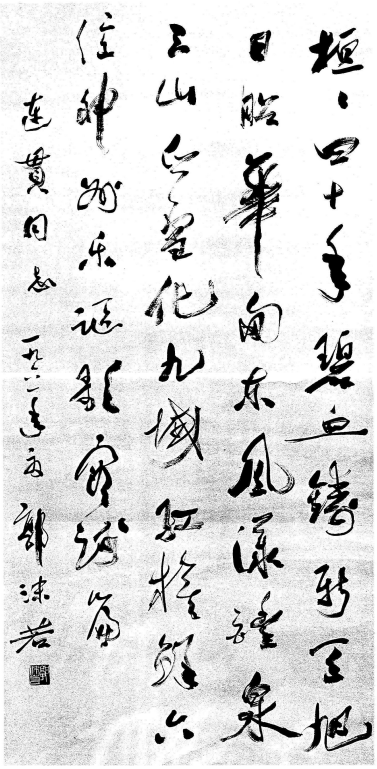


図 14

九　小結

本章では、「郭体」の定義を中心的テーマにして、抗日戦勝利後から百花斉放期に至る郭沫若の書風の変遷を追い、その様式ごとの思想性や時代性について少しく論じてきた。

要約するならば、抗日戦後から国共内戦期の郭沫若の書は、民国以来の流れで整理できるものであり、中華人民共和国建国期もさほどの変化は見られない。そして建国後、副総理の役に就き、また文字改革政策に携わる時期には、右派文芸批判と白話体の書様式の模索が行われたと言える。

そして先行研究の指摘もあるように、一九五〇年代後半から六十年代にかけて「郭体」が隆盛するという見解には、私論に於いても当期が大きな節目であったという認識に同意であるが、さらにその実態について詳しく考察すれば、民国期以来、その「第二期郭体」形成過程に於ける実験の蓄積を背景に、百花斉放期に開花したと言えるだろう。

またこの百花斉放期の「第二期郭体」の完成は、裂帛の気魄を表現するに相応しい用筆の伸縮の激しさという新しいアイデアを内包し、大躍進政策時代へと受け継がれる序奏的な位置付けと言える。この「第二期郭体」は偶発ではなく常態として大躍進期以降の書風にも反映されるのだが、当時の郭沫若の意識の内実についての、政治史、文学史、書道史的な角度からの考察については、次章以後で整理したい。

1　拙稿「民国抗日戦争期に於ける郭沫若の「書」及び「文学」の論理」郭沫若に於ける「言語」「文学」「思想」の表出としての「書」様式の史的変遷について」（『郭沫研究会報』十五号　二〇一六年六月）

2　銭理群氏は反右闘争以後、弾圧された知識人として、その生の声を直裁に表しており、郭沫若に近い知識人史観として、有用性があると考えた。またその歴史叙述は、極めて具体的であり、歴史学では主として文献から歴史を調べてゆくが、それから知られる内容には限界があり、例えば、政策決定を渦巻く社会状況、またその過程を検討しようとするとき、文献としては公表された結果のみで、どのような経緯で、政治が推移したかについては文書が残っていないことが多い。また、記録に残ることの多くは特異な事件などであって、一般人の日常生活などは文献にはほとんど残っていない。つまりその当時は常識であったとしても、年月を過ぎると全くわからなくなるということがあり、そういう意味でも、この証言は、知識人の苦悩という主観を差し引いて、現在の史料として有効性があると考えたことを、先に注記しておきたい。

銭理群著：阿部幹雄「ほか」訳『毛沢東と中国：ある知識人による中華人民共和国史』（青土社二〇一二年十二月）

3　注1参照。

4　久保亨『社会主義への挑戦　一九四五-一九七一　シリーズ中国近現代史④』（岩波新書　二〇一一年一月）参照。

5　河内利治『郭沫若書法管見』（『現代中国文化与文学』二〇一三年第〇一期）

6 岩佐昌暲『中国現代詩史研究』（汲古書院　二〇一三年）
7 邹铁夫「上世紀三十年代到五十年代的文白之争」（『剑南文学』上半月　二〇一五年〇一期）
8 草津祐介「中華人民共和国建国期の小学校における写字教育―『小学語文課程暫行標準(草案)』『小学語文教学大綱(草案)』を中心として」（『中国近現代文化研究』第十九号　二〇一八年三月　中国近現代文化研究会）
9 銭理群著；阿部幹雄［ほか］訳『毛沢東と中国：ある知識人による中華人民共和国史』（青土社二〇一二年十二月）
10 小竹文夫『中国の思想問題―胡風事件をめぐって』（大学出版協会一九五六年三月）
11 注3参照。
12 拙稿「抗日勝利から中華人民共和国建国期　百花斉放時に至る郭沫若の書様式の整理-日中戦争終結から一九五〇年代後期の様式変遷と所謂「郭体」の確立時期を巡って」（『京都語文』第二三号　二〇一六年十一月）
13 注5参照。
14 注8参照。
15 井垣清明［ほか］編著『書の総合事典』（二〇一〇年十一月　柏書房）

第十二章　郭沫若の大躍進政策期に於ける書法様式の類型とその背景について

ー「漢詩」の分析を中心とした政治性及び建築と書法との照合

一　緒論

先の章までで、抗日全面戦争期から建国後の百花斉放期までの、郭沫若の書風の変遷について、郭沫若の行草、所謂「郭体」は、実際に二度の変転を経て、形成されたもので、その一つは一九三〇年代後期の抗日全面戦争期に形成され（第一期郭体）、もうひとつは、一九五〇年代中後期の百花斉放期に変貌を遂げたと言える（第二期郭体）。そしてその内実についてまとめれば、「第一期」は、白話様式の文語様式への流入体、「第二期」は、「第一期体」に再度文語様式が盛り込まれた体と定義し、分類、分析した。

本章では、以上の経過を受けて、その後、大躍進政策期の郭沫若の書がどのような様相を呈し、さらにその背景には、如何なる事情があったのかを考察する。

二　大躍進期の書様式の類型

所謂、大躍進期、それは中華人民共和国が一九五八年から一九六〇年前半期にかけて推進した社会主義国家建設のスローガンの一つであり、生産大躍進として人民公社革命・社会主義建設総路線と並び〈三面紅旗〉の一つと見做された[1]。

その大躍進政策進行時の郭沫若の足跡は、まずその日記や、書法の系譜を追い、さらに旧文明と共産主義を結び付けようとする視覚から、新詩ではなく[2]、旧体漢詩集を分析することから始めねばならないだろうが[3]、書法史的にその当時を俯瞰すれば、第二期郭体期に見られた過度な伸縮と裂帛の気迫の姿が変貌を見せる。

無論、ここでは郭沫若の行草書に絞っての議論であるが、作品全文字に第二期郭体の典型の如く、伸縮の激しさと裂帛の気迫を盛り込むケース（図1）と第一期郭体を基調に時折第二期的要素を表現するケース（図2）、また第一期風郭体が用いられるケース（図3）の三つに大別できる。

図 1

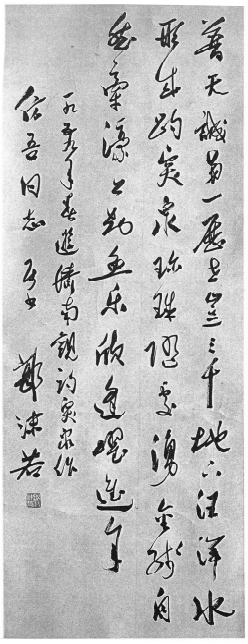


図 2

そしてその背景を分析すると、その書かれた文学的な内容に呼応した側面も然ることながら、その書かれた時、場所、それが飾られる場の背景などの経緯が大きな所以となっているように考えられる。

本章では、その三パターンの定義を行うことを目的とし、具にその事情を詳論していきたい。

りまく「不健康」な作品を、「反党の逆流」として「党を攻撃し、社会主義を攻撃する」作品をあげて批判し、詩人たちに「鮮明な社会主義時代の特徴を備えた詩篇」を書くよう呼び掛けている。『詩刊』は―というより中国現代詩は、反右派闘争を契機に五七年前半の努力＝芸術上の探索、を放棄し、「頌歌」と「戦歌」の道へと再転換することになる。

と述べられている。

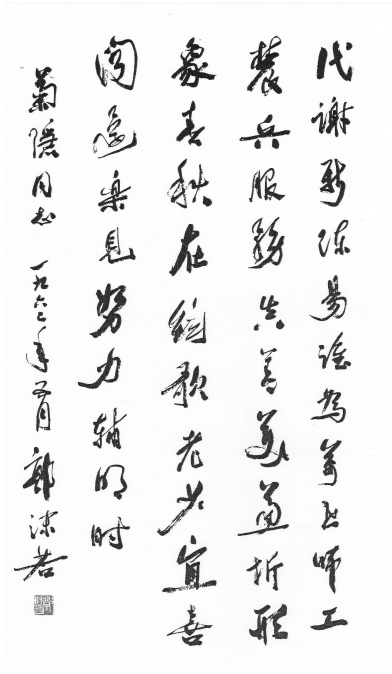


図3

三　第二期郭体の淵源としての共産党プロパガンダ詩、そしてその書法

前章「抗日勝利から中華人民共和国建国期、百花斉放時に至る郭沫若の書様式の整理」の百花斉放期で見た第二期郭体の象徴的に挙げた作品は、一九五七年五月十四日正式成立した北京画院に題された詩であるが(図4)[15]、これらの極度の伸縮と裂帛の気迫が盛り込まれるスタイルは、先ず内容として、何某かの政治的な出来事を記念した漢詩のケースがほとんどであり、それが飾られる場、つまり建築も、書者である郭沫若の念頭にあったことは、想像に難くない。

また岩佐昌暲氏は、先ず反右闘争後の『詩刊』に纏わる文学界について[16]、

この文章は「不良な傾向」として「くだらない情欲の追求」や「愛情にたいする恐れや空虚で陰鬱な情緒」「頽廃的で感傷的な感覚」をうたった愛情詩、個人的な「暗い」「陰鬱な」情緒をふ

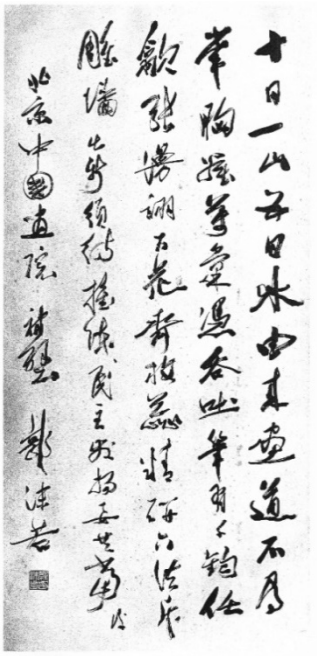


図4

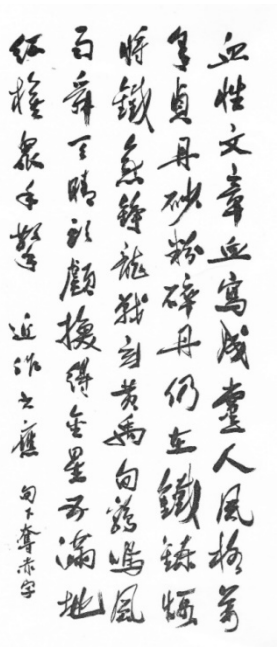


図5

つまり図5・図6に見られる題詩や共産党を謳歌するプロパガンダ的な漢詩作品が、先ずは第二期郭体を生み出した背景にあると言えるだろう。

そしてこれらの作品を分析すると、先ず郭沫若の日記である『郭沫若年譜』にもその言及が確認でき[6]、史実としても裏付けられる。

先ず図5の建国十周年に当たる年に書かれたこの書幅は、政治的な記念碑としての意味を有するものと見て大過なかろう。

そしてその一九五九年三月二日の作詩、「題《革命烈士抄》」には、

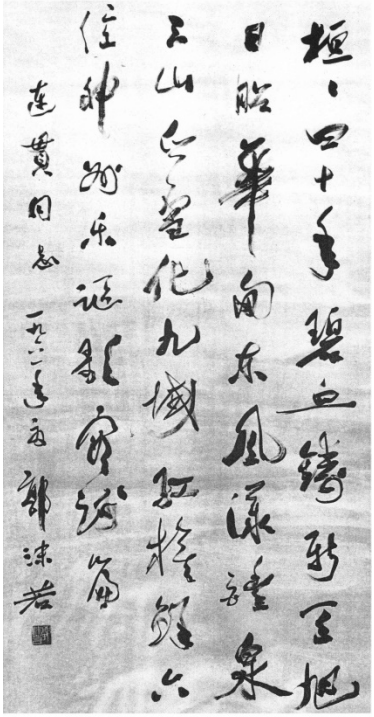


図6

血性文章血写成　党人風格万年貞　丹砂粉砕丹仍在　鉄鏈鍛成鉄癒錚　竜戦玄黄禹甸赤　鶏鳴風雨舜天晴　頭顱換得金星五　満地紅旗衆手擎

(大意)剛直正直な文章、血によって書かれ、共産党員の風格は、いつまでも貞(ただ)しい。丹砂は粉砕され、丹がここにあり、鉄鎖が鍛えられ、ますます高く響く。龍の戦いは、玄黄であるが、禹は赤く、鳥が風雨に鳴き、舜天が晴れている。頭が代わって金星を五つ得て、地には紅旗が満ち、民衆が手を上げている。

とあり、この《革命烈士抄》には、毛沢東や董必武、林伯渠などが同じく題詩を寄せている。

因みに同年二月二十五日に新華社から「人民解放軍総政治部「軍隊の建設活動参加要綱」」が発表され[7]、

中国人民解放軍総政治部は、最近軍隊の社会主義建設参加に関する工作要綱を発布して、各部隊が組織的に、計画的に社会主義建設に参加し、一歩一歩国家の工業化、人民公社の工業化および農業の機械化、電化実現のために、いっそう大きな貢献をするよう呼びかけた。

と言う大躍進政策期の政治的指示内容と、この漢詩は時期的に呼応していると言えるだろう。

さらに政策が頓挫して間もない一九六一年六月一六日に北京で作られた図6の「頌党慶」は、共産党成立四〇周年を祝す内容である。

桓桓四十年　碧血鋳新天　旭日昭華甸　東風漾醴泉　三山白雪化　九域紅旗鮮　六億神州楽　謳歌実践篇

(大意)勇敢な四〇年間、忠誠の血が新しい天を鋳込(いこ)む。旭は全中国を照らし、東風は醴泉に流れる。三山は白雪となり、九州の紅旗は鮮やかである。六億の中国人民は楽しみ、毛沢東の実践論を謳歌する。

とあり、ともに共産党を謳歌する嬉々たる生命力を内包した、プロパカンダを目的とした様式であったと言える。

当時の第二期郭体の背景には、先ずはこのような政治性があったことは、言を俟たないだろう。

四　書品と建築のダイナミズム

一九五九年当時、大躍進政策が進行する中、建国十周年を記念する十大建築に象徴される、博物館や駅、公共建造物が多く建てられたが[8]、権力者がその「建築」で訴える夢と魅惑の全体主義の下、政

治家でもある郭沫若の書のもつ意味も、その文脈で捉えるべきだろう。

因みに郭沫若は当時、「十年建国増徽识」八首、「大广场」「大会堂」「博物馆」「民族宫」「军事馆」「北京站」「长安街」「颐和园」を作詩している。

そして図1の様式は、紛れもなく第二期郭体を象徴するような姿態であり、この漢詩「迎賓館」は、その当日、一九五九年一月二六日の日記によれば、以下のような経緯が窺える。

二十六日　陪同卡德纳斯等人从武汉飞抵广州访问。下午，一同参观了广州市郊区新滘人民公社以及中国出口商品陈列馆。晚，设宴欢送即将离开我国的墨西哥朋友，在致词中表示愿与墨西哥人名紧密携起手来，保卫太平洋上的和平，使太平洋成为名副其实的太平洋。(27日《人民日报》)

同日　晚，在迎宾馆与卡德纳斯将军共赏红线女和马师曾合演的粤剧《断机教子》。作七律一首以志之，有云“绕梁细听歌声转　一曲断机净客尘。”载《作品》四期，题为《迎宾馆》，为“南来杂诗九首”《英雄树下华争放》之二。

(大意)二六日、カルデナスたちを連れて武漢空港から、広州を訪問。午後一同は広州市郊区新滘人民公社と中国出口商品陳列館を参観。晚にパーティを行い、帰国するメキシコの友をねぎらい、その挨拶の中で、メキシコ人と緊密に連携し、太平洋上の平和を守り、名実ともに備わる太平洋とすることを願った。(二七日《人民日報》)同日、晚、迎賓館でカルデナス将軍と共に紅線女と馬師曾、合演の粤劇(えつげき)《断机教子》を鑑賞。七律一首を作りその志を示し、“繞梁細聴歌声転　一曲断机浄客塵”の句は《作品》四期に掲載、《迎賓館》と題して“南来雑詩九首”《英雄樹下華争放》の二とした。

そして、その詩を分析すると、

尚府樓台幾度新　經年喬木更嶙峋　打通鉄塔矜今古　六祖金身隱近鄰　霞鶩起飛冬日暖　桂蘭竟秀晚風薫　繞梁細聴歌声轉　一曲断機淨客塵

(大意)尚可喜(しょうかき)の邸宅は、幾度も新しくなり、年を経て丈の高い木が、さらに剛直。鉄塔を打ち抜き、古今に誇り、六祖の御身は、近隣に隠れている。霞の中の鶩(あひる)は、冬の日の暖かさに起き、桂蘭は秀でて、夜風に香る。琴の美しい音色が聞こえ、歌声もさえずり、一曲は、織りかけた糸を断ち、客の塵を浄める。

となり、迎賓館の模様、役割を物語仕立てに軽やかに詠い上げている。

もともとこの迎賓館は、明末の平南王・尚可喜の王府で、一九五三年に広東省人民政府第三招待所に、一九五六年五月に第三招待所を改名し広東迎賓館となり、郭沫若が“広東迎賓館”の題字を書いている。

さらに、次の図7も、第二期郭体の様式であるが、大躍進政策の影響にさらされた時期、一九六二年十月、郭沫若は北京を離れ、上海を経て、舟山、普陀山(ふださん)、寧波(ねいは)、紹興、杭州に、そして十一月一日福建武夷山に至って視察旅行を行った。その際、郭沫若は福建文化に感動し、十一月六日の一九五三年成立の福建省博物館を参観の折、詠じた詩が次の「如夢令〈参観福州博物館〉」である。因みに郭沫若

と博物館との関係は、その学者的な素性、その学術行政者としての面からも、因縁浅からぬものであった[10]。

古香古色満壁　眼福飽飧一席　特愛呉缶廬　映目荷花　幾筆幾筆　痛快淋漓飄逸

（大意）古香古色が壁に満ち、眼福する晩御飯の一席に。特に呉昌碩の作を愛し、目に蓮の花を何筆かを映じる。何筆何筆と溢れ出る勢いが痛快であり、飄逸である。

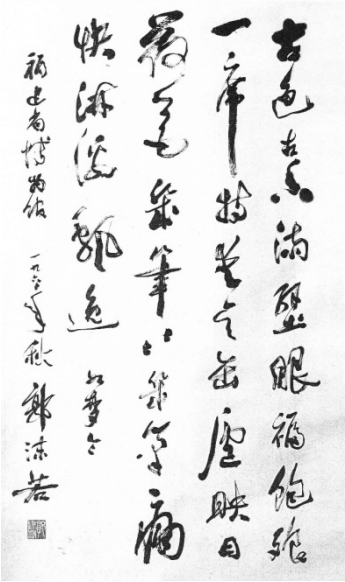


図７

このように、郭沫若は視察を兼ねた旅行中に、あらゆる建造物に立ち寄り、そこで詩を詠じ、書を残している。

以上の傾向から、百花斉放期に北京画院に題された図４も同様、このようなケースで第二期郭体が用いられたのは、建国時の建築ラッシュ、共産党の建造物所有化の中で、その建築に対する記念、さらにその場に見合う書を残すという意識、建造物への配慮があった可能性は充分指摘できるだろう。

また延いては、第一期郭体から第二期郭体へと移行する要因の一つにも、飾られる場の変化があるという視点も、ここで提起したい。

五　漢詩と書法の関係と傾向

A　第三期郭体とその漢詩の詩境

次に、図２は一九五九年二月一九日作詩の「趵突泉（しゃくとつせん）」であるが、

普天誠第一　暦世豈三千　地下汪洋水　形成趵突泉　珍珠随処湧　金線自然牽　濠上知魚楽　欣逢躍進年

（大意）天下第一の泉、どうして三千年を隔てようか。地下には、はてしない水があり、趵突泉を形成している。珍しい珠が随所に湧き、金のすじが自然にひかれる。ほりの上で魚が楽しんでいるのを知り、躍進の年をよろこぶ。

とあり、款記に「仿吾同志属書」とある。

さらに図８の作品は、一九六一年三月十日の作、但し後ろの二句は『郭沫若旧体詩詞系年注釈』所収のものと変わっている。

柳州旧有柳侯祠　有徳于民民祀之　丹荔黄蕉居士字　剣銘衣塚后人思　誕敷文教鋤奴俗　藻飾渓山費品題　当日瘴郷流謫地　于今沆瀣沁心脾

（大意）柳州に古くからの柳宗元の祠がある。民に徳を施し、民もこれを祭る。「丹荔（たんれい）」「黄蕉（こうしょう）」は、蘇軾の字。剣銘、衣冠塚は後世のひとの思い。文教を遍く生き渡らせ田舎の習俗を助け、渓山を飾り、品題をついやす。当日、瘴郷（しょうきょう）は流謫の地、今まで夜も水が湧き出て、脾（ひ）に染渡る。

そして、『郭沫若旧体詩詞系年注釈』では、末句は、

地以人伝人以地　拝公遺像誦公詩

(大意)この地は人に伝えるのにこの地によって、公の遺像を残して、公の詩を読む。

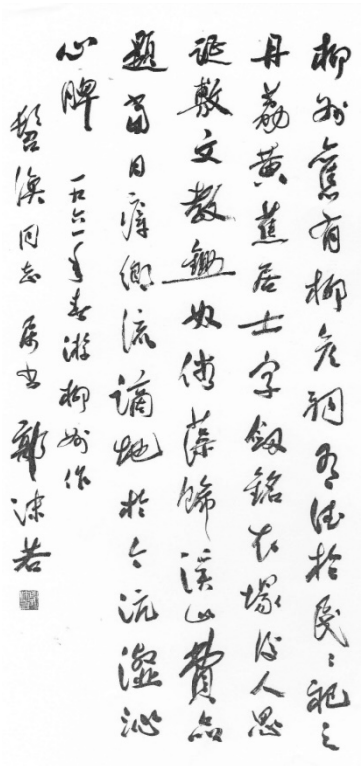


図８

とある。さらに款記には、「髫漁(ちょうぎょ)同志属正」とあり、髫漁の依頼によって書したことが分かる。このように、郭沫若は当時、名所旧跡を回り、多くの漢詩を書している。

これらのように、公共性(建築等)、政治性(プロパガンダ)と言うよりは、名所の感慨を詠じ、また個人的に同志に委嘱されて書す場合、純正の第二期郭体ではなく、第一期郭体と第二期郭体が混合されたような様式となっている。これをここでは、第三期郭体と定義したい。

またこの現象によって逆説的に第二期郭体が公に対して、共産党を謳歌する嬉々たる生命力を内包したプロパカンダを目的とする様式であり、その程度の如何によって、書風が変化していたことを如実に物語っていると言えるだろう。さらには、どこに飾られるかという意識も、やはりその書風に影響を与えていたと言えるかもしれない。

これら郭沫若の、後に名所旧跡詩・記念詩・建築詩等にまで用いられるようになる第三期郭体書風についての詳論は、別章に譲りたい。

B　大躍進期に於ける第一期風郭体の内容について

次に、一九六二年の作、図３の作品「贈焦菊隠(ぞうしょうきくいん)」を見ると、ほぼその姿態は、第一期郭体であると言える。その内容は、

代謝新陳易　誰為万世師　工農兵服務　真善美兼圻　形象
春秋在　弦歌老少宜　喜聞還楽見　努力輔明時

(大意)新陳代謝は易く、誰がいつの世も師となすだろうか。工、農、兵のサービスは、真善美の境を兼ねる。形象は春秋にあり、弦楽器の歌は、老いも若きも宜しい。喜び聞いてかえって楽しく見て、努力は、平和に治まっている世の中をたすけるだろう。

郭沫若の漢詩は、つねに幾らかの政治性を内包しているが、それが公に発せられる場合と、個人に発せられる場合とでは、その形象は異なる。

換言すれば、公的な性格の強くない書は、第一期的に書かれ、それは個人宅で飾られるものという、鑑賞する場という意識が働いていたものと考えられる。

つまり、この書のように大躍進期にあっても、ケースバイケースで、その様式は、抗戦期に復古することもあったと言える。

六　小結

従来、時と場、そして目的、そして為書き、つまり与える人によ

ってほぼ書き分けられていた郭沫若の書風を分析することは、なされてこなかった。

本稿では、大躍進期に於いて、郭沫若の書風の傾向とその意味について、いくつか論及した。

岩佐氏によれば、大躍進期の文学について、

大躍進運動は文芸界にも大きな影響を与えた。その最も大きなひとつが「新民歌運動」の展開である。五七年秋から五八年春、各地の農村では大規模な水利建設が繰り広げられた。五七年末で六千万人が参加したといわれるほどの、この巨大な水利建設に農民を動員するため、多くの地方では政治・生産スローガンを歌謡化し、大衆に呼び掛けるという方法を採った。また動員された農民の中からも「新民歌」(労働や建設、社会主義の理想、共産党賛美などを歌う民謡)が生まれた。

と総括されているが、郭沫若の旧詩に於いても、視察に伴う旅行詩、取り分け大躍進政策を讃える詩が主流となる。

ただその結果として、第二期郭体は、個人の委嘱であっても、そこに政治的プロパガンダの意味合いが強いか、それが公共の建築に飾られることを意識されたケース、それらの共産党的な公共性の意味合いが強い場合に用いられた様式であることを確認した。

さらにその公共性が少ないか、名跡を訪れ、歴史を詠った場合で、多く同志の委嘱で書かれた際は、第二期郭体の要素は些か減った体(第三期郭体)や、むしろ第一期郭体に近い復古ケースもあることも確認した。

これらの書された環境についての考察は、特に近現代の書を研究する場合、その書品の背景が復元しやすく、そのような書かれた情況とタイアップすることが、現地視察などからさらに可能なケースが多々あろう。

よって、これらの書風の分析が、郭沫若に止まらず、さらに今後、詳細に考究される必要があること述べて、本章の結びとしたい。

---

1 賀吉元『三面红旗』的提出与实施(『文史精华』二〇〇八年〇四期)

2 既に大躍進期の新詩については、邢小群「试析郭沫若在大跃进年代的诗歌活动—从《百花齐放》到《红旗歌谣》」(『中国青年政治学院学报』二〇〇三年〇三期、賈振勇『遍地皆诗写不赢—郭沫若大跃进时代的诗歌创作与诗学观念』(『郭沫若学刊』二〇〇五年〇二期)等に於いて、分析がなされている。

3 王继权、姚国华、徐培均『郭沫若旧体诗词系年注释』(一九八四年、黑龙江人民出版社)

4 注3参照

5 岩佐昌暲『中国現代詩史研究』(汲古書院、二〇一三年)

6 龚继民、方仁念『郭沫若年譜』下(一九九二年一〇月、天津人民出版社)

7 日本国際問題研究所、現代中国研究部会編『中国大躍進政策の展開』上巻(一九七三年八月、財団法人、日本国際問題研究所、発行)

8 齐燕铭「为文物、博物馆事业更大跃进而奋斗!—文化部副部长齐燕铭在全国文物博物馆工作会议上的报告」(『文物』一九六〇年〇四期)沈庆林『大跃进、和国民经济调整时期的中国博物馆(1958年〜1965年)』(『中国博物馆』一九九六年〇三期)

9 井上章一『夢と魅惑の全体主義』(文春新書、二〇〇六年九月、文藝春秋)

10 温吉言「郭沫若情系西安半坡博物馆」(『郭沫若学刊』二〇〇七年〇四期)、张勇「中国现代文学研究与名人博物馆关系初论—以郭沫若研究为例」(『山东师范大学学报(人文社会科学版)』二〇一六年〇三期)

11 注5参照

第十三章　郭沫若に於ける百花斉放の文学と書
ー百花斉放詩の書風を巡って

一　緒論

ー百花斉放期の郭沫若日記

毛沢東は一九四九年、ソビエト連邦のヨシフ・スターリン支持(向ソ一辺倒)の下、中華人民共和国を建国したが、一九五三年三月五日にスターリンが死去し、後継者ニキータ・フルシチョフが一九五六年二月にスターリン批判を始めたことによって、中共の政策はソ連との協調と独自性が交錯するようになる。

その流れを受けて一九五六年九月、中国共産党第八回党大会ではフルシチョフと歩を合わせ、採択された綱領に於いても「毛沢東思想」という文言が削除され、集団指導体制の確立が強調されて、毛の決定権が根底から揺さぶられた。

これを受けて、毛はリーダーシップの再強化を大衆運動によって挑み、一九五六年五月二日、毛沢東は最高国務会議で「共産党への批判を歓迎する」として、「百花斉放、百家争鳴」所謂「双百」を提唱、百花斉放百家争鳴とは「多彩な文化を開花させて、多様な意見を論争する」という意味である。

毛沢東がこのような運動を始めた理由は、現在では概ね毛沢東が反中共分子を炙り出すための巧みな陰謀だったと見做す説が有力である[1]。

また、銭理群氏によると[2]、

毛沢東の時代には、党内の知識人が少ないからこそ、根本的なやり方として長期にわたり自分たちの知識人を育てるべきだと考えていた。しかし自分たちの知識人が育つ以前には、知識人に妥協することに耐えなければならなかった。これはかなり不愉快なことであった。しかも「私の指導を承認し、受け入れる」という前提が必要であった。つまりブルジョア知識人は基本から言えば社会主義革命の対象であり、さらにかつては「反革命」の勢力であり、最終的には消滅させられるべきものであるが、ただ共産党が科学界を完全に掌握しきっておらず、またプロレタリア階級の知識人がまだ培養されていない時期にあっては、やはり彼らは必要だったのであり、譲歩するほかなかったのである。その前提のもとでのみ、一定の自由や民主も許される。これこそが毛沢東が一九五六、一九五七年に双百方針を打ち出した真の意図であったのだ。そして当時、知識人の絶対多数は毛沢東に確実に心服していた。傅雷のような貴族的な、プライドの高い知識人ですら心服していたのだから、当時の知識人は共産党の指導を誠心誠意に受け入れようとしたと考えられる。毛沢東は恐らくそう思ったからこそ「百家争鳴、百花斉放」のスローガンを高らかに掲げたのである。しかし彼が別の判断を下し、知識人が言い付けを聞かないと気づくとすぐに、彼はいつでも双百方針を撤回することができた。その後の変化と急展開は、この時すでに準備されていたといえよう。

と当時の事情について独自の見解を述べている。

その当時の郭沫若は、一九五五年の中国社会科学院の前身にあたる中国科学院の哲学、社会科学科の設立、それとともに、全国の古跡名所を訪れる視察旅行が始まり、また日本訪問などがあっても、まだ北京で過ごす日々が多く、中国全土視察は本格化していなかった時期である。

その一九五六年五月二日の翌々日、四日郭沫若は全国先進生産者代表会議で「向科学技术进军」という講話を発表し、各国の先進技術の中国への導入を訴えている。

また一九五六年八月二四日の毛沢東の「推陳出新」方針の談話を受けて、二六日『人民中国』《百家争鳴“万岁！》に於いて

认为“百家争鸣”具有它的时代性“，”由于历史发展的阶段不同，因而每个阶段，百家争鸣‘的实质也各不相同”，指出：“在我们的时代中实现，百家争鸣‘是比历史上任何时期都有更有利的条件”，并分析了具体条件和措施，从而断定：“只要我们不断努力，我们的，百家争鸣‘将永远继续下去”。

（大意）「百家争鳴には、その時代性が備わっている。歴史の発展段階は同じではないから、それぞれの段階の百家争鳴の実質も同じではない」とみなし、以下のように指摘した。「我々の時代に百家争鳴を実現するのは、歴史上のいかなる時よりも有利な条件がある」。同時に具体的な条件と措置を分析し、そこから「我々が不断に努力を続けさえすれば、我々の百家争鳴は永遠に続いていくであろう」と断定した。

と述べ、そして翌月九月六日には、

发表《“百家争鸣”可以推广》，就“百家争鸣”的方针是不是仅限于学术界等问题，答《工人日报》读者问。认为“百家争鸣”主要是发展学术研究方针”，但“在实际工作中和在技术上都可以适用”，问题于“怎么来进行，百家争鸣‘，怎么通过，百家争鸣：而求得进步‘。

（大意）『百家争鳴は広めていい』を発表し、「百家争鳴」の方針は学術界だけに限られるのか等の問題について、《工人日报》の読者の質問に答え、以下のように表明した。「「百家争鳴」は主として学術研究を発展させる方針である。だが、実際の工作と技術面にも適用できる。問題は、どのように百家争鳴を進めて行くのか、「百家争鳴」を通してどのように進歩を求められるのか、という点にある」。

と表明している。

そして、百花運動は当初盛り上がらなかったため、党外人士や知識人に積極的に参加するよう呼びかけ、二月には、毛は「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」という講話を行い、党に対する党外からの批判を歓迎すると表明した。

さらに一九五七年三月六日から十三日にかけて全国宣伝工作者会議でもさらに中国共産党に対する批判を促した。

かくして、知識人の間で中国共産党に対する批判が徐々に始まり、次第にその批判は激し、知識人たちは共産党の「党天下」や、最高指導者を名指しで批判するようになる。

また、始めは批判の場は壁新聞や座談会に限定されていたが、拡大する潮流に対し、一九五七年五月十五日、毛沢東は、「事情正在起变化」を撰文し「右派」に対する批判も行うように奨励した。

その前日の十四日、郭沫若は、北京中国画院成立大会で、百花斉放を称える漢詩を発表し、二三日の日記によると、

上午，往北京饭店，出席中国科学院学部委员会第二次全体会议，并致开幕词，指出“能够领导制订科学远景规划的党，一定能够领导我们实现远景规划”：强调“贯彻学术性的百家争鸣，是促进学术发展的原动力”。

（大意）午前中、北京飯店に赴き、中国社会科学院学部委員会第二次全体会議に出席。その開会のあいさつで、「科学の将来計画を定めるよう指導できる党は、必ず我々を指導して将来計画を実現できる」と述べ、「学術上の百家争鳴を貫徹することは、学術発展を促進する原動力である」と強調した。

とあり、三十日には、

下午，在中国科学院学部委员会第二次全体会议上致闭幕词，肯定这次会议展开了争鸣，体现了当前的时代精神，初步发扬了学术民主，希望既不要盲目自大，也不要盲自菲薄，在重视自己的劳动的同时，更要重视别人的劳动。

（大意）午後、中国社会科学院学部委員会第二次全体会議で閉会のあいさつを行う。今回の会議がさまざまな議論を繰り広げ、現下の時代精神を体現し、初歩的に学術上の民主を発揚したことを肯定した。また盲目自大、盲目浅薄にならず、自己の成果を重視すると同時に、それ以上に他人の働きの成果を重視するよう希望すると述べた。

とあり、ここではまだ学術界の百家争鳴、民主性を唱えている。

しかし文学方面では、「生活に関与する文学」として共産党内の官僚主義、党幹部の非人道的な、党内部の〈暗黒〉を批判するものもあれわれるが、岩佐氏の指摘にもあるように[3]、

このような作品と、それを生んだ「生活に関与する文学」の主張は、当時の文壇主流からは、延安で解決ずみの問題の蒸し返しであり、『講話』への反対と受けとられたであろう。だがこの主張は現実を〈暗黒／光明〉の二項対立でとらえ、〈暗黒〉をなくし〈光明〉を求めるというその発想の構造においては、〈暗黒／光明〉モデルの発想の範囲内にあったのであり、社会主義体制に反対する文学主張ではなかった。五七年反右派闘争のなかで彼の詩は「反官僚主義の看板で、歪曲と誇張の手法で……多方面から新社会を攻撃した毒草」とされ、彼自身は右派分子と認定され、詩壇から追放されたがこのような主張は「反党の逆流」「修正主義の文学思潮」として葬りさられた。この後文学が、社会主義の〈暗黒〉を指摘することはなくなる。という道程を辿ることになる。

そして、一九五七年六月八日、人民日報は「这是为什么？」という「右派分子が社会主義を攻撃している」という毛沢東が執筆した社説を掲載。これによって党を批判した知識人たちは、毛沢東によって社会主義政権破壊を画策した「右派」と見做されるようになる。知識人の粛清運動である所謂「反右派闘争」は、この時から始まったと言われている。

郭沫若の六月二六日の日記では、

就回击资产阶级右派分子进攻等问题，对《光明日报》记者何柄然发表谈话，认为“无罪者的言者无罪，有罪者的言者还是有罪者”，对资产阶级右派分子必须坚决回击，希望他们不要自绝于人民。

（大意）ブルジョワ階級右派の進攻に反撃する等の問題について《光明日报》記者、何柄然が談話を発表し「無罪の発言は無罪、有罪者の発言は、やはり有罪」と見ている。ブルジョワ階級右派には必ず断固として反撃しなければならず、彼らが自ら人民と手を切る（絶縁する）ことのないよう望む。

と述べている。これが、郭沫若の右派闘争期当初のスタンスとなるのだろう。

この年の右派闘争、一九五七年の毛沢東の一党専制体制強化の所謂「五七」体制について、銭理群氏は、四つの点にその要点を絞っている。

一　隊列を組みかえ、階級部隊を再編すること。
二　大きな権力の独占と党による一元化された指導体制の確立。
三　興無滅資（プロレタリア思想を興し、ブルジョワ思想を撲滅すること）を軸とした新しいイデオロギーの確立。
四　党の対立面を必要とし、階級闘争をつくりあげ、「永続革命」の緊張状態を保つこと。

である。

二　百花斉放時の旧詩と書

郭沫若の当該期の旧詩の作は、『郭沫若旧体詩詞系年注釈』に拠ると、一九五六年は六首、一九五七年は十首と少なく、一九五八年以降増産されている。これは、百花斉放期は作（旧）詩を作る旅行の機会が少なかったことと、行政的な多忙さによるところが大であろうが、一九五八年後の旧詩の増産は、大躍進政策に伴う視察旅行に便乗して、文化面にも何らかの予算が付けられたことが推察できる。

それでは、百花斉放期の旧詩を見て行くと、

まず一九五六年十月一日に発表された「文匯報継続出版　用陳叔老韻」には、

建国七年慶　普天万歳声　続編文匯報　敢作驚人鳴　愚者一籌慮　秀才半紙情　集思忠益広　日久自成城

（大意）建国七年の慶賀、天下に万歳の声が響き渡る。続編「文匯報」、敢えて人を驚かせる。愚者は小さなことに慮り、秀才は半紙で情を伸ばす。忠誠への思いは益々広がり、日は長く自ら城塞を築く。

とあるが、この和された詩は、陳叔通の

国慶歓騰日　飛来第一声　発揚八大会　貫徹百家鳴　取譬群流匯　提高再厲情　従茲文教益　頼此作干城

（大意）国慶を歓喜する日、飛び来たる第一声。八大会を発揚し、百家争鳴を貫徹する。すべての情報が流れ集まり、凄まじい情熱を高めてくれる。ここから文教は益し、これによって城塞を築く。

である。次に一九五六年十一月一日の「賀張元済老先生九十寿辰」では、

興国禎祥見　老成今道行　百年暦甘苦　七載浄風塵　文化高潮至　和平普海親　百家鳴鼎盛　翹首寿斯人

（大意）国家が振興をみせ、老いて今の道を行く。百年の甘苦を重ね、七年で風塵を浄めてくれた。文化の高潮は、遍く海を和平に導く。百家争鳴は盛んになり、首を上げてこの人を寿ぐ。

とある。そして一九五七年五月の「贈北京中国画院」（図1）では、

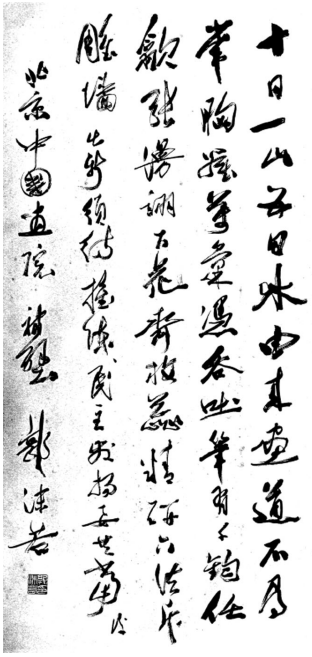


図 1

十日一山五日水　由来画道不尋常　胸羅萬彙憑呑吐　筆有千鈞任歙張　漫詡百花斉放蕊　精研六法拆雕墻　出新須待推陳後　民主発揚要共当

とあり、反右闘争がすでに始まっている一九五七年九月の「贈香港大公報」でも

為民喉舌誇天職　報国精誠万感通　大陸風伝森大厦　長江電見架新虹　百花斉放文化蕊　七載双成革命功　奮鋒継今循宇

内　仍期為善与人同

（大意）民の喉舌と為ることを天職と誇り、報国の忠誠はすべてに通じる。大陸の風は森やビルに伝わり、長江の電力は新たな虹をかける。百花斉放は文化の蕊、七載双つ〔百花斉放＝芸術上の繁栄と百家争鳴＝学術上の繁栄〕ながら革命の功と成る。奮鋒今に継ぎ、宇内を循（めぐ）る。善行を人とともになす事を期している。

とあり、未だその基本姿勢を貫いている。但し一九五七年の「卜算子　為文君公園題詞」では、

文君当壚時　相如滌器処　反抗封建是前駆　佳話伝千古
会当一凭弔　酌取井中水　用以烹茶滌塵思　清逸諒無比

（大意）文君壚に当たりし時、相如器を滌（あら）いし処〔〈卓文君と司馬相如の故事が典拠〉富豪の娘司馬相如が親に背いて貧しい卓文君に添い、居酒屋を開いた話。史記にあり、次の「反封建」はそのことを指す〕。封建制への抵抗への先駆け、その逸話は千年も伝わっている。今は古人を弔い、その井水を汲む。今はお茶を煮るに使って俗念を浄め、その清涼感は無比である。

とあり、右派を牽制している。

そして私は当時の旧詩の書相については、第十一章「抗日勝利から中華人民共和国建国期、百花斉放時に至る郭沫若の書様式の整理」に於いて[4]、

…つまりこの抗日期の「第一期郭体」とは異相を呈した「第二期郭体」の確立の背景には、政治キャンペーンという目的があって、そのプロパガンダ的性格が決定的な役割を担い、とりわけ、幾多の書風遍歴を経て、「百花斉放」時代に完成したといって過言ではないだろう。…所謂、気迫型の「郭体」は、単発としては、未成熟ながら早く抗日戦争期（第一期）から見られたが、感情の起伏の表現たる用筆の伸縮の激しさ、最高度の気魄が盛り込まれるようになったのは、この「百花斉放」時であり、知識人の復権という精神的な興奮を背景に、この確立された様式が常態として、次の大躍進時代（第三期）にまで引き継がれることになるのである。

と述べ、さらに拙稿「郭沫若の書、所謂「郭体」の規定と成立過程及びその時期を巡って」に於いて[5]、

ここまで見てきたように郭沫若の行草、所謂「郭体」は、実際に二度の変転を経て、形成されたものと言えるだろう。その一つは一九三〇年代後期の抗日全面戦争期に形成され（第一期郭体）、もう一度は、一九五〇年代後期の百花斉放期に変貌を遂げたと言える（第二期郭体）。そしてその内実についてまとめれば、「第一期」は、口語様式の文語様式への流入体、「第二期」は、「第一期体」に再度文語様式が盛り込まれた体と定義できよう。

と定義した。この「口語様式」という語彙は、「白話様式」と修正しなければならないが、

図1の「贈北京中国画院」の書、また図2の「百花斉放　推陳出新」、さらに図3の自作詩に、

百花斉放百鳥鳴　貴在推陳善出新　看罷牡丹看秋菊　四時佳気永如春　郭沫若

（大意）百花斉しく放（さ）き、百鳥が鳴く。貴ぶべきは陳（ふる）きを推して、新しきを出すにあり。牡丹を見終われば次は秋菊、

四時の佳気は永（とこしえ）に春のごとし。

とある書風から、私が従来指摘してきた要素が汲み取れると言えるだろう。

図 2

図 3

三　詩集「百花斉放詩」の構成過程

A　全体構成と一九五六年時期の三首

一九五八年四月九日付の後記には、この詩集は三月三十日に正式に開始し、一九五六年の作三首（牡丹／芍药／春兰）以外は、十日で書き上げたとあり、大躍進政策の東風に感謝すべき旨が述べられている。

実際にその内容を分類してみると、

一　総路線、大躍進の頌歌

二　知識分子の心理を反映したもの

三　植物使用の価値と、接ぎ木の詩と間に合わせの詩

と従来整理されている[68]。

本章では、先ず一九五六年時の百花斉放期の三つの詩の分析から始めたい。

先ず「牡丹」であるが、

我们并不是什么，花中之王，也不曾怀抱过所谓，富贵，之想；只多谢园艺家们的细心栽培，使抽出了碧叶千张，比花还强。尽管被人称为国色与天香，尽管有什么，魏紫，或者，姚黄，花开后把花瓣散满了园地，只觉得败坏风光，令人惆怅。

（大意）私達は決して「花中の王」などではなく、また「富貴の花」の想いなど抱いたこともない。ただ園芸家達の心を込めた栽培のおかげで何千もの緑の葉を抜き取られ、花よりずっと強くなっただけ。ただ人様から国の色（国家一番の美女）天の香りと誉めそやされ、「魏紫」や「姚黄」（いずれも古代の牡丹の名品種）などがあると言っても、咲いたあとは花びらを庭中に散らし、風景を台無しにし、人を悲しくさせるだけ。

次に「芍药」では、

有人竟贬低我们为“花之奴”，我们都不愿受这样的侮辱。委屈生活过了不知多少年，如今是奴隶翻身，人民作了主。花开

在今天，我们是倍有精神，发出的一花一叶都是为了人民。蝴蝶们的午梦睡得来更加轻巧，蜜蜂们的蜜汁比以前更加清凉。

（大意）私らのことをなんと“花の奴隷”と貶める人がいるが、我らはこのような侮辱を受けたくない。くやしい生活を何年過ごしてきたか知れないほどだが、今や、奴隷は立ち上がり、人民が主人公となった。今日、花咲きひらき、私らは以前に増して元気になった、咲き開いた一花一葉はすべて人民のためだ。チョウ達は午睡の夢から目覚めてずっと軽やかに飛びまわり、ミツバチ達の甘い蜜は前よりずっとさわやか。

さらに「春兰」では、

我们也讨厌人们夸说什么“王者香”，也讨厌人们说我们是“花中君子”，其实我们生长在山地的泉水边，樵夫和林农们本是我们的好邻里。脉脉的清泉浸出自幽谷的岩隙中，空气是十分清冷，苔藓是十分蒙茸。我们深愿回到故乡，倾听流泉的琤琮，在亲爱的邻里中高唱着东风的歌颂。

（大意）私らは人から「王者の香り」などと褒められるのはイヤ。「花の中の君子」だと言われるのも嫌いだ。実を言えば我等は山地の泉のほとりの育ち、もともときこりと農夫の隣同士。清らかな泉水が途絶えることなく奥深い谷間の岩の隙間からにじみ出て、空気はひんやり、こけにやわらかく覆われているところ。故郷に帰りたいと強く願い、さらさらと流れる泉の音に耳を傾け、親愛なる古里の隣人の中で東風の褒め歌を高らかに歌っているのだ。

これらの三首について贾振勇氏は「郭沫若与反右运动」の中で、

（大意）郭沫若の言行は、とても慎重で、賢い政治態度の表明である。旗幟鮮明で、断固として応えて、またあいまいで、左右同源である。周知のように、一九五六年夏に、郭沫若は奮して百花を植え、百首の詩を選出し、毛沢東のために興を添えると同時に、毛沢東に対し“百花斉放、百家争鳴”方針に積極的に応えた。しかしただ三首だけしか残さなかった。…

この三首の詩を見ると、《牡丹》詩の初めに“我们并不是什么‘花中之王’，也不曾怀抱过所谓‘富贵之想’”と言い、《芍药》詩の中で“我们也讨厌人们夸说什么‘王者香’，也讨厌人们说我们是‘花中君子’”だと言う。詩歌の初めに否定句式でなく、否定するのであって、まるで謙虚な声明で、また理解が得られないため弁解するようでもある。全体を見て、詩句の現れた心理状態は慎重であり、自らの清らかさを挟んでいる。「芍药」では、心理状態の変化の興奮を“有人竟贬低我们为‘花之奴’，我们都不愿受这样的侮辱。委屈生活过了不知多少年，如今是奴隶翻身，人民作了主。”と述べている。少し謙虚な弁明から、また翻って精神奮起する。思想と情緒を述べている間、何度もためらいながらも、毛沢東と党と前進する文人知識人の実際の心理状態と一つになる。もしも、詩情がここで終わっていれば、おしまい。しかし、《牡丹》の最後の一節は、それなのに“百花齐放”の精神に背くようである。“尽管被人称为国色与天香，尽管有什么魏紫与姚黄，花开后把花瓣散满了园地，只觉得败坏风光，令人惆怅。”と花が咲き散る興ざめさせた主旨であるが、“百花齐放”の方針、政策の歌であるのは、それは興ざめなのか？これは予見なのか？不満なのか？指摘なのか？それとも政治的嗅覚に敏感なせいなのか？　上述の詩を解釈して、行間からひそかに郭沫若の政治に対す心理状態を少し解することができる。

と述べ、その三首はその百花斉放政策に対する郭沫若の政治的洞察によって、曖昧な心境が吐露されていたとする見方であるが、当時この三首の他に新詩が残されていた可能性や、またその中で反右闘

争、大躍進政策への後付けにこれら三首が敢えて選定された可能性も否定できないのではなかろうか。

続いてその詩をさらに見て行きたい。

B　反右闘争という転機と大躍進政策の頌歌

百花斉放の詩は、その題名とは裏腹に、その後の反右闘争や大躍進政策時の詩が内容としてもこちらがメインであり、後に一九五九年に上梓される書の装いもこの詩文に相応しい様式が模索されたと見て大過なかろう。

例えばその詩を見ると、先ず反右闘争の詩として「石榴花」では、

我们是灌木，和杜鵑是同科，叶似琵琶而细长，花红如火。也有淡红，淡紫，深黄或者纯白，数朵开在枝头就像是一朵。我们能耐寒，能生活在高山，北京应该多，却是大大不然。同志，为什么不敢栽培我们？我们是多么愿意：向党交心肝！

（大意）我々は潅木で杜鵑（つつじ）と同科、葉は琵琶に似て細長く、花は紅く火のようだ。うすい赤、うすい紫、濃い黄色、真っ白のものもある。数枝が枝先に咲くと、まるで一枚の花びらのよう。我等は寒さに強く、高山で生きられる。北京には当然多いが、我等とは大いに違う。ねえ、同志。どうして我等を育てる勇気がないのですか？我等は、党に心を差し出したいと、こんなにも願っているというのに。

とあり、右派知識人に代わって党に融和策を求め、さらに「郁金香」では、

波斯诗人曾经把我们比作酒杯，但他错误的只用来作自我陶醉。我们今天是要为大跃进而干杯，高呼中国共产党和毛主席万岁。黄河之水今后不会再从天上来，高峡出平湖，猿声不再在天上哀。最大的变异要看到黄海变成青海，全民振奋，真真正正是大有可为。

（大意）ペルシャの詩人が、かつて我等を酒盃にたとえた。だが彼は誤ってそれを自己陶酔に使っただけだった。我等は今日大躍進のために乾杯し、中国共産党と毛主席万歳と高らかに叫ぶ。黄河の水は今後はもう天から来ないだろう〔李白の詩「将進酒」の詩句を受けている。黄河の激しい水流を水が天から来るようだと描写した。ここでは、黄河の治水が完成すれば、水流は穏やかになるだろうと言っている〕長江の深い渓谷を出れば平らな湖で猿声が天上に哀しく響くことは、もはやあるまい。最大の変化は黄色く濁った黄河が澄んだ水の流れる青い海になったのを目にできるだろうこと。全人民が奮い立とう、この大躍進運動は、ほんとうに大いなる可能性があるのだ。

と総路線、大躍進の頌歌となっている。

銭立群氏は、当時の右派闘争について[8]、

…それと同時に、毛沢東は自分達の知識人を養成することをくり返し打ち出した。これはおそらく彼が反右派運動のなかから学んだ重要な経験であり教訓だったのであろう。「一九五七年夏の形勢」において、毛沢東は「社会主義建設のためには、労働者階級は自らの技術幹部の部隊を形成せねばならないし、自らの教授、教員、科学者、新聞記者、文学者、芸術家とマルクス主義理論家の部隊を持たねばならない。これは幅広い部隊となり、人数が少なくては成り立たない。この任務は今後一〇年から一五年のうちに解決されなければならない」と号令をかけて

いる。彼が構想したのは、未来の労働者知識人の部隊であり、中心となるのは共産党によって養成された新しい知識人である。旧知識人は、もし改造を受け入れ、プロレタリアートの側に立てば、未来のプロレタリアート知識人部隊の一角を担えるだろう。その際、いわゆる旧知識人が改造を受け入れるということは、党への投降であり、馴致された道具となることを意味し、改造をするのなら認められるし、改造しないのだったら消滅の対象となることを意味することになる。これこそが反右派闘争以降、毛沢東が打ち立てた知識人政策であるといえる。このような状況下で、百花斉放、百家争鳴をさらにどう理解すればよいであろうか？ 毛沢東は「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」において次のような「補足」を加えている。「百花斉放、百家争鳴という二つのスローガンは、字面から見れば、階級性はなく、プロレタリアートも利用できるし、ブルジョワジーも利用できるし、その他の人々も利用することができる」ものである。毛沢東が実際に強調したのは百花斉放と百家争鳴における階級性であった。私的な談話のなかで、「百花斉放、百家争鳴というこの二つのスローガンはプロレタリアート的なものである。このスローガンを実行した結果、誤謬を打ち破れず、右派を正すことができなければ、このスローガンはブルジョア的なものとなり、反動となってしまう」と語っていた。このように、いわゆる「百家」とは、実際は二つしかなかったのである。それは ブルジョワジーとプロレタリアートだけであった。「百家争鳴」は自ずと「両家の争い」となり、争鳴の目的は「一方が一方を叩きのめす」ことになった。プロレタリアートがブルジョワジーを叩きのめし、マルクス主義が非マルクス主義を叩きのめすということだ。百花斉放、百家争鳴は、学術的民主と政治的民主の発揚のためではなく、イデオロギー的な階級闘争であり、思想的文化的なプロレタリアートの専政を実現するための一つの手段であったのだ。

と述べている。郭沫若の詩もそういう推移する境遇の中で書かれたのである。百花斉放詩には、これらのような政治的寓意を込めた詩が多く、一九五八年時の郭沫若の心境を、如実に物語っていると言える。

四　百花斉放詩の書風構造とその意味について

郭沫若日記によれば、一九五八年三月末日に百花斉放詩の小序を書き、その四月に殆どの詩を発表、六月に後記を書き上げている。

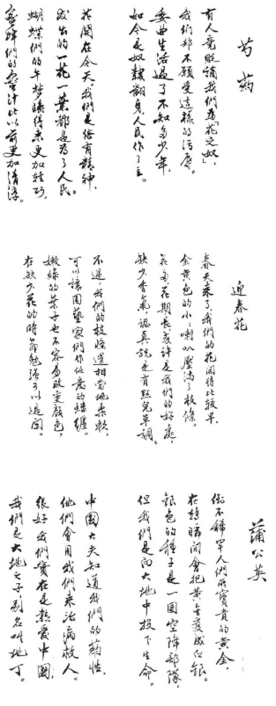


図 4

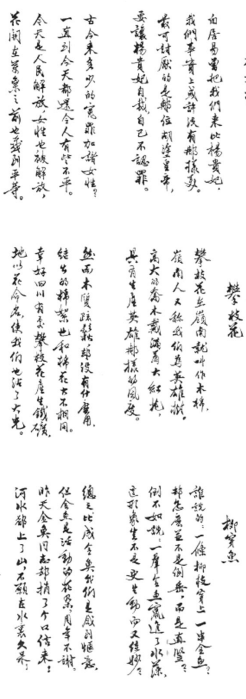


図 5

そしてそれが出版されるのが一九五九年四月、江蘇文芸出版社を先駆けとして陸続と出版されている。そしてそれが郭沫若の書とともに出版されるのは、一九六一年一月に栄宝齋からで、これが実際

に書かれたのは一九六〇年の秋、日記に依れば九月六日となっている。

百花斉放詩が書品ではなく下書きされたその様式は、当時の管見の資料から推せば、恐らく当時日常で通用されていた、第一期郭体、白話様式の文語様式に流入された態様であったと思われるが、この栄宝齋から出された書法の様式は、郭体として異色な様相を呈している。

例えば、図4の「芍药」は先に見た一九五六年時の百花斉放の詩であり、図5の《攀枝花》などは

攀枝花在岭南就叫作木棉，岭南人又称我们为英雄树。高大的乔木戴满着大红花，具有生产英雄那样的风度。然而木质疏松，却没有什么作用，结出的棉絮也和棉花大不相同。幸喜四川有处攀枝花产生铁矿，地以花命名，使我们也沾了大光。

（大意）攀枝花は嶺南では木綿（きわた）といい、嶺南の人は我等のことをまた英雄樹と呼ぶ。高い喬木には大きな紅い花がびっしり咲き、英雄を産むような風格を備えている。だが木質は緩み、なんの役にも立たない。生まれ出る棉状の絮や綿花とも大きく異なる。幸いに四川には攀枝花と言うところがあり、鉄鋼を生産し、ここは花の名を地名としていて、我等もおかげを蒙っている。

は大躍進政策の頌歌であるが、同じ様式に総括さてており、百花斉放詩様式の確立を意味している。

その書風を具さに分析すると、日常の小字、それは当時通用していた第一期郭体に、例えば一九四〇年代に書かれた文語体、といっても図6のような謹直で伝統的な小楷の要素が加わり新たな様相を呈している。

ここで少しく郭沫若の小字、つまり日常時に用いていた書風を概観すれば、一九三〇年代は草書主体の丸文字、癖文字とでもいうものであったが、一九四〇・一九五〇年代と次第にそこに文語的な要素が加わってくる。無論そこには、第二期郭体に見られるような艶やかな伸縮は見られない。それは鑑賞者を意識することが少ないが

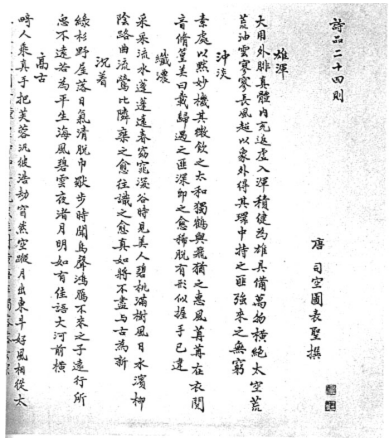


図6

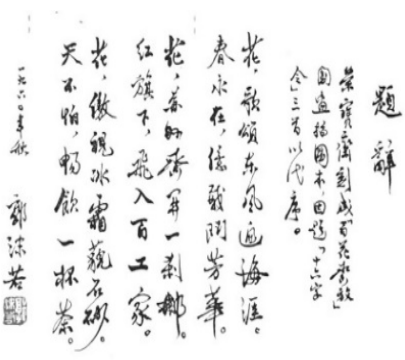


図8

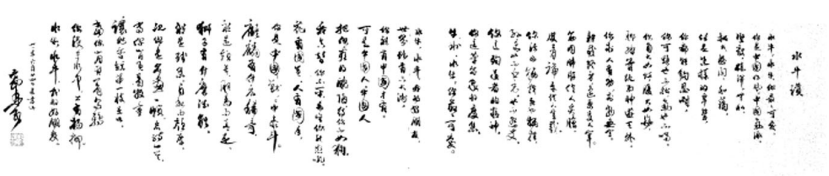


図7

故に当然であり、小字の小筆、小紙、鑑賞物的要素の少なさに起因するものと考えられる。

しかし、この百花斉放詩は、小字と雖も鑑賞物である故に、そこに日常とは一線を画する要素が必要だった。そこに用いられたのが、伝統的な碑学の小楷の技法であり、書道用語で言えば「刻意」の書、それによって気品を高めていると言える。

つまり、日常化されていた第一期郭体の様式にさらに伝統的な碑学、小楷の要素が上積みされたのが、この百花斉放詩様式と言える。

白話詩の鑑賞物たる書として、先例を挙げるならば、一九四二年の書「水牛讃」（図7）があるが、それは元来の白話様式をベースにし、さらに鑑賞物たる故に、幾らか文語的な華やぎが盛り込まれている。それに比べこれらの百花斉放詩様式は、逆に華やぎを抑制した緊張感があり、その心境が郭沫若の百花斉放詩への総括だったと考えられる。

その傍証として図8の題字は、第三期郭体（第二期を内包した）であって、郭沫若は、この百花斉放詩を第三期で書こうと思えば書けた。そこを書き分けた原因を考えねばならないだろう。

五　題辞と第三期郭体の使用条件

ートーンダウンと言う止揚

私は、一九五〇年代後期から六十年代前期にかけての郭沫若の歴史学行政・視察旅行と詩、そして書について分析する過程で、郭沫若の詩は、常に記念詩的な意味を担っているが、一九五〇年代後期から一九六〇年代の新様式サイズの作品について言えば、共産主義のスケールの大きさが反映するという社会を構成する要素であった反面、彼自身の生活を構成する要素であったという側面からの考察が、次の研究の課題だと考えている。つまり百花斉放、反右闘争、大躍進政策という時代の流れの中で、書という分野はつねにその書人の心の速度でもあり、時代の速度でもあり、第三期郭体を改めて簡易に定義すれば、第二期と第一期の郭体の止揚した姿と言える。

次は、その定義を深めるために、百花斉放時の文学や思想の変遷を中心とした、彼の内面の世界をさらに掘り下げる研究を課題とすれば、郭沫若の第三期郭体は、ほぼ百花斉放から反右闘争へと移る時、管見では一九五八年にその姿を現す。

さらに郭沫若は、先ほども述べたように、旧詩の作は、一九五六年は六首、一九五七年は十首と少なく、一九五八年以降増産されている。

また、それは大躍進政策に伴う視察と関連するのだろうが、この第三期郭体は、この百花斉放と表裏の関係にあると言えるだろう。

これは郭沫若の思想的傾向でもあるが、常にダブルスタンダード、両刀使いであって、時の情勢によって、思想が左右に微妙に揺れると言えるだろう。

つまり、一九五六年期の百花斉放開始期は、主に学術界の解放の方面に力を入れ、文学的には自重していたように思われる。または、当時の詩作を葬り去った可能性も考えられる。

そして、一九五八年の反右闘争後の大躍進政策に於いて、書法的に言えば、第二期郭体がややトーンダウンと言う形で、再度、右から左と向かい止揚した姿が、第三期郭体の真相とは、言えないだろうか。また第一期と第三期の違いを象徴的にいえば、第二期で備えた伸縮の有無と言えるだろう。

六　小結

中国共産党の政治キャンペーンである、「百花斉放」政策は、時間の経過の中で、その題目は変わらずとも、その内実の意味合いが変質していった。そしての変貌を、もっとも見事に体現した人物の一人が、この郭沫若に他ならない。

一九五六年時は、学芸の解放に歓喜し、一九五七年時には反右闘争へ玉虫色の模糊たる様相を呈するようになり、一九五八年には、大躍進政策を賛歌する。

そして一九五九年九月二六日の日記には、

发表《进一步展开“百花齐放，百家争鸣”》，初步总结贯彻“双百”方针的经验。认为“要使‘百花齐放’，则‘推陈出新’正是最具体的方法”，“要能‘百家争鸣’，那应‘包含有‘实事求是’的步骤”。

（大意）「《「百花斉放、百家争鳴」をよりいっそう展開せよ》を発表し、「双百」の方針を貫徹実行した経験を初歩的に総括した。「百花」（さまざまな芸術の花）を「斉放」（一斉に咲）かせようとすれば、「推陳出新」こそが正に最も具体的な方法である。もし「百家」（さまざまな学術）の「争鳴」（活性化）を可能にしようとするなら、「実事求是」（事実に即して真理を求める）の段取りをふまなければならない、という認識を述べた。」

とある。

この「推陳出新」とは、「古きを推し量り、新しいものを出だす」「古い糟粕をすて、新しいものを出だす」の両訓が可能であり、これも時局によって使い分けのできる造語である。

またこの「実事求是」の精神は、清朝考証学の空理空論（理学）を批判する思想を基とする思想でもあり、清朝の当時、その思想の延長として書の美学、大衆化的に質実な四角い楷書が尊重されるという流派を形成したが、所謂一九六〇年の郭沫若の書様式、「百花斉放詩様式」に認められる楷書の方筆的要素は、その意識を大躍進政策の反省として百花斉放詩に盛り込まんとしたとも考えられよう。

政治とは常に流動的で玉虫色であるが、政治や文学と違い、書は常にその時々の事実に正直であり、その姿がその時の真実を現していると言えるだろうか。

---

1 天児慧『中華人民共和国史』（岩波新書 一九九九年）ユン・チアン『マオ 誰も知らなかった毛沢東』（講談社 二〇〇五年 上巻）

2 銭理群著：阿部幹雄［ほか］訳『毛沢東と中国：ある知識人による中華人民共和国史』（青土社二〇一二年十二月）

3 岩佐昌暲『中国現代詩史研究』（汲古書院 二〇一三年）

4 拙稿「抗日勝利から中華人民共和国建国期 百花斉放時に至る郭沫若の書様式の整理 日中戦争終結から一九五〇年代後期の様式変遷と所謂「郭体」の確立時期を巡って」（『京都語文』第二十三号 二〇一六年十一月）

5 拙稿「郭沫若の書 所謂「郭体」の規定と成立過程及びその時期を巡って」（『書法漢学研究』二十一号」二〇一七年七月 有限会社アートライフ社）

6 刘涵华「复杂心态的曲折流露—郭沫若《百花齐放》的重新解读」（『贵州社会科学』二〇〇三年五月）

7 贾振勇「郭沫若与反右运动」（『粤海风』二〇〇八年一月）

8 注2参照

第十四章　一九五〇年代後期から六〇年代前期にかけての郭沫若の歴史学行政・視察旅行と詩、そして書

―一九五〇年代に誕生、一九六〇年代に確立する第三期郭体の生成過程と横幅作品の背景ついての分析的考察

一　緒論

先の章までで、抗日全面戦争期から建国後の百花斉放期、また大躍進期までの、郭沫若の書風の変遷について、一九三〇年代後期の抗日全面戦争期に形成された第一期郭体、一九五〇年代後期の百花斉放期に変貌を遂げたと言える第二期郭体、大躍進期の第三期郭体について、定義づけを行った。

また第十二章では、第二期郭体について、

またこの現象によって逆説的に第二期郭体が公に対して、共産党を謳歌する嬉々たる生命力を内包したプロパカンダを目的とする様式であり、その程度の如何によって、書風が変化していたことを如実に物語っていると言えるだろう。さらには、どこに飾られるかという意識も、やはりその書風に影響を与えていたと言えるかもしれない。

と、政治性と建築性の両面から再定義した上で、

これら郭沫若の、後に名所旧跡詩・記念詩・建築詩等にまで用いられるようになる第三期郭体書風についての詳論は、別章に譲りたい。

と課題を述べた[1]。

その第三期郭体の定義を再度ここで行いたいのだが、少しく先に結論を述べれば、私が大躍進時代に多く見られるとした第三期郭体は、言葉を弄ぶつもりはないことを断っておくが、第一期から第二期に向かう側筆(主旋律)、直筆混合の第一・五期と峻別の難しい位に似た、第二期を過ぎて多様される直筆(主旋律)、側筆混合の書風と言えるだろう。

換言すれば、トーンが上り坂の一・五期と、一度目の極点に達し(第二期郭体)、トーンがややダウンする下り坂の様式を第三期と定義できる。

そしてその背景については、第十一章「抗日勝利から中華人民共和国建国期、百花斉放時に至る郭沫若の書様式の整理」の中で、一九五四年までの書を、

要約するならば、抗日戦後から国共内戦期の郭沫若の書は、民国以来の流れで整理できるものであり、中華人民共和国建国期もさほどの変化は見られない。そして建国後、副総理の役に就き、また文字改革政策に携わる時期には、白話体の書様式の模索が行われたと言える。

と述べたように、特に建国期から一九五五年頃の書について、

一九五五年に『漢字簡化方案草案』が発表されるに至り、翌年の一九五六年、この草案を基に『漢字簡化方案』が国務院より公布され、五一四字の簡体字と五十四の簡略化された偏や旁が採用された時期に、それを求めることができる。そして、その文字改革の渦中に、郭沫若も参画していたと言えるだろう。因みに郭沫若は、一九五五年の中国国務院が設立した漢字簡化方案審訂委員会の副主任委員を、一九五六年には漢語拼音方案審訂委員会の主任を務めている。(中略)

郭沫若は、一九五〇年代前半の漢詩(文語)が少なかったのは、先に副総理という激務の中で、その作詩時間の余裕がなかったのではないかと述べたが、さらに当時郭沫若は、中国の文字改革の潮流にあって、文語よりも白話の問題についての意識の割合が、高かったとも考えられる。

と分析した。

また、一九五六年中国が北京で「文字改革会議」を開催した当時、郭沫若は中国科学院院長として「為中国文字的根本改革舗平道路」（中国文字の根本的な改革のために道をならす）という講演を行ったことは周知の通りである[2]。

そしてその当時の実験を総括すると、従来側筆中心の白話の言葉の表現に、文語的な直筆が用いられ、一貫性のない多彩な形で模索されていると言える。さらに貴族の占有物だった草書を人民の文字、所謂「簡体字」に交えたアジェンダは、まさに共産主義たる所以でもあろうし、その変革も文化行政に携わった郭沫若の識字意識に、何らかの影響を及ぼしていることは、容易に推察できる。

ここで漸く本論でのテーマに移行すると、一九五五年以後旧詩の作詩が再開されるが、それに伴って、その書相に、先ほど触れた第一期郭体に文語様式が盛り込まれ始める第一・五期が姿を見せる。

その背景を分析する手がかりとして、言語政策の一旦の区切り、一九五五年の現中国社会科学院の前身にあたる中国科学院の哲学・社会科学科の設立、それに伴って行われた、全国の古跡名所を訪れる視察旅行が挙げられる。

前置きが長くなったが、当時の郭沫若の足跡と書の在処の分析を始め、その復元を行っていきたい。

二　郭沫若の視察旅行までの経緯

―文部行政に携わる政治家としての歴史学構築

一九五五年年六月、中国科学院は正式に哲学社会科学部等の四学部を設立、各研究所の学術的指導を強化した。付言になるが、これが後の一九七七年に組織された中国社会科学院の前身に当たる[3]。

少しくその経緯を説明すると、周恩来は当時、政務院総理として、中国科学院学部成立の確定及び、委員のメンバー構成の仕事に参与した。一九五四年一月二八日、政務院は周恩来主持の二〇四次政務会議を開き、その席で郭沫若は「關於中國科學院的基本情況和今後工作任務的報告」（原文・繁体字）という基本内容を報告した。

その中で、後に冒頭と歴史学に関連する部分を垣間見ると、まず冒頭で、

中華人民共和國成立以來，中國的科學研究工作，在中央人民政府的領導下，經過全體科學工作者的努力，已經為科學研究有計劃地服務於國家建設，為我國科學事業的進一步發展創造了一定的條件。對於中國科學院來說，今天也已經有可能從現有基礎上出發，根據國家在過渡時期的總路線和總任務的要求，提出今後工作的方針和任務。

（大意）中華人民共和国成立以来、中国の科学研究工作は、中央人民政府の指導の下、科学者全員の努力を経て、既に科学研究のため、国家建設に計画的に服務することを有し、我が国の科学事業の進歩発展のために、一定の条件を創造した。中国科学院に対して言えば、今日も既に現在からの基礎上の出発を可能にし、国家の過渡時期の総路線と総任務の要求に基づいて、今後の工作の方針と任務を提出する。

その後文で、この四年の科学研究方面院の主要な成績の一つとして、

（四）社會科學方面：在歷史，語言的研究研中，在經濟資料的搜集整理和考古發掘中，都有一定的成績。此外，1951 年隨著西藏的和平解放，組織了西藏工作隊進藏工作，兩年來對西藏地區自然條件與資源有了初步認識，並發現了鐵，有色金屬，石油，石膏等礦藏，在協助當地軍民改進農業生產上也有貢獻。在反細菌戰斗爭中，院內外的科學工作者都曾經起了積極作用。

(大意)社会科学方面。歴史、言語研究の中で経済資料の収集整理と考古発掘に、すべて一定の成績を残した。この他に一九五一年のチベット解放にしたがい、チベット工作隊が組織され、その工作が進められ、この二年でチベット地区の自然条件と資源開発に対して初歩的な認識があり、あわせて鉄や有色金属、石油、石膏などの埋蔵鉱物を発見し、当地の軍民を協助しつつ農業改進の生産上にも貢献があった。反細菌戦争の中で、院内外の科学工作者に、かつて積極的な作用を起こしている。

と社会科学面の功績を強調し、さらに

我國第一個五年經濟建設計劃，已在偉大盟邦蘇聯的援助下全面而開始。當前科學工作的方針任務，應該是遵循國家在過渡時期的總路線，認真學習蘇聯先進科學工作的經驗，積極支援國家建設，發揮科學家的高度積極性和創造性，在實踐中發展我們的科學事業，充實我們的科學隊伍，為堅決實現國家建設的總線和總任務而努力。沒有科學技術的不斷支援和科學事業的相應發展，要完成國家的社會主義工業的任務是不可能的；反之，離開了積極支援國家建設的科學實踐，要達到發展科學事業的目的也同樣是不可能的。

(大意)我が国の第一次五年経済建設計画は、すでに偉大な盟友国、ソ連の援助の下、全面的に開始している。前の科学工作の方針任務は、国家の過渡期総路線に従い、真摯にソ連の先進科学技術の経験を学習し、積極的に国家建設を支援、科学者の高度で積極的な創造性を発揮し、実践の中で我々の科学事業を発展させ、我々の科学部隊を充実させ、堅い決意で国家建設の総線と総任務を実現するために努力しなければならない。科学技術の不断の支援と科学事業の相応する発展なしに、国家の社会主義工業の任務の完成は不可能であろう。かえって積極的に国家建設の科学実践を支援することを離れて、科学事業の目的の発展の到達も不可能であろう。

とある基本精神のもと、科学院の主要任務として、

(五) 設法加強社會科學方面的力量。目前社會科學方面已有經濟，語言，考古，近代史等四個研究所，正在籌備中的有關上古史，中古史研究的兩個研究所。其他如哲學，國際問題和亞洲史的研究也亟待開始。我們擬分別集中人材，充實已有的研究所，逐步建立新的研究所，在提高馬克思列寧主義理論水平的基礎上開展研先工作，並有計劃有領導的組織各種科學討論，以遂步解決目前存在著的有關歷史的，理論的和實際的學術爭論問題。

(大意)社会科学方面の力量を増強する設置方法。目下、社会科学方面には、すでに経済、言語、考古、近代史等の四つの研究所があり、現在上古史、中古史に関する二つの研究所の樹立の準備を進めている。その他に哲学、国際問題、アジア史研究も早急に準備を始めている。我々は人材を分別集中する計画をし、既にある研究所を充実させており、随時、新研究所を建立し、マルクス・レーニン主義理論の水準の基礎を高めた上に、研究工作を展開させ、合わせてリードする組織、各種科学討論を計画し、随時、目前の関係する歴史問題、理論と実際的な学術争論問題を解決している。

と述べている。

そしてその後、同九月の第一届次全国人民代表大会第一次会議が開催され、会議後政務院は国務院に改められ、中国社会科学院も国務院領導部学術機構となり、一九五五年五月に周恩来主持の中央政

治局会議において、中国科学院の学部委員の名簿が提出、通過された。そして六月に中国科学院の学部成立大会が行われている。

郭沫若の日記にも六月一日二日の項に明記されており、当時の様子が確認できる。

三　『考古通讯』の発刊と題字について

後の『考古』雑誌の前身に当たる『考古通讯』創刊号が発刊されるのが、一九五五年一期からであり、主办は中国社会科学院考古研究所、その発刊の背景には、二章で見た当時の世相が反映していることは、間違いなかろう。

その「發刊詞」を抄録すると、

我國的考古事業，從中華人民共和團成立以來，因為政府和黨的重視，以及全國各地基本建設工程的紛紛開建，顯得空前的活躍。這五年來，我們的工作是非常繁重的，收獲是十分巨大的，同時在工作中所遇到的問題，也是非常多的。舊中國遺留下來的考古人員非常不夠，新的力量正在不斷的培育中，但遠遠的不足擔負急不可待的當前任務。而我們這些有限的工作人員，又散在各地，各地方的收獲和問題，都很難及時的加以溝通和討論。這就需要有一個定期的刊物，可以互通聲氣，互相學習，互相幫助，以便取得問題解決。有了這樣一個刊物，還可以多多地介貂一般的考古學知識，介紹蘇聯先進經驗，來擴大我們的知識范圍，提高我們的工作效力，並培養更多的考古工作者出來。最近兩年來，中國科學院曾注意到要編印是這樣一個刊物。但由於我們人力不夠，遲遲不能舉辦。現在因為當前的需要緊迫，才決定由考古研究所的工作同志們，聯合中央人民政府文化部的，北京大學歷史系的，以及有關的專家和考古工作者，共同發起，組織編輯委員會，來試編這個刊物。希望這個刊物能夠在大家共同努力之下，逐漸的壯大起來，發揮更大的作用。我們希望由於這個刊物的印行，可逐步地

從普及考古知識而做到提高田野工作方法和室内整理方法。我們希望這個刊物不是刊載長篇巨著的研究，而是盡可能的多登一些考古工作者實際需用的知識，多登一些各地有關發掘，清理和調查的簡訊。這個刊物的出世，對於推進中國考古事業有着責無旁貸的使命，這是要求全國考古工作者一同負擔的。

(大意)我が国の考古事業は、中華人民共和国成立以来、政府と党の重視によって、全国各地の基本建設工程に及んで、次々と開始され、空前の活躍を現している。この五年、我々の工作は非常に繁重で、収穫は十分大きく、当時に工作中に遭遇した問題に於いても、また非常に多かった。旧中国が残した考古人員は不足しており、新しい力量を不断に培育しているが、遠く負担することができず、急ぎ目前の任務に対応できない。我々のこの限られた人員は、また各地に散らばり、各地方の収穫と問題は、時に急ぎコミニュケーションと討論を加えるのにすべて大変困難である。これによって一冊の刊行物が必要となり、互いに声を通じることができ、互いに学び合い、互いに助け合うことができ、問題解決をすることができ。この刊行物があることによって、また多く一般の考古知識、ソ連の先進的な経験を紹介でき、我々の知識範囲を広げ、我々の工作の効力を高め、並びに多くの考古工作者を育成することができる。最近、この二年、中国科学院はかつてこの一つの刊行物の発行に注意してきた。ただし我々の力不足で、遅々として行うことができなかった。現在目前の切迫した需要によって、ようやく考古研究所の工作員同志、中央人民政府文化部、北京大学歴史部、その他の関係のある専門的な考古学者、共同組織編集委員会によって、この刊行物を試し編集することを決定した。この刊行物が全員の共同努力のもと、次第に壮大となり、さらに大きな作用を発揮することを希望している。我々は、この刊行物の発行によって、随時可能なだけ少しく考古知識を掲載し、多く少しく各地

の関係発掘、整理と調査情報を掲載することを希望している。

この刊行物が世に出されることは、中国考古事業に伴う当然の使命に対する、全国考古学者の共同の負担要求である。

この『考古通讯』の創刊号の図1の題字は、郭沫若の手に拠るものであることは、その書風から明らかであり、民国期から引き継いだ図2『考古學報』（中國科學院考古研究所編輯）の題字も一九五六年一期から活字体から郭体の筆文字に移行されている。

また一九五九年に『考古通讯』から『考古』に改名され現在まで存続しているが、図3の一九五九年一期の『考古』の題字も郭体であり、これらの考古、文物雑誌の題字は、ほぼ郭沫若の担当であったと言えるであろう。

因みに『考古通讯』の文章文字は一九五五年五期までは繁体字が用いられ、一九五六年一期から第一次簡体字が用いられている。

この現象は、共和国建国から三年後の一九五二年、簡略字体の議論を受けて、漢字研究の機関として「中国文字改革研究委員会」が設立、一九五四年に憲法が制定されたためで、政務院が改組されるなど新体制への変遷の中で、中国文字研究改革委員会も中国文字改革委員会に改名され、一九五五年に『漢字簡化方案草案』が発表される。そして翌年の一九五六年一月、この草案を基に『漢字簡化方案』が国務院より公布されたことと、対応されていると言えるだろう。

四　一九五〇年代の視察と漢詩と書

―西安での活動を中心として[4]

郭沫若日記に依れば、一九五五年四月、インドで行われたアジア国家会議に出席した後、帰途、昆明、重慶、四川を経て、再び重慶から西安に至った。

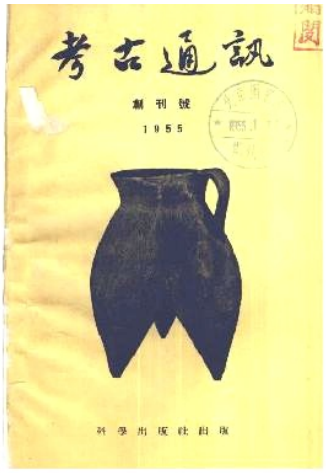


図 1

図 2

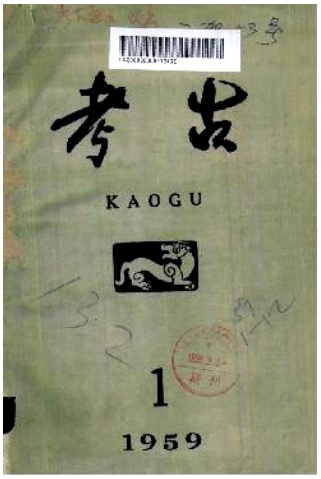


図 3

五月二日午前、人民大厦に宿り、午後、碑林、歴史博物館、雁塔に遊び、夜映画『沙家店粮站』を鑑賞。翌三日午前、茂陵、霍去病墓、衛青墓、霍光墓、周陵を参観、午後には華清池に遊び、温泉招待所に安置されていた一九三六年に蔣介石が過ごした客室で、当時の西安事変の状況を伺い、捉蔣亭を参観。晩に戯劇『武松打店』を鑑賞した。

そして翌四日人民大厦の為にと華清池の為に詩を書している。また「訪霍去病墓」を作詩し、午後に北京に戻っている。

そもそもこの際の視察の目的は、考古視察、政治視察、社会視察にあったと考えられるが、先ず図4の一九五五年五月に書された詩と款記、そし

て書を分析すると、

驪山雲樹郁蒼蒼　曆尽周秦与漢唐　一脈温湯流日夜　幾坏荒
呆掩皇王　已駆碩鼠歌麟鳳　定復台澎系犬羊　捉蔣亭辺新有
路　遊春士女楽而康

（大意）驪山の雲と樹は盛んに蒼々として、歴史は周秦漢唐と。一脈の温湯が日夜と流れ、幾つかの丘のあれた墓が皇王をおおう。既に碩鼠を追いやり麟鳳が歌い、台湾に定め復しているのは、犬羊のごとし。蔣介石を捉えた辺りに新しい路ができ、春に遊ぶ男女が楽しくまた康すし。

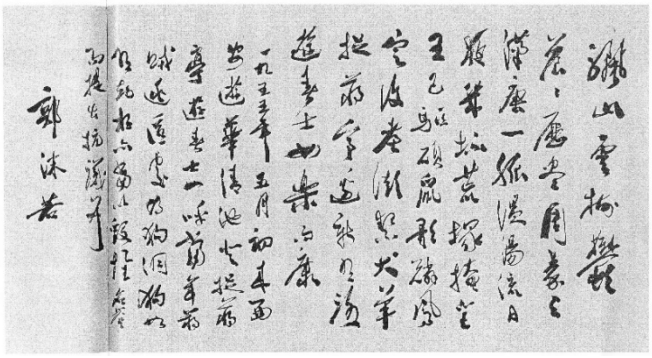


図 4

そして款記には、

一九五五年五月初来西安、游華清池。登捉蔣亭、游春士女呼当年蔣賊逃匿處為狗洞、狗如有知。想亦当以毀壊名誉而提出抗議耳。郭沫若

（大意）一九五五年五月初めて西安に来て華清池に遊ぶ。蔣介石を捉えたあずまや、春に遊ぶ男女が、当時蔣介石が逃げ隠れた場を、狗洞と呼び、狗を知るようである。まさに名誉を毀損され、抗議しているのを思うだけである。

前半は考古性が、後半は政治性が詠われた混合の書と言えるだろう。当時に在っては、考古的な意味よりも、西安事変の肯定という政治的な意味合いの強い詩と言える。

反蔣介石、共産党キャンペーン的な作品であるこの書は、郭沫若の書も改築された建築物同様、外交も意識した共産党のサンプルモデルの一環であったと言えよう。

つまりその書という外交資源によって、だれが得をするかという着想も不可欠な課題である。

郭沫若の場合、旅行と言っても何らかの政治的使命が隠されているのだが、この書相を分析すると、国民党時代に形成された第一期郭体が側筆を主旋律とするのに対して、第二期的な直筆が多用され、その律動と伴に、第一・五期的な様相を呈している。

この建国期から一九五三年までの多様な白話の実験作品から抜け出て、第二期へと向かう転機とも言える作品が、郭沫若の歴史学的使命、つまり共産主義と歴史を結びつける視角を持って行われた視察旅行時代に始まり、それが旧詩制作急増の再開を告げるとともに、当内容が蔣介石との決別を寓しているところに、その書風の持つ意味の重層性を感じさせている。

ところで郭沫若は、生涯で西安に七度来たといわれており、その際に文物考古、科学教育、工場生産に関心を持ち、考古遺跡だけでなく、共産党の建築ビル、レストラン、学校などにも立ち寄り、題額、スローガン、詩などを書し残している。また彼の文学芸術と旅行文化、科学教育は密接に連結していたという指摘もされている。

例えば、先ほどの華清池には三度訪れており、その度に詩を残しているが、一九五六年八月六日、陝西公布第一批文物保護単位の時、華清池（華清宮）は省級保護単位に列せられ、併せて好華清池内所蔵の唐漢白玉老君像和北魏温泉頌碑、北魏三道士石刻などが保護された上、華清宮遺址が画定されており、一号遺跡は同年発掘されている。

つまり私がさらに言及したいのは、郭沫若の遺跡などの視察に伴い、その政治的神通力、つまり発掘、開発の予算が下りていたのではないかということにも触れておきたい。

さてここで一九五五年に戻るが、郭沫若が訪れた半年後の十月に董必武も中央代表団を引き連れ、新疆からの帰途、華清池により、郭沫若の詩に唱和している。その詩とは、

依旧驪山兀老蒼　暦来事跡頗荒唐　始皇大塚埋労役、天宝清池涴寿王　幸有張揚双十二　遂無美蒋馬牛羊　郭公雅韻留佳句　我輩登臨亦楽康

（大意）旧き驪山に依り、険しく突き出た深い蒼、歴代の事跡は、頗る荒れている。始皇帝の大塚は労役を埋め、天宝の清池は寿王を汚している。幸いに張学良と揚虎城の十二月十二日事変（西安事変）があり、遂に蒋介石の馬牛羊はいない。郭公に雅韻し佳句を留め、我輩も登臨みまた楽しく康し。

であり、この詩に対し郭沫若は一九五九年七月、二度目の華清地の来訪の際に、再び詩の応酬をしている。その詩（図5）とは、

華清池水色青蒼　此日規模越盛唐　不僅宮池依旧制　而今民庶尽天王　秦皇漢武遺荒塚　老母長生剰吉羊　読罷和章懐大老　願公長寿国同康

一九五九年七月七日重游華清池宮　董老和詩　因用旧韻続成一律　郭沫若

（大意）華清池の水色は青々と、この日の規模は盛唐を超える。宮池は旧制に依るだけでなく、今の人民は天子に尽くす。秦皇、漢武は荒塚を残し、老母は長生きで吉羊に乗る。和章を読み止め大老をおもい、公の長寿と国の康きを願う。

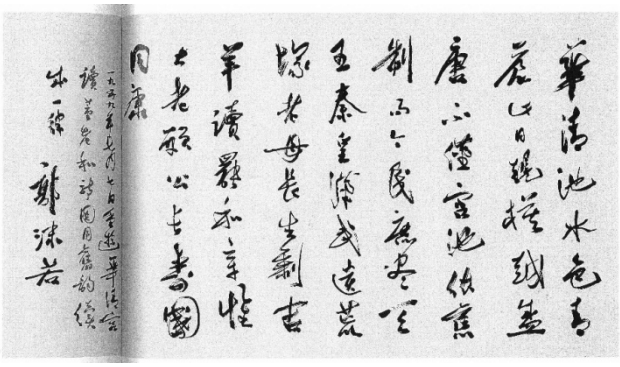


図 5

という、考古の内容で始まって、共産党同志を言祝いで終わっている。

そしてその書相は、第二期郭体の直筆を主旋律として、強度の伸縮という律動を内包しているが、最盛期のものと比べるとやや小ぶりで、所々に第一期的な側筆も見られ、まさに第二・五期と言うべき姿と言えるであろう。

因みに一年後の一九六〇年三月二十三日に郭沫若は華清池に三度目の来訪を果たし、「雨中游華清池」を読んでいる。その本文と大意を記すと、

雨裏雲山万仞蒼　玉蘭花放頌虞唐　九竜吐水濯宮闕　一狗跳墻泣覇王　公社普天駆碩鼠　春郊遍地舞商羊　年年躍進成規律　楽歳豊収人寿康

（大意）雨の中の雲山、非常に高く蒼く、玉蘭の花は咲き虞唐を称えている。九竜は水を吐き宮闕に流れ、一匹の狗が墻を跳び覇王に泣かされている。人民公社は遍く碩鼠（貪欲な搾取者）を駆除し、春の辺地で商羊（洪水をもたらす一本足の鳥）が舞う。年々躍進し規律を成し、楽しく歳をとり豊な収入で人の寿命も長い。

この詩の書相を未だ実見できてないが、推測すれば、第三期郭体であろうことは、想像に難くない。

この郭沫若の華清池での三つの詩の構成の共通性を言うならば、前半でその考古的な歴史的故事の内容を詠い、後半で共産党の政治的な内容、イデオロギーを詠っていたと言えるだろう。

五　視察の環境と横幅宣紙、そして書

ー「办公室书法」の成立

一九六四年秋、郭沫若は于立群夫人とともに安徽省の涇県宣紙廠を参観する予定であったが、緊急の会議のため中止された。当時せめて題詞だけでも、という求めに応じ郭沫若は、

“宣纸是劳动人民所发明的艺术创造，中国的书法和绘画离了它，便无从表达艺术的妙味”。

(大意)宣紙は労働人民の発明した芸術創造であり、中国書法と絵画と切り離せず、そこからしか芸術の妙味を表現することはできない。

と書した。またその前の一九五八年にも郭沫若は求めに応じ、涇県宣紙廠産品の封書に“中国宣紙様本”六大字を書している。

つまり文人でもあった郭沫若にとって宣紙は、重要な価値を持つ存在だったと言える。

本章で着眼するのは、その宣紙、つまり安徽省宣州(宣城)産の紙のサイズであり、所謂画仙紙四尺(現在の四尺全紙〈小画仙〉幅七十×長一三八㎝)相当の作品がいつ頃から郭沫若の書として表れるかである。

管見によると、それに近いサイズの作品を確認できたのは、前節でみた一九五五年の西安からであり、必ず揮毫作書のために文房四宝を携えて視察旅行したとされる郭沫若の紙のサイズが、その四尺画仙紙ではなかろうかという疑念が拭い去れない。

因みに前年の一九五四年に宣紙企業は、公私合営になり、国家計画に組み込まれている[58]。

そしてその郭沫若の一九五〇年代後半から一九六〇年代前半にかけての四尺作品を分析すると以下のようになる。

先ず図6は、幅六十五×一二〇㎝の考古視察による洛陽博物館蔵の作。郭沫若日記によると一九五九年七月十三日に、解放前に祖国の文物が帝国主義に毀損され盗まれたことに憤慨したとある。その時作られた「観龍門石窟斥美帝摧毀盗窃文物二首」のその一で、

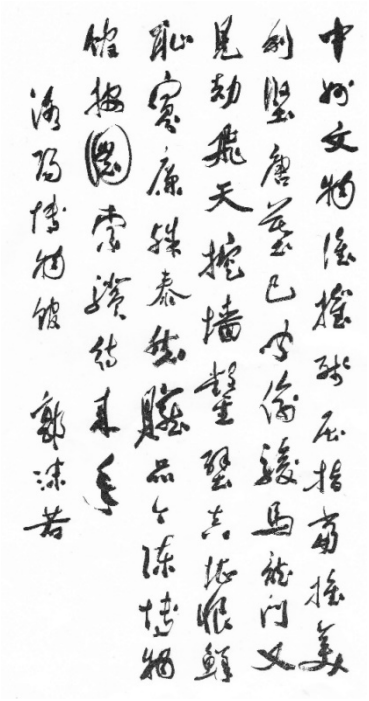


図 6

中州文物誰摧残　屈指当推美利堅　唐墓已聞偸駿馬　龍門又見劫飛天　挖墻鑿壁真堪恨　鮮恥寡廉殊泰然　贓品今存博物館　按図索驥待来年

(大意)河南省の文物は誰が壊したのか、アメリカ人の盗掘が屈指である。唐墓の駿馬が盗まれたのは、既に有名で、龍門もまた天にかえるのが見える。垣壁を掘削されたのは、恨み深く、恥知らずで泰然としている。今この博物館に盗まれた品を所蔵し、図案で事物を探して来年を待つ。

とある。この作は、ほぼ四尺の縦幅の作品であるが、共産党の考古

活動を称えた内容である。

書風は、第二期郭体に近いが、絶頂期の全直筆と比べ、随所に少し側筆も見られる。

次に見る図７の横幅は、六十六×一三二cmの作。郭沫若は一九六一年九月十四日に二度目の船で長江を渡り、夔門を出て三峡を通過した。その詩「宿万県」であるが、款記に依ればその年の秋に、上海の文房四宝の老舗、栄宝齋の壁に掛ける為に書したとある。因みに一九五二年に栄宝齋は国営になっている。

乗風朝発古渝州　夕宿瞿塘峡上遊　浩気混茫江似雪　崇山磅礴月如鈎　航標灯影聯波面　漁舎炊煙起渡頭　李白書堂何処是　紅旗挿在万城楼

（大意）風に乗り朝に古き渝州にたち、夕に瞿塘峡に宿り遊ぶ。浩気は広く、江は血のようで、崇山は広大無辺、月が鈎のようだ。航標の灯影は波面に映え、漁舎の炊煙が渡頭に上がる。李白の書堂はどこにあるのか、目を放てば紅旗が万城楼に挟んである。

とあり、前中半部で三峡の様子を詠い、末句で李白の書堂とかけて共産党支配の賛美で結んでいる。

図８は一九六一年十月二九日上海により、社会視察も兼ねてか翌日三十日錦江飯店に寄った時の作。横幅六十六×一二四．六cmのサイズで、「登錦江南樓十六階」詩が書されている。

上海渾如海　宏涛蕩碧穹　鯨翻常破浪　龍巻爪因風　万事吟求実三山一掃空　登楼縦高目　旭日満天紅

（大意）上海は広きこと海の如く、高き波が碧天に昇る。クジラが翻り波しぶきを上げ、龍が巻き上がり風が起こる。すべては事実を求め、封建主義、帝国主義、官僚資本主義は一掃される。楼に登り目線が高く、旭日は共産主義に満ちている。

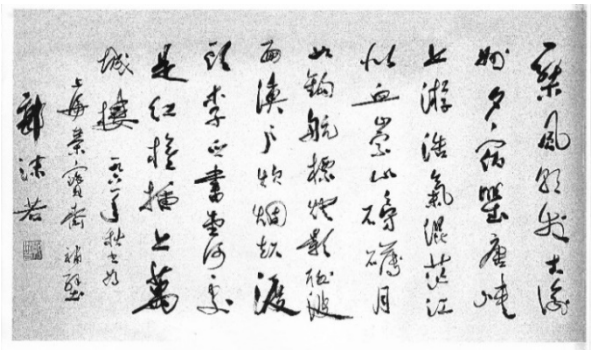


図 7

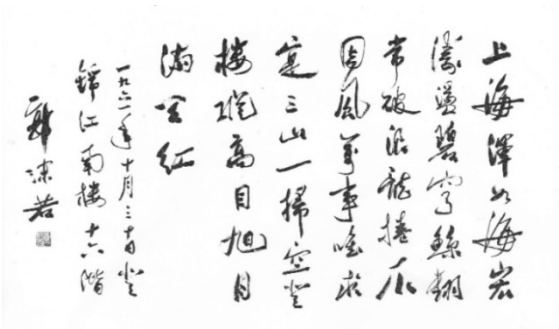


図 8

この書相も、直筆主体で律動がややトーンダウンした第三期郭体の書であると言えよう。

以上のことから推測すれば、一九五〇年代後半から一九六〇年代前半期の視察時に書かれた書は、共産党の建築物増設や私有化に伴って作られ、また定められた办公室で書され、主にそこに掲げられるべき書、つまり「办公室书法」とは言えまいか。

建国期、ソ連式の建築の影響や周恩来らの指導によって、中国共産党様式の建築物が造られ、またお色直しが行われた。それと並行

するように、建国後の視察旅行と共に現れる郭沫若の四尺の書、特に横幅の書は、民国期に比べて実用主義的で経済的な殺風景とも言える共産党建築に見合う書であり、それは、視察地に行く折々に、その主要建造物の办公室で書され、主に当初はそこに飾られることによって、共産党のマークを付すが如き意味合いが込められていたと考えられる。

そして、それは先ほどの詩と書の両面からの分析で、少しくは証明されたと思う。また西洋化の視点から言えば、その建築物に似合うサイズの全紙、額様式が多く用いられる端緒を、郭沫若が開いたとも言えないだろうか。

また中国のネットサイト新浪で見聞できる一九六一年に書された現在の北京の郭沫若紀念館办公室に掛かる横幅、一九六五年山西大寨視察の折、「重遊晋祠」詩の横幅の書が、時の山西省副省長、黄克誠に贈られ、現在に至るまで办公室に飾られ続けていることも傍証となろう。

このような書のリアリズムを、本章で仮説として提起したい。

六　簡体字の施行と漢詩の平仄についての考察

中華人民共和国成立後の一九五五年十月共産党と人民政府は全国文字改革会議と現代漢語規範問題学術会議を招集し、そこで現代漢民族の共通語の名称「普通話」とその内容が確定された。これを受けて教育部は十一月、「中学・小学および各級師範学校において大いに普通話を推し広めることに関する指示」を発表した。翌一九五六年、国務院が「普通話を推し広めることに関する指示」を頒布して、普通話の名称と内容を法律として定め、同年五月、「各省（市）教育庁（局）において普通話推広処（科）を設立することに関する通知」を発表、一九五七年には教育部が「継続して普通話を推し広めることに関する指示」を発表した。

ここで取り上げたい考察は、その当時に音韻変化の意識が、郭沫若の漢詩の音韻にまで反映されているかという問題である。

そもそも古代中国語に平声・上声・去声・入声と呼ばれる四声があったが、北京官話では平声が二つに分かれて陰平と陽平になり、普通話策定のときに入声復活採用案は否決され、削除されて今日にいたっている。

建国前の、郭沫若の漢詩の音韻意識については、先章「民国抗日戦争期に於ける郭沫若の「書」及び「文学」の論理―郭沫若に於ける「言語」「文学」「思想」の表出としての「書」様式の史的変遷について」に於いて、

少しく当時の中国での言語事情を振り返ると、一九二〇年一月、中華民国政府教育部は、各省に訓令を発し、同年の秋から国民学校一・二年の「国文」（文語体）を「語体文」（口語体）に変更するよう指示した。その後、文語文と白話文の対立は続き、所謂「文白之争」は一九四〇年代まで続くことになる。ただし、一九三〇年代に入り注音字母から入声が消え、『国音字典』が改修し出版されるころ、大衆語運動が起こっている。この入声とは、日本語の旧仮名使いで、「フ・チ・ツ・ク・キ」で終わる漢字を意味し、これらはすべて仄声となる。

つまり図１２の作品にある「八」「術」「瑟」「目」などは入声であり、郭沫若の音韻意識は、抗日期の新書風形成時にも、厳格に伝統を保守した証左と言えるだろう。つまり当時に於いて、郭沫若の口語書風の文語体への流入期にあって、些か音韻意識がアバウトになるものの、「入声」などの古音と伝統、平仄の意識は、基本的に守られていたと言えるだろう。

と論じたが、果たしてこの一九五〇年代後期から一九六〇年代前期の漢詩についてはどうであろうか。

先ず図四の一九五五年五月に書された詩の音韻を分析すると、

（●仄声　○平声　◎押韻）

○　●　○◎　●　○　●◎　●　○　●
驪山雲樹郁蒼蒼　曆尽周秦与漢唐　一脈温湯流日夜
○　●　○◎　○　●　○◎　●　○　●◎
幾坏荒呆掩皇王　已駆碩鼠歌麟鳳　定復台澎系犬羊
●　○　●　○　●　○◎
捉蒋亭辺新有路　遊春士女楽而康

図六の一九五九年七月十三日に、「観龍門石窟斥美帝摧毀盗窃文物二首」のその一では、

○　●　○◎　●　○　●◎　●　○　●
中州文物誰摧残　屈指当推美利堅　唐墓已聞偸駿馬
○　●　○◎　○　●　○◎　●　○　●◎
龍門又見劫飛天　挖墻鑿壁真堪恨　鮮恥寡廉殊泰然
●　○　●　○　●　○◎
贓品今存博物館　按図索驥待来年

図七の一九六一年九月十四日の詩「宿万県」であるが

○　●　○◎　●　○　●◎　●　○　●
乗風朝発古渝州　夕宿瞿塘峡上遊　浩気混茫江似雪
○　●　○◎　○　●　○　●　○　●◎
崇山磅礴月如鈎　航標灯影聯波面　漁舎炊煙起渡頭
●　○　●　○　●　○◎
李白書堂何処是　紅旗挿在万城楼

となり、図七の詩の「発」字は入声であるが、すべて古式を遵守している。

また一九六二年の作、図9の作品「贈焦菊隠（ぞうしょうきくいん）」も平易な現代語を用いた詩であり、その書風は口語性の強い第一期郭体に近いが、

●　○◎　○　●◎　○　●　●　○◎
代謝新陳易　誰為万世師　工農兵服務　真善美兼折
●　○◎　○　●◎　○　●　●　○◎
形象春秋在　弦歌老少宜　喜聞還楽見　努力輔明時

となり、これも古格を守っている。

図 9

以上総括すると、先ず音韻意識は、普通話制定以後も旧詩においては、戦前と引き続き遵守され、　旧文化に対する態度と行政は、はっきりと線引きされている。

また、それと書相との関係は、あまりないと言えるだろう。

さらに郭沫若の漢詩に論究する際、毛沢東が「詩」よりも「詞」の作家として著名であるのに対し、郭沫若が「詞」を多作するのは、一九六三年の「満江紅」詞以後という傾向が指摘できるかもしれないが、郭沫若の詞については、別章にて論じたい。

七　小結

ー反右派闘争期に於ける第三期郭体様式の意味を巡っての課題

従来、書幅のサイズと時代背景とを合わせて、飾られる部屋、建築を類推し、その社会を垣間見る研究は少なかったと言える。少なくとも人民共和国建国期の貧しい時代にあって、郭沫若は新建築、特にビル建築に興奮を覚えていることは、容易に推察できる。

また当期の郭沫若の書法研究をする際、特に文部行政、歴史学の骨格の中での書法の意義も究明すべきであろう。

つまり歴史、文化と共産主義イデオロギー、近代科学とを如何に結び付けるかが、郭沫若にとっての重要な課題であったと言える。

換言すれば、歴史性という学究的深みと、政治性という大衆化を同時に行えた人物だったと言えるだろう。

話題が変わるが、郭沫若は、抗日戦争以前の市川在住期は、大正日本の印刷技術の普及によって、いろいろな法帖を自由に手にでき、任意に楽しむ西洋化された現代書人の唯物論感覚に似たものを持っていたし、あらゆる書風を書き分けることができた。その中で自らの行草体を、自分のスタイルの中心としたことは、どういう意義があるかも窮理されなければならないだろう。

無論、思想家でもある郭沫若にとって、各体をこなせた作品個別にはそれなりの背景が存在したことも、今後の分析課題である。

郭沫若の詩は、常に記念詩的な意味を担っているが、一九五〇年代後期から一九六〇年代の新様式サイズの作品について言えば、共産主義のスケールの大きさが反映するという社会を構成する要素であった反面、彼自身の生活を構成する要素であったという側面からの考察が、次の私自身の研究の課題でもある。

というのも、端的にいえば、郭沫若は、この中国二百年に於いて、書の政治化を最も推進した人物であるが故に、逆に個人の耽美的執着にメスを入れるという側面も見落としてはならないと言えるだろう。

百花斉放、反右闘争、大躍進という時代の流れの中で、書という分野はつねにその書人の心の速度でもあり、時代の速度でもある。

そして本章でテーマにした第三期郭体を改めて簡易に定義すれば、第二期と第一期の郭体の止揚、反右闘争によって伸縮がトーンダウンした意気の姿と言える。

---

1 拙稿「郭沫若の大躍進政策期に於ける書法様式の類型とその背景について―「漢詩」の分析を中心とした政治性及び建築と書法との照合」（『京都語文』二十五号　二〇一七年十一月　佛教大学国語国文学会）

2 宮下尚子「中国の文字改革と郭沫若」（『郭沫若研究会報』第三号　二〇〇三年十二月　日本郭沫若研究会事務局）郭沫若「为中国文字的根本改革铺平道路　在全国文字改革会议上的讲话」（『山西政报』一九九五年七月）

3 薛倩「中国科学院哲学社会科学部的发展历程与历史贡献」（『当代中国史研究』二〇一七年九月）

4 钱克兴「郭沫若与西安」（『郭沫若学刊』二〇〇八年十二月）钱克兴「晚年郭沫若的诗墨情怀和行旅书写―以郭沫若与古都西安为中心的考察」（『郭沫若学刊』二〇一〇年三月）

5 戴健「宣纸制作技艺的文化生态探析」（『中国艺术时空』二〇一七年九月）

6 任重「建国初期周恩来建筑思想探析」（『毛泽东思想研究』二〇〇六年十一月）唐文「建国初期居民区的苏联建筑模式设计研究―以武汉红钢城九街坊为例」（『艺术与设计(理论)』二〇一五年十月）

D　社会主義運動から文革、そして晩年に於ける書の変貌

第十五章　大躍進、調整時代、一九五八年から一九六二年までの郭沫若の文学と書

―視察時に於ける第三期郭体から第四期郭体までの過程とその詩、書の思想

一　緒論

郭沫若は一九五八年五月、科学技術の現代化の実現と、国防建設と尖端科学技術方面の専門人材の育成のために、当時の中国科学院院長郭沫若グループの科学者と、党中央に中国科学院創建の新型大学の建議を提出。建議は党と国家リーダーの劉少奇、周恩来、鄧小平、聶栄臻らの支持を得て、中央書記処会議で批准され、同年九月に中国科学技術大学が北京で正式に成立し、国務院の任命で郭沫若が校長となった。

建国期から没年の一九七八年六月に至るまで、中国科学院首任院長、中国科学技術大学首任校長、中央人民政府委員、政務院副総理兼文化教育委員会主任、全国人民代表大会常務委員会副委員長、中国科学院哲学社会科学部主任、歴史研究所第一所長、中国人民保衛世界和平委員会主席、中日友好協会名誉会長、中国文聯主席、中国共産党第九、十、十一届中央委員、第一・二・三・五届全国政協副主席等を務めた郭沫若にとって、一九五八年は一つの文化行政面での節目となる年であり、大躍進政策時代から、経済調整時代、文化大革命前へと連なる彼の足跡を構成する大きな意義のある時期と言える。

本章では、その足取りを追うことから始め、詩、書作との関係を探って行きたい。

二　一九五八年から一九六二年までの視察データ

―残存する漢詩を中心としての分析

郭沫若は政治家であるが故に、国内外を問わず会議や視察に飛び回っていた。つまり北京の中南海を基点に、政治、文化などの行政的な目的で、中央の伝書鳩的な役割を演じていたと言えるだろう。そしてそれが、所謂、中南海と地方との時差を意味している。

本章では、あらゆる視察を行った郭沫若の漢詩、それも『郭沫若旧体詩詞系年注釈』[1]に残存するものを基に、視察のデータを復元したい。

前近代的な士大夫が旅や左遷時に、多く漢詩や書を残しているが、郭沫若にとっては、これらの視察が、そういう旅であったと言えるかもしれない。

『郭沫若旧体詩詞系年注釈』（一九八二年）に拠ると、一九五六年は六首、一九五七年は十首と少なく、一九五八年以降増産されている。これは、百花斉放期は旧詩を作る旅行の機会が少なかったことと、行政的な多忙さによるところが大であろうが、一九五八年後の旧詩の増産は、大躍進政策に伴う視察旅行に便乗して、先にも触れたが、文化面にも何らかの予算が付けられたことが推察できる。

それでは、残された漢詩を中心に一九五八年以降の、郭沫若の視察に関係する足取りを追ってみたい。

付言であるが、残された書の有無は確認できたものという意味である。

日時	漢詩名	場所	目的	書の有無
1957年12月～1958年1月	访埃及杂吟十二首	エジプト	アジア・アフリカ人民団結会議出席	
1958年2月1日(北京)	题司马迁墓	陝西省文化局の要請で題詞	歴史	
1958年3月上旬	蝶恋花	北京	頌歌(妇女节)	
1958年初(北京)	为如东水利工程题诗	手紙への返書にて題詞	大躍進政策	
1958年5月/6月	遍地皆写不赢十四首	河北省西北部	大躍進政策	
1958年7月1日	雄师百万挽狂澜—“七一”参加十三陵水库落成典礼书怀	北京	大躍進政策	
1958年7月初	颂十三陵水库(西江月二首)	北京	大躍進政策	●
1958年7月中旬	在载军大会上二首	スウェーデン	ストックフォルム軍事大会	
1958年8月19日	声声快	北京	大躍進政策	
1958年9月7日	告别北戴河	長春	大躍進政策	
1958年9月13日	庆武钢一号高炉出鉄 (调寄《西江月》)	北京	大躍進政策	
1958年10月28日	志愿军凯歌	北京	頌歌	
1958年秋	歌颂中朝友谊　四十八首	朝鮮	朝鮮視察	
1958年11月	悼郑振锋同志		弔詩	
1958年12月	咏黄山灵芝草	北京	大躍進政策	
1959年1月25日	颂武汉/访武钢	武漢	大躍進政策	
1959年1月26～30日	英雄树下花争放(迎宾馆)	広州	歴史・大躍進	●
1959年2月12日	游西湖	杭州	大躍進政策	
1959年2月12日	游孤山/登六和塔/虎跑泉	杭州	歴史・大躍進	
1959年2月12日	花港观鱼	杭州	歴史・文化	
1959年2月16日	雨中登国际大厦二首	上海	大躍進政策	●
1959年2月18日	颂曲阜/观孔府/游孔林/游孔庙/观大成殿	山東	歴史	
1959年2月19日	齐鲁多文物六首(趵突泉)	山東	歴史・大躍進	●
1959年2月25日	喜雪	北京	頌歌	
1959年2月26日	再喜雪	北京	頌歌	●
1959年2月	因如泰运河在九圩港竣工题贺		大躍進政策	
1959年3月2日	题革命烈士诗抄	北京	頌歌	●
1959年3月30日	《光荣的中国人民志愿军》题辞	北京	頌歌	
1959年3月	电影	北京	文化・世界平和	
1959年5月	游北欧诗四首(在瑞典首都游米利士园)	スェーデン	視察	●
1959年6月7日	题徐悲鸿《八骏图》	北京	文化	
1959年6月28日	访无锡四首	無錫	歴史・大躍進	
1959年6/7月	【豫秦晋纪游二十九首】			
1959年6月30日	访安阳殷墟/观园形殉葬坑十三首	安陽	歴史	
	登袁世凯墓	安陽	歴史・政治	
1959年7月	颂郑州	鄭州	歴史・大躍進	
	访花园口		歴史	
	颂洛阳二首	洛陽	歴史	
	观龙门石窟斥美帝摧毁		歴史・政治	●
	盗窃文物二首			
	访奉先寺石窟		歴史	
	访半坡遗址四首	西安	歴史	●
	重游华清宫读董老和诗		歴史・政治	●
1959年7月	因再用旧韵奉酬			
	颂太原	太原	大躍進・歴史	
	游晋祠		歴史	●
	看三槽出钢		大躍進政策	
	访窦大夫祠		歴史	
	经济交流	北京	大躍進政策	
	游莫干山二首	杭州	歴史	

日時	漢詩名	場所	目的	書の有無
1959年8月3日	題济南李清照故居	济南	歴史	
	題山东民间剪纸		大躍進・文化	
1959年9月5日	題《图书馆学通讯》	北京	学術	
1959年9月5日	颂北京四首	北京	頌歌	
1959年9月7日	題气象馆	北京	学術・建築	
1959年9月12日	題福建省工艺美术展览会	北京	文化	
1959年9月14日	十年建国增徽识八首	北京	頌歌・建築	
1959年10月7日	会运会闭幕	北京	スポーツ	
1959年	贈朱琳同志		文化	
1959年11月28日	咏邱少云烈云		援朝抗美	
1960年	題贈东风剧团		文化	
	題成都带江草堂		文化・頌歌	
1960年1/2月	重庆行十六首(飞过秦岭)	重慶	歴史・頌歌	●
	題红岩村革命纪念馆		頌歌・文化	
1960年3月22日	颂延安	延安	頌歌	
1960年3月22日	访杨家岭毛主席所住窑洞	延安	歴史・大躍進	
1960年3月22日	谒延安烈士陵园	延安	歴史・頌歌	
1960年3月23日	游乾陵/吊章怀太子墓	西安	歴史	
1960年5月27日	喜闻攀上珠穆朗玛峰	チベット	学術・頌歌	
1960年6月8日	紫竹院观鱼二首	北京	民間生活	●
1960年9月4日	蝶恋花-《題园林植物栽培》	北京	百花斉放	
1960年9月6日	十六字三首—題国画插图版《百花齐放》	北京	百花斉放	●
1960年9月10日	读《忠王李秀成自述》二首	北京	歴史	
1960年9月30日	贈日本友人/《夕鶴》	北京	政治・外交	
1961年1月6日	游古巴松树河谷	キューバ	政治・外交	
1961年1月19日	飞渡大西洋	スイス	視察	
1961年1月23～25日	昆明杂咏九首(游黑龙潭)	昆明	歴史・文化・大躍進	●
1961年2月3日	挽杜国庠同志二首/校场口事件十五年	北京	歴史・政治	
1961年2月11日	颂湛江	湛江(広東)	頌歌	
1961年2月12日	雷州青年运河	雷州半島(広東)	建設	
1961年2月13日	游湖光崖	福建	歴史	
1961年2月16、17日	題为海南岛兴隆农场/咏油棕/鹿回头	海南島	産業	
1961年2月19、20日	游天涯海角/天涯海角	海南島	文化	●
1961年2月20日	颂海南岛	海南島	頌歌	
1961年2月27日	贈崖县歌舞团	海南島	文化	
1961年2月27日	咏五指山	海南島	歴史	●
1961年3月3日	访那大	海南島	歴史	
1961年3月10日	访柳侯祠	海南島	歴史	●
1961年3月15日	游从化温泉	海南島	文化	
1961年3月18日	回京途中	武漢	歴史・文化	
1961年3月27日	诗一章—献给第二十六届乒乓球锦标赛	北京	スポーツ	
1961年3月31日	題郁曼陀二首	北京	歴史・文化	
1961年5月7日	访泰山杂咏六首(在极顶观日出未遂)	山東	歴史	●
1961年6月16日	颂党庆二首(其一)	北京	頌歌	●
1961年7月1日	再題福建省工艺美术展览	北京	文化	
1961年8月30日	曼德勒既事	北京	歴史	
1961年9月3日	回昆明	昆明	歴史	
1961年9月5日	宿楚雄二首	楚雄(雲南省)	歴史・文化	
1961年9月7日	在昆明看演话剧 《武则天》	雲南	文化	●
1961年9月7日	万人冢/天生桥	雲南	歴史	
1961年9月7、8日	大理温泉/大理石厂/望夫云/洱海月	大理	文化	
1961年9月9日	负石观音	大理	歴史・頌歌	

日時	漢詩名	場所	目的	書の有無
1961年9月9日	朝珠花	大理	文化	
1961年9月12日	赠关肃霜同志	雲南	文化・頌歌	
1961年9月12日	题为云南农业展览馆	雲南	文化	
1961年9月14～18日	再出夔门七首	(三峡)四川	文化・歴史	●
	(宿万县)/(过西陵峡其一)		歴史・頌歌	
1961年9月18日	蜀道奇		歴史・頌歌	●
1961年9月20日	谒晋冀鲁豫烈士陵园(西江月)	河北	歴史・頌歌	
1961年9月20日	登赵武灵王丛台	河北	歴史・頌歌	
1961年10月	对联一副	北京	頌歌	
1961年10月7日	题赠日本代表团	北京	外交	
1961年10月25日	看《孙悟空三打白骨精》	北京	文化・教育	
1961年10月26日	湖笔	北京	文化	●
1961年10月29日	游上海豫园	上海	文化・歴史	●
1961年10月30日	游闵行	上海	大躍進	
1961年10月30日	登锦江南楼十八层	上海	建築・頌歌	●
1961年10月31日	赠上海京昆实验剧团	上海	文化	
1961年11月1日	溯钱塘江三首	浙江	文化・歴史	
1961年11月	七里泷	浙江	建設	
1961年11月5日	访句山樵舍	浙江	文化	
1961年11月9日	流溪水电站即景	広東	建設	
1961年11月10日	游凤院棵树园	従化	文化	
1961年11月13日	从化温泉	従化	文化	
1961年12月1日	流溪河水库观鱼	広州	文化	
1961年12月3日	观百丈瀑二首(其一)	広州	文化	●
1961年12月9日	远眺	従化	文化	
1961年12月17日	看《牛郎识女》舞剧	従化	歴史・文化	
1961年12月21日	游端州七星岩四首	端州	文化	
1961年12月22日	题桂花轩/游鼎湖山	肇慶	文化	
1961年12月28日	题赠广东图书馆	広州	建築・文化	
1961年12月	登阅江楼怀叶挺及独立团诸同志	肇慶	歴史・頌歌	
1961年冬	偶成		文化	
1962年1月7日	访萝冈洞四首	広州	文化	●
1962年1月9、10日	再访萝冈洞/题广州听雨轩	広州	文化・頌歌	
1962年1月14日	游佛山诗三首	広東	文化	
1962年1月18日	郑成功光复台湾三百周年纪念	広東	歴史・軍事 国光計画	●
1962年1月21日	咏黎族姑娘/咏椰子树	広東	文化	
1962年1月25日	南海劳军	海南島	軍事	
1962年1月30日	东风吟四首	海南島	文化・頌歌	
1962年1月30日	咏梅(卜算子)	広東	文化・頌歌	
1962年2月3日	看渔民出海	海南島	歴史・文化	
1962年2月7日	海南岛西路纪行十一首	海南島	文化・頌歌	
	(赴崖城道中)/(东方县途中口占)			●
1962年2月9日	重访那大学院	海南島	教育	
1962年2月11日	题海口东坡祠	海南島	歴史・政治	
1962年2月	题《五朵红云》	海南島	文化	
1962年2月24日	题品石轩		文化	
1962年2月24日	七律二首		文化・頌歌	
1962年3月7日	访孙中山先生故乡五首	中山	歴史・頌歌	●
1962年3月8日	咏梅二绝有怀梅兰芳同志二首－题传记纪录片 《梅兰芳》	広州	文化	
1962年3月	赠祝希娟同志		文化・頌歌	●
1962年3月30日	题为西冷社六十周年(七律)	北京	文化	

日時	漢詩名	場所	目的	書の有無
1962年4月9日	题为赵一曼纪念馆	北京	建築・文化	●
1962年4月	题赠范政	北京	文化・頌歌	
1962年4月12日	闻广西博白有绿珠里	北京	文化	
1962年6月	挽涂长望同志	北京	頌歌	
1962年7月17日	纪念八一建军节三十五周年	北京	頌歌・軍事	●
1962年夏	银画银勾—题湖州笔店一品斋《湖州颖谱》	北京	文化	
1962年8月25日	咏北戴河二首(其二)	河北	歴史・政治	●
1962年8月26日	题沈阳抗美援朝烈士纪念碑		軍事・援朝抗美	
1962年8月26日	题天福山抗战起义纪念碑二首		軍事・頌歌	
1962年9月6日	北戴河一夕即景	河北	文化	
1962年9月10日	游鴿子窝	河北	文化	
1962年秋	火中不灭凤凰俦－黄继光，邱少云二烈士逝世十周年	北京	軍事・頌歌	●
1962年9月25日	题为黄山风景摄影展览	北京	文化	
1962年10月19日	题上海延安饭店	上海	頌歌	
1962年10月22日	如梦令二首	舟山	領土・頌歌	●
1962年10月23日	西江月	舟山	頌歌	
1962年10月23日	看舟山集艺越剧团演出《双阳公主》	舟山	文化	
1962年10月23日	访普陀山	普陀県	政治	
1962年10月26日	访宁波天一阁	寧波	歴史・頌歌	
1962年10月28日	访三味书屋	紹興	歴史	
1962年10月28日	东湖	紹興	文化	
1962年10月29日	钗头凤（游沈园）	紹興	歴史・文化	
1962年10月29日	题《试马》	杭州	文化	
1962年10月29日	登钱塘六和塔	杭州	歴史・文化	
1962年10月	途次上饶	上饒	歴史・頌歌	
1962年11月1日	游武夷泛舟九曲池	福建	歴史	●
1962年11月1日	游武夷二首(其二)	福建	歴史・文化	●
1962年11月	咏南平二首	南平	歴史	●
1962年11月	自南平至福州	南平	文化	
1962年11月6日	如梦令－ 参观福建省博物馆	福建	学術・文化	●
1962年11月	题赠福州脱胎漆器厂	福建	文化	
1962年11月8日	游鼓山二首	福州	歴史	
1962年11月12日	途次莆田	莆田	歴史	
1962年11月12日	木兰陂六首/题东圳水库	莆田	歴史・建設	
1962年11月13日	咏泉州/咏五里桥	泉州	歴史・頌歌	
1962年11月13日	金鸡水利工程歌	泉州	建設	●
1962年11月16日	参观郑成功纪念馆	厦門	歴史	●
1962年11月21日	用厦门高集海堤	厦門	建設	
1962年11月	登日光岩	厦門	歴史・軍事	
1962年11月23日	访问厦门前线二首	厦門	歴史・軍事	
1962年11月23日	题赠某炮艇/登云顶岩访问前线部队	厦門	軍事	
1962年11月23日	西江月－ 题赠厦门大学	厦門	教育	
1962年11月24日	游南普陀	厦門	歴史・文化	
1962年11月30日	书赠厦门文物商店	厦門	文化	
1962年冬	西江月(1962年初冬在鼓浪屿看龙溪专区木偶剧团演出)	鼓浪嶼	文化	
1962年11月下旬	重游三都澳	三都澳	歴史・文化	
	在三都澳水警区二首	三都澳	軍事	
	乘炮艇由三都澳赴黄岐	厦門	軍事	
	在黄岐	黄岐	軍事	
1962年12月25日	喜看电影《槐树庄》	北京	文化	

以上、郭沫若の一九五八年から一九六二年までの漢詩と書は右の表のように整理できる。

郭沫若の大躍進政策に伴う視察は、一九五八年に始まりはするが、当時の書はあまり残されておらず、視察自体も一九五九年に本格化し、以後も様々な目的を持って行われているが、その視察地は、中国科学院分院を始め、極めて政治的、文化的な地であり、行くところどころを、紅色に染めていく意味合いを持って、詩は賦され、書は揮毫されている。また作詩の目的を、「歴史」「学術」「政治」「文化」等と分類したが、本来峻別できるものではないので、特にそういう要素が強いという意味で用いたことをここでも断っておく。取り分け、郭沫若にとって「歴史」とは、イコール「学術」の意味も多分に含んでいる場合が多いと言えるだろう。

次章では、その残された書が、どのような時期、場所、意味、様式で書かれたのかを分析し、その変遷を辿っていきたい。

三　視察と漢詩と書の意義

ここで取り上げるのは、視察の際の詩と書に限定した。無論、郭沫若は、首都北京でも詩を詠い、書も残しているが、ここでは資料が膨大になるので、ほぼ割愛したい。

また書式サイズを一九五五年頃から使われることの多い、今で言う四尺全紙(小画仙)に絞ったのは、郭沫若が視察時に残した書は、ほぼそのサイズであり、その紙の様式が、視察に常備された紙だと推定できるからである。

では年代を追って、その場所、意味、書様式などを分析していきたい。

まず当時（一九五九年から六〇年）の文学界の趨勢について、岩佐氏は、

一九五九ー六〇年の中国政治をつらぬくのは「反右傾」思潮だった。五九年以後中国は三年続きの大自然災害にみまわれ、さらにソ連の援助停止があり、毛沢東の大躍進経済政策は挫折した。こうした情勢を背景に五九年ー六〇年の中国は左傾化を強めるのである。まず五九年七月中共八期八中全会（中国共産党第八回全国代表大会第八回中央委員会全体会議）が江西省廬山で開かれるが、会議で大躍進政策を批判した彭徳懐国防部長が反党とされて失脚した。毛沢東は影の大躍進批判は党内に存在する右傾思想、右寄りの感情を代表していると判断、八月以後反右傾闘争が展開される。六〇年はこの「反右傾」の延長線上に文芸界でも一月に巴人（一九〇一ー七一）の「論人情」が批判されるなど、人道主義、人間性論などを槍玉にあげた批判運動が起こった。六〇年七月には第三次文代会（中国文芸工作者第二次代 表大会）が開かれ、文芸界における反修正主義闘争のよびかけが行われた。

と述べられさらに、一九六一年から六二年に就いては、

一九六一年ー六二年の基調は大躍進など「左傾」の路線によって生じた経済の混乱を正すための調整政策である。文芸界もまた「左傾」の過ちを正すべく政策的な措置をとった。文革後に明らかにされた資料では、文芸界における「左傾」の是正に積極的に動いたのが周恩来、陳毅らであった。彼らは六一年ー六二年に開かれた新僑会議（「全国文芸工作者座談会と故事片創作会議」六一年六月）、紫光閣会議（在北京の劇作家との座談会、六一年二月）広州会議（「全国話劇、歌劇、児童劇創作座談会」六二年二月）、大連会議（「農村題材短編小説創作座談会」六二年八月）など一連の会議で五七年以後の学術界、文芸界の非民主的状況を厳しく批判し、文芸に対する過度の干渉を戒める発言を繰り返した。例えば周恩来は紫光閣会議で次のように述べたという、

これを書いてはいけない。あれを書いてはいけない。さらに人様にレッテルを貼る。右傾だ、保守だと。かくして大変多

くの作品が公式化、概念化、低俗化したものとなる。作家はただ間違わないことだけを求め、功績あるを求めない。もちろん良い作品などできはしない。これは党委員会の指導と関係がある。

それと同時に、これらの意見を「条例」の形で公式化することも試みた。その文芸領域における「条例」が六二年四月に公布された「関千当前文学芸術工作者若干問題的意見」いわゆる「文芸八条」である。当時の党の文芸工作に「少なからぬ欠点と過ち」が存在しているとの認識に立って、「百花斉放百家争鳴」の原則の徹底、民族遺産の批判的継承と外国文化の批判的摂取、文芸批評の正しい展開など、それを是正する八点の原則を定めたものである。こうした一連の調整政策は六一年ー六二年前半の『詩刊』の編集方針にも反映されているように見える。掲載作品はとげとげした内容のものが減り、穏やかな作品が主流を占めている。「戦歌」と「頌歌」の二本立てであったのが、戦歌がほとんど掲載されなくなった、といってもいい。また、それまでずっと続いていた「批判」文の掲載が、この 期間は途絶えている。『詩刊』のこういう誌面構成は、やはり「調整」を軸に動いていた当時の文芸界の

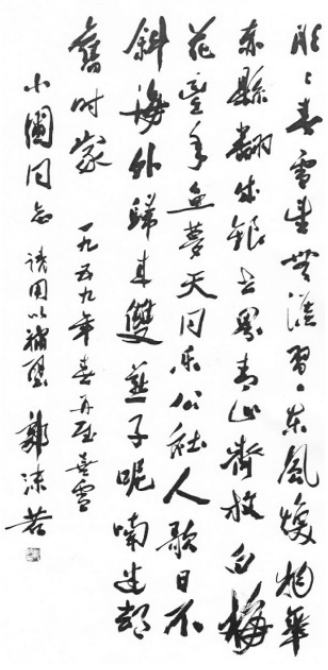


図 1

雰囲気の反映なのであろう。

と総括されている。

その中で当時の郭沫若の旧詩の在処は、考古視察に伴う歴史詩や大躍進政策を讃える詩が主流となる。

Aこの「再喜雪」は一九五九年二月二六日の作詩で、二二日にメキシコ将軍、カルデナス随行などの全国主要都市の視察を終え、北京に帰り発表されたもので、その書はその春、小圃同志、つまり彭桂萼のために揮毫されている。そして、内容は(図1)

彤彤春雪望無涯　習習東風煥物華　赤県翻成銀世界　青山斉放白梅花　豊年魚夢天同楽　公社人歌日不斜　海外帰来双燕子　呢喃迷却旧時家

(大意)やわらかな春の雪が果てしなく続き、そよふく社会主義の風が景色を輝かせている。赤い中国は、銀世界に変わり、緑の山には、白梅の花が一斉に咲き誇る。豊年の魚の夢は天と共に楽しむこと。人民公社の歌頌は、日が沈むことはない。海外から帰ってきた燕の夫婦、囀りながら昔の巣を探して迷っている。

つまり、大躍進と人民公社運動に拠る変革を、美しき中国の風景として詠い上げている。更に言えば、人民公社運動で大きく変わった中国の姿を早春の風景と、舞い戻った燕に託して、帰国華僑の夫婦が故郷の余りの変わりように生家を探しあぐねている様子を述べることで賛美している。毛沢東が五八年に提唱した「両結合」(革命的リアリズムと革命的ロマンチシズムの結合)芸術理論の一つの実践であろう。

従来、郭沫若の大躍進政策時の新詩の研究は、先鞭が付けられているが[2]、詩についての分析は、皆無に等しい。ただこの詩からは、新詩同様の政治ロマンチズムは、内包されていることが読み取れ、

その表出が、書としての姿態に他ならないと言えよう。但し、第二期郭体と比べると、やはり些かのトーンダウンが読み取れる。

私は第一二章「郭沫若の大躍進政策期に於ける書法様式の類型とその背景について」[15]の中で、

これらのように、公共性(建築等)、政治性(プロパガンダ)と言うよりは、名所の感慨を詠じ、また個人的に同志に委嘱されて書す場合、純正の第二期郭体ではなく、第一期郭体と第二期郭体が混合されたような様式となっている。これをここでも、第三期郭体と定義したい。

またこの現象によって逆説的に第二期郭体が、公に対して、共産党を謳歌する嬉々たる生命力を内包したプロパカンダを目的とする様式であり、その程度の如何によって、書風が変化していたことを如実に物語っていると言えるだろう。さらには、どこに飾られるかという意識も、やはりその書風に影響を与えていたと言えるかもしれない。

と述べた。

それを踏まえても、これらの書を分類すれば、第一期郭体(文語への白話の流入様式)と第二期郭体(第一期郭体への文語体流入様式)の止揚体、つまりやはり第三期郭体と見做すべきものとやはり考えられる。

図 2

B郭沫若は、一九五九年六月二八日から、安陽、鄭州、洛陽、三門峡、西安、太原等の視察に向かった。その時の詩で、翌七月十一日に帰京し、十三日に発表されたものが図2である。

当時の漢詩は、【豫秦晋紀游二十九首】と言われ、その中の「观龙门石窟斥美帝摧毁」(〈龍門石窟を参観しアメリカ帝国主義の破壊を責める〉が当詩であり、洛陽博物館のために書かれた、まさに歴史性、学術性の高い意味合いを担っている。

中州文物誰摧残　屈指当推美利堅　唐墓已聞偸駿馬　竜門又見劫飛天　挖墻鑿壁真堪恨　鮮恥寡廉殊泰然　贓品今存博物館　按図索驥待来年

(大意)河南省の文物は誰が毀損したのか、指折り数えてみればみなアメリカ。唐墓では既に駿馬が盗まれたと聞き、龍門ではまた飛天の彫刻が強奪されたのを見た。墻を掘り壁を鑿つやり方はまことに憎らしい。清廉さも恥もなく平然としている。盗品は今やアメリカの博物館に陳列、証拠をつかんでの盗品捜索は、今後を待とう。

当時、大躍進政策の下、反浪費、反保守運動の中で、近現代的な文物の収集、整理工作が行われ、一九五九年には〈社会主義建設之部〉という陳列が完成された。つまり、「厚今薄古」という政府の指導の下ではあるが、社会主義と歴史を結びつける役割を持って、博物館が林立する。[16]

そしてこの洛陽博物館も、一九五八年に建立されたものであり、郭沫若がそれら博物館事業の指導的な任の一翼を担っていたことは言うまでもなかろう。

歴史遺跡の豊富な中原地方の代表的な博物館なのに、貴重な歴史遺産の展示が少ない。展示されても毀損されたものが多い。あれも、これもと指を折って数えるとみなアメリカに持ち去られたか、アメ

リカの手で毀損されたものばかり。いまはアメリカの博物館にあるそれらを、いつか証拠を突き付けて取り返すぞ、という決意で詩を結ぶ。当時の郭沫若の主要な敵はアメリカ帝国主義。これも反米愛国が一つのテーマ。そのような政治的立場で詠われた詩が、この詩であり、そして書ある。

この図2の書も、第三期郭体に分類できるが、その中でも図1同様、第二期的、つまり文語的要素が強い書風と言えるだろう。

文革前に郭沫若は、自己の歴史研究を全面否定するが、逆から見ると全否定しなければならないぐらいに郭沫若は、歴史を重んじていた。つまり毛沢東と今古の重心の綱引きを、常に行っていた忠臣であったと言えるのではなかろうか。

その右派と左派の綱引きの力の駆け引き、配合が、書に如実に現われていると言えるだろう。

C郭沫若は一九六〇年一月末から二月六日まで重慶に視察旅行し、北京に帰ったその六日に【重庆行十六首】として整理した。そのなかで、図3の「飞过秦岭」（〈飛行機で秦嶺山脈を越える〉）が詠われている。そしてその款記から、黎夫同志、つまり常黎夫に与えられていることが分かる。

群山界秦蜀　宛転万竜遊　海抜四千米　天高一指頭　雪涛眉下湧　雲海望中収　瞬息巴渝到　嘉陵緑似油

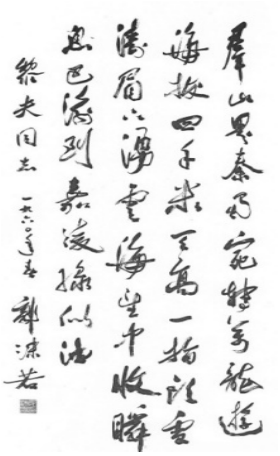


図3

（大意）群がる山々は秦（陝西省）と蜀（四川省）の境界、その山容は何万もの龍がゆるやかに遊ぶかのようだ。海抜は四〇〇〇メートル、天高くその頂きを指す。雪波が眉の下に湧き、雲の海は視界に収まる。

一瞬で巴渝（重慶）に着き、嘉陵の川の緑色は、油のようになめらかにきらきら輝いている。

これは、帰途、飛行機からの眺めを詠ったもので、一九三六年の長征の懐古、若しくは一九四五年、蒋介石との談判のために初めて延安から重慶に飛んだ機上で作った、毛沢東の最も有名な作品「沁園春雪」と同じく、中国の大地の美しさと雄大さを、「万龍」「雲海」などの大胆でロマンティックな語を運用して描いている。この詩を作ったとき、郭沫若の脳裏には毛沢東の「雪」が去来していたのではなかろうか。政治性はあまり汲み取れないが、その書は、第二期に近い気迫が込められている。

D一九六〇年十二月末からキューバでの式典、視察の帰途、一九六一年一月二三日に昆明に立ち寄った。そして「游黑龙潭」（黒龍潭に遊ぶ）【昆明杂咏九首】）が発表され、図4の如く書として残っている。

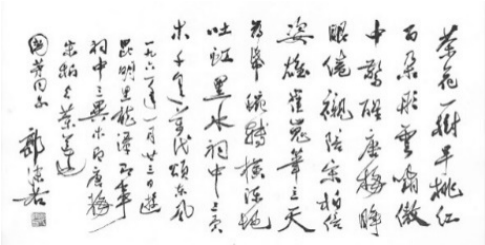


図4

茶花一樹早桃紅　百朶彤雲嘯傲中
驚醒唐梅睜眼倦　襯陪宋栢倍姿雄
崔嵬筆立天為紙　婉転横陳地吐紅
黒水祠中三異木　千年万代頌東風

（大意）ツバキの木はとっくに桃紅色の花をつけ、何百もの紅霞が自由に咲き誇っている。目覚めた唐梅がぱっちり、寝飽きた目を見開き、ぴったり寄り添う宋柏が雄姿を際立たせている。険しく切り立った岩山の空を紙となし、やわらかに体を丸めて横に伏せ、地に紅を吐く。黒龍潭の祠の

三種の異る木は、千年万代にわたり、社会主義を讃えている。

そして款記には、次のように書かれている。

一九六一年一月廿三日游昆明黒龍潭即事、祠中三異木、即唐梅、宋柏与茶花也。

（大意）昆明の黒龍潭に遊び、眼前の事を詠んだ。祠中三異木とは唐梅、宋柏とツバキである。

この雲南と三異木と郭沫若との関係については、先行研究がある[6]。雲南の風景と歴史を社会主義の紅色に染めたこの漢詩は、横幅で書かれ、これも第三期郭体と言えるだろう。

E一九六一年十一月から一九六二年三月十日の帰京まで、郭沫若は四か月の長期間を広州で過ごしている。この長期の滞在中に多くの詩と書を残している。

これは銭理群氏が指摘するように[7]、

一九六二年は中国にとり多忙な一年であった。年初には、大飢饉が引き起こした当然の成り行きとして、広州と香港との間で大規模な密航が行われ、全世界を震撼させた。これ以前においては、中国で発生していたことは大飢饉も含め情報封鎖されていたため、世界には何も知られていなかったが、三万九千人の密航により、中国の内幕が公のものとなったのである。片時も大陸反攻を忘れずにいた蔣介石はこれに鼓舞され、今こそ絶好のチャンスだと考えるようになった。これに警戒した毛沢東はこの年の五月に人民解放軍参謀総長に対し、「《台湾にいる》蔣介石集団四〇万人の秋以降の上陸に備える必要がある」と語った。また六月には『人民日報』社説という形で、「全国人民は警戒を高め、蔣介石匪賊集団の軍事的冒険を粉砕する準備を整えねばならない」と促した。果たせるかな、一〇月一日から一二月六日にかけて蔣介石は前後して、高雄より武装勢力を九度出発させ、東南沿海地区で騒擾を起こし、「ゲリラの回廊」を建設しようと呼びかけた。しかし、人数も少なければ規模も大きくなく、毛沢東の見積もりをはるかに下回るものだった。にも関わらず、緊張した局面が生まれたわけである。

と述べるように、台湾への対応を托された可能性が高いだろう。

その残された書は、やや大味なものが多いが、その中でも、一九六二年一月十八日の「鄭成功光復台湾三百周年紀念」（鄭成功台湾解放三百年記念）の書は、落ち着いた佇まいを見せている（図5）。

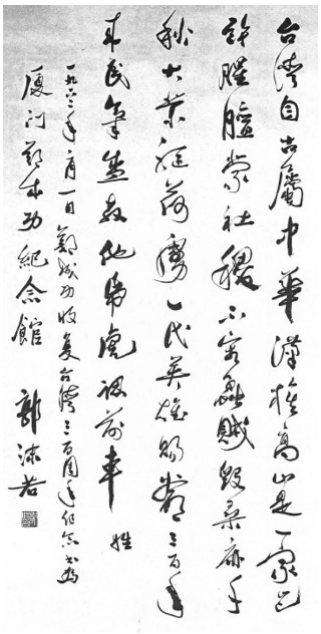


図5

台湾自古属中華　漢族高山是一家　豈許腥羶蒙社稷　不容蟊賊毀桑麻　千秋大業駆荷擔　一代英雄賜姓爺　三百年来民気盛　教他紙虎認前車

（大意）台湾は昔から中国に属し、漢族と高山族は一家族である。西方の侵略者が社稷を侵すことをどうして許そうか。害虫が桑麻を喰らうのを許しはしない。オランダを駆逐したのは千年の大業、一代の英雄は国姓を賜る。三百年間、人民の意気は盛んで、張子の虎（帝国主義）に前の失敗の教訓を認めさせる。

この幅は、厦門鄭成功紀念館の為に書かれたもので、公共建築物には、当時この第三期郭体が用いられることが多い。但し戦時の覇気を少しく含み出し、当時の中国の国際状況を物語っているとも言える。

F　一九六二年期の作としてもう一つ八月二五日の作、河北省視察時を想い作られた「咏北戴河二首(其二)」を見てみたい。(図6)

図6

魏武東征此地過　秦皇遺鐲為応磨　秋風払岸翻銀浪　滄海連雲氾碧波　明月瓊楼誰秉燭　青春高閣我聞歌　解衣磅礴忘吾汝席地暮天誦戴河

(大意)曹操は東征してこの地を過ぎ、始皇帝の東巡の遺跡は今も残っている。秋風は岸に吹いて銀の波を翻し、蒼海は雲を連ね、青い波をあおいでいる。明月の高楼、誰が燭を取るのだろうか。青春の高閣で私は歌を聞く。毛沢東主席の恩恵は、我と汝を忘れさせ、地べたに座って夕暮れに、毛主席の詞「北戴河」を常に朗誦している。

この書は、杭州の西冷印社の為に書かれたものであるが、一九六一年頃からこの手の細身の書風が散見される。

因みに一九五九年には、歴史劇「蔡文姫」によって、曹操の三国志演義以来の評価に対して翻案を提示している。この内容は、悲劇を喜劇に転じるきざしをを示したものであるが、大躍進期の失敗、大飢饉にあっての、当時の時勢を反映しているのであろう。

さて、この作品の形態は、無論第三期郭体に分類できるが、郭沫若は使う筆を愛用の筆だけでなく、別の筆も実験的に使い始めていたと考えられる。

四　視察書体の様式と変遷

ー毛沢東の復権と詩の唱和へ

先まで見てきたように、郭沫若の一九五八年から一九六二年の書風は、概ね第三期郭体、つまり第二期の文語様式への白話様式の流入体、第一期と文語様式の流入体たる第二期郭体の止揚体で概ね解消されるものであったと言える。

時に第一期が、また時に第二期が強調され、その振り幅のなかで、演出されたものであった。

敢えて言えば、一九六一年十一月から広州で過ごした四か月の期間、当時の書は、些か粗野なものが多く、それは視察体とは違う、台湾の大陸反抗への戦意の意味合いを持ったものだった可能性があり、これが、第四期郭体への胎動であったとも言える。

しかし、象徴的に言えば、一九六三年一月元旦の東風、つまり社会主義への頌歌「満江紅」詩を基点に、第三期郭体に再び第二期的な気迫が盛り込まれるようになる。例えば、一九六三年十月九日作詩の図7の「国庆节之夜月亮与太阳对话(满江红)」〈国慶節の夜、月と太陽の対話〉のように、第四期郭体と言うべき、第三期とは明確に、また別物の態様を示すようになり、それが引伸されて、一九六七年の毛沢東との唱和体、懐素風の連綿体(図8)へと展開されていく。

これは、視察体(第三期郭体)から毛沢東の好んだ「頌歌」「戦歌」へと、新たな旧詩の在り処を模索、発見していく姿が、書にも反映されていったものと考えられる。

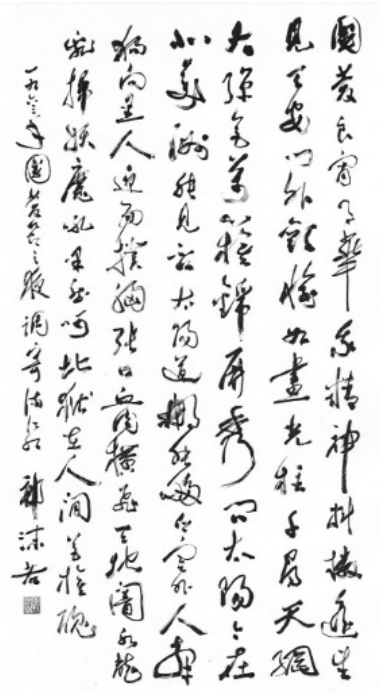


図7

図8

五　小結

本章では、大躍進期から国民経済調整時代、特に一九五八年から一九六二年の郭沫若の視察時の書について言及した。

総括して言えば当時の視察時の書は、常備されていたと考えられる四尺全紙に、第三期郭体で書されたものと定義できるだろう。

そして第一二章「郭沫若の大躍進政策期に於ける書法様式の類型とその背景について」に於いて、「郭沫若の、後に名所旧　跡詩・記念詩・建築詩等にまで用いられるようになる第三期郭体書風についての詳論」についての課題を示したが、この名所旧跡詩・記念詩・建築詩等という分類は、概ね「視察体様式」と総括でき、文学界の左傾路線と少しく並行していたことが明らかになったと言える。

そして次の課題として、一九六三年から一九六五年の文革に至る三年間の郭沫若の書が、如何に変貌していったか、そしてそれは、どういう政治的背景を有し、それが文学、書に投影されたか分析する必要があると考える。

その課題を明記して、本章の末尾にしたい。

---

1 国华・徐培均编注『郭沫若旧体詩詞系年注釈』上・下(一九八四年黑龙江人民出版社出版)

2 岩佐昌暲『中国現代詩史研究』(汲古書院　二〇一三年)

3 邢小群「试析郭沫若在大跃进年代的诗歌活动ー从《百花齐放　到《红旗歌谣》」(『中国青年政治学院学报』二〇〇三年五月)　贾振勇「一遍地皆诗写不赢」ー郭沫若大跃进时代的诗歌创作与诗学观念」(『郭沫若学刊』二〇〇五年六月)

4 拙稿「郭沫若の大躍進政策期に於ける書法様式の類型とその背景についてー「漢詩」の分析を中心とした政治性及び建築と書法との照合」(『京都語文』二五号　二〇一七年十一月)

5 储著武「“厚今薄古”ー一九五八年历史学大跃进」(『安徽史学』二〇一七年一月)

6 甘立荣「郭沫若诗中的“三异木”」(『生态文化』二〇一五年十月)

7 錢理群著：阿部幹雄［ほか］訳『毛沢東と中国：ある知識人による中華人民共和国史』(青土社二〇一二年十二月)

第十六章　一九六三年から文革に至るまでの郭沫若の漢詩の在処と書

―郭沫若「満江紅」詩の社会史的意義を中心にして

一　緒論

―郭沫若と「満江紅」詩の意義と展開

一九六二年、世界の形勢は変化を見せ、中国も国際的に孤立、緊張が高まった。ウイグル自治区での中ソの武力衝突、アメリカのベトナム侵攻、インド軍の中国国境での紛争、キューバ危機、これらに伴うソビエトとの関係悪化など、中国共産党は、様々な政策転向を余儀なくされていた[1]。

六二年十月いわゆるキューバ危機が起こると、中国は「キューバ支持、アメリカ帝国主義反対」を唱え、またソ連政府を批判し、フルシチョフとも対立する。

事態に大きな変化が生まれるのは六二年九月中共八期十中全会以後のことで、会議の席上毛沢東は社会主義社会における階級と階級闘争の存在、資本主義復活の可能性を指摘、階級闘争の必要性を語り、修正主義の防止と反対を提起し、それは会議のコミュニケに書き込まれた。六三年からは社会主義教育運動が始まり、中国は短い調整期を経て再び激しい政治の季節に入っていく[2]。

そしてその翌年、一九六三年一月元旦、郭沫若は最初の「満江紅」を発表した。

滄海横流　方顕出　英雄本色　人六億　加強団結　堅持原則
天垮下来擎得起　世披靡矣扶之直　聴雄鶏一唱遍寰中　東方
白　太陽出　氷山滴　真金在　豈銷鑠　有雄文四巻　為民立
極　桀犬吠堯堪笑止　泥牛入海無消息　迎東風革命展紅旗
乾坤赤

（大意）海岸の流れが氾濫する大異変のなかにおいて、英雄の本来の能力は発揮される。人民六億は団結を強化し、原則を堅持しており、たとえ天がおちて来たとしても、支えることができる。世間が倒れ伏せば、これを扶けてまっすぐにしてやることはできる。雄鶏が地球に暁を告げるのを我々は聞き、東は白んで来た。太陽が出れば、巨大な氷山も融けるが、真実の金はどうして融けようか。雄勁な文章四巻（「毛沢東選集」）にもられた思想が、人民の目標をはっきりと示している。暴君桀の犬は盲目の忠誠心から正しい人間堯に吠えかかるが、真理を見失ったその様子は笑止千万である。泥牛が海に入って、それっきり音沙汰なくなるように、彼らもそうなるであろう。東風を迎え、革命は赤旗をひるがえして前進している。やがて全世界が赤い色に燃えるであろう。

この詩は、この国難に対し、国際的孤立感からきたナショナリズムの強化、毛沢東の権力の再確立と、その核心となる思想、社会主義（東風）を讃えたものであって（「左傾急進主義」）、これ以後、郭沫若の漢詩と書の意味合いが視察詩中心から変貌を見せていく。

当時を概観して岩佐昌暲氏は[3]、

八期十中全会の「資本主義復活の危険性―社会主義段階での階級闘争の必要性」という提起は、文芸界を含む全イデオロギー領域に激震をもたらすことになった。この会議の席上劉建形の小説「劉志丹」が批判されたのを皮切りに、六三年五月には昆曲「李慧娘」が批判され、九月には毛沢東が伝統演劇とそれを管轄する文化部を「帝王将相部、才子佳人部、あるいは外国死人部だ」と批判、十二月には演劇以外の芸術形式は「問題が少なくない」、社会主義改造は「ほとんど効果をあげていない」と批判する「批示」を書いた。この「批示」に基づき六四年四月

から文芸界では整風運動を展開、問題点の点検をおこない、五月にはその報告書草案をまとめた。六月毛沢東はこの草案に「批示」し、文芸界（全国文芸界聯合会とその傘下の各協会）について次のように書いた。これらの協会とこれらの協会が掌握している出版物の大多数（少数の、いくつかのものは、よいといわれているが）は、この十五年間、基本的に（すべての人ではない）党の政策を実行せず、役人風や旦那風を吹かして、労働者、農民、兵士に接近せず、社会主義の革命や建設を反映しなかった。ここ数年間は、なんと修正主義すれすれまで転落するにいたっている。（中略）果たしてこの「批示」により文芸界は再び整風運動のやり直しを迫られることになる。この結果、映画「北国江南」、「早春二月」が「ブルジョア個人主義、人道主義を賛美している」などとして 批判されたのをはじめ、多くの作品が批判にさらされた。六四年夏以降、批判は学術界にも及び、哲学界では楊献珍、馬定、経済学では孫冶方、歴史学では剪伯賛、呉唸らへの批判が展開された。こうした批判運動の継起はやがて 始まる文革の前触れであった。

と述べられているが、以上の文学界の左傾化を前提に、その変化の整理、分析から始めて行きたい。

二　一九六三年から一九六六年までの漢詩と書

（●は図版あり。）

・これらの漢詩は、王继权・姚国华・徐培均编注『郭沫若旧体詩詞系年注釈』上・下（一九八四年　黑龙江人民出版社出版）に拠って、整理した。

・図版は『二十世纪书法经典 郭沫若』（河北教育出版社 广东教育出版社一九九六年十二月）『郭沫若书法集』（郭沫若书法集编委会 四川辞书出版社出版发行 一九九九年）『依据教育部中小学书法教育指导纲要编选 中国最具代表性碑帖临摹范本丛书 郭沫若卷 』（人民美术出版社二〇一七年十一月）参照。

また、作詩の目的をここでも、「歴史」「学術」「政治」「文化」「頌歌」等と分類しているが、本来峻別できるものではない。ただ特にそういう要素が強いという意味で用いたことをここでも断っておく。

日時	漢詩名	場所	目的	書の有無
1963年1月1日	满江红 1963年元旦书怀	北京	頌歌	●
1963年2月7日	“二七”罢工四十周年(满江红)	北京	頌歌	
1963年2月15日	纪念孙诒让诞生一一五周年	北京	学術・歴史	
1963年2月21日	赞雷锋(满江红)	北京	頌歌	
１９６３年春	题赠福州工艺品展览会	北京	文化	
１９６３年春	续鸳鸯湖棹歌	広西	文化・頌歌	●
1963年3月21日	南宁见闻	広西	学術・文化	
1963年3月24日	满江红	広西	学術・歴史	
１９６３年春	在南宁看美协画展	広西	文化	●
１９６３年春	武鸣纪游二首	柳州	文化	
1963年3月	途次柳州		歴史	
1963年3月	重访柳侯祠	柳州	歴史・政治	
1963年3月	在柳侯祠植树	柳州	歴史・政治	
1963年3月	柑香亭	柳州	歴史・政治	
1963年3月	柳州登立雨峰	柳州	歴史・政治	
1963年3月	满江红－ 咏芦笛岩		文化・頌歌	
1963年3月	满江红 —咏七星岩		文化・頌歌	
1963年3月	满江红		文化・頌歌	
1963年3月	题月牙楼	広西	文化	
1963年3月	西江月 —再题月牙楼	桂林	文化・頌歌	
1963年3月	榕树楼	桂林	歴史	●
1963年3月	西江月－ 雨中重登榕树楼即事	桂林	文化	
1963年3月	桂林登叠彩山仰止堂见瞿式耜张同敞浮雕像诗以赞之(二首)	広西	歴史・政治	
1963年3月	春泛漓江	広西	文化	
1963年3月	游阳朔舟中偶成(四首)	桂林	文化・頌歌	
1963年3月28日	满江红	興安	文化・頌歌	
1963年3月28日	灵渠	興安	文化・歴史	●
1963年3月	看高甲剧团演－《连升三级》	泉州	文化	
１９６３年	题赠潮安县革命历史文物陈列馆		歴史・政治	
1963年8月15日	断手再植（满江红）	北京	頌歌	
1963年9月16日	看周霖同志画展题赠	北京	文化	
1963年10月9日	国庆节之夜月亮与太阳对话(满江红)	北京	頌歌	●
1963年11月4日	为新安江水电站题诗	新安江	建設	
1963年11月11日	访韶山（满江红）	湖南	頌歌	●
1963年12月5日	读毛主席诗词(满江红)	北京	頌歌	
１９６３年秋	柏子白如花		文化	●
１９６３年秋	题如东丁店水闸	江蘇	建設・人民公社	
1964年1月25日	访鞍钢	遼寧	建設・頌歌	
同日	访南京	南京	歴史・頌歌	

日時	漢詩名	場所	目的	書の有無
1964年2月13日	向解放军学习（满江红）	北京	軍事	
１９６４年春	满江红(赞彭加木同志并以奉赠)		頌歌	
	1964年夏初饮高桥银峰		歴史・文化	
１９６４年夏初	1964年5月5日漫题	安徽	歴史・頌歌	
1964年5月5日	为天台县国清寺作	天台	歴史・文化	
1964年5月12日	题雁荡灵岩雄鹰峰	浙江	文化	
1964年5月13日	赞雄鹰峰	浙江	文化	
同日	游雁宕	浙江	文化・頌歌	
1964年5月14日	游雁荡合掌峰	浙江	文化	
1964年5月15日	游温州江心屿	浙江	文化・頌歌	
同日	题青田石雕厂	浙江	文化・頌歌	
1964年5月17日	题石门瀑布	浙江	文化	
1964年5月18日	游冰壶洞	浙江	文化	
1964年5月19日	重登烟雨楼	浙江	文化・頌歌	
1964年5月21日	游黄山(五首)	安徽	文化	
１９６４年	莫愁湖	南京	文化・政治	
1965年1月30日	题傅抱石画《延安画卷 七首》	北京	文化・頌歌	
１９６５年初夏	赠周铁衡先生	北京	文化・頌歌	
1965年3月5日	观话剧女飞行员后题词	北京	文化・頌歌	
1965年3月8日	“三八”节之夜	北京	頌歌	
1965年5月6日	寄题广西勾漏洞	広東	文化・頌歌	
1965年6月16日	在海丰	広東	歴史・頌歌	
1965年6月17日	题普宁革命纪念馆	広東	歴史・頌歌	●
1965年6月17日	雨中游(党石)石	広東	文化・頌歌	
1965年6月18日	外砂桥上	江西	軍事	
1965年6月25日	井冈山巡礼(二首)	瑞金	頌歌	
1965年6月26日	颂瑞金(四首)	赣州	頌歌	●
1965年6月27日	赴赣州途中(二首)	赣州	頌歌	
1965年6月28日	登赣州城内八境台	赣州	頌歌	
1965年6月28日	登郁孤台	興国県	歴史・頌歌	
1965年6月29日	绿化歌	江西	頌歌	
1965年6月29日	宿泰和	江西	文化	
1965年6月30日	过桐木岭	江西	文化・頌歌	
1965年7月1日	在茨坪迎「七一 」（念奴桥）	江西	頌歌	
1965年7月1日	黄洋界	井岡山	歴史・頌歌	●
1965年7月2日	龙潭	井岡山	文化・頌歌	●
1965年7月3日	访茅坪毛主席旧居	江西	頌歌	
1965年7月3日	红军会师桥	寧岡龍市	頌歌	
1965年7月4日	宿永新	江西	頌歌	
1965年7月4日	宿吉安	江西	文化・頌歌	
1965年7月5日	访南昌	江西	文化・頌歌	
1965年7月6日	访景德镇三首	景德鎮	文化・頌歌	
1965年7月7日	登湖口石钟山	江西	文化・頌歌	

日時	漢詩名	場所	目的	書の有無
1965年7月8日	登庐山三首	江西	文化・頌歌	
1965年7月8日	乘民主轮赴武汉	江西	文化	
1965年10月20日	题三江程阳桥	北京	建設・政治	
１９６５年	贺日本内山书店成立三十周年纪念		文化・政治	
1966年2月6日	题卧蕉图（水调歌头）		文化・頌歌	
1966年2月21日	喜雪(水调歌头)	北京	頌歌	
1966年2月22日	参观大连港(水调歌头)	大連	頌歌	
1966年3月15日	赞焦裕禄(水调歌头)	大連	頌歌	
1966年4月23日	西南建筑(水调歌头)	西南	建設・頌歌	●
1966年7月16日	看武汉第十一届横渡长江比赛(水调歌头)	北京	頌歌	

三　毛沢東との関係と漢詩

建国期から文革期の知識人の状況について克明に吐露した銭理群氏に拠ればゃ、一九六二年五月毛沢東は、蒋介石上陸に備えるよう人民解放軍参謀長に指示した後、「敵が少しくらい暴れてくれたほうが逆に良い」という一言を残した。そして、孟子の言葉をさらに引用して「憂患に生き、安楽に死し、敵国外患無くば、国恒に亡ぶ〔人は憂いの中では長く生き、安楽の中では死に向かうものであり、敵国外患が無ければ国というものは常に滅んでいくものであるの意〕と大言、つまり、「多難なれば邦を興すべし〔多難のときこそ邦土の振興を図るにふさわしい〕」という語を毛沢東は信じていたことになる。また毛沢東は一九六四年、外国の共産党指導者に向かって、「私はここ数年はさほど気分が優れなかったが、闘争がひとたび始まるや意気高揚としてきた」と語った。ちょうど一九六二年年末から翌一九六三年年初にかけて、毛沢東は詩興が大きく振るうようになり、立て続けに二篇の詩を書き上げた。「冬雲」（中略）この詩は一九六二年一二月二六日、六九歳の誕生目を迎えた際に詠まれたものである。もう一つの詩は「満江紅」と題されたものであり、「一萬年は太だ久し、只朝夕を争い」「要し一切の害人蟲を掃除せば、全て敵無からん」などと詠まれていた。これより明らかなのは、少なくとも一九六三年の年初に毛沢東の方針がすでに固まっていたということであり、それは国際、国内双方で全面的な階級闘争を開始することであった。

と述べており、それに呼応するように郭沫若は一九六三年一月に「満江紅　一九六三年元旦書懐」を発表、その後も一九六三年から一九六四年までにかけて陸続と「満江紅」を発表した。

「満江紅」は、基本的に毛沢東の頌歌であり、当時、郭沫若が走資派時代にあって、その毛沢東の復権に加担したことを如実に物語っている。つまり郭沫若は、資本主義の潮流に対して、あくまで「東風(社会主義)」体制を保守すべき思想を有していたことになる。

また一九六五年には、毛沢東の詩を書として手掛けたものが多く残っているのも特筆すべき事実である。一九六三年、特に一九六四年から一九六六年当時の書風は、第三期郭体に再度、第二期的な裂帛の気迫が蘇ってくる。

これは、第四期郭体と定義すべきものと言えるだろうが、文学界の左傾化の流れの中で、旧文化として形成されたこの書風の変化と毛沢東との関係を次章では、見て行きたい。

四　第四期郭体に至る道程と定義

抗日期の第一期郭体、つまり文語様式への白話様式の流入から百

花斉放期のそれへの再度文語様式の流入を経て(第二期郭体)、大躍進期、調整期の第三期郭体(やや白話体様式・但し伸縮あり)、それは第二期と第一期の止揚の姿を見たが、一九六三年頃からまた文語性、換言すれば伸縮の激しさと野太い気迫が盛り込まれるようになっていく[5]。

当時の政治状況に就いて、先の銭理群氏は、

一九六三年二月、中国共産党中央は工作会議を開き、劉少奇が「現代修正主義に反対する闘争の問題について」という報告を行った。ここで注意すべきなのは、毛沢東が劉少奇の報告の中に挿入した言葉である。我が国に修正主義が現れるかどうか、可能性があると言えばあるし、無いといえば無い。というのも人によっては、三斤の豚肉と、少しばかりの紙巻きタバコでもその人を買収できたりするからである。したがって、社会主義教育を農村で進めてこそ、修正主義を根絶することができるのである。この毛沢東の言葉には意味が二つある。まずは、農村での社会主義教育運動の発動を明示していることであり、これは後に四清運動へと展開していった。その目的は修正主義を根絶し、社会的基盤の問題を解決することにあった。次に「三斤の豚肉と、少しばかりの紙巻きタバコでも買収できたりする」という言葉が実質的に意味していたのは、困窮を極めた時期に、農村の基層レベルの幹部たちが自分の取り分以上に利益を取り上げ、賄賂を受け取っていたという問題の存在についてである。毛沢東は、農村の基層レベルにおける党組織の腐敗の問題を述べているのである。つまり、毛沢東の主観的な判断と意図としては、「修正主義を根絶する」というのがあった一方で、「農村の基層レベルにおける党組織の腐敗の問題」もまた、解決せぬばならぬ問題として現実に存在していたということになる。

と述べている。この修正主義の根絶に向けての意気が反映した書風が第四期郭体と定義でき、文革直前までの郭沫若のエレルギーマックスの最後の書風と言えるだろう。そして、その特徴の一つに気脈の強さ、連綿の有無が挙げられる。

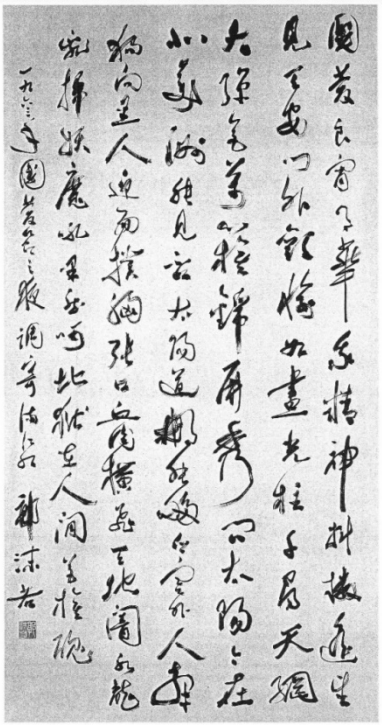


図 1

本章では、その変遷過程を、詩、書の両面から見て行きたい。先ず、一九六三年の国慶節の書、満江紅「日月対話」(図1)は、

国慶良宵　月華我　精神抖擻　遥望見　天安門外　歓愉如昼
光柱千尋天網大　弾花万簇錦屏秀　問太陽　君在北美洲　能
見否　太陽道　哪能夠　白宮外　人牽狗　向黒人　迎面撲胸
張口　血肉横飛天地暗　水竜乱掃妖魔吼　果然呵　地獄在人
間　花旗醜

(大意)国慶節の良宵は、月は私を輝かせ、精神は、雑念を払う。遙かに天安門の外を望み喜びは、昼のようだ。光の柱は高く天の網も広い。弾花はにしきの山となり、秀でた屏となる。太陽に問うには、君は北アメリカにいて、見ることができるのかと。太陽の道は、どこで足りるのか。ホワイトハウスの外で、人は犬を連れている。黒人に向かって、面と向かって、胸をうち、口を開く。血肉は横に飛び、天地は暗く、水竜は

妖魔を見出し咆哮（ほうこう）する。果たして、地獄は人間世界にあり、星条旗は醜い。

と自国を讃え、アメリカの人種差別、さらには当時に於けるジョン・F・ケネディの政治、外交行動を批判しているのであろう。

この時期の書風は、また第二期的な気迫と伸縮が看取できる。

図 2

そして図2の一九六四年秋の書、「下龍湾七律八首之一」（図2）は、

仙女三千尽害羞　銀紗罩面怕凝眸　虚点鸞影陳金鏡　嬾巻珠簾上玉鈎　待到両全人去后　掲開重幕日当頭　原来回避非無故　只見英雄不見修

（大意）仙女は三千、辱めを尽くし、銀色の砂は一面を覆い、瞳を驚かす。虚しい点に鸞の影が映り、金の鏡をならべ、だるく巻かれた珠の簾が玉のかぎにかかっている。腕の立つ人（二人のソビエト書記長）が去ったあと、新しいリーダーが登場する。もともと会談を避けるのは訳がないわけでない。ただ英雄をみるだけで、修正主義を見はしない。

この毛沢東を持ち上げる詩は、海南島で作られ、時のソビエトの修正主義を批判、中国のマルクス、レーニン主義を讃えた内容であり、その書相は、第二期のエネルギーに更なる圧力、つまり情熱が加えられ、まさに時の頌歌、戦歌の佇まいと言えるだろう。

次の図3は、一九六五年一月に郭沫若が毛沢東の詩、一九五九年の作、七律（廬山に登る）を書したものであり、当時、郭沫若は毛の詩を書として、よく手掛けるようになる。

一山飛峙大江辺　躍上葱蘢四百旋　冷眼向洋看世界　熱風吹雨洒江天　雲横九派浮黄鶴　浪下三呉起白煙　陶令不知何処去　桃花源裏可耕田

（大意）いまにも飛び立とうとするかのように、長江の広い水面のすぐわきに、突如として廬山が聳えている。自動車を新しくできた道路に走らせると、緑の渦巻く樹海の中を、四百ものカーブを一気にぬけて、頂上へ出た。冷ややかな眼で鄱陽湖（はようこ）を見る。世界を見る。広大無際の天の一隅では、熱風が雨を吹き付け、雨は力を込めて長江の空からふりそそぐ。さて眼を転ずれば、上流武漢三鎮の上に雲が横たわり、ふと伝説の黄鶴が飛んでいるように見えた。さらに視線を反対に

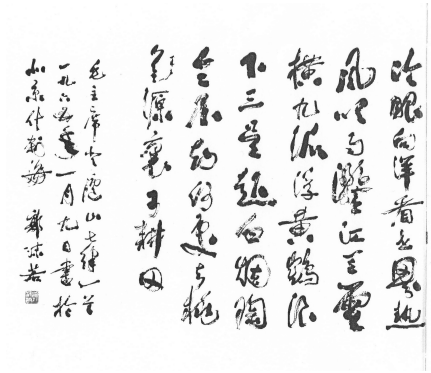


図 3

移すと、長江下流の、歴史があり物産豊富な呉の国々に、いまや近代工業の白い煙が太く何百本と立ち上っている。さてこの付近に暮らしていた県知事、陶淵明はどこにいったのか。かつてのユートピア桃花源にあこがれた彼は、いまや現実の桃花源で、嬉々として耕作に従事しているに違いない。

この書には更なる厚み、墨量が加味されており、使われた筆も変化したことが容易に類推できる。このように第四期の書は、第二期を骨格にして、さらにトーンが高まり、厚みが加わった様式と言えるだろう。そしての図4の一九六六年四月の書、「西南建筑（水调歌头）」は、

図4

建設飛騰進　西南改面容　四処翻江倒
海　火熱斗争中　遥想長征路上　両
万五千余裏　豪邁有遺蹤　形勢殊今
昔　革命壮心同　成渝竣　宝成継
滇黔通　塹山堙穀　鉄軌連穿万畳峰
怒激風雷雲水　駆除熊羆虎豹　赤幟映
天紅　要把乾坤改　光明来自東

（大意）建設は飛躍的に進み、西南の旧様を改める。四つの場所から江に流れ、海に至り、まさに火熱、闘争中である。遙かに長征の道を想い、二万五千キロ、豪邁の足跡がある。形勢は、今昔を分けるが、革命の志は変わらない。成渝鉄道が竣工し、宝成鉄道を経由し、滇黔鉄道を通過する。山を打ち砕き、鉄路は万畳の峯を穿つ。激しい風雷、雲水が、熊羆虎豹を駆除して、赤旗が天の紅に映え、乾坤を改めて、光明は東風からやって来る。

とあるが、この書も第四期郭体の完成された書相を呈している。

また図5の書は一九六六年五月の作であるが、「西江月　游南郊公園」詩が書されている。

暫憩武侯祠畔　黄花白蝶満園　当年軍閥閙頻繁　而今換了人間

図5

昨日才過五一　遊人万万千千　赤巾系頚多少年　期望紅色接班

（大意）しばらく武侯祠の畔で憩い、黄色い花や白い蝶が公園に満ちている。当年は軍閥が、頻繁に動き、今は人民にかわっている。昨日漸く五月一日（労働節）を過ぎ遊び人は、数多い。赤ずきんをかけるものは、何歳なのか。紅色の社会主義グーループに与することを望んでいる。

この書も第四期郭体であり、因みにこれら一九六三年以降に量産される第四期郭体に象徴されるように、文革前の郭沫若の心境は、共産主義の政策の頌歌、戦歌、毛沢東の称揚に限られてくるものの、旧文化が多用されるとともに、その感情も高ぶっていることが、看取される。

つまり、文革前には郭沫若は、孤立する国際状況の中でナショナリズムの高揚、戦意を表に出し、毛沢東に更なる偶像化を求めた半面で、毛沢東と共に旧文化的表現を用い、それと共産主義を繋ぐ視角を、むしろ促していたとも考えられる。

また文学思想と書との関係で言えば、修正主義に反対し、第二期の時とは真逆に左派を全面肯定するエネルギーによって、裂帛の気迫が書姿に再び反映されたのである。

五　文革前の息子、郭世英の動向

また当時、郭沫若の意識に文革中自殺に追い込まれた息子、郭世英があったことは間違いなかろう。

再度、銭理群氏の証言によれば[7]、

大学の反逆者は、未来の哲学者の中より現れた。今日つねに話題に登るのは、北京大学哲学科のX社であるが、なかでも当時最も注目を集めたのが、その中にいた郭沫若の息子郭世英(一九四二～一九六八)であった。郭世英は他の人に父親のことを、「この社会を飾る最大の文化的衝立て」として紹介していた。郭世英は父親の苦しい胸の内をもちろん分かっていたが、彼自身にも、苦しみや問題を感じることがあった。「五四運動の頃の父は、あんなに自由に詩を書いていたのに、今やどうしてこういう意思表現の自由がなくなってしまったのだろう?」と考えた郭世英は、自らのサークルの名を「X社」としていたが、これは戸惑いを表すために名付けられたものであった。Xとは未知数であり、十字架であり、交差点である。それは疑うことであり、この世にいくらでも存在する未知で、はっきりとはつかめぬ問題を疑い、そしてそれについて考えていこうというわけであった。また、それは彷徨うことであり、交差点に立ち、十字架を背負い、あてもなく彷徨うことも意味していたのである。六〇年代の大学のキャンパスにおいて、モノを考えることへの欲望と能力をまだ失っていなかった大学生に共通した苦しさがここにおよそ反映されていた。その後、彼は、「精神解放の要求」、「自由の要求」、「絶対的真理の要求」という三つの罪で捕らえられてしまう。「精神」「自由」「真理」がひとしく罪悪になっていたことは、六〇年代の大学キャンパスにおける若者たちへの思想コントロールが本当はどういうことであったのかをよく説明してくれている。このことは最高幹部たちを激しく怒らせたらしく、毛沢東も「幹部の子弟もまた、つまらぬ騒ぎを起こしている。これは整頓しなければならない」という指示を与え、郭世英を、最高幹部の子弟における反逆者の代表と見なした。内側より、しかも子や孫の世代より起こったこうした反逆は、強い警戒を必然的に引き起こすことになった。X社は幹部子弟が変質したことの典型となった。毛沢東が革命の後継者について 触れるようになったのも、このことと関係があると言われている。

と述べるように、いわば息子が人質的な存在となり、郭沫若を苦悶させていたことは、想像に難くない。

この状況下で郭沫若は、毛沢東のいわば付き人となり、第四期郭体によって、強く毛沢東への支持を表明していたのかもしれない。

六　文革前夜の郭沫若

文革が始まる直前の一九六六年一月、中国科学院党組書記張勁夫

を通して中共中央に提出した辞表が却下された後、北京大学にある「郭沫若批判」の大字報特 集欄に毎日のように郭沫若打倒を叫ぶ批判文が張り出された。その張勁夫宛ての郭沫若の手紙の書面は、

張勁夫　同志

本日、書面の形でわたくしの長い間持っていた個人的な願いを申し上げたいと思います。わたくしは耳が難聴です。最近視力も大変衰えました。科学院の仕事に対してずっと職責を果たしていません。わたくし自身は大変つらいです。悔しいあまりに、いつも居ても立っても居られません。わたくしは科学院の一切の職務（院長、哲学社会科学部主任、歴史研究所所長、科学技術大学学長等）を辞退する考えを前から持っています。どうかご検討のうえそれを上申していただき、そして上層部の批准を心から願ってやみません。この考えはずいぶん前から十分に考慮を重ねたものです。他の不純な意図は決してございません。どうかご明察願います。

敬礼

郭沫若

一九六六年一月二七日

＊原文は『郭沫若書信集』（下）による。

＊張勁夫は当時中国科学院党組書記兼副院長を務めていた。

そして四月十日、『林彪同志委托江青同志召開的部隊文芸工作座談会紀要』の前書きで、

全党はプロレタリア文化大革命の大旗を高く揚げ、反共産党、反社会主義のいわゆる学術権威たちの反動的なブルジョア立場を徹底的に暴露し、学術界、教育界、マスコミ、文芸界および出版界のブルジョア反動思想を徹底的に批判せねばならない。そしてそれらの文化領域の指導権を奪還しなければならない。それを達成するには、まず共産党内部、政府、軍もしくは文化領域に紛れ込んだブルジョアジーの代表人物を批判し、粛清せねばならない。[8]

と書かれたのが毛沢東の指示である。[9]

さらにそれを受けて四月十四日、全人大常務委員会副委員長である郭沫若は全人代常務委員会第三〇回会議で即席発言の形で自己批判を行った。それは、

数十年来、ずっとペンを持ってものを書き、そしていくらか翻訳もしました。字数から言えば、恐らく数百万字があったかもしれません。しかし、今日の基準を持って判断するなら、以前書いたものは、厳格にいうなら、全て焼き尽くすべきで、まったく価値がありません…。わたくしは今労農兵に学ぶべきです。そして彼らを師として仰がなければなりません。わたくしはすでに七十いくつになりましたが、志なら大きなものがあります。つまり全身泥まみれ、油汚れまみれ、そして血まみれになりたい。もしもアメリカ帝国主義が攻撃してくるなら、彼らに向かって手榴弾でも投げたいものです…。[10]

という内容である。

この自己批判の発言が『人民日報』に公表された十日後、郭沫若は日本自由民主党顧問の松村謙三氏一行と自宅で会見。その際、なぜ焚書の発言をしたのかという質問に対して、郭沫若は書斎にずらりと並んでいる書棚を指し「ほら、本はちゃんとそこにあるんじゃありませんか！　私は本を焼くべきだというのは私自身を否定することで、“鳳凰涅槃（鳳凰は５００年ごとに自ら焼身し火の中から再生する）”という意味にすぎないですよ」と躱したという（一九六六、五、十五『人民日報』：王廷芳「周総理和郭老的友誼」）[11]。

因みに郭沫若は、一九六六年一月から七月の間までは、少なくとも幾つかの旧詩を残している。

そしてその姿こそが、図４と図５の第四期郭体であり、郭沫若はその旧詩に込める気迫は衰えるどころか、第二期よりも凄まじいも

のであったと言えるだろう。
　この現象は、郭沫若の矜持の示すところと解釈しても良いのではなかろうか。

七　小結

ー「文革」突入を前に

　本章では、一九六三年から一九六六年八月の第八期十一中全会での「中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定」(十六か条)で文化大革命の定義が正式に明らかにされる以前の、郭沫若の旧詩とその書相を幾らか整理した。
　史料不足の感もあり、本格的な分析は、今後の課題としたいが、郭沫若は書に於いて、当初は旧文化をナショナリズムに利用し、敢えて左傾化と合流する開き直りによって、その消滅には抵抗していたと言えるだろう。
　つまり、従来の白話体様式、文語体様式の綱引きというよりも、社会主義運動が本格化する中で、旧文化の生き残りをかけて、なりふり構わずプロパガンダとして印象的に、派手に、目立とうと演出した様式が当該期の書風とも言えるのではなかろうか。
　敢えて書法風格史的に言えば、「卒意」が甚だしくなると言えるだろうが、その内実は、そのような政治的背景に於いて、エネルギーが、マックスに至ったと言えるだろう。
　郭沫若の書風の変遷は、総じて白話と文語の振り子運動と、生き残りを懸けて闘争、また賛歌のプロパガンダとして存在感ある力感の追求に移行する二つの流れで解消できるように思う。
　換言すれば、第四期郭体から文革に至るまでの書は、権力に奉仕する一筋にしか、書の在り処、存在価値は見出だせなかったのであろう。
　一九六五年、一九六六年頃、またその後の文革突入後の、郭沫若の学術、文芸の苦悶は、さらに足を止めて詳細に窮理していきたいと思う。

1　天児慧『中華人民共和国史』(岩波新書　一九九九年)
2　岩佐昌暲『中国現代詩史研究』(汲古書院　二〇一三年)
3　注2参照。
4　銭理群著：阿部幹雄［ほか］訳『毛沢東と中国：ある知識人による中華人民共和国史』(青土社二〇一二年十二月)
5　拙稿「郭沫若の大躍進政策期に於ける書法様式の類型とその背景について―「漢詩」の分析を中心とした政治性及び建築と書法との照合」(『京都語文』二五号　二〇一七年十一月　佛教大学国語国文学会)
6　武田泰淳　竹内実『毛沢東　その詩と人生』(一九七一年七月　文藝春秋)
7　注4参照。
8　一九六六年四月十八日『解放軍報』社説「高挙毛沢東思想偉大紅旗　積極参加社会主義文化大革命。
9　本章での考察は、武継平氏の「郭沫若の自己批判の懸案」(『言語文化論究』二〇号　二〇〇五年二月　九州大学大学院言語文化研究院)に詳しく、参照させて頂いた。
10　一九六六年五月五日『人民日報』掲載　郭沫若署名文「向工農兵群衆学習　為工農兵群衆服務。
11　「郭沫若の自己批判」(『郭沫若研究会報』第五号　二〇〇四年九月　日本郭沫若研究会)

第十七章　文化大革命期に於ける郭沫若の思想変転下の詩詞と書

―蘭亭論争の行方と毛沢東との関係に於ける書風の変貌を巡って

一　緒論

一九六二年、八期十中全会の「資本主義復活の危険性-社会主義段階での階級闘争の必要性」という提起は、文芸界を含む全イデオロギー領域に激震をもたらすことになった。この会議の席上劉建彤の小説「劉志丹」が批判されたのを皮切りに、六三年五月には昆曲「李慧娘」が批判され、九月には毛沢東が伝統演劇とそれを管轄する文化部を「帝王将相部、才子佳人部、あるいは外国死人部だ」と批判、十二月には演劇以外の芸術形式は「問題が少なくない」、社会主義改造は「ほとんど効果をあげていない」と批判する「批示（文書による指示）」を書いた[1]。

そしてそのような趨勢の中、一九六三年一月元旦、郭沫若は最初の「満江紅」詞を発表した。

この詞は、この国難に対し、左傾路線によって生じた経済混乱から正すための国民経済調整時期から、六三年-六四年、孤立する国際情勢の中で、ナショナリズムの強化、すべてを階級闘争に結びつける「左傾」の急進主義が中国を覆い、文革の思想的基盤が形成されていく中で発表された。

因みに郭沫若は一九六三年一月に「満江紅　一九六三年元旦書懐」を発表後も一九六三年から一九六四年までにかけて陸続と「満江紅」を発表している。

また一九六五年には、毛沢東の詩を書として、手掛けたものが多く残っているのも特筆すべき事実である。

そしてその詩詞の姿である書について言えば、一九六三年、特に一九六四年から一九六六年当時の書風は、第三期郭体に再度、第二期的な裂帛の気迫が蘇り、単体主義を逸脱し時に連綿線が姿を見せる第四期郭体、さらに一九六七年には、その強い気脈と連綿運動が拡張され、狂草風になってくる。これは、第五期郭体と定義すべきものと言えるだろうが、この書風の変化と毛沢東との関係は密接に連関されていると言えるだろう[2]。

これら一九六三年以降に量産される第四期郭体に象徴されるように、文革前の郭沫若の心境は、共産主義の頌歌、戦歌、毛沢東の称揚に限られてくるものの、旧文化が多用されるとともに、その感情も高ぶっていることが看取される。つまり文革前に郭沫若は、やはり毛沢東に旧文化と社会主義を繋ぐ視角を、むしろ促していたとも考えられる。

その傍証として、郭沫若は、自己批判を行った当時、一九六六年一月から七月の間までは、少なくとも幾つかの旧詩を残していることが挙げられる。

そしてその姿こそが、真正の第四期郭体であり、郭沫若がその旧詩に込める気迫は衰えるどころか、第三期より復古し、その第二期よりも凄まじいものであったと言えるのである。この現象は、郭沫若の矜持の示すところと解釈しても良いであろう。

また一九六五年六月、雑誌『文物』に発表された郭沫若の「王謝墓誌の出土から蘭亭序の真偽を論ず」は、文章と筆跡の両面から「蘭亭序」が王羲之の作品であることを否定。一九四五年以後、頌歌中心、取り分け一九六三年ごろから、毛沢東への賛歌が目立つようになった中でのこの論は、「唯物史観の問題、主に階級闘争の問題」として、学術問題から政治問題へと波及をみせることになる。

本章では、以上の流れを踏まえ、一九六六年八月の第八期十一中全会での「中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定」（十六か条）で文化大革命の定義が正式に明らかにされる頃の、郭沫若の旧詩とその書相を幾らか整理した。

つまり郭沫若は文革前夜までは旧文化（旧詩・書）によって、来たるべきプロレタリア文化大革命に対して、イデオロギーでは左袒しつつも、旧文化の面ではその在処を探っていたと言えるだろう。

現象的には文革当初、一九六六年時は第四期郭体によって、さらに一九六七年時には毛沢東風の狂草様式、第五期郭体によって、書の表出を演じている。

この意味するところを、如何に解釈すべきかを問うことが、本稿の中心命題である。

二　一九六五年から一九六六年にかけての郭沫若の漢詩と書

一九六五年六月、雑誌『文物』に発表された郭沫若の「王謝墓誌の出土から蘭亭序の真偽を論ず」は、文章と筆跡の両面から「蘭亭序」が王羲之の作品であることを否定したが、その論が書かれた日付けは一九六五年三月三一日である。

この論は、先にも述べたように「唯物史観の問題、主に階級闘争の問題」として、学術問題から政治問題へと波及をみせるが、これを文革の予兆と見做す見解が既に提出されている。[8]

さらに文革が始まる直前の一九六六年一月二七日、中国科学院党組書記張勁夫を通して中共中央に提出した辞表が却下された後、北京大学にある「郭沫若批判」の大字報特 集欄に毎日のように郭沫若打倒を叫ぶ批判文が張り出された。

また四月十四日、全人大常務委員会副委員長である郭沫若は全人代常務委員会第三〇回会議でも即席発言の形で自己批判を行った。

しかし、郭沫若は、一九六六年一月から七月の間までは、少なくとも幾つかの旧詩を残していることには、留意されたい。

文革後、一九六〇年代の詩詞を表にする。

日時	詞詩名	詞・ 詩	内容	書の有無
1966年8月16日	访鞍钢 水调歌头	詞	頌歌	
8月19日	上海百万人大游行庆祝文化大革命 水调歌头	詞	頌歌	
9月5日	读毛主席的第一张大字报 炮打司令部 水调歌头	詞	頌歌	
9月9日	文革水调歌头	詞	頌歌	
10月1日	国庆水调歌头	詞	頌歌	
10月12日	长征红卫队水调歌头	詞	戦歌	
10月28日	导弹核武器试验成功	詞	戦歌	
10月31日	蔡永祥　水调歌头	詞	弔詞	
11月28日	大民主　　水调歌头	詞	頌歌	
12月29日	新核爆　水调歌头	詞	戦歌	
1967年6月19日	第一颗氢弹爆炸水调歌头	詞	戦歌	
6月30日	纪念党的生日 沁园春	詞	頌歌	
8月20日	亿延安大学 念奴娇	詞	頌歌	
8月22日	参观北京市聋哑治疗语言训练班　　念奴娇	詞	頌歌	
9月21日	科大大联合 满江红	詞	頌歌	
1968年1月12日	考察须弥 沁园春	詞	頌歌	
2月14日	登采石矶太白楼 水调个头	詞	頌歌	
3月3日	科技大学成立革命委员会 沁园春	詞	頌歌	●
9月28日	毛主席去安源 满江红	詞	頌歌	
	向工人阶级致敬 满红江	詞	頌歌	
12月28日	迎接一九六九年 沁园春	詞	頌歌	
1969年4月	满红江三首	詞	頌歌	
	庆祝九大开幕	詞	頌歌	
	歌颂九大路线	詞	頌歌	
	庆祝九大闭幕	詞	頌歌	
1969年9月9日	西江月 二首	詞	頌歌	
	献给地震预报战线上的同志们			

三　近似するようになる毛沢東の書との関係

A　毛沢東の生涯と初期の詩詞と書

ここで毛沢東の人物と詩詞及び書に就いて、一瞥しておきたい。

毛沢東（一八九三―一九七六）。中国の政治家・思想家。湖南省湘潭県の人。中国共産党の最高指導者として、中国革命を最終的勝利に導き、中華人民共和国の建国、さらには文化大革命を発動した中国の革命家。

毛沢東は一般的に詩よりも詞を得意としたと言われている。それについては後章で言及するが、その書相については、図１に見えるように、建国前の資料は、便箋の類に書かれている。図１の便箋には、第十八集団重慶辦事處とあり、これが、最も確証のある史料と言える。

一九四五年年八月十四日、日本がポツダム宣言受諾を連合国

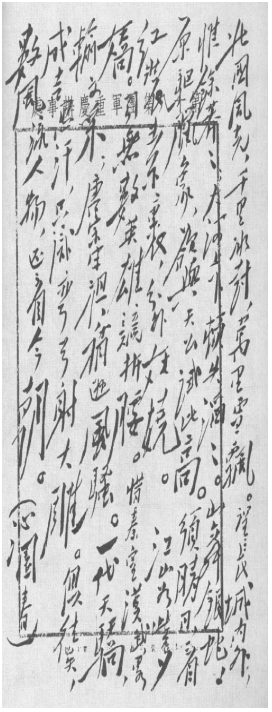


図 1

側に通告、八月十五日に終戦を迎えた（日本の降伏）。同二八日から、第二次世界大戦終了後の中国政局の収拾と国共関係の調整とを目的として、アメリカの P.J. ハーレー大使の仲介のもとに蔣介石と毛沢東は重慶で会談し、国共和平・統一について議論を重ねた（蔣毛重慶会談）。その時、延安から駆け付けた毛沢東を旧知の詩人柳亜子が宿舎を訪ね、自作の詩を送り、これに対して毛沢東は、この「沁園春雪」詞を贈ったと言われている。

この手帳に書き付けたような詞の書は、草卒に書かれ、後に見られるような過剰な演出はまだ見られない。ただし当時期に於いても、毛沢東は日常的に行草書を用いていたことが分かり、その教養があったことと、他の共産党革命闘士同様、科挙文字とは隔絶した、自分の癖字を肯定していたことは了解されよう。屈託のない明るさ、憂いを感じさせない線質が毛の持ち味であったと言える。

B　書品「長征論」論

近現代の東アジア史を俯瞰した時、それは戦国時代さながらの、「戦争」の歴史である。その群雄割拠する時代に於いて大陸の勝利者たりえたのが、現在の中華人民共和国、つまりは中国共産党であるが、その勝利への一つの転機とされたのが、一九三四（昭和九年）から一九三六（昭和十一年）にかけての所謂「長征」である。

その内実は中国国民党軍の包囲掃蕩作戦により根拠地の撤退を迫られ、行った脱出作戦であり、具体的には湖南省江西省の根拠地から陝西省北部までの十一省を踏破する「二万五千里」の行軍は、敵の追尾軍から逃れ、敵の封鎖線を突破し、大自然の険阻難関を越え、指導内部の対立と分裂を経て、兵力を十分の一に失う、受難の行程であった。しかしこの長征は教訓とされ、後に中国共産党は一九八六（昭和六一年）の五〇周年記念の講話で、長征精神を「革命理論と革命事業に対する無比の忠誠心」「犠牲を畏れず敢えて勝利し、楽観に満ちた、一往無前の英雄的気概」「大局を考慮し、規律を厳守し、緊密に団結する高尚な品徳」「民衆と連携し、艱苦奮闘、誠心誠意人民に奉仕する崇高な思想」と長征神話として総括するに至った。

また長征途上の一九三五（昭和十年）、貴州省遵義県で行われた遵義会議では、派閥闘争の勝利によるところの「中央三人組」、毛沢東、張聞天、王稼祥に権力が移行、毛沢東の党内影響力を大きく伸長させたことは否めないだろう。図2の書は、まさにその長征詩である。

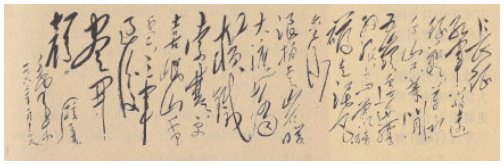


図 2

紅軍不怕遠征難　萬水千山只等閒　五嶺逶迤騰細浪　烏蒙磅礴走泥丸　金沙水拍雲崖暖　大渡橋横鉄索寒　更喜岷山千里雪　三軍過後盡開顔

（大意）中国赤軍は長征がどんなに困難であろうとおそれはしない。けわしい山、急な河がいくつも前途に待っているのを、まるで平坦な道でもいくように、平然と通りすぎるのである。五嶺の山々はうねうねと幾重にもつづくが、赤軍の眼には小さな波がたっているように見え、烏蒙の雄大な山厳はものすごい勢いをもってそびえているが、これまた、ころがってい

く泥の弾丸の描く線のようにしか見えない。金沙江の急流のぶつかる断崖は、高くそびえて雲がかかり、暑いことは暑いが、まあ暖い程度とでもいっておこう。そのさき、大渡河には橋がかかっていたが、これが鎖だけで、急流のうえに、高くかかる鉄の鎖は寒さを感じさせる。岷山のどこまでもつづく雪景色を賞でながら、長征の最後の難所を、わが赤軍の兵士たちはついに歩ききった。難所をすぎて、いま兵士たちの顔は ひとり残らず笑っている。[5]

この詩文は、一九三五年十月に作られたもので、この行軍の美化、来る時代を予知し、事実を捏造する創造力の産物に他ならない。このような「詩文」「書」の力量はゆくゆく三人組の中でヘゲモニーを掌握した、毛沢東の政治力のひとつであり、その書は、党のプロパガンダだけではなく、毛の内部闘争の勝利宣言としての意味を蔵しているとも言えるだろう。

その詩も七言律詩、平起式で平仄、押韻とも乱れはない。毛は現代詩だけでなく、近体詩にも習熟していたと言えるだろう。またその戦時に於いて作られた多数の書によって、毛が曹操以来の「槊を横たえて詩を賦す」の精神を継承していたことが分かる。

そしてその筆勢溢れんばかりの書の佇まいは、郷里の先輩、狂草の名手として名高い懐素を拠り所としているという説が既に提出されているが。その詩の「興」の在処は、僧の禅味とはかけ離れた政治性にあるところが、根本的に異なっている。六朝貴族趣味からの解放の意味を有していた懐素とは違い、儒教道徳からの解放、伝統文化に依って抑圧された感情の解放、来る共産主義の実現を謳歌するか如く「天真」であり、またその姿は沈鬱さを感じさせない、歓喜を感じさせる禅味を抜いたイデオロギーの書である。

またこの詩作は、一九三五年の作であるが、この書の款記には、一九六二年とある。このような過剰な演出の一群の書は、建国以後再度、プロパガンダの性格を担って書されたものと推察でき、管見では、大躍進政策の失敗による失脚時期、一九六一年から始まっている。

ただし、この仮説には幾つかの反証が想起される。

一つ目は、款記は後に、詞が作られた時期として挿入されたものがあり、一九五〇、六〇年代に手帳の類にも回想として書かれていたという説。二つ目は、横幅の演出の書にも一九二〇年代の年紀が書かれており、一九六一年以後と断じられないという説である。

一つ目の説については、その可能性は排除できないが、図一の確たる史料の示すように、やはり戦中は手帳に書かれたと考える方が妥当であり、二つ目の年紀についても、一九二〇年代と記されているものは、前半部の題名の横に挿入され、図二のように款記として、末尾に記されていないと言うことが、区別の論拠として挙げられる。

つまり、手帳の一九二〇年代の款記の書は、一九五〇、六〇年代に書かれたとはいえ、戦時中も同様であったと考えられること、さらに、演出型の横幅は一九六一年以後の款記が殆どであり、一九二〇年代の年紀があったとしても、書される位置が区別されており、やはり、演出型の横幅は、失脚時の挽回期に求めたい。

その当時一九六二年五月毛沢東は、先章でも見たように蒋介石上陸に備えるよう人民解放軍参謀長に指示した後、「敵が少しくらい暴れてくれたほうが逆に良い」という一言を残し、孟子の言葉をさらに引用して「憂患に生き、安楽に死し、敵国外患無くば、国恒に亡ぶ」、つまり多難のときこそ 邦上の振興を図るにふさわしいという語を信じていた。また毛沢東は一九六四年、外国の共産党指導者に向かって、「私はここ数年はさほど気分が優れなかったが、闘争がひとたび始まるや意気高揚としてきた」と語った。ちょうど一九六二年年末から翌一九六三年年初にかけて、毛沢東は詩興が大きく振るうようになり、立て続けに二篇の詩を書き上げている。

例えば「冬雲」詩は一九六二 年一二月二六日、六九歳の誕生日を

迎えた際に詠まれたものであり、もう一つの詩は「満江紅」と題されたものである。この内容から少なくとも一九六三年の年初に毛沢東の方針がすでに固まっていたということであり、それは国際、国内双方で全面的な階級闘争を開始することであった。

毛は当時の情勢にあって、書によって民意の鼓舞、宣伝役をも担当、新様式を確立、郭沫若もそこに自身の詩と書の在処を求めたと言えるだろう。

四　文革前夜と書の在処

毛沢東の提倡した大躍進政策が失敗し、三年続きの自然災害とソ連との対立も重なった結果、数千万人の餓死者を出した。一九五九年、毛沢東は政策失敗を認めて国家主席を辞任し、実質的な権力を一時的に失い経済は調整局面に突入した。

図 3

経済の第一線を退いた毛沢東は政治面での反撃に移り、プロレタリア階級とブルジョワ階級の間の階級闘争、社会主義と資本主義という二つの道が存在するとして、階級闘争が強調されていった文化大革命前夜の詩が次の詩である。

やがて起こる文化大革命では、毛沢東に反対する立場を取って国家の運営を任された劉少奇や鄧小平らは、「実権派」としていに打倒された。

この図3の作品、「和郭沫若同志詞（満江紅・一九六三年元旦書懐に唱和する）」は、文化大革命を発動する直前の毛沢東の心境がよく分かる詩である。

小小寰球　有幾個蒼蠅碰壁　嗡嗡叫　幾声凄厲　幾声抽泣
螞蟻緣槐誇大国　蚍蜉撼樹談何易　正西風落葉下長安　飛鳴
鏑　多少事　従来急　天地転　光陰迫　一万年太久　只争朝
夕　四海翻騰雲水怒　五洲震盪風雷激　要掃除一切害人蟲
全無敵

（大意）小さな地球のうえで、まして極微極小なハエが何匹か壁に頭をぶつけて（出口もわからず）ブンブンいっている。かすかにたてる音は淋しげであり、ちょっぴり泣いている。蟻が槐の樹に孔をあけて大国だと威張っても、大蟻が樹をゆさぶるとわめいても、口で大言壮語するのはた易いことだ。いまや西風に落葉はしきりと長安に散りしき（帝国主義者。反動派の没落はあいつぎ）、その落葉を射るように鳴鏑の矢が、勇ましく発射され飛んでいく（われわれの革命の宣言は発せられ、たたかいは始まった）。いくつかの事は、これまでも解決が急がれた。天地は転回し、時間は一刻一刻と迫る。一万年かけて歴史に結論をゆだねたいが、それではあまりに時間がかかりすぎるので、われわれとしては一日半日を争うほかはない。四海はわきたち、雲も水も怒っている。五大洲は激しくゆさぶられ、暴風と雷鳴が激しい。一切の、人（人民）を害する虫（帝国主義・反動派）をきれいに除去しよう。この（革命的人民によう）たたかいは天下無敵である。[7]

まさに毛沢東の書技の力量が、遺憾なく発揮された、ドラマチックな絶叫の書と言える。

因みに郭沫若の原詞「満江紅・一九六三年元旦書懐」は、

滄海横流　方顕出　英雄本色　人六億　加強団結　堅持原則

天垮下来擎得起　世披靡矣扶之直　聴雄鶏一唱遍寰中　東方白
太陽出　氷山滴　真金在　豈銷鑠　有雄文四巻　為民立極　桀
犬吠尭堪咲止　泥牛入海無消息　迎東風革命展紅旗　乾坤赤

である。

なお、郭沫若は一九五七年の反右派闘争以降、毛沢東に迎合するようになり、一九六六年からの文化大革命発動後には、「私が以前に書いた全てのものは、全て焼き捨てるべきで、少しの価値も無い」との自己批判を行い、一層毛沢東に迎合する度合いを高めていった。

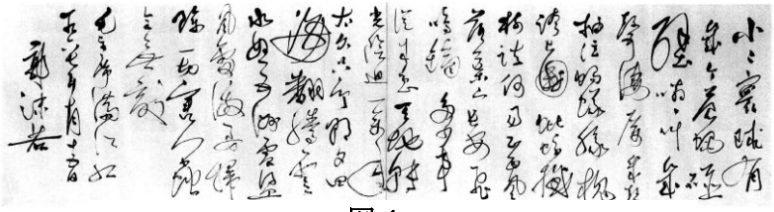


図４

図　５

図４・５の作品は、先の毛沢東詩とこの自作詩を書したものであるが、ともに一九六七年の作である。またその書風も所謂「郭体」ではなく、毛沢東が基盤にした懐素風になっている。これを第五期郭体と定義したい。

当時文革の時代にあって、郭沫若は毛沢東に同化し、すり寄ってゆく姿がその書からも看取される。

五　蘭亭論争時の漢詩と書

郭沫若は、一九六五年三月三一日、北京にて「王謝墓誌の出土から蘭亭序の真偽を論ず」を書き上げた。そして一九六五年六月に雑誌『文物』に発表された郭沫若の「王謝墓誌の出土から蘭亭序の真偽を論ず」に対して、翌月七月から論争が開始される。

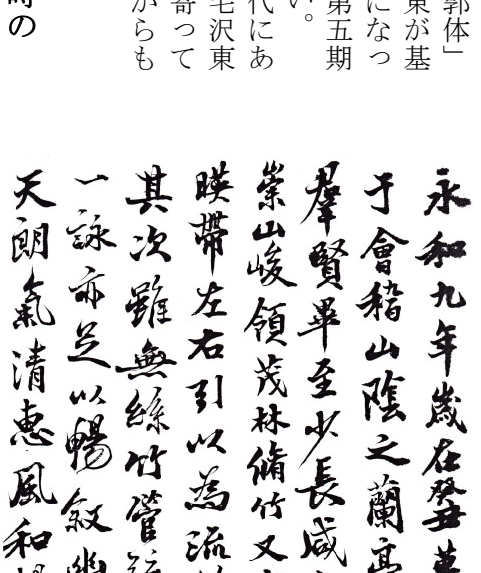
その六月、郭沫若は、広州、江西に視察に赴いている。郭沫若は、当時広州で、図６のように蘭亭序を書しているが、その末尾には、（図七）

一九六五年六月十二日夜書於広州白雲山山荘客舎之山水相逢處

羅培元同志以韓珠舩旧蔵定武蘭亭影印本贈書此以報之

郭沫若補注於汕頭　一九六五年六月十八日晨

とあるように、羅培元から贈られた定武蘭亭に対する返礼として書したものである。



永和九年歳在癸丑暮春之初會
于會稽山陰之蘭亭脩禊事也
羣賢畢至少長咸集此地有
崇山峻領茂林脩竹又有清流激湍
映帶左右引以為流觴曲水列坐
其次雖無絲竹管弦之盛一觴
一詠亦足以暢叙幽情是日也
天朗氣清惠風和暢仰觀宇

図６

その定武蘭亭について、「王謝墓誌の出土から蘭亭序の真偽を論ず」の中での言及を敢えて探せば、その蘭亭偽作説の論拠となった李文田の書論が、定武蘭亭の跋文であったことが指摘できよう。

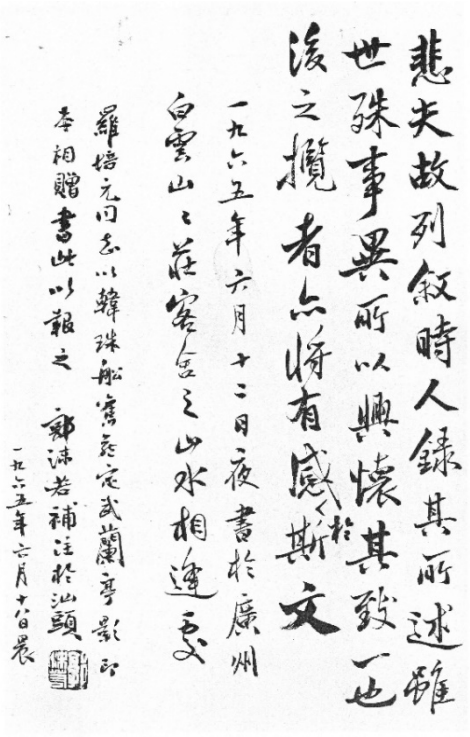


図 7

そして、その郭沫若の蘭亭の書風を分析すると、その用筆は直筆で書かれ、文字の配置も実物と違う部分が多い。まさに偽作蘭亭の様相を呈している。

例えば、二行目から行数が変化し、蘭亭実物四行目の「崇山」は、書き込みになっていない。実物十三行の「因」の訂正も無視され、十七行目の「向之」部の上塗りもなされず、二一行目「痛」の上書き、二五行目の塗りつぶし、「夫」の上書きも無視され、最終行の「於」は、書き込み扱いにされ、「文」の上書もまた無視されている。また文字の用筆も臨書といえないような独自の書風で書かれたところも随所に確認できる。これは、蘭亭序への軽視、偽作とはこういうものだと言わんとしているのであろうか。

また当時の漢詩の書と比較すると、前章で見た毛沢東詩の書は従来通りの第四期郭体の佇まいを示している。つまり、蘭亭論争に拠って、郭体の書風が変貌するような影響は見られなかったと考えられる。むしろその書風は、郭沫若の郭体作品の側款の趣に似ているとも言えるだろう。

換言すれば、蘭亭論争とは、反動派を炙り出さん為の仕掛け、政策に過ぎず、自身の書とは直接的な関係がなかったのだろう。

六　郭沫若の『蘭亭偽作説』に纏わる政治的背景と書論史的考察のための基礎整理

一九六五年六月、雑誌『文物』に発表された郭沫若の「王謝墓誌の出土から蘭亭序の真偽を論ず」は、書論と言うジャンルが、政治問題とされた、歴史上稀な現象と言えるだろう。換言すれば、学問はその背後にある思想、イデオロギーと連関しており、延いては国体の問題へと波及する可能性を常に蔵している。

書と書論というジャンルは、概ね平和を期して時の宮廷趣味に奉仕することが多く、時にその腐敗に抵抗するものの、この場合も共産党という現代宮廷に奉仕した論説と言えるだろう。

また本章は、一九六〇年代の中国政治文化史を書論に纏わる具体的な言説を精査に分析することを通じて、その人的蠢き、つまり政治史を垣間見ることを目的とするもので、その書論の是非を問うことは、二義的であることを予め断っておきたい。

ところで、従来の本邦での研究では、当論に関して主に学術的なアプローチでの論考が多数を占める。主だったものを挙げれば、

小南一郎「蘭亭論争をめぐって」『書論』第三号　一九七三年
高橋　健三「李文田、郭沫若の「蘭亭」偽作説をめぐる一小論―書体の変遷を追って」『櫻美林大學中國文學論叢』十九号　一九九四年
村上　幸造「押韻から見た蘭亭詩―蘭亭叙の偽作説に関連して」『大阪工業大学紀要　人文社会篇』第三七巻一号　一九九二年
井田有哉「王羲之書『蘭亭序』の偽作説考」『帝京国文学』第七号　二〇〇〇年
菅野智明『近代碑学の書論史的研究』研文出版　二〇一一年

・　魚住和晃『書聖　王羲之』岩波書店　二〇一三年

等が挙げられよう。

そして、その郭沫若の蘭亭論、さらにそれに纏わる論争の論文についての邦訳は、

・　谷川鉄雄・佐々木猛『蘭亭序論争訳注』中央公論美術出版　一九九三年

があるが、郭沫若に対して最も存在感を示した論敵、高二適の「『蘭亭序』の真偽駁議（《兰亭序》的真伪驳议）」の訳は、何故かなされていない。

七　蘭亭論争を取り巻く人間関係

―支持者と反駁者の整理

本章では、その蘭亭論争を年代順に一覧し、その大要を確認したい。

一九六五年

この郭沫若の論文に対して、同年の七月初めには、反対の論調、東方雨の「『蘭亭』趣味」が香港の『大公報』に掲載された。続いて七月二三日の『光明日報』で高二適の「『蘭亭序』の真偽駁議」、八月一九日『文匯報』に唐風の「『蘭亭序』の真偽に関する問題」、八月号の『学術月刊』に厳北溟「東晋の書法芸術の発展から見た『蘭亭序』の真偽」、商承祚「東晋の書法の風格を論じて『蘭亭序』に及ぶ」等が次々と新聞、雑誌に発表され、郭沫若の考えに反駁した。

これら反対意見でなく、七月三〇日『光明日報』には宗白華の「『蘭亭序』を論じた二通の手紙」が掲載され、郭沫若の論が補強された。

また同年の『文物』第六期に郭沫若の「『光明日報』に連載された論文が再録され、同期の『文物』には、郭沫若の論旨の根拠とされた出土文物が紹介された。「南京人台山東晋興之夫婦墓発掘報告」「南京戚家山東晋謝鯤墓簡報」「南京板橋鎮石閘湖晋墓清理簡報」、方介堪「晋朱曼妻薛買地券」などが挙げられる。さらに同年『文物』第十期には「南京象山東晋王丹虎墓和二・三号墓発掘簡報」十二期には「北京西郊西晋王浚妻華芳墓清理簡報」「介紹几件晋代的行草塼刻」、程方英「晋刻郭永思手簡残瓷片」等が発表された。

郭沫若は、八月二一日の『光報日報』で「『駁議』の検討」、八月二四日には『光明日報』に「『蘭亭序』と老荘思想」を掲載し、この二つの論文は高二適の反駁に対する反論であり、『文物』九期に再録された。

『文物』第十期には、竜潜「『蘭亭序帖』迷信の上着を取り払う」啓功「『蘭亭』迷信は破棄すべし」于碩（郭沫若の筆名）「『蘭亭序』は鉄案にあらず」及び阿英の「晋磚の文字から『蘭亭序』の書法を述べる」の四論文が掲載されたが、阿英の副題「郭沫若の『蘭亭序』偽作説のための補足」とあるようにこれらの論文は郭沫若を支持、補強したものである。

『文物』第十一期には徐森玉の「『蘭亭序』の真偽についての私見」趙万里の「字体上より『蘭亭序』の真偽を試みに論ず」于碩「東呉にすでに〈暮〉字があった」の三論掲載。十一月、姚文元「海瑞罷官」を評す（『文匯報』、次いで『人民日報』）『文物』第十二期には甄予（李長路）「『蘭亭序』の妄を弁じて例を挙ぐ」、史樹青「『簫翼賺蘭亭図』より『蘭亭序』を論ず」、伯炎甫「『蘭亭』弁偽一得」の三論文が掲載。

一九六六年

一九六五年十月に初稿が書かれ、翌年一月の修訂を経て『中山大学学報』一九六六年第一期に載せされた商承祚の「東晋の書法の風格を論じて『蘭亭序』に及ぶ」は、『文物』誌上の論争の総括し、郭沫若の偽作説に反対する立場を明らかにした。

★四月、郭沫若自己批判

この五月に「五・一六通達」によって、「文化大革命」は大きな展開を見せ、蘭亭論争はのみこまれていく。

一九七一年

魯迅の論敵であった章士釗は、唐の柳宗元の詩文に考証を加えた研究書『柳文指要』を著したが、その中で「蘭亭序」に触れた柳宗元の二篇の文章を根拠に、郭沫若の偽作説に反対を唱えた。「柳子厚の蘭亭に関する見解」

一九七二年

郭沫若は、既に趙万里がその論文で言及した『三国志』の晋代写本について新たな考察を試み、『文物』第八期に「新疆より新しく出土した晋人の写本『三国志』残巻」を発表し、章士釗の異論にも反論。この論文は、『蘭亭論弁』で巻頭に置かれているが、この論文が最新であり、最後の論文であった。

『文物』第十一期に「南京象山五号・六号・七号墓清理簡報」が掲載。

一九七三年

二月に王一羽「東晋の字体は隷書の筆意を離脱していない」、李長路「『蘭亭』の妄を弁じて例を挙ぐ・小補」を発表、郭沫若を擁護。

一九七七年

十月『蘭亭論弁』が文物出版社から刊行されたが、その巻頭の「出版説明」が書かれたのは、一九七三年三月であり、既に四年が経過している。

翌七八年六月郭沫若没。

・本章は、谷川鉄雄・佐々木猛『蘭亭序論争訳注』（中央公論美術出版　一九九三年）に依拠、加筆した。

八　郭沫若の学術的蘭亭論法略説

郭沫若の「王謝墓誌の出土から蘭亭序の真偽を論ず」は、凡そ七つの段落と二つの追記、併せて九つの要旨で構成されている。ここでは、その批判を行うのではなく、先ずはその概要を正確に把握することから始め、その学術性を確認したい。

① 王興之夫婦の墓誌
② 謝鯤墓誌
③ 墓誌から書法を論ず
④ 「蘭亭序」の真偽
⑤ 仮託説を補足する証拠
⑥ 偽作されたのはいつか
⑦ 王羲之の筆跡はどのようなものであったのか

・書後
・再書後

一　王興之夫婦の墓誌

発掘された王興之夫婦墓誌に現われる王興之を王彬の子であるとする説を考証する。王彬は、王正の第三子で、その次兄が王羲之の父、王曠であり王興之と王羲之は従兄弟関係にある。考証の手法として、文献学的には『世説新語』『晋書』を用いている。

二　謝鯤墓誌

謝鯤墓誌の謝鯤の文献考証。謝鯤の子、謝尚と従子の謝安は王羲之と親交が厚かった。謝氏と王氏は東晋の名族。

三　墓誌から書法を論ず

顔劉氏墓誌、王興之婦人墓誌、劉尅墓誌は先の二つの墓誌と合わせてわずか三五年の間のものである。つまり東晋の初めの三〇数年は、これらの墓誌についてみれば、基本的にまだ隷書の段階にあって、北朝の碑刻と一致し、「顔劉氏墓誌」の何字かがのちの楷書の筆意を持つだけである。

さらに阮元の北碑南帖、碑刻と尺牘の違いによる差異を批判する理由に、晋の陸機の平復帖と前凉の李柏「書疏稿」がともに行草書であり、一方が南方のもの、一方は北方のものであるにもかかわらず、類似していること、また南朝と北朝の写経の字体は、いずれも隷意の筆意に富んでいることを挙げている。

また顔劉氏墓誌は、王羲之と同時代の行書であるにも関わらず書

法が隔たっていることも蘭亭序の信憑性を疑う根拠に挙げている。

四　「蘭亭序」の真偽

「蘭亭序」が『文選』に収められていないこと、また清の李文田、張魏の説を挙げて、蘭亭の真偽を分析している。

五　仮託説を補足する証拠

王羲之の「臨河帖」と伝世「蘭亭序」を比較し、増加された悲観的な部分は、当時の蘭亭の詩に見当たらず、また『世説新語』で「骨骾」と称された精神にそぐわない。つまり、その悼みの部分は、孫綽の「蘭亭後序」に拠って付加されたものだと判断する。

六　偽作はされたのはいつか

まず『晋書』王羲氏伝の中に「蘭亭序」が見られることから、梁から唐までの約六〇年間の隔たりが、偽作が行われた時期と考える。

劉餗の『隋唐嘉話』や何延之の『蘭亭記』は、にその言及が見られるがともに唐の玄宗の天宝年間の書であり、少なくとも『法書要録』巻二〔梁の武帝と陶弘景の間の往復書簡〕や梁の虞龢『論書表』では、晋や宋の時代に二王の書が偽作されたことが述べられている。そこで郭沫若は、その偽作者を陳代の智永と断定する。

七　王羲之の筆跡はどのようなものであったのか

先ず梁の武帝の「書評」では、「王右軍の書は、字勢雄強であり、龍の天門に跳ね、虎の鳳闕に臥すようだ」とあるが、唐の韓愈は、「羲之の俗書　姿媚に趁る」とあり、唐の張懐瓘は「逸少の草は女郎の才があるが、丈夫の気がない。貴ぶに足らない」と述べる。さらに清の包世臣は「書評に謂う、王右軍の字勢は雄強であると。もし『淳化閣帖』の刻するところにしたがうなら、まったく「雄強」の妙を見ない。即ち「定武蘭亭」もまたほめられない」と全く違う評価が下されている。

その理由について康生が、王羲之は唐以前や唐初において草隷、隷書、章草をよくすることで名を知られていたと考えた。つまり王羲之の字跡は隷書の筆意を脱していない。郭沫若も同様に王羲之の実像は、李文田の説を更に一歩進め、隷書の筆意があって始めてよい。その隷書の筆意とは、方筆を用いて逆入平出、つまり筆を下すときは鋒を蔵し、筆を離すときは鋒を収めない。所謂「蚕頭」や「燕尾」を形成する。南北朝の人の碑刻の字や写経の書は、すでに鋒を収めているが、まだ方筆を用いて、一点一画、一起一収、すべて筆鋒は紙や絹の上で三角形を画くように転折している。このような用筆が隷書の筆意、王羲之の書と判断した。つまり先の新出土碑や李文田が拠った「爨宝子碑」「爨竜顔碑」の姿がそれに近いと考えた。

八　書後

蘭亭序の「癸丑」の二字は、後で書き加えられたものであることによって、王羲之が干支を忘れるはずがないとし、偽作の証拠とした。また神竜本蘭亭が智永の書した真蹟であり、その濃筆と淡筆の箇所を分析し、その濃淡の差は、文章を書き上げる過程で、何度も改訂が行われていたことを指摘した。

さらに王羲之と王献之の歴代評価を挙げ、王羲之を守旧派、王献之を革新派と分類し、「稿(速度の速い新しい草書)行(行書)の間」という道は、梁陳以後、特に隋唐以後の書法の主流を開拓したとし、この変化は、顔真卿にいたって最高の域と考えた。

あとは新出土の「劉覬買地券」(四八五年)の書風に言及し、それが、隷書の気分を留めているが、後の真書や行書とあまり隔たっておらず、このことは王献之のいう「稿行の間」の道を辿った証拠とする。

九　再書後

新出土の王丹虎磚志について論究している。。

九　碑学派への造詣

では、次に郭沫若の蘭亭論弁に真っ向から対立した高二適の『蘭

亭序』の真偽駁議(《兰亭序》的真伪驳议)」について見て行きたい。この論は、『文物』一九六五年第七期に肉筆原稿とともに掲載されている。

その中で、

首先郭先生之为此文。愚以为是系于包世臣在其《艺舟双楫》论书十二绝句内。咏“龙藏寺”诗。诗云“中正冲和龙藏碑，坛场或出永禅师，山阴面目迷梨枣，谁见匡庐雾霁时。”世臣设想“龙藏寺”为陈智永僧所书。又其自注，称，龙藏寺，出魏，李仲璇，敬显隽，碑。……左规右矩近《千文》。《书平》谓右军笔势，雄强，此其庶几。若如，阁帖，所刻，绝不见，雄强，之妙，即《定武兰亭》亦未称也”等语。世臣本以北碑起家，其不信“禊帖”及大王书，此影响尚属微薄。(余疑包未见帖本佳刻，其于华亭摸，澄清堂”又顷水雨十一字，未为能手。而世臣极称之。至“龙藏寺”为北齐张公礼之书，宋拓本字迹尚存，何可张冠李戴。)至李文田题端方《定武兰亭》，疑问丛生。其断语称“文尚难信：何有于字。”这问题就显得重大了。何况郭先生对，右军传世诸帖，尚欲作进一步的研究”主张来。今吾为驳议行文计。请先把清光绪十五年顺德人李文田跋端方的帖语所存在的诸疑义，概括起来，分为两点。盖缘郭文李跋，前后都有错杂突出的意义。窃恐理之难清；词安可喜。

(大意)

まず郭先生のこの文は、愚かにも包世臣《芸舟双楫》論書十二絶句の系統で考えている。その「詠龍蔵寺詩」。詩には「中正沖和なり龍蔵碑、壇場にして或いは永禅師より出づ。山陰の面目は、梨棗に迷わされ、誰か見ん、匡廬の霧霽るるの時。」と言う。世臣は、龍蔵寺は陳の智永の書すところと考えた。またその自注に「龍蔵寺は、魏の「李仲璇」「敬顯雋」両碑から出た…その左右の規矩は「千字文」に近いと称える。梁の武帝の『評書』では右軍の筆勢を「雄強」と言い、この碑は、それに近いものがある。もし「淳化閣帖」に刻されたものであれば、絶対に「雄強」の妙は見られない。たとえ《定武本蘭亭序》であっても、またかなっていない」とある。世臣は、もともと北碑から一家を成し、「蘭亭序」を信じずに、王羲之の書に言及しているが、この影響はさほど大きくない。(私は、包はいまだ帖本の佳刻を見ておらず、華亭の摸した「澄清堂」の「又頃水雨…」の十一字は腕利きではないが、世臣は極めてこれをも称えている。「龍蔵寺」に至っては、北斉の張公礼の書であり、宋拓本の字跡をなお存している。なんと食い違っているではないか。)

李文田が端方の《定武蘭亭》に題するに至って、疑問が生じている。その判断は、文はなお信じ難く、どうして字もそうでないことがあろうかと称している。この問題はあきらかに重大である。どうして郭先生の王羲之の諸帖に対して、なお一歩研究を進めるべきとする主張は言うまでない。今反駁のために文章を計画する。先に清の光緒十五年の順徳の人、李文田が端方の帖語に跋した諸々の疑義を概括することから始めて、二点に分けた。多分郭文、李跋によって、前後に錯雑突出の意義がある。理論の濁りを恐れ、安定した詞を喜ぶべきである。

とあるように、碑学派の包世臣の説に拠っているという高二適の批判が示すように、郭沫若が碑学派の書論に造詣が深かったことを示していると言えるだろう。

十　碑帖の学の超克としての郭沫若の書境

そもそも郭沫若は、市川在住時にも、西洋考古学との接触にともなう変質の中で、金文、甲骨文の研究に尽力しており、また抗日戦争期にも金石の題跋やそれを題材にした漢詩をいくつか残している。

例えば一九年四〇年五月には、図8のような題跋を書き、そのような題跋を生涯を通じていくつか書している。

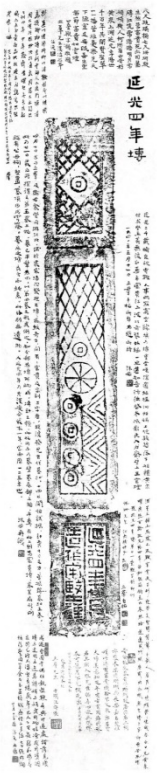


図8

郭沫若は、嘉定府中学堂在学時に包世臣の『芸舟双楫』を教材に使っており、早くにその「経世致用」書論の洗礼を受けていると言えるだろう。

つまり郭は、今文経学の思想、碑学観念の昇華の上に、「為革命而文艺」を成したと言えるだろう。[9]

更に一九六一年に書された扇面の書（図9）には、『自題詩》「有筆在手　有話在口　以手写口　龍蛇乱走　心無漢唐　目無鍾王　老当益壮　興到如狂」と書されている。

内容は、書論であるが、その「以手写口、龍蛇乱走。心無漢唐、目無鍾王。老当益壮、興到如狂。」とあるのは、手で口語を書し、漢唐の碑学も、鍾繇、王羲之の帖学も関係なく、興が到れば「狂う」ようであると述べている。

この「口語の表出」という書境こそが、碑学、帖学を超克した、「経世致用」の極致の郭沫若の「革命の書の姿」と言えるだろう。

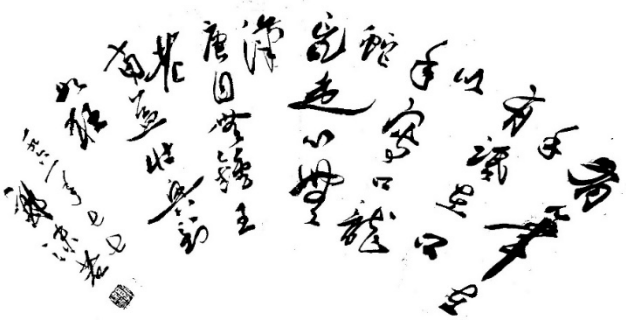


図9

十一　自己批判時の詞と書

先にも述べたが、一九六六年一月二七日、中国科学院党組書記張勁夫を通して中共中央に提出し、また四月十四日、全人大常務委員会副委員長である郭沫若は全人代常務委員会第三〇回会議でも即席発言の形で自己批判を行った。

この時点で、郭沫若の詩、書がどう変化したか確認したい。

郭沫若の自己批判後の詩は、旧詩ではなく、詞が専らとなる。それは、北宋の蘇軾の「水調歌頭」を冠した頌歌であり、これは、一九六三年以来の「満江紅」詞を継承するものである。

その書姿は、長めの横幅に第五期郭体で書したものであり、図4、図5のような佇まいを示している。

またそれらの詞も、一九六六年七月が最後、一九六六年八月の第八期十一中全会での「中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定」（十六か条）で文化大革命の定義が正式に明らかにされた以降は、書としては管見では残されていない。

つまり自己批判後の郭沫若の書は、毛沢東の得意とする詞によって、政治に奉仕する頌歌によるものに限定される。

所謂「旧詩」は、蘭亭論争期の一九六五年七月頃で一度終息することなる。

十二　一九六七年時の書相と文革様式の意味

文革が正式に開始する一九六六年八月から、郭沫若は旧詩の作をしばらく手掛けていない。但し一九六七年十月十五日に、毛沢東の「満江紅・和郭沫若同志」詞と自作詩「満江紅・領袖頌」詞を書している。この懐素風の毛沢東の書風に迎合した様式が、郭沫若の文革様式、つまり第五期郭体である。

その日記や『沫若詩詞选』を見ると、文革後の一九六〇年代は専ら詞を手掛け、一九七〇年代になると詩も散見される。

その役割は、文革中の毛沢東崇拝は、始めから宗教儀式的な要素を持ち、毛沢東のバッジ、ポスター、肖像、銅像、著作、語録、詩詞はすべて「聖なるもの」としてどの家庭にも置かれたが、郭沫若の書もその付き人的な性格を持って書かれたのであろう。

因みに次子、郭世英は北京大学哲学系卒業後、一九六八年北京農業大学の紅衛兵に拷問自白を迫られ自殺、三子郭民英も中央音楽学院卒業後、一九六七年中国人民解放軍海軍に参加後、自殺している。

新しい階級関係論、そこで強調されたのはマルクス・レーニン主義の理論からして、階級は人々の社会的な経済地位による区分であるが、解放後の十七年で階級関係に変動が生じ、以前は地主や資本家などが搾取階級で、革命の対象となったが、現在人民を圧迫し搾取しているのは特権階級であり、その高級幹部子弟の造反は、血統論を理論的支柱にしていた。よって血統論を吹聴するもの、唱導者たちはまたはばかりもなく「我々は既得権益者だ」と血統論を論じ、既得権益を守ろうとしたため、これは必然的に激越な論争となったことと関係があるのであろう。

十三　郭沫若と毛沢東の詞と書との関係

毛沢東は、その「詞集」が載せられた一九五七年一月に出た「詩刊」創刊号の編集長・臧克家に宛てた手紙の中で、

詩は当然新詩を主体とすべきでありまして、旧いスタイルの詩は少し作ってもよろしいが、若い人にすすめるのはよくありません。なぜなら、このようなスタイルは、思想を束縛するし、また学びにくいからです。

と述べている。しかし、毛沢東が、敢えて詞を好んだ理由について、岡崎俊夫氏は、以下の二つの理由を述べている[10]。

ところで、こうした本来女性的な詞を、毛澤東がなぜ好んで作つたり詩も作つてはいるが、とくに詞を多く作つているのはなぜか。それは、詩が士大夫の固定化したのに反し、詞は戯曲、小説の中に入り、民衆の中にその響きを保つていた、つまり、より人民的であるからと説明できましようが、さらにもう一つの答えがある。

とした上で、

このスメドレーの神秘的な印象は、多分に当時の延安の環境、またはそれをうつす彼女の特殊な個性によるものでもありましようが、しかしまた毛澤東のかくされた一面がこれによつて照し出されたといえないこともありません。彼女の感じた「女性的なもの」「耽美派」「精神の孤独」「男女の愛」－これらは、外ならぬ、詞の持つ性格であります。従つてスメドレーは毛澤東に詞人を直観したといえましょう。…要するに、私は、毛澤東の中に、女性的なものがあり、それが詩よりも多く調を生んだのだということをいいたいわけです。

と述べている。さらに先の言と矛盾するように詞を作り続けた理由について、

また、「矛盾論」と同じころに書かれたという「実践論」によれば、感性的認識－理性的認識－実践というこの過程は永久に終るところがないそうです。「客観的に存在する世界の變化の運動は永久に終わるところがなく、実践のうちで人々の真理の認識

も永久に終わることがない」これは永遠の相において、事物をとらえる仕方であります。そうすると、ある歴史史的一定時期の存在は虚無ともいえましょう。毛澤東は、そうはいっておりませんが、そこには一種寂寞のひびきがあります。孤独の形があります。それこそ詞に限らず、中国の伝統的な詩人の魂であります。ところで、こうした詩魂は「プチブルの息子」であるために得られたのだから、人民のために奉仕するには完全に捨て去らねばならぬものだろうからいや、そうではあるまい、孤独の深淵をのぞいてこそ、はじめて、真の人民愛というものは生れて来るのではいか。あの、臧克家に興えた手紙は、この問いに答えているのではないか。あれは、若い人に新しい詩魂を燃やすことをすすめたもので、その励ましとして、自分の旧い詞を発表したのではないか。ーと、こんなふうに問いかけたくなるわけであります。

と、その詞の意義を推察している。

さて毛沢東に対して、郭沫若も早くから詞を作らなかった訳ではないが、それが量産されるのは、明かに一九六三年以降である。

つまりは、郭沫若にとっての当時の作詞の量産は、外的な要因、当時の社会情勢と毛沢東との関係によると考えるのが自然であろう。

十四　いつ、どのように旧文化は、姿を消したのか

ー空白の時代の意味

文化大革命期の知識人の精神的葛藤については、銭理群氏の『毛沢東と中国』に詳細に記されているので、ここで紹介したい。それに拠れば[二]、

紅衛兵の大字報は、造反とは暴力、一切の人情温情を排除し、人と人との間の「殺し合い」を実行するものであるとして、極めて容易に人間性の悪の部分、内在的な残虐さを露呈したが、彼らは同時にただこのような大破壊、大殺戮を通じてのみ、「プロンタリアの新世界を作り出す」ことができると信じていた。彼らの理解する「新世界」は、また一つの矛盾の終着点でもあり、いわゆる「旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣」と徹底的に手を切った無限に純粋で全く汚れのない理想社会である。これは紅衛兵の造反の二重性というもので、理想主義と専制、そして殺戮との組み合わせであり、もっと正確に言えば、理想主義の旗印の下での専制と殺戮、紅衛兵とは天使と悪魔の混合体であった。（中略）また高級幹部子弟を主とする紅衛兵、その造反の対象は何であったのかということである。細かく清華付属中紅衛兵の大字報を見ると分かるのは、彼らは四つの造反を意図していたことになる。一つは修正主義の黒幕をやっつけること、二つ目は「四旧」、つまり旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣を打破すること。三つ目が学校を一七年統治した修正主義教育路線に反対すること。そして四つ目が「すべての牛鬼蛇神」をやっつけることである。老紅衛兵の革命造反運動において、最も有名なのは、「四旧の打破」であろう。簡単に紹介すると「四旧打破」は毛沢東が発動した文化大革命の一つであるが、早くも文革前の一九六五年、毛沢東がフランスの国務長官と接見した際にもこう言っていた。「消失すべきは中国の過去の思想、文化と風俗で、現れるべきものはまだ存在しているわけではない思想、風俗と習慣である」と。すなわち、毛沢東が文革の中で推進したのは、一切の伝統を断ち切る文化路線であり、それを明確に表現したのは、文革におけるもう一つのスローガン、いわゆる「封〔封建〕、資〔資本主義〕、修〔修正主義〕を徹底して批判する」であった。そこから、中国伝統文化、西洋文化、またソ連修正主義と中国自身の左翼革命文化まで、これらすべてを排除するためのリストに加えた。この角度からして、紅衛兵

による全てを焼き尽くす「革命行動」は、毛沢東の意図に合致していたことになる。

とある。

このような時勢では、文革時の郭沫若は、毛沢東に寄り添う形で、書法を捨て、詞を細々と書くしかその旧文化の拠り所がなかったと言えるだろう。

十五　小結

―付き人観の始まりと展開の総括

郭沫若も他の文学者同様、作詩の時、ノートで作ってから書の作品化をしているはずで、その間隔にも別の思惟があるはずである。

つまり、郭沫若は文革時、毛沢東同様、詞を作っても書として作品化しなかったのは、それを阻む思惟、書で表現できるのは、毛沢東のみで、他は「四旧」と解される懼れがあったということであろう。

ここで文革期の郭沫若の書について概括すれば、巧蒙氏が、

，中年后，在苏，颜基础上参以米芾笔法意趣终成“郭体”书法面貌，尤以行草书为长。晚年因一味“跟随”，学习借鉴怀素失败，又由于各种客观原因形成了重“宣情”的书法取向，导致书法出现衰退。

と総括しているように、このどこでも付いていく「付き人」観が促進される端緒が、社会主義教育運動開始の一九六三年時期の第四期郭体、そして決定的に表れるのは文革前期の第五期郭体と言え、そしてその後「四旧打破」のため禁じられたと考えるべきではなかろうか。

そして郭沫若の書が、再び別の姿で世に現われるのは、文革後期、さらに外交の具としての別の文脈での確立を待つしかなかったと言えるだろう。

---

1 岩佐昌暲『中国現代詩史研究』（汲古書院　二〇一三年）

2 拙稿「大躍進　調整時代　一九五八から一九六二年までの郭沫若の文学と書―視察時に於ける第三期郭体から第四期郭体までの過程とその詩　書の思想」（『郭沫若研究会報』二〇号　日本郭沫若研究会事務局　二〇一八年十二月）

3 紀紅「演出された「蘭亭論争」―紙上論争の光と影1．2」（『金石書学』三　四号　二〇〇〇　二〇〇一年十二月　藝文書院）

4 鐙屋一「「長征精神」論の現代的位相」（『目白大学　総合科学研究』六号　目白大学総合科学研究編集委員会　二〇一〇年三月）

5 武田泰淳　竹内実『毛沢東　その詩と人生』（文藝春秋　一九六五年）

6 大野修作「書学を学ぶ人のために　第一二三回　梅屋庄吉と孫文の書」（『書道美術新聞』第九四七号　二〇一〇年一〇月）

7 注5参照

8 谷川鉄雄・佐々木猛『蘭亭序論争訳注』（中央公論美術出版　一九九三年）参照。

9 呂金光「郭沫若的今文经学思想与碑学观念」（『中国书法』二〇一三年〇五期总二四一期）

10 岡崎俊夫「毛沢東と詞」（『東京支那学報』四号　一九五八年六月）

11 銭理群著；阿部幹雄［ほか］訳『毛沢東と中国：ある知識人による中華人民共和国史』（青土社二〇一二年十二月）

第十八章　郭沫若の晩年の文学と書

一　緒論

郭沫若は文革期に於いて、書と詩の制作は「四旧」の一環としてか禁じ、旧文化では毛沢東に寄り添う形で専ら詞の制作に努めていたが、一九七〇年以後、再び書と詩の制作に着手する。

郭沫若は四人組について、一九七六年一〇月二一日に『水調歌头』として「粉碎四人帮」詞を発表している。

大快人心事　揪出四人帮　政治流氓文痞　狗头军师张　还有精生白骨　自比则天武后　铁帚扫而光　篡党夺权者　一枕梦黄粱　野心大　阴谋毒　诡计狂　真是罪该万死　迫害红太阳　接班人是俊杰　遗志继承果断　功绩何辉煌　拥护华主席　拥护党中央（簡体字ママ）

（大意）人心を大いにこころよくするできごと、ひきずりだした四人組。政治ゴロ、筆を操るならずもの。狗のアタマなる軍師の張。そのうえに魔物をうめる白い骸骨。みずからなぞらえる則天武后。鉄のほうきもって掃き、きよめたり簒党奪権者ども。ひとねむりの黄粱の夢なりしか。野心が大きく、陰謀は毒であり、詭計は狂っている。本当に罪は万死に値する。紅太陽を迫害したが、後継者は英傑で、遺志は果断に継承する。功績は何と輝いているだろうか。華主席を擁護し、党中央を擁護する。

毛沢東側近の王洪文、張春橋、江青、姚文元ら四人組も一九七六年一〇月の北京政変によって打倒され、華国鋒体制に取って代わられた。北京政変は四人組らの文革左派と華国鋒らの文革右派との権力争いであったが、当年の毛沢東の死と四人組の逮捕により文革は実質的な終焉を迎え、一九七七年にその終結が正式に宣言された。そして一九八一年年の中国共産党第一一期中央委員会第六回全体会議の決議で公式に否定されることになる。

ただ実際は、郭沫若は、文革中の日中国交修復時に詩と書の制作を再開していることに着眼したい。

一九七二年の日中共同声明によって、日本と中華人民共和国が国交を結び、その共同声明は、同年九月二九日に北京で、日本側は田中角栄首相、中国側は周恩来首相の署名により成立した。

本章では文革後期、当時の外交家としての郭沫若の文化活動、更に文革後から没年までの活動と三段に分けて、考察していきたい。

二　郭沫若の詩と詞について

文革期から晩年の残存、確認できる詩詞と書を整理すると以下のようになる。

日時	詞詩名	詞・ 詩	内容	書の有無
1970年5月10日	赠日本松本芭蕾舞团 二首	詩	外交	
1970年9月初	西江月	詞	頌歌	
1971年2月	日本文化交流协会成立十五周年纪念	詩	外交	
1971年6月27日	五十党庆	詩	頌歌	
1971年8月	悼松村谦三先生	詩	外交	
1971年9月13日	陪高棉战友访问西北 诗词三首	詩	外交	
	浣溪沙	詩	頌歌	
9月15日	满江红	詞	頌歌	
9月16日	七律	詩	頌歌	
1971年12月11日	屈原在日本第三次演出	詩	外交	
1972年秋	祝中日恢复邦交 沁园春	詞	外交	●
1973年春	人民中国日文版创刊二十周年 越王勾践破吴剑	詩	外交 文化	
1973年4月11日	息庵碑	詩	外交	
1973年4月17日	照公塔	詩	歴史	
1973年6月	题长沙楚墓帛画 西江月	詞	文化	
1974年10日	赠日本狮子座剧团 西江月	詞	外交	
1975年夏	日本冈山六高建校七十五周年纪念	詩	外交	●
1976年1月13日	悼念周总理	詩	弔詩	
1976年9月	毛主席永在 二首	詩	弔詩	
1976年10月21日	粉碎四人帮	詞	政治	
1976年12月16日	怀念周总理 念奴娇	詞	頌歌	
1976年12月24日	怀念毛主席 满江红	詞	頌歌	
1976年12月29日	迎接一九七七年 东风第一枝	詞	頌歌	
1977年2月6日	农业学大寨 望海潮	詞	頌歌	
1977年2月12日	歌剧 白毛女 重上舞台 亿秦娥	詞	頌歌	
1977年2月26日	工业学大庆 水调歌头	詞	頌歌	
1977年3月19日	捧读 毛泽东选集 第五卷	詞	頌歌	
1977年3月26日	怀念董老 步董老 九十初度 原韵	詩	弔詩	
1977年3月27日	纪念抗日战争四十周年 浣溪沙	詩	記念詩	
1977年6月	为东风剧团题诗	詩	頌歌	

以上、内容を確認すると、文革の開始後、書の残っていない一九六六年八月から一九七〇年頃では、専ら詞による頌歌、そして一九七〇年から日中国交正常化に向けた工作を端緒に、詩の制作が再開される。因みに日本と関係する場合の詩歌は、詩である場合が多いと言えるだろう。

そして、一九七〇年以後、周恩来や毛沢東の弔詩は詩であるが、他の頌歌は没年まで、依然、詞であったと言える。

三　残存する書の分析

―三つの変貌過程と頌歌を中心にして

残存する文革中期以後の書を類型化すると、凡そ三つに分類できる。

一つは図1の頌歌、二つ目は図3の日中国交正常化に纏わる詞、そして三つ目は図4の最晩年の境涯を詠う詩である。ここでは、先ず図1の書に就いて分析したい。

図1の「登采石矶太白楼　水调个头」の書は、詞自体は一九六八年二月十四日に作られ、書されたのは一九七三年の初冬である。

久慕燃犀渚　来上青蓮楼　日照長江如血　千裏豁明眸　洲畔漁人布罾　正是鰣魚時節　我欲汜中遊　借問李夫子　願否与同舟　君打槳　我操舵　同放謳　有興何須美酒　何用月当頭　《水調歌頭・遊泳》暢好迎風誦去　伝遍亜非欧　宇宙紅旗展　勝似大鵬遊

（大意）ひさしく東晋の温嶠が、犀の角を燃やして深淵を照らし、水中の怪物の姿を見、物事の本質を見抜くとされるなぎさを慕い、青蓮楼に上り来る。太陽が長江を照らす姿が血のようで、千里の美しさを開いている。中洲のほとりの漁師が、竹ひごで編んだかご（魚を捕らえるための道具）を仕掛け、まさにハスをとる季節。私は、水面に遊ぼうとして、かりに李白に問いかけた、同じ船に乗ってもいいですかと。あなたはこみずを打ち、私が舵をとり、一緒に謳い放とう。興があってなぜ美酒をまとうか。どうして月に頭目をさせようか。《水調歌頭・遊泳》暢べて風を迎えうたい去り、アジアに遍く伝え、ヨーロッパはもういい。宇宙に紅旗をかかげ、すぐれて大鵬が遊ぶようである。

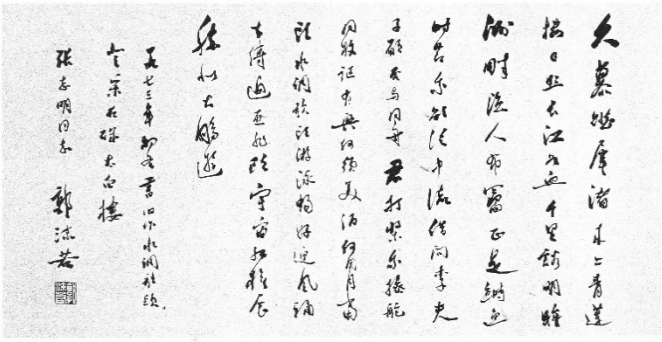


図 1

この頌歌は内容的に党を讃えているが、その書風を分析すると、文革初期の頌歌の書風とは全く違い、筆勢のない、小粒でおとなしい、萎縮感のある書風を構成している。

まさに文革後期の郭沫若の心境を如実に物語っており、「文革後期体」、第六期郭体と言えるだろう。

四　日中国交正常化に於いて

―　最後に託された仕事

一九七二年の日中共同声明によって、日本と中華人民共和国（中

国)が国交を結んだ。共同声明は、同年九月二九日に北京で、日本側は田中角栄首相、中国側は周恩来首相の署名により成立した。中華人民共和国は四九年の成立以来、日本との国交がなかったため、一般には「国交回復」ではなく「国交正常化」と称される。郭沫若はその時、田中角栄の故宮博物館の案内役をしている(図2)。

図 2

それまでの日本は、五二年の日華平和条約締結以来、中国国民政府(台湾)との間に国交を結んでいた。中国と同様に、太平洋戦争において争った隣国であるソビエト連邦共和国(現在のロシア)との間では、五六年に国交が回復した。しかし当時の日本では、台湾での権益を持つ親台勢力が与党自民党関係者などに多く、中華人民共和国とは貿易も含めた関係が長らく希薄なままだった。この一方で、米国は中ソ対立などに乗じ、七二年、ニクソン大統領が北京を訪問するなどして、東アジア新秩序構想により、日本の頭越しに米中関係を深めつつあった。このため、日本政府は野党社会党なども巻き込んで、急速に中華人民共和国に接近をはかり、日中共同声明にこぎつけた。日中共同声明によって、日本は中華人民共和国政府を中国唯一の合法政府としたため、日華平和条約は終了。中華民国(台湾)は日本との国交を断絶した。また、七八年には日中平和友好条約が調印されている。田中角栄は、日本の親台勢力を押さえて日中国交樹立を遂げたことなどから、中国では最も高名な日本の政治家として「古い友人」と呼ばれた。

郭沫若は、その政治家、外交官として、最後の大仕事に向き合ったことになる。

一九七〇年から七二年までの作詩・詞は、凡そ二〇年間在住し、第二の故郷とした日本と中華人民共和国との橋渡しの役を担った軌跡でもある。

図3の「祝中日恢復邦交 沁園春」は、

赤県扶桑　一衣帯水　一葦可航　昔鑑真盲目　浮枹東海　晁衡負笈　埋骨盛唐　情比肺肝　形同唇歯　文化交流有耿光　堪回想　両千年友誼　不等尋常　豈容戦犯猖狂　八十載風雷激大洋喜霧霽雲開　渠成水到　秋高気爽　菊茂花香　公報飛伝　邦交恢復　一片歓声起四方　従今后　望言行信果　和睦万邦

(大意)中国と日本は、一衣帯水。小舟で航行でき、昔鑑真は盲目で東海に船出し、阿倍仲麻呂は、遊学して盛唐に骨を埋めた。感情は肺と肝に比較でき、形は唇と歯と同じくす。文化交流は光を放った。回想に堪えれば、二千年の友誼は、尋常ではない。どうして戦犯狂気、八〇年の風雷で大洋を荒立てようか。霧雲が開くのを喜び、渠に水が流れ、秋空高く空気が清々しく、菊が茂り花が香る。両国の声明が飛び伝え、国交が回復し、一片の歓声が

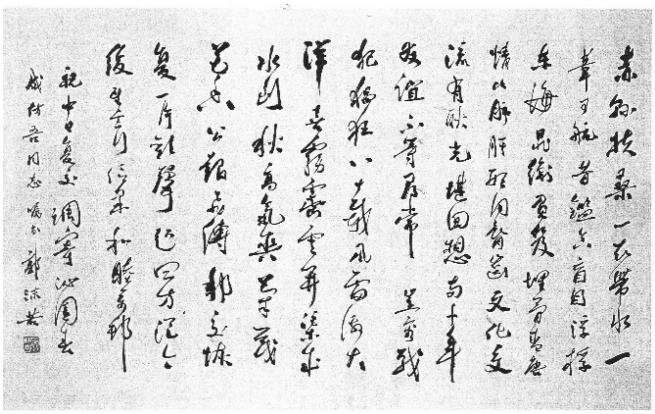


図 3

四方に起こった。今よりのち、言行一致で万国の和睦を望む。

とあるようにまさに日中関係の「暗黒」からの「光明」の文学、詞であるが、郭沫若が当時手掛けた日本との外交詩の書風は第四期郭体に似た気迫が戻っている。これらを第七期郭体と定義できよう。

五　最晩年の書と学問

―七〇年の光陰の意味

一九七七年春、病中の郭沫若は、殷代後期の武丁の妻である婦好の墓から出土した青銅器によって、殷周社会に対する自説の正しさ裏付けられたことに喜んだと伝えられている。

その当時の書が、図4である。

閑釣茶渓水　臨風誦我詩　釣竿含了去　不識是何魚

（大意）閑で釣りをする茶渓の水、風に臨んで我が詩を朗誦する。釣竿を一諸に持ち運び、何の魚か分かっていない。

十一歳の時に作った「茶渓」の詩であるが、その款記に、

幼時所作即興詩一首、王廷芳同志嘱為書出、彷彿縮短了七十年的光陰

（大意）幼き時作った即興の一首、王廷芳同志に委嘱され書いた。彷彿する七十年の時間の短さを。

この回想の詩は、最晩年、病床の郭体の姿、第六期がやや気力の枯れた最後の郭体、政治からの引退、諦観の書風と言うべきであろうか。

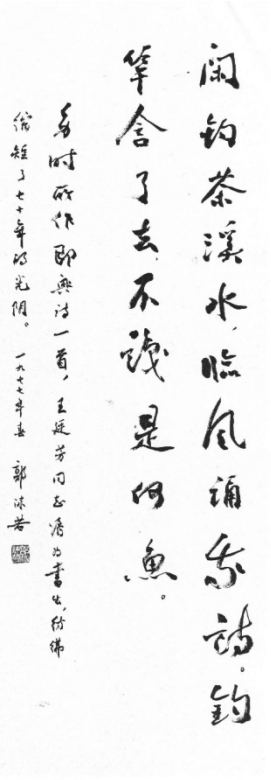


図4

まさに「経世致用」の書から、脱け出した文人趣味の書に回帰したと言えるだろう。

そして翌年一九七八年六月十二日に郭沫若は世を去ることになる。

☆本論での人物略歴等については、フランク・B・ギブニー編『ブリタニカ国際大百科事典』、小学館『日本大百科全書』、近藤春雄編『中国学芸大事典』（大修館書店）等の辞典類に拠った。

☆また九章から始まる郭沫若の書法についての立論は、新説として私独自の論を展開したが、近現代中国文学史に就いては、岩佐昌暲氏の史論に、また建国後の社会史に就いては、当時の知識人の証言、オーラルヒストリーとして、銭理群氏の説に多く基盤を置いた。ここに、その学恩に謝意を示しておきたい。

終章

全十八章に及び日中二〇〇年の書論史、思想史、政治史、文学史、社会史、書法史を相互連関的に鳥瞰した。前半は、学際的な書法思想史を三つの潮流で捉え、中後半は、郭沫若の学芸、そして書法史について、社会科学史的に考察した。

郭沫若という人物を取り上げた理由は簡単には述べられないが、近代中国、現代中国を通観する上で、最も象徴的な人物の一人であろうし、近代から、西洋化によって齎された「経世致用」「実学」の流れを、書に於いても見事に体現した人物に他ならないだろう。

また別の言いようをすれば、「託古改制」という政治手法を用いることのできた人物として、近代以降の文人の殿として郭を位置付けることも可能かもしれない

「経世致用」「実学」の極致、「実際に世の用、役にたつ」姿が、書の「政治化」と言え、書や文学を政治に利用した故に文学に於いては、「郭老、郭老、诗多、好的少」と人口に膾炙される所以の一つであろうが、書ではどう言えるのであろうか。

敢えて書に於いて言うならば、書を政治化した故に、書作品も多く残し、また傑作も多かったと、逆説的に言えるのではなかろうか。

無論、郭沫若にも、伝統中国文人同様に、異常な程の耽美的趣味への執着はあったであろうし、その文脈での郭沫若の書の分析は、別稿に譲りたい。

本論では、抗日戦以来の書を、プロパガンダ、政治化の書と定義し、七つに類型、観念思想化せんと試みた。郭沫若の書風の変遷は、総じて白話と文語の振り子運動と、闘争と賛歌のプロパガンダとして存在感ある力感の追求という二つの流れで概ね解消できるように思う。

通観することを目的とした故に、精査な社会史、文学史との照合に就いては、隔靴掻痒の念は免れない部分もあろうが、本論が郭沫若書法論の基底となり得る器としての始まりであり、緻密性の高い更なる高次元の考証、分析は今後の課題としたい。

例えば、本論で定義した七つの郭体は、あくまでもその時代の傾向、特徴であって、本来峻別することはできないだろうことを、ここで断っておきたい。つまり変貌に至る推移過程があるはずだろうし、白黒と急変するのでなく、グレーな時期もあるということである。

更に言えば、第二期が書けたときは第一期が、第三期が書けたときは第一、二期が、第四期が書けたときは第一、二、三期が、という具合に、郭沫若があらゆるスタイルを時と場合によって書き分けることはできたであろうし、その可能性は排除できない。

そういう用途・目的や時の気分等による書き分けについてや、個別事象的に各体の収束先を辿る考察も、今後なされるべきであろう。

ところで、「文学史」に就いて、岩佐昌暲氏は以下のように述べられている。

作家が文学作品を生み出すときに、その基になる発想法というものがあるであろう。それはその作家が生活している社会や時代に、その根本のところでは規定されているということができるであろう。そういう前提に立つと「元になる発想法」の中には、ある特定の社会の、特定の時期に生活する作家ならば、どの作家も大なり小なりそれを逃れがたいような「時代に共通の発想法」と、個々の作家を他の作家と区別する、彼の作品の独自性を形成する基盤になっているような「作家固有の発想法」との、二種類の発想法があるだろうと考えられてくる。前者の「共通の発想法」を仮にある時代・ある社会の「支配的な発想法」とよぶことにすると、「支配的な発想法」を軸に文学史（の時期区分）を構想することができるように思う。

つまりある「支配的な発想法」によって作品が書かれている時期が一つの文学時期であり、次にそれと異なる新しい発想法が生れ、それが支配的になったときから新しい文学時期が始まるという時期区分の考え方である。こういう考え方は別に新しいものではなく、文学史の時期区分には必ずそういう考え方が前提されているはずである。それなのにわざわざこういうことを言い出すのは、中国現代文学においては政治史・社会史の時期区分をもとにした「近代ー現代ー当代」という時期区分が、文学史を考える上での 大きな枠組みとしてまだ存在しているからなのである。

《岩佐昌暲『中国現代詩研究』汲古書院》

この着想は、「文学」だけではなく、それとつねに連動関係にあった「書」にも言えるように思う。

つまり、岩佐氏の言う前段を要点的に三つにまとめ、演繹することを許されるのであれば、書にも「時代・地域に共通する発想法」があって、つまりそれが社会の「支配的な発想」であり、それを基軸として書法史の時期区分をなしえるだろう。

さらにもう一方で「作家固有の発想」を認め、その「支配的発想法」と二重構造にあって、それが基端となって異なる新しい発想が生まれ、それが次に支配的になったとき、新しい書法史の時期区分が形成されると考えられる。

換言すれば、「作家固有の発想」とそれが、「支配的な発想」へと変貌するダイナミズムによって、細かく時期が措定されるべきであろう。

またその支配の推移を考えるとき、その新たな時代を拓く固有の発想には、インパクト、存在感(書で言えば新しい書法風格)・思想性(郭沫若の場合、往々にしてイデオロギー)・美術性(文房四宝など様式への拘り)の三者が、少なくとも大きな要素となるだろう。

されどこれらの観念が前提とされているにも関わらず、依然として書法史に於いても、政治史・社会史の時期区分をもとにした「近代ー現代ー当代」という時期区分が、大きな枠組みとして存在し、苛烈な政治国家である中国の文学史のように「暗黒」と「光明」の繰り返しとまでは明確に言えないまでも、細部への配慮がなされていないし、展望もできない史観状態と言える。

さらに追い打ちをかけるのであれば、書法史に於いては、文学史では既に自明とされる政治史と社会史とのタイアップの関係すら、充分になされてこなかったのではなかろうか。

但し時代に支配的な発想となりえなかた作家個人の発想の中には、社会的に主流であった郭沫若を含む共産党系の白話派でなく、別の文脈で文語派(書法風格史至上主義派)内で、むしろ中国書法史的な見方をすれば本流となる書法家達が、社会の裏面となるあらゆる場で活動してたことも想像に難くなく、今後の研究課題でもある。

ともあれ政治の本流、社会を支配する発想、政治家として毛沢東に最も近い立場にあった郭沫若の書や、考え方を、謂わば「先決事項」の「時代を書いた書」として基幹に構築することが、当初からの目的であったことは、最後に断っておくべきかもしれない。

つまり本論、取り分けその中核を成した郭沫若書法論は、郭が強く基軸にした動乱の世を生き抜くための社会、権力への奉仕、換言すれば「時代に支配的な発想」、書のダイナミズムと、「作家固有の発想」との振幅、齟齬と止揚の姿についての研究である故に、岩佐氏の文学史構想に基づく書法史研究の狼煙として、その挑戦の始まりと位置付けられる、ということまでは言えるだろう。